HP Service Health Reporter

Windows® オペレーティングシステムおよび Linux オペレーティングシステム用

ソフトウェアバージョン : 9.30

インストールおよび設定ガイド

ドキュメントリリース日 : 2013 年 7 月
ソフトウェアリリース日 : 2013 年 7 月

ご注意

保証

HP 製品、またはサービスの保証は、当該製品、およびサービスに付随する明示的な保証文によってのみ規定されるものとします。ここでの記載で追加保証を意図するものは一切ありません。ここに含まれる技術的、編集上の誤り、または欠如について、HP はいかなる責任も負いません

ここに記載する情報は、予告なしに変更されることがあります。

権利の制限

機密性のあるコンピューターソフトウェアです。これらを所有、使用、または複製するには、HP からの有効な使用許諾が必要です。商用コンピューターソフトウェア、コンピューターソフトウェアに関する文書類、および商用アイテムの技術データは、FAR12.211 および 12.212 の規定に従い、ベンダーの標準商用ライセンスに基づいて米国政府に使用許諾が付与されます。

著作権について

Copyright 2010-2013 Hewlett-Packard Development Company, L.P.

本製品には、Apache Software Foundation (**http://www.apache.org/**) (英語サイト) によって開発されたソフトウェアが含まれています。

本製品には、Andy Clark によって開発されたソフトウェアが含まれています。

本製品には、asm ソフトウェア (Copyright (c) 2000-2005 INRIA, France Telecom. All rights reserved) が含まれています。

本製品には、jquery.sparkline.js ソフトウェア (Copyright (c) 2007-2009, Adolfo Marinucci. All rights reserved) が含まれています。

商標について

Adobe® は、Adobe Systems Incorporated の商標です。

Microsoft® および Windows® は、Microsoft Corporation の米国登録商標です。

UNIX® は、The Open Group の登録商標です。

Java は、Oracle Corporation およびその関連会社の登録商標です。

ドキュメントの更新情報

このマニュアルの表紙には、以下の識別番号が記載されています。

- ソフトウェアのバージョン番号は、ソフトウェアのバージョンを示します。
- ドキュメントリリース日は、ドキュメントが更新されるたびに変更されます。
- ソフトウェアリリース日は、このバージョンのソフトウェアのリリース期日を表します。

最新の更新のチェック、またはご使用のドキュメントが最新版かどうかのご確認には、次のサイトをご利用ください。

http://support.openview.hp.com/selfsolve/manuals

このサイトを使用するには HP Passport に登録してサインインする必要があります。HP Passport ID を登録するには、次の URL を参照してください。

http://h20229.www2.hp.com/passport-registration.html (英語サイト)

または、HP Passport のログインページの [**New users - please register**] リンクをクリックします。

適切な製品サポートサービスをお申し込みいただいたお客様は、更新版または最新版をご入手いただけます。詳細は、HP の営業担当にお問い合わせください。

サポート

次の HP ソフトウェアのサポート Web サイトを参照してください。

http://support.openview.hp.com

HP ソフトウェアが提供する製品、サービス、サポートに関する詳細情報をご覧いただけます。

HP ソフトウェアのオンラインサポートでは、セルフソルブ機能を提供しています。お客様の業務の管理に必要な対話型の技術支援ツールに素早く効率的にアクセスいただけます。HP ソフトウェアサポート Web サイトのサポート範囲は次のとおりです。

- 関心のある技術情報の検索
- サポートケースとエンハンスメント要求の登録とトラッキング
- ソフトウェアパッチのダウンロード
- サポート契約の管理
- HP サポート窓口の検索
- 利用可能なサービスに関する情報の閲覧
- 他のソフトウェアカスタマーとの意見交換
- ソフトウェアトレーニングの検索と登録

一部のサポートを除き、サポートのご利用には、HP Passport ユーザーとしてご登録の上、サインインしていただく必要があります。また、多くのサポートのご利用には、サポート契約が必要です。HP Passport ID を登録するには、以下の Web サイトにアクセスしてください。

http://h20229.www2.hp.com/passport-registration.html (英語サイト)

アクセスレベルに関する詳細は、以下の Web サイトにアクセスしてください。

http://support.openview.hp.com/access_level.jsp

目次

1 はじめに 11
SHR のコンポーネント 12
SHR デプロイメントシナリオ 12
Service and Operations Bridge 12
Application Performance Management 13
HPOM 13
VMware vCenter 14
インストールフローチャート 15
インストールメディア 15
インストールの概要 16
リモートシステム上の SHR コレクター 16
SHR ドキュメントセット 16

2 インストールの前提条件 19
ハードウェア要件 19
ソフトウェア要件 19
オペレーティングシステム要件 19
Windows 19
Linux 21
ポートの可用性 23
Web ブラウザーの要件 25
ActiveX コントロールの有効化 25
JavaScript コントロールの有効化 26
プレインストールの作業 26

3 インストール SHR 31
プレインストールチェックリスト 31
Linux の場合の追加の確認事項 32
インストールの準備 32
メディアの再構築 32
追加の考慮 33
単一システムのインストール : 単一システム上での SHR と Sybase IQ のインストール 33
インストールウィザードを使用したインストール 33
コマンド行コンソールからのインストール (Linux の場合のみ) 34
ポストインストールの作業 35
デュアルシステムのインストール : 別々のシステムでの SHR と Sybase IQ のインストール 35
SHR メディアからの Sybase IQ のインストール 36
インストールウィザードを使用したインストール 36

コマンド行コンソールからのインストール (Linux の場合のみ) 37
ポストインストールの作業 38
専用システムへの SHR のインストール 38
インストールウィザードを使用したインストール 38
コマンド行コンソールからのインストール (Linux の場合のみ). 39
Windows での Sybase IQ サービスの作成 40
リモートシステムへの SHR コレクターのインストール 42
SAP BusinessObjects 言語パックのインストール 43
デスクトップヒープメモリーの設定 44

4 SHR のアップグレード 47
アップグレードの前提条件 47
SHR 9.20 データベースのバックアップ 48
SHR サービスの停止 48
SHR のアップグレード 48
単一システムのアップグレード 48
デュアルシステムのアップグレード 48
アップグレード後の設定 49

5 設定 SHR 53
タスク 1: Sybase IQ データベースの起動 54
タスク 2: 複数のプロファイルデータベースをサポートする SHR の設定 55
タスク 3: 管理コンソールの開始 56
タスク 4: SHR のタイムゾーンの選択 57
タスク 5: データベース接続の設定 57
タスク 6: データベーススキーマの作成 59
タスク 7: Sybase IQ データベースの再起動 61
タスク 8: 管理データベースユーザーアカウントの作成 61
タスク 9: リモートシステムにインストールされているコレクターの設定 62
タスク 10: トポロジソースの設定 63
次の RTSM トポロジソースの設定 : SHR 64
次の HPOM トポロジソースの設定 : SHR 73
次の VMware vCenter トポロジソースの設定 : SHR 82
タスク 11: Sybase IQ ライセンスのタイプの確認 83
SHR の HP Operations Agent との共存の有効化 84
リモートシステム上での SHR コレクターと HP Operations Agent の共存の有効化 86

6 コンテンツパックの選択およびインストール 89
コンテンツパックコンポーネントの選択 89
コンテンツパックコンポーネントのインストール 90
コンテンツパックのアップグレード 92

7 ローカルデータおよびリモートデータ収集のための SHR の設定 95
HPOM デプロイメントシナリオでのデータ収集の設定 96
エンタープライズアプリケーションデータソースの設定 96
HPOM データベース接続の設定 96

HPOM データソース接続の変更 97
HP Performance Agent データソースの設定 98
ネットワークデータソース接続の設定 98
汎用データベース接続の変更 100
VMware vCenter データソース接続の設定 101
VMware vCenter データソース接続の変更 102
BSM Service and Operations Bridge デプロイメントシナリオの場合のデータ収集 104
エンタープライズアプリケーションデータソースの設定 104
プロファイルデータベースのデータソース接続の設定 104
HP Performance Agent のデータソース接続の設定 107
HPOM データベース接続の設定 108
HP OMi データベース接続の設定 109
HP OMi データソース接続の変更 110
ネットワークデータソース接続の設定 111
汎用データベース接続の変更 113
VMware vCenter データソース接続の設定 114
VMware vCenter データソース接続の変更 115
アプリケーションパフォーマンス管理デプロイメントシナリオの場合のデータ収集の設定 116
ファイアウォール環境内またはプロキシ経由の HP Performance Agent のデータ収集の設定 116
セキュアモードでのデータ収集のための HP Performance Agent の設定 116
レポートドリル機能設定の設定 117
SHR 管理者アカウントのパスワードの作成 118
Web サービスのログイン画面のプライバシー情報の表示 118
VMware vCenter デプロイメントシナリオでのデータ収集の設定 120
VMware vCenter データソース接続の設定 120
VMware vCenter データソース接続の変更 121

8 インストールの検証 123
SHR サービスのチェック 123
SHR データベースのチェック 126
トポロジ収集のステータスのチェック 127
インストールされたコンテンツパックのチェック 128
コンテンツパックのストリームステータスのチェック 129
SAP BusinessObjects ユニバースのチェック 130
SAP BusinessObjects InfoView のレポートフォルダーのチェック 132

9 SHR 用のクライアント認証証明書 133
認証と承認 133
SHR 管理コンソールの設定 136
SAP BusinessObjects InfoView および Open Document の設定 139
ユーザー名抽出メソッドの設定 141
セキュアな接続 (HTTPS) の設定 142
SHR の管理コンソールの場合 142
SHR の InfoView コンソールの場合 143

証明書に基づいた認証の設定の取り消し。 143
管理コンソールレベルでの取り消し 143
InfoView コンソールレベルでの取り消し 144

10 SHR 用のセキュアな接続の設定 (HTTPS) 147
キーストアファイルの作成 147
セキュアな接続の設定 (HTTPS) 147
SHR の管理コンソールの場合 147
SHR の InfoView コンソールの場合 149

11 ライセンス取得 151
永久的なライセンスキーの取得 151
永久的なライセンスキーのインストール 152
SAP BOBJ ライセンスの再アクティブ化 153
ライセンス使用権 (LTU) 153

12 アンインストール SHR 155
データベースのバックアップの実行 155
コンテンツパックのアンインストール 155
アンインストール SHR 156
リモート Sybase IQ のアンインストール 159
SHR の手動アンインストール 160
コンソールモードでの SHR のアンインストール (Linux) 166
リモートシステムにインストールされたコレクターのアンインストール 167

13 データベースのバックアップとリカバリ 169
Windows でのデータベースのバックアップの実行 169
タスク 1: バックアップスクリプトの編集 169
タスク 2: コピーバックアップスクリプトの編集 170
タスク 3: バックアップのスケジュール 170
コピーバックアップスクリプトを実行するスケジュール 170
完全バックアップスクリプトを実行するスケジュール 171
増分バックアップスクリプトを実行するスケジュール 171
Linux でのデータベースのバックアップの実行 172
Windows でのデータベースの復元 173
Linux でのデータベースの復元 175

14 SHR インストールのトラブルシューティング 177
SHR ログファイル 177
インストールのログファイル 177
インストール後の設定ログファイル 179
SHR インストールのトラブルシューティング 180
Sybase IQ データベースのクラッシュに関する問題 180
仮想マシンで環境変数が設定されない 181
あるセッションで設定した環境変数が、他のセッションで表示されない 181
データベーススキーマの作成にかなり時間がかかる 181

コンテンツパックのインストールが失敗する 182
コンテンツパックのアンインストールが失敗する 182
Sybase IQ のアンインストールが失敗する 183
ネイティブ Windows インストーラーのエラーでインストールが失敗する 184
SAP BOBJ のエラーでインストールが失敗する 184
リモート Sybase IQ データベースの作成が失敗する 184
管理コンソールにログオンできない 185
管理コンソールの動作が断続的になる 186
Windows Server 2008 での IPv6 アドレスの変更が原因でポストインストールの設定が失敗する 186
コレクターインストールのトラブルシューティング 187

A SiteScope モニター 189
SiteScope Monitors for HP Service Health Reporter 189

B Xcelsius のインストール 195
Xcelsius 2008 のインストールのハードウェアおよびソフトウェア要件 195
Xcelsius のインストール (オプション) 196

B お客様からのご意見をお待ちしております。 197

1 はじめに

HP Service Health Reporter (SHR) は、履歴に基づいたクロスドメインのインフラストラクチャパフォーマンスレポートソリューションです。Business Service Management (BSM) ビジネスサービスおよびビジネスアプリケーションまたは HP Operations Manager (HPOM) ノードグループから基盤となるインフラストラクチャへのトップダウンレポートと、インフラストラクチャから影響を受けるビジネスサービスおよびビジネスアプリケーションまたはノードグループへのボトムアップレポートの両方を表示します。トポロジ情報を活用して、基盤となるインフラストラクチャの稼働状態、パフォーマンス、および可用性がビジネスサービスやビジネスアプリケーションに長期的にどのような影響を与えるかを示します。

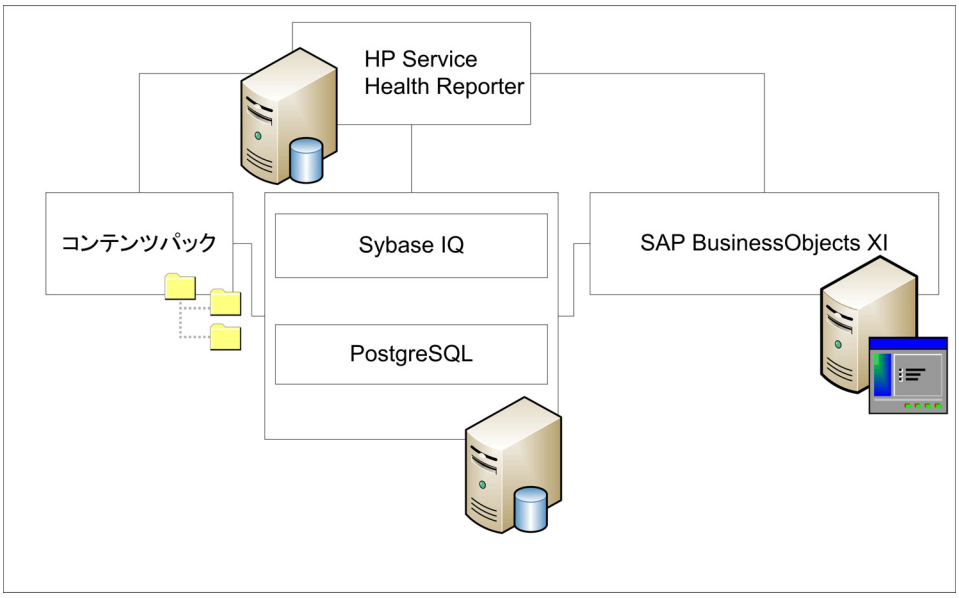
SHR によって作成されるレポートを使用すると、さまざまな IT 要素の使用状況とパフォーマンスのデータを比較および分析し、次のような目標を達成することができます。

- IT インフラストラクチャの負荷と効率を分析する。
- パフォーマンスを予測し、キャパシティと使用率を計画する。
- ビジネスおよび IT 環境に影響する問題のパターンを識別する。

SHR は、さまざまなデータソースからデータを収集して処理し、処理済みのデータを使用してレポートを生成します。SHR は、パフォーマンスデータを格納するための Sybase IQ データベース、レポートを作成するための SAP Business Objects、管理データを格納するための PostgreSQL データベースといったコンポーネントを使用します。SHR のコレクタコンポーネントは、RTSM、HP OM、BSM プロファイルデータベース、BSM 管理データベース、Operations Manager i (OMi) データベース、HP SiteScope および HP Operations Agent からデータを取得します。

SHR のすべてのコンポーネントを単一のシステムにインストールできます。単一のシステムで SHR のすべてのコンポーネントをサポートできない場合は、データコレクターおよび Sybase IQ コンポーネントを別のシステムにインストールできます。データソースが大規模な領域にわたって分散している場合、SHR コレクターを異なる複数のシステムにデプロイできます。ネットワーク負荷を軽減し、データソースへの接続性を高めることができます。

SHR のコンポーネント



HP は、SHR に付属しているバージョンの Sybase IQ と SAP Business Objects のみをサポートします。HP は、システムにすでに存在しているこれらの製品のライセンスをサポートしません。

SHR およびそのアーキテクチャと機能の詳細については、『HP Service Health Reporter コンセプトガイド』を参照してください。

SHR デプロイメントシナリオ

SHR は次のような環境にデプロイできます。

- Service and Operations Bridge (SaOB) が存在する環境
- Application Performance Management (APM) が存在する環境
- HPOM が存在する環境
- VMware vCenter が存在する環境

Service and Operations Bridge

このデプロイメントシナリオでは、Run-time Service Model (RTSM) が、SHR のトポロジ情報のソースになります。RTSM がこのデプロイメント環境内にインストールされている必要があります。

このデプロイメントシナリオでは次のような HP 製品がサポートされます。

- データ取得製品としての HP SiteScope、Real User Monitor (RUM)、Business Process Monitor (BPM) などの 1 つ以上のアプリケーションを含む BSM プラットフォーム
- HPOM with the following Smart Plug-ins

  - Oracle database Smart Plug-in
  - Microsoft SQL Server database Smart Plug-in
  - IBM WebSphere Application Server Smart Plug-in
  - Oracle WebLogic Application Server Smart Plug-in
  - Microsoft Active Directory Smart Plug-in
  - Microsoft Exchange Smart Plug-in
  - Systems Infrastructure Smart Plug-in
  - Virtualization Infrastructure Smart Plug-in
- HP Network Node Manager i ソフトウェア (NNMi) および HP Network Node Manager iSPI Performance for Metrics ソフトウェア
- BSM ソリューションの Operations Bridge としての BSM Operations Management (OMi)

BSM Service and Operations Bridge のデプロイメントシナリオの詳細については、『SHR コンセプトガイド』を参照してください。

Application Performance Management

APM デプロイメントシナリオでは、RTSM がトポロジ情報のソースになります。RTSM がこのデプロイメント環境内にインストールされている必要があります。

このデプロイメントシナリオでサポートされる HP 製品には、データ取得製品として、HP SiteScope、RUM、BPM、または NNMi などの 1 つ以上のアプリケーションを含む BSM プラットフォームが含まれます。

アプリケーションパフォーマンス管理のデプロイメントシナリオの詳細については、『SHR コンセプトガイド』を参照してください。

HPOM

HPOM のデプロイメントシナリオでは、HPOM データベースサーバーが、SHR のトポロジ情報のソースになります。HPOM がこのデプロイメント環境内にインストールされている必要があります。HPOM データベースサーバーには次のものが含まれる可能性があります。

- HPOM for Windows
- HPOM for UNIX
- HPOM for Linux
- HPOM for Solaris

このデプロイメントシナリオでは次のような HP 製品がサポートされます。

- HPOM with the following Smart Plug-ins
  - Oracle database Smart Plug-in
  - Microsoft SQL Server database Smart Plug-in
  - IBM WebSphere Application Server Smart Plug-in
  - Oracle WebLogic Application Server Smart Plug-in

  - Microsoft Active Directory Smart Plug-in
  - Microsoft Exchange Smart Plug-in
  - Systems Infrastructure Smart Plug-in
  - Virtualization Infrastructure Smart Plug-in
- HP Operations agent
- HP Network Node Manager i ソフトウェア (NNMi) および HP Network Node Manager iSPI Performance for Metrics ソフトウェア

HPOM のデプロイメントシナリオの詳細については、『SHR コンセプトガイド』を参照してください。

VMware vCenter

VMware vCenter は、エンタープライズのビジネスに不可欠なシステムの仮想インフラストラクチャの管理を行う柔軟な中央プラットフォームを提供する分散型サーバー / クライアントソフトウェアソリューションです。VMware vCenter は、パフォーマンスとイベントを中央から監視し、仮想環境の高度な可視性を提供します。そのため、IT 管理者は環境を簡単に制御できます。

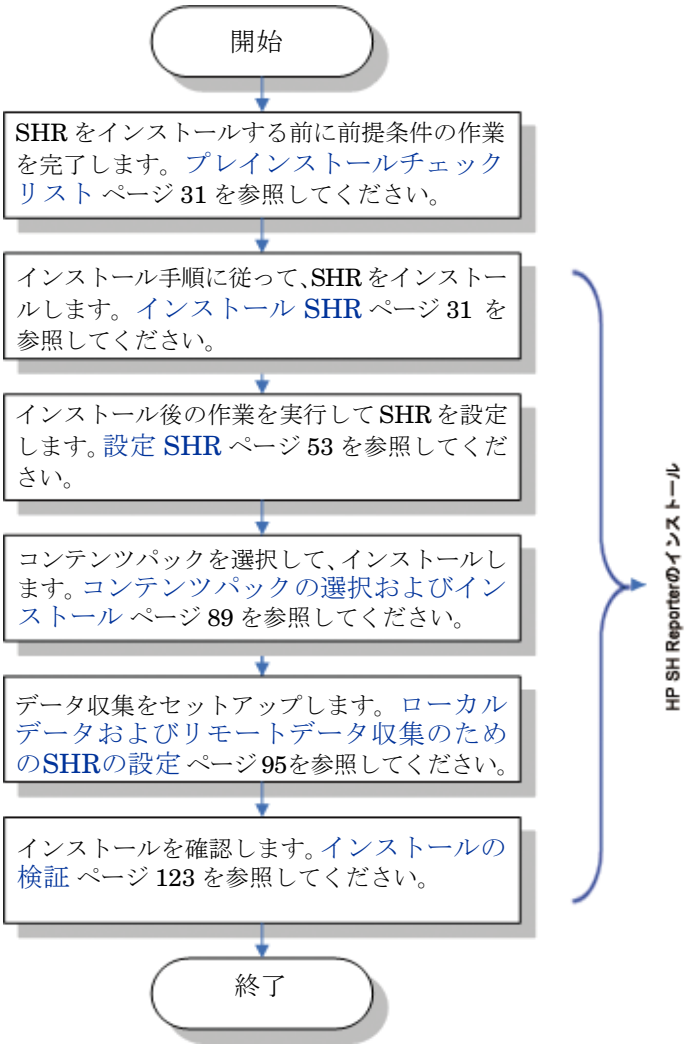
SHR は VMware vCenter データベースから仮想化パフォーマンスメトリックを収集します。

VMware vCenter のデプロイメントシナリオでは、VMware vCenter データベースサーバーが、SHR のトポロジ情報のソースになります。VMware vCenter がこのデプロイメント環境内にインストールされている必要があります。VMware vCenter データソースの収集設定は、次のデプロイメントシナリオで可能です。

トポロジ	データソース
RTSM	RTSM がトポロジ情報のソースで、VMware vCenter がデータソースです。
HPOM	HPOM がトポロジ情報のソースで、VMware vCenter がデータソースです。
VMware vCenter	VMware vCenter がトポロジ情報のソースで、VMware vCenter がデータソースです。 このシナリオでは、システム管理および Virtualization Infrastructure のコンテンツパックのみがサポートされます。

インストールフローチャート

フローチャート内にあるリンクをクリックすると、関連するセクションが表示されます。



インストールメディア

SHR のインストールメディアには、次が含まれています。

- HP Service Health Reporter 9.30 インストールファイル
- Sybase IQ 15.4 ESD 1
- SAP BusinessObjects XI 3.1 Service Pack 5 (SP5) Fix Pack 3
- PostgreSQL 9.0.4
- コンテンツパック
- Xcelsius インストールファイル
- コレクターのインストーラー (コレクターをリモートサーバーにインストールするため)

インストールの概要

SHR メディアに付属する Sybase IQ データベースでは、SHR によってレポートの作成に使用されるデータが保管および処理されます。SHR インストーラーには、Sybase IQ データベースを別のサーバー (SHR がインストールされているサーバー以外) にインストールできるオプションがあります。そのため、SHR のインストール後に次のいずれかの環境を作成できます。

- **単一のサーバー環境**

  SHR と Sybase IQ をこの環境の同一のサーバーにインストールします。

- **デュアルサーバー環境 (リモートデータベース)**

  SHR と Sybase IQ を別々のサーバーにインストールします。Sybase IQ クライアントはコア SHR サーバーにインストールされます。デュアルサーバー環境を作成する場合は、最初に Sybase IQ をインストールしてから、SHR をインストールすることをお勧めします。

リモートシステム上の SHR コレクター

コレクターとは、SHR がネットワーク内のさまざまなデータソースからデータを収集するのに役立つ収集コンポーネントです。リモートサーバーにコレクターをインストールすることで、SHR のパフォーマンスを向上できます。コレクターは任意の数のリモートサーバーにインストールできるため、負荷をサーバーのグループに分散できます。

コレクターは、SHR によってサポートされている任意のオペレーティングシステムを実行するリモートシステムにインストールできます (ソフトウェア要件 ページ 19 を参照)。SHR システムとリモートコレクターシステムは、同じオペレーティングシステムで稼働している必要はありません。コレクターは、異なるオペレーティングシステムで実行されている複数のリモートサーバーにインストールすることもできます。

SHR インストーラーは、必ずコレクターインスタンスを SHR システムにインストールします。コレクターをリモートサーバーにインストールすることを選択した場合でも、SHR システムへのコレクターのインストールはスキップできません。

SHR ドキュメントセット

次に、SHR ドキュメントセット内のマニュアルの一覧を示します。

- リリースノート (HTML 形式)
- コンセプトガイド (PDF 形式)
- インストールおよび設定ガイド (本書、PDF 形式)
- インストールおよび設定ガイド (高可用性クラスタ環境対応)
- 管理者オンラインヘルプ (HTML 形式)
- ユーザーオンラインヘルプ (HTML 形式)
- レポートハンドブック (PDF 形式)
- コンテンツ開発 - スタートアップガイド (PDF 形式)

PDF マニュアルおよびリリースノートは、インストールメディアの **Documentation** ディレクトリに収録されています。インストール後、< インストールディレクトリ >/PMDB/Documentation フォルダーにあるマニュアルが使用できるようになります。

ここでの < インストールディレクトリ > は、SHR をインストールした場所を示します。

Windows では、[**スタート**] → [**プログラム**] → [**HP Software**] → [**SH Reporter**] → [**Documentation**] の順にクリックして、これらのドキュメントを開くこともできます。

最新の更新を確認したり、使用しているドキュメントが最新版であるかどうかを確認するには、次の URL を参照してください。**http://h20230.www2.hp.com/selfsolve/manuals**。

2 インストールの前提条件

デュアルシステム設定 (Sybase IQ を専用システムにインストール) では、SHR ホストとリモート Sybase IQ システムの両方で以下の前提条件を満たす必要があります。

これらの前提条件は、SHR コレクターをインストールするリモートシステムにも適用されます。

ハードウェア要件

ハードウェア要件の一覧については、『HP Service Health Reporter パフォーマンス、サイズ設定、および調整ガイド』を参照してください。このドキュメントは HP Software 製品マニュアル Web サイト (**http://h20230.www2.hp.com/selfsolve/manuals**) からダウンロードできます。

ソフトウェア要件

コンポーネント	バージョン
サポートされるオペレーティングシステム	• Microsoft Windows Server 2008 x64 Enterprise Edition Service Pack 2 • Microsoft Windows Server 2003 x64 Enterprise Edition Service Pack 2 • Microsoft Windows Server 2008 R2 x64 Enterprise Edition Service Pack 1 • Red Hat Enterprise Linux 5.5, 6.0, 6.2
Web ブラウザー	• Internet Explorer 7.0, 8.0, 9.0 • Mozilla Firefox 10.x ESR、17.x ESR ブラウザは Windows でのみサポートされます。SHR が Linux にインストールされている場合でも、SHR コンソールにログオンするには常に Windows システムを使用する必要があります。

オペレーティングシステム要件

SHR をインストールする前に、オペレーティングシステムソフトウェアを更新し、ネットワーク接続を確立して、ウイルス対策ソフトウェアを無効にする必要があります。

Windows

すべての必要なWindowsオペレーティングシステムのパッチがインストールされていることを確認してください。

スワップ領域

スワップ領域が RAM のサイズの 2 倍であることを確認します。

Windows 2003 の要件

SHR を Windows Server 2003 x64 SP2 オペレーティングシステム上にインストールする場合は、次のコンポーネントをインストールする必要があります。

- **Microsoft .NET Framework 2.0 (64 ビット)**

  .NET Framework 2.0 をインストールするには、次の手順を実行します。

  a 管理者としてホストシステムにログオンします。

  b [**スタート**] → [**プログラム**] → [**Internet Explorer**] をクリックします。Internet Explorer が開きます。

  c アドレスバーに次の URL を入力して、Microsoft ダウンロードセンターの Web サイトにアクセスします。

  http://www.microsoft.com/ja-JP/download/details.aspx?id=6523

  URL は、スペースを入れずに 1 行に入力する必要があります。

  d [**ダウンロード**] をクリックして、.NET Framework version 2.0 (x64) 再頒布可能パッケージをダウンロードします。

  e ダウンロードが完了したら、ファイルがダウンロードされた場所を参照して、`NetFx64.exe` セットアップファイルをダブルクリックします。Microsoft .NET Framework 2.0 (x64) セットアップウィザードが開きます。

  f [Microsoft .NET Framework 2.0 (x64) セットアップへようこそ] ページで、[**次へ**] をクリックして続行します。使用許諾契約書ページが開きます。

  g 使用許諾契約書を確認した後で、[**同意する**] チェックボックスをオンにし、[**インストール**] をクリックします。[コンポーネントのインストール] ページが表示されます。

  h コンポーネントをインストールした後に、[セットアップの完了] ページが開きます。[**完了**] をクリックしてインストールを完了します。

- **Window Server 2003 x64 更新プログラム KB925336。**

  フランス語版の Windows Server 2003 x64 SP2 オペレーティングシステム上に SHR をインストールする場合は、その他すべてのオペレーティングシステムのパッチに加えて、`WindowsServer2003.WindowsXP-KB971812-x64-FRA.exe` パッチをインストールする必要があります。

  更新プログラム KB925336 をインストールするには、次の手順を実行します。

  a 管理者としてホストシステムにログオンします。

  b [**スタート**] → [**プログラム**] → [**Internet Explorer**] をクリックします。Internet Explorer が開きます。

  c アドレスバーに次の URL を入力して、Microsoft ダウンロードセンターの Web サイトにアクセスします。

  http://www.microsoft.com/ja-JP/download/details.aspx?id=1048

  URL は、スペースを入れずに 1 行に入力する必要があります。

d [**ダウンロード**] をクリックして、更新プログラムをダウンロードします。

e ダウンロードが完了したら、ファイルがダウンロードされた場所を参照して、`WindowsServer2003.WindowsXP-KB925336-x64-ENU.exe` セットアップファイルをダブルクリックし、オペレーティングシステムの更新プログラムをインストールします。Windows x64 用修正プログラム (KB925336) ウィザードが開きます。

f [**次へ**] をクリックして続行します。[ライセンス契約] ページが開きます。

g 使用許諾契約書を読み、[**同意する**] を選択し、[**次へ**] をクリックして続行します。[システムの更新] ページが開きます。

h [**完了**] をクリックしてインストールを完了します。

i システムを再起動します。

Linux

- **ライブラリ (Red Hat Enterprise Linux 6.x の場合のみ)**

  以下のライブラリが SHR システムで利用可能であることを確認します。

  ➤ この一覧は、必要とされるライブラリの最低要件バージョンを示しています。利用可能な場合は、各ライブラリの上位バージョンをインストールすることも可能です。

  — libXext-1.1-3.el6.x86_64

  — libXext-1.1-3.el6.i686

  — libXext-devel-1.1-3.el6.i686

  — libXext-devel-1.1-3.el6.x86_64

  — libstdc++-4.4.4-13.el6.x86_64

  — libstdc++-4.4.4-13.el6.i686

  — libstdc++-devel-4.4.4-13.el6.x86_64

  — compat-libstdc++-33-3.2.3-69.el6.x86_64

  — compat-libstdc++-33-3.2.3-69.el6.i686

  — libXtst-1.0.99.2-3.el6.i686

  — libXtst-devel-1.0.99.2-3.el6.i686

  — libXtst-1.0.99.2-3.el6.x86_64

  — libXau-1.0.5-1.el6.i686

  — libXau-devel-1.0.5-1.el6.i686

  — libXau-1.0.5-1.el6.x86_64

  — libXdmcp-1.0.3-1.el6.i686

  — libXdmcp-devel-1.0.3-1.el6.i686

  — libxcb-1.5-1.el6.x86_64

  — libxcb-devel-1.5-1.el6.i686

  — libxcb-1.5-1.el6.i686

- libXrender-0.9.5-1.el6.i686
- libXrender-0.9.5-1.el6.x86_64
- glibc-2.12-1.7.el6.x86_64
- glibc-2.12-1.7.el6.i686
- libgcc-4.4.1-13.el6.i686
- libgcc-4.4.4-13.el6.x86_64
- libX11-devel-1.3-2.el6.i686
- libX11-1.3-2.el6.i686
- libX11-1.3-2.el6.x86_64
- libXi-1.3-3.el6.x86_64
- libXi-devel-1.3-3.el6.i686
- libXi-1.3-3.el6.i686
- alsa-lib-1.0.22-3.el6.i686
- alsa-lib-1.0.22-3.el6.x86_64
- alsa-lib-devel-1.0.22-3.el6.i686
- alsa-lib-devel-1.0.22-3.el6.x86_64
- nss-softokn-freebl-3.12.7-1.1.el6.i686
- ncurses-libs-5.7-3.20090208.el6.i686
- xorg-x11-proto-devel-7.6-13.el6.noarch

• スワップ領域

スワップ領域が RAM のサイズの 2 倍であることを確認します。

十分なスワップ領域を割り当てるには、次の手順を実行します。

a ルートとしてシステムにログオンします。

b 次のコマンドを入力して、スワップ領域を設定します。

– `dd if=/dev/zero of=<スワップファイルのフルパス> bs=1M count=<スワップサイズ (MB)>`

以下に例を示します。

```
dd if=/dev/zero of=/extraswap bs=1M count=16384
```

– `mkswap /extraswap`

– `swapon /extraswap`

c 次の行が /etc/fstab ファイルに存在することを確認します。

```
/extraswap  swap  swap  defaults  0  0
```

ポートの可用性

SHR は、多様なサービスに対して多数のデフォルトポートを使用します。

サービス	ポート番号	プロトコル	着信	発信	詳細
HP PMDB Platform Message Broker	21401	TCP	はい	はい	メッセージブローカサービスは、ほかの SHR サービスがメッセージを送信または受信したときにこのポートをリッスンします。
HP PMDB Platform DB ロガーサービス	21408	TCP	はい	はい	DB ロガーサービスは、このポートを介してデータベースにログを保持します。
HP PMDB Platform Collection Service	21409	TCP	はい	はい	収集サービス用のJMX管理ポート。IM Service は、このインタフェースを使用して監視を行います。
HP PMDB Platform IM Service	21410	TCP	はい	いいえ	IM Service 用の JMX 管理ポート。
HP PMDB Platform Timer	ポートなし	NA	NA	NA	SHR 用の Timer サービス。
HP PMDB Platform Administrator	21411	TCP	はい	いいえ	SHR の Web アプリケーションサーバーポート。管理 Web アプリケーションをホストします。レポートクロス起動機能は、このサービスに依存します。
HP Software Communication Broker	383	TCP	はい	はい	SHR は、リモートサーバーにインストールされているコレクターとの通信にこのポートを使用します。
管理コンソール Web サーバー	21416	TCP	はい	はい	SHRの管理Webサーバー用の JMX 管理ポート。
HP PMDB Platform Sybase Service	21424	TCP	はい	はい	Sybase IQ サーバー用のポート。
Sybase IQ Agent 15.4	21423	TCP	はい	いいえ	Sybase IQ Agent 用のポート。

サービス	ポート番号	プロトコル	着信	発信	詳細
HP-SHR-Postgre - PostgreSQL Server 9.0	21425	TCP	はい	はい	PostgreSQLサービス用のポート。
Apache Tomcat 5.5.20	8080	TCP	はい	いいえ	SAP BOBJ Application Service ポート。SAP BOBJ Central Management Console および SAP BOBJ InfoView Web アプリケーションはこのポートでホストされます。
SAP BOBJ Central Management Server	6400	TCP	はい	はい	SAP BOBJ Central Management Server 用のポート。主に、SAP BOBJ の認証の目的で使用されます。
Server Intelligence Agent (HOML01GEATON)	6410	TCP	はい	はい	SAP BOBJ Server Intelligence Agent 用のポート。すべての SAP BOBJ 関連タスクを管理します。
BOE120SQLAW	2638	TCP	はい	はい	SAP BOBJ リポジトリデータベース用のポート。
BOE120MYSQL	3306	TCP	はい	はい	SAP BOBJ リポジトリデータベース用のポート。
RTSM	21212	TCP	いいえ	はい	RTSM データソース用に管理コンソールで設定されたポート。SHR は、このポートを使用して RTSM に接続します。

サービス	ポート番号	プロトコル	着信	発信	詳細
HPOM	任意	TCP	いいえ	はい	HPOM データベース用に 管理コンソールで設定されたポート。SHR は、このポートを使用して HPOM データベースに接続します。
HP Operations Agent	383	TCP	いいえ	はい	SHR は、このポートを使用して HP Operations agent に接続します。
HP BSM プロファイルデータベース	任意	TCP	いいえ	はい	プロファイルデータベース用に 管理コンソールで設定されたポート。 SHR は、このポートを使用して、プロファイルデータベースおよび OMi データベースに接続します。

ファイアウォールの要件

*Windows の場合。*ファイアウォールソフトウェアをインストールする場合は、ファイアウォールで SHR のポートを開く必要があります。手順については、ファイアウォールのマニュアルを参照してください。

Linux の場合 ファイアウォールを完全に無効にする必要があります。

ファイアウォールを無効にするには、ルートとしてログオンした後に次のコマンドを実行します。

```
/etc/init.d/iptables stop
/etc/init.d/ip6tables stop
```

Web ブラウザーの要件

Internet Explorer で管理コンソールを表示するには、ActiveX および JavaScript コントロールを有効にする必要があります。

ブラウザは Windows でのみサポートされます。SHR が Linux にインストールされている場合でも、SHR コンソールにログオンするには常に Windows システムを使用する必要があります。

ActiveX コントロールの有効化

Internet Explorer 7.x、8.x、または 9.x で ActiveX コントロールを有効にするには、次の手順を実行します。

1. Internet Explorer を開きます。
2. [**ツール**] → [**インターネット オプション**] をクリックします。[インターネット オプション] ダイアログボックスが開きます。

3 [**セキュリティ**] タブで [**レベルのカスタマイズ**] ボタンをクリックします。

4 [**ActiveX コントロールとプラグイン**] セクションまで下にスクロールします。

5 [**ActiveX コントロールとプラグイン**] の下にある利用可能なすべてのオプションについて [**有効にする**] を選択します。

6 [**OK**] をクリックします。

7 警告メッセージボックスで [**はい**] をクリックします。

8 [**適用**] をクリックし、[**OK**] をクリックします。

JavaScript コントロールの有効化

Internet Explorer 7.x、8.x、または 9.x で JavaScript コントロールを有効にするには、次の手順を実行します。

1 Internet Explorer を開きます。

2 [**ツール**] → [**インターネット オプション**] をクリックします。[インターネット オプション] ダイアログボックスが開きます。

3 [**セキュリティ**] タブで [**レベルのカスタマイズ**] ボタンをクリックします。

4 [**スクリプト**] セクションまで下にスクロールします。

5 [**スクリプト**] の下にある利用可能なすべてのオプションについて [**有効にする**] を選択します。

6 **[OK]** をクリックします。

7 警告メッセージボックスで [**はい**] をクリックします。

[**適用**] をクリックし、[**OK**] をクリックします。

プレインストールの作業

上記の前提条件が満たされていることが確認できたら、SHR のインストールに向けたサーバーの準備作業を実行する必要があります。

タスク 1: ウイルス対策の無効化

ウイルス対策アプリケーションは、SHR のインストールの妨げになることがあります。実行されているウイルス対策ソフトウェアがある場合は、一時的に無効にします。

インストールの完了後にウイルス対策ソフトウェアを再び有効にしてください。

タスク 2: システムの完全修飾ドメイン名 (FQDN) の確認

SHR のインストールを実行する前に、DNS の参照で、ホストシステムの正確な FQDN が返されることを確認する必要があります。DNS の参照のエントリーがシステムのホスト名と異なっている場合、結果として管理コンソールでのログインが失敗する可能性があります。これは、SAP BOBJ のインストール中に、サーバー / サービスの作成およびそれらの登録のためにシステムのホスト名が使用されるために発生します。

ホストシステムの FQDN を確認するには、次の手順に従います。

1 コマンドプロンプトを開きます。

2 次のコマンドを入力して、システムのホスト名を確認します。

Windows の場合

hostname

Linux の場合

hostname -f

システムのホスト名をメモします。

3 次のコマンドを入力して、システムの IP アドレスを確認します。

Windows の場合

ipconfig

Linux の場合

ifconfig

4 次のコマンドを入力して、表示された IP アドレスの FQDN を確認します。

nslookup <*IP アドレス*>

ここでの <*IP アドレス*> はホストシステムの IP アドレスです。

DNS 参照コマンドを実行した後に表示される名前が、HOSTNAME コマンドを実行した後に表示される名前と一致していることを確認します。名前が一致していない場合は、システムのホスト名を変更する必要があります。

タスク 3: *Windows の場合のみ。*ユーザーアカウント制御 (UAC) を無効にする

このタスクは、ホストシステムで Windows Server 2008 with Service Pack 2 または Windows Server 2008 R2 with Service Pack 1 オペレーティングシステムが実行されている場合にのみ実行してください。

ホストシステムで Windows Server 2008 Service Pack 2 が実行されている場合は、次の手順を実行してください。

1 [**スタート**] → [**コントロール パネル] をクリックします。**[コントロール パネル] ウィンドウが開きます。

2 [コントロール パネル] ウィンドウで、[**ユーザー アカウント**] をダブルクリックします。

3 [ユーザー アカウント] ウィンドウで、[**ユーザー アカウント**] をクリックします。

4 [ユーザー アカウント] タスクウィンドウで、[**ユーザーアカウント制御の有効化または無効化**] をクリックします。

5 現在UACが管理者承認モードで設定されている場合は、[**ユーザー アカウント制御**] メッセージが表示されます。[**続行**] をクリックします。

6 [**ユーザーアカウント制御 (UAC) を使ってコンピューターの保護に役立たせる**] チェックボックスをオフにして、[**OK**] をクリックします。

7 [**今すぐ再起動する**] をクリックして変更を適用します。

ホストシステムで Windows Server 2008 R2 Service Pack 1 が実行されている場合は、次の手順を実行してください。

1 [**スタート**] → [**コントロール パネル] をクリックします。**[コントロール パネル] ウィンドウが開きます。

2 [コントロール パネル] ウィンドウで、[**ユーザー アカウント**] をダブルクリックします。

3 [ユーザー アカウント] ウィンドウで、[**ユーザー アカウント**] をクリックします。

4 [ユーザー アカウント] タスクウィンドウで、[**ユーザー アカウント制御設定の変更**] をクリックします。

5 [ユーザー アカウント制御設定] ウィンドウで、スライダーを一番下まで移動して [**通知しない**] オプションを選択し、[**OK**] をクリックします。

6 現在UACが管理者承認モードで設定されている場合は、[ユーザー アカウント制御] メッセージが表示されます。[**続行**] をクリックします。

7 [**今すぐ再起動する**] をクリックして変更を適用します。

タスク 4: *Linux の場合のみ。*Linux サーバーの準備

Linux サーバーでは、追加の手順を実行する必要があります。

SELinux の無効化

SELinux を無効にするには、`/etc/sysconfig/selinux` ファイルで `SELINUX = disabled` を設定します。

SAP Business Objects インストールに向けたシステムの設定

a `/etc/sysconfig/network` ファイルを開き、HOSTNAME パラメーターが (システムの FQDN ではなく) システムのホスト名に設定されていることを確認します。

b 次の例に示すように、ドメイン名および DNS サーバーを `/etc/resolv.conf` ファイルに追加します。

```
domain domain.example.com
nameserver <IP アドレス 1>
nameserver <IP アドレス 2>
search domain.example.com
```

c `/etc/hosts` でホスト名、IP アドレス、FQDN のパラメーターを次のように設定します。

```
127.0.0.1   localhost localhost.localdomain localhost4 localhost4.localdomain4
::1         localhost localhost.localdomain localhost6 localhost6.localdomain6
<IP アドレス >   abcd.ind.xy.com abcd
```

Kernel パラメーターの設定

Kernel パラメーターを設定するには、次の手順を実行します。

1 `/etc/security/limits.conf` ファイルを開き、次の値を設定してオープンファイルの数を増やします。

```
* soft    nofile  65535
* hard    nofile  65535
```

2 *Red Hat Enterprise Linux 6.x の場合のみ。* `etc/security/limits.d/90-nproc.conf` ファイルを開き、(先頭に # 文字を追加して) 次のラインをコメントアウトします。

```
#*soft    nproc     1024
```

3 *Red Hat Enterprise Linux 6.x の場合のみ。*`/etc/sysctl.conf` ファイルを開き、パラメーターの値を次のように設定します。

> より高い値がこれらのパラメーターにすでに指定されている場合は、変更しないでください。

- kernel.msgmnb = 65536
- kernel.msgmax = 65536
- kernel.shmmax = 68719476736
- kernel.shmall = 4294967296
- kernel.sem = 250 1024000 250 4096
- vm.max_map_count = 1000000
- kernel.msgmax = 65536
- kernel.msgmnb = 65536

4 システムを再起動します。

ネットワーク構成ファイルの変更

ネットワークを設定するには、次の手順を実行します。

1 `/etc/sysconfig/network` でホスト名のショートネームを次のように設定します。

NETWORKING=yes

HOSTNAME=server1

2 /etc/hosts を次のように設定します。

127.0.0.1 localhost.localdomain localhost

192.168.0.1 server1.example.com server1

追加のホストがある場合は、上記の 2 行の後ろに追加します。

3 解決の順序を設定します。解決の順序を設定するには、次の表に示すファイルを開き、パラメーターを表の値に設定します。

ファイルを開く	記載の値にパラメーターを設定する
`etc/nsswitch.conf`	`hosts:`*files dns*
`etc/host.conf`	`multi on` `order hosts,bind`

4 `/etc/resolv.conf` ファイルでドメイン名を設定します。

domain example.com

nameserver a.b.c.d

nameserver a1.b1.c1.d1

3 インストール SHR

プレインストールチェックリスト

SHR のインストールに進む前に、以下のタスクが完了していることを確認してください。

☐ ハードウェアがSHRの要件を満たしている。	『HP Service Health Reporter パフォーマンス、サイズ設定、および調整ガイド』を参照してください。
☐ SHR をサポートするオペレーティングシステムと Web ブラウザーを使用している。	ソフトウェア要件 ページ 19 を参照してください。
☐ オペレーティングシステムの必要なパッチをインストールした。	オペレーティングシステム要件 ページ19を参照してください。
☐ ネットワークおよびクライアントの接続のためのポート番号を確認した。	ポートの可用性 ページ 23 を参照してください。
☐ SHR のインストールの妨げになる可能性があるすべてのウイルス対策アプリケーションを無効にした。	ウイルス対策の無効化 ページ 26 を参照してください。
☐ SHR をインストールするホストシステムの FQDN を確認した。	システムの完全修飾ドメイン名 (FQDN) の確認 ページ 26 を参照してください。
☐ Webブラウザーの必要なコントロールを有効にした。	Web ブラウザーの要件 ページ 25 を参照してください。

➤ SHR インストーラはインストールのロールバックをサポートしていません。インストールに失敗した場合は、インストーラが配置したすべてのファイルを手動で削除する必要があります。

Linux の場合の追加の確認事項

Linux では SHR のインストールに進む前に、以下のタスクを完了していることを確認してください。

☐ ファイアウォールを無効にした。	ファイアウォールの要件 ページ 25 を参照してください。
☐ ネットワーク設定ファイルを編集した。	ネットワーク構成ファイルの変更 ページ 29 を参照してください。
☐ 必要なライブラリをすべてインストールした。	ライブラリ (Red Hat Enterprise Linux 6.x の場合のみ) ページ 21 を参照してください。
☐ SAP BusinessObject をインストールするためにシステムを設定した。	SAP Business Objects インストールに向けたシステムの設定 ページ 28 を参照してください。
☐ カーネルパラメーターを設定した。	Kernel パラメーターの設定 ページ 28 を参照してください。
☐ スワップ領域のサイズを使用可能な RAM の 2 倍のサイズに増加した。	Linux の場合のみ。Linux サーバーの準備 ページ 28 を参照してください。

インストールの準備

SHR の電子配布には、3 つの異なるファイルが付属しています。SHR の物理配布には、3 枚の異なる DVD が含まれます。SHR をインストールするには、3 つのファイルまたは DVD を 1 つの ISO ファイルに再構築する必要があります。

メディアの再構築

Windows の場合

1 管理者としてログオンします。

2 ISO の各部 (.PART1 ファイル、.PART2 ファイル、.PART3 ファイル) を共通のディレクトリにコピーします。

3 ISO の各部をコピーしたディレクトリに移動します。

```
cd <ディレクトリ>
```

4 次のコマンドを実行します。

```
copy /b TD185-1500?.part? SHR.iso
```

これで、ISO の各部がすべて `SHR.iso` ファイルに結合されます。このマージ済み ISO ファイルを使用して、SHR をインストールできます。

Linux の場合

1 root としてログオンします。

2 ISO の各部 (.PART1 ファイル、.PART2 ファイル、.PART3 ファイル) を共通のディレクトリにコピーします。

3 ISO の各部をコピーしたディレクトリに移動します。

cd <ディレクトリ>

4 次のコマンドを実行します。

cat TD185-1501?.part? > SHR.iso

これで、ISO の各部がすべて SHR.iso ファイルに結合されます。

5 マージ済み ISO ファイルをマウントします。

6 ディレクトリを新規作成し、マウント済み ISO ファイルのコンテンツを新規ディレクトリにコピーします。

7 オプション。ISO ファイルをアンマウントすることもできます。

8 新規作成したディレクトリに移動し、インストーラープログラムを使用して製品のインストールを開始します。

追加の考慮

- root または管理者としてシステムにログオンします。Windows では、ローカル管理者グループのメンバーである必要があります。
- インストールの途中でシステム時間が変更されないようにしてください。インストール中にシステムが自動的に夏時間に遷移しないようにしてください。
- ネットワーク共有から SHR をインストールしないでください。インストールファイルのサイズが大きいため、ネットワークを使用した SHR のインストールはサポートされていません。

単一システムのインストール : 単一システム上での SHR と Sybase IQ のインストール

製品は、インストールウィザードを使用してインストールすることも、コマンド行コンソールを使用してインストールすることもできます (Linuxの場合のみ)。ウィザードを使用してインストールするには、インストールウィザードを使用したインストールを参照してください。コマンド行コンソールからインストールするには、コマンド行コンソールからのインストール (Linux の場合のみ) を参照してください。

インストールウィザードを使用したインストール

インストールウィザードを使用してインストールするには、次の手順を実行します。

1 物理 DVD を使用する場合、自動実行プログラムによってインストールウィザードが自動的に開きます。自動実行プログラムによってインストールが開始されない場合、または ISO ファイルを使用する場合、メディアのルートで次のファイルを実行します。

Windows の場合

HP-SHR_9.30-setup.exe

Linux の場合

HP-SHR_9.30-setup.bin

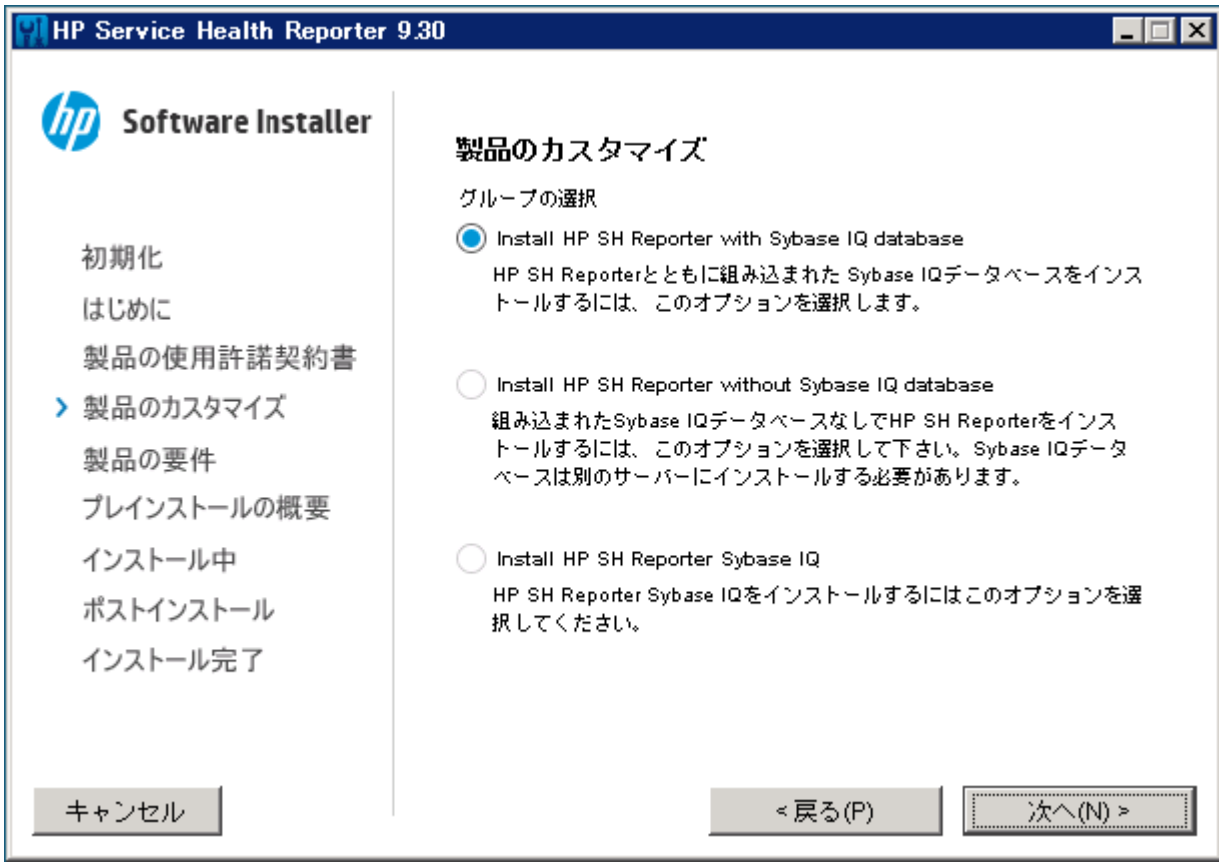
2 SHR をインストールする言語を選択してから [**OK**] をクリックします。

3 [はじめに] ページが開きます。[はじめに] ページの注を見直し、[**次へ**] をクリックします。

4 [ライセンス契約] ページが開きます。使用許諾契約書を読み、[**同意する ...**] を選択し、[**次へ**] をクリックします。

5 Windows の場合のみ。[フォルダの選択] ページが開きます。インストーラーでは、Windows 上の場合のみ、デフォルト以外のインストールディレクトリを選択できます。SHR のフォルダをデフォルト以外にしたい場合、必要な変更を行い、[**次へ**] をクリックします。

6 [製品のカスタマイズ] ページが開きます。[製品のカスタマイズ] ページで最初のオプションを選択し、[**次へ**] をクリックします。



7 インストーラーはインストールの前提条件について確認し、[インストールチェック] ページにチェックの結果を表示します。チェックが正常に終了した場合は、[**次へ**] をクリックします。

8 [プレインストールの概要] ページが開きます。概要を確認し、[**インストール**] をクリックします。

9 インストールが完了したら、[**完了**] をクリックします。

コマンド行コンソールからのインストール (Linux の場合のみ)

コマンド行コンソールからインストールするには、次の手順を実行します。

1 メディアのルートに移動します。

2 コマンドプロンプトに次のコマンドを入力します。

```
./HP-SHR_9.30_setup.bin -i console
```

3 [**Enter**] キーを押してインストールを開始します。

インストール中のどの時点でも、back と入力して前のページに戻ることも、quit と入力してインストールをキャンセルすることもできます。

4 [ロケールの選択] セクションが表示されます。SHR をインストールする言語を選択してから [**Enter**] キーを押します。

5 インストーラーによって、プレインストールの情報がコンソールに表示されます。[**Enter**] キーを押します。

6 インストーラーによって、使用許諾契約の詳細が表示されます。**Y** と入力して契約書に同意し、[**Enter**] キーを押します。

7 インストーラーによって、さまざまなインストールオプションが表示されます。SHR と Sybase IQ をインストールするために **1** と入力し、[**Enter**] キーを押します。インストーラーは必要な前提条件のチェックを実行し、チェックの結果をコンソールに表示します。

8 [**Enter**] キーを押します。インストーラーによってプレインストールの概要がコンソールに表示されます。[**Enter**] キーを押してインストールを開始します。

ポストインストールの作業

簡体字中国語または日本語のロケールのシステムでは、インストール後に次のファイルを手動で削除します。

Windows の場合

- *%PMDB_HOME%*`¥Sybase¥IQ-15_4¥Bin64¥dblgzh_iq12.dll`
- *%PMDB_HOME%*`¥Sybase¥IQ-15_4¥Bin64¥dblgja_iq12.dll`

Linux の場合

- `$PMDB_HOME/Sybase/IQ-15_4/res/dblgzh_iq12_eucgb.res`
- `$PMDB_HOME/Sybase/IQ-15_4/res/dblgzh_iq12_cp936.res`
- `$PMDB_HOME/Sybase/IQ-15_4/res/dblgja_iq12_eucjis.res`
- `$PMDB_HOME/Sybase/IQ-15_4/res/dblgja_iq12_sjis.res`

デュアルシステムのインストール：別々のシステムでの SHR と Sybase IQ のインストール

SHR の一般的なインストールでは、Sybase IQ のサーバーとクライアントを SHR アプリケーションとともに同じホストシステム上にインストールします。ただし、SHR には、Sybase IQ サーバーを別のサーバー上にリモートインストールするオプションもあります。このタイプのインストールでは、Sybase IQ クライアントのみを SHR とともにホストシステムにインストールします。

デュアルサーバーインストールの場合、SHR をインストールする前に Sybase IQ をインストールすることを推奨します。

SHR メディアからの Sybase IQ のインストール

製品は、インストールウィザードを使用してインストールすることも、コマンド行コンソールを使用してインストールすることもできます (Linuxの場合のみ)。ウィザードを使用してインストールするには、インストールウィザードを使用したインストールを参照してください。コマンド行コンソールからインストールするには、コマンド行コンソールからのインストール (Linux の場合のみ) を参照してください。

インストールウィザードを使用したインストール

インストールウィザードを使用してインストールするには、次の手順を実行します。

1. 物理 DVD を使用する場合、自動実行プログラムによってインストールウィザードが自動的に開きます。自動実行プログラムによってインストールが開始されない場合、または ISO ファイルを使用する場合、メディアのルートで次のファイルを実行します。

   Windows の場合

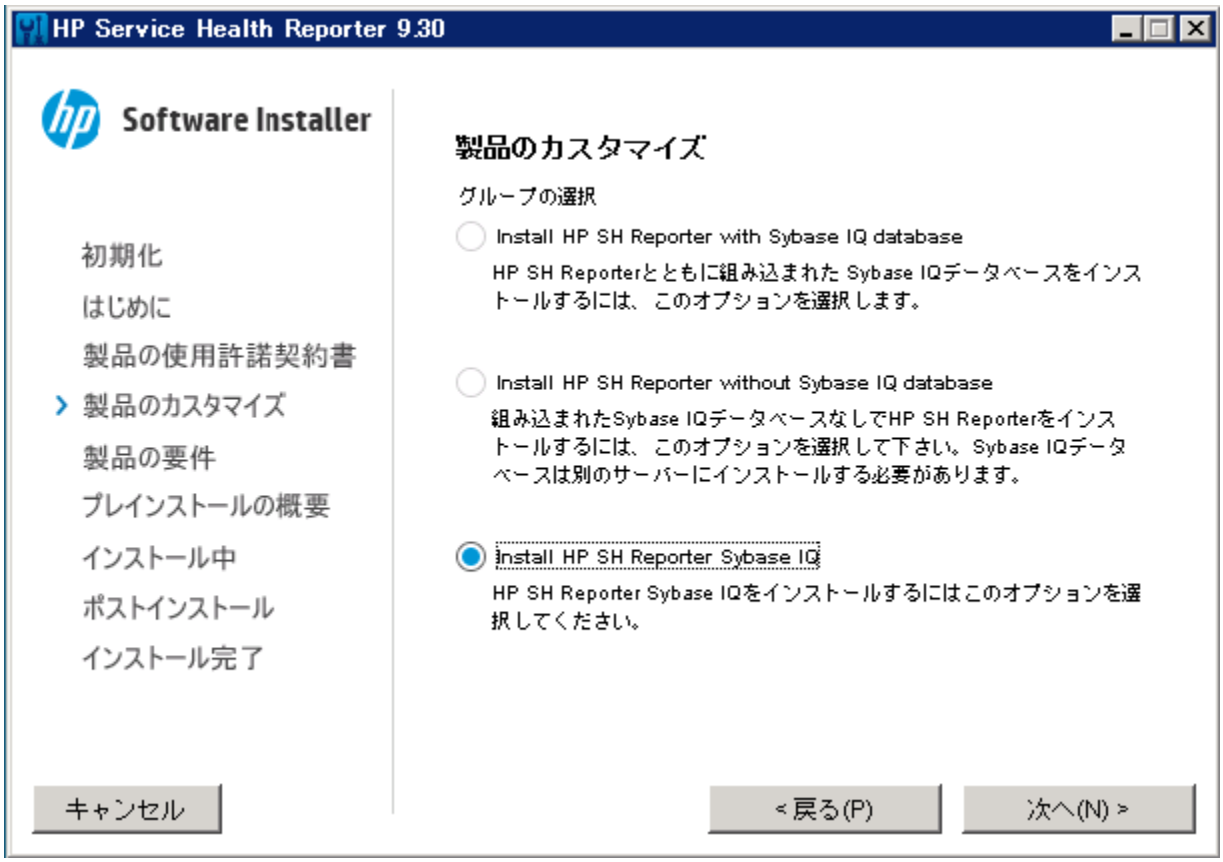
   `HP-SHR_9.30-setup.exe`

   Linux の場合

   `HP-SHR_9.30-setup.bin`

2. インストールする言語を選択してから [SHROK] **をクリックします。**
3. [はじめに] ページが開きます。[はじめに] ページの注を見直し、[**次へ**] をクリックします。
4. [ライセンス契約] ページが開きます。使用許諾契約書を読み、[**同意する ...**] を選択し、[**次へ**] をクリックします。
5. Windows の場合のみ。[フォルダの選択] ページが開きます。インストーラーでは、Windows 上の場合のみ、デフォルト以外のインストールディレクトリを選択できます。SHR のフォルダをデフォルト以外にしたい場合、必要な変更を行い、[**次へ**] をクリックします。

6 [製品のカスタマイズ] ページが開きます。[製品のカスタマイズ] ページで 3 番目のオプションを選択し、[**次へ**] をクリックします。



7 インストーラーはインストールの前提条件について確認し、[インストールチェック] ページにチェックの結果を表示します。チェックが正常に終了した場合は、[**次へ**] をクリックします。

8 [プレインストールの概要] ページが開きます。概要を確認し、[**インストール**] をクリックします。

9 インストールが完了したら、[**完了**] をクリックします。

コマンド行コンソールからのインストール (Linux の場合のみ)

コマンド行コンソールからインストールするには、次の手順を実行します。

1 メディアのルートに移動します。

2 コマンドプロンプトに次のコマンドを入力します。

```
./HP-SHR_9.30_setup.bin -i console
```

3 [**Enter**] キーを押してインストールを開始します。

インストール中のどの時点でも、back と入力して前のページに戻ることも、quit と入力してインストールをキャンセルすることもできます。

4 [ロケールの選択] セクションが表示されます。インストールする言語を選択してから [SHREnter] **キーを押します。**

5 インストーラーによって、プレインストールの情報がコンソールに表示されます。[**Enter**] キーを押します。

6 インストーラーによって、使用許諾契約の詳細が表示されます。**Y** と入力して契約書に同意し、[**Enter**] キーを押します。

7 インストーラーによって、さまざまなインストールオプションが表示されます。Sybase IQ をインストールするために **3** と入力し、[**Enter**] キーを押します。インストーラーは必要な前提条件のチェックを実行し、チェックの結果をコンソールに表示します。

8 [**Enter**] キーを押します。インストーラーによってプレインストールの概要がコンソールに表示されます。[**Enter**] キーを押してインストールを開始します。

ポストインストールの作業

簡体字中国語または日本語のロケールのシステムでは、Sybase IQ をインストールしたシステムから次のファイルを手動で削除します。

Windows の場合

- *%PMDB_HOME%*¥`Sybase¥IQ-15_4¥Bin64¥dblgzh_iq12.dll`
- *%PMDB_HOME%*¥`Sybase¥IQ-15_4¥Bin64¥dblgja_iq12.dll`

Linux の場合

- `$PMDB_HOME/Sybase/IQ-15_4/res/dblgzh_iq12_eucgb.res`
- `$PMDB_HOME/Sybase/IQ-15_4/res/dblgzh_iq12_cp936.res`
- `$PMDB_HOME/Sybase/IQ-15_4/res/dblgja_iq12_eucjis.res`
- `$PMDB_HOME/Sybase/IQ-15_4/res/dblgja_iq12_sjis.res`

専用システムへの SHR のインストール

製品は、インストールウィザードを使用してインストールすることも、コマンド行コンソールを使用してインストールすることもできます (Linuxの場合のみ)。ウィザードを使用してインストールするには、インストールウィザードを使用したインストールを参照してください。コマンド行コンソールからインストールするには、コマンド行コンソールからのインストール (Linux の場合のみ) を参照してください。

インストールウィザードを使用したインストール

インストールウィザードを使用してインストールするには、次の手順を実行します。

1 物理 DVD を使用する場合、自動実行プログラムによってインストールウィザードが自動的に開きます。自動実行プログラムによってインストールが開始されない場合、または ISO ファイルを使用する場合、メディアのルートで次のファイルを実行します。

   Windows の場合

   `HP-SHR_9.30-setup.exe`

   Linux の場合

   `HP-SHR_9.30-setup.bin`

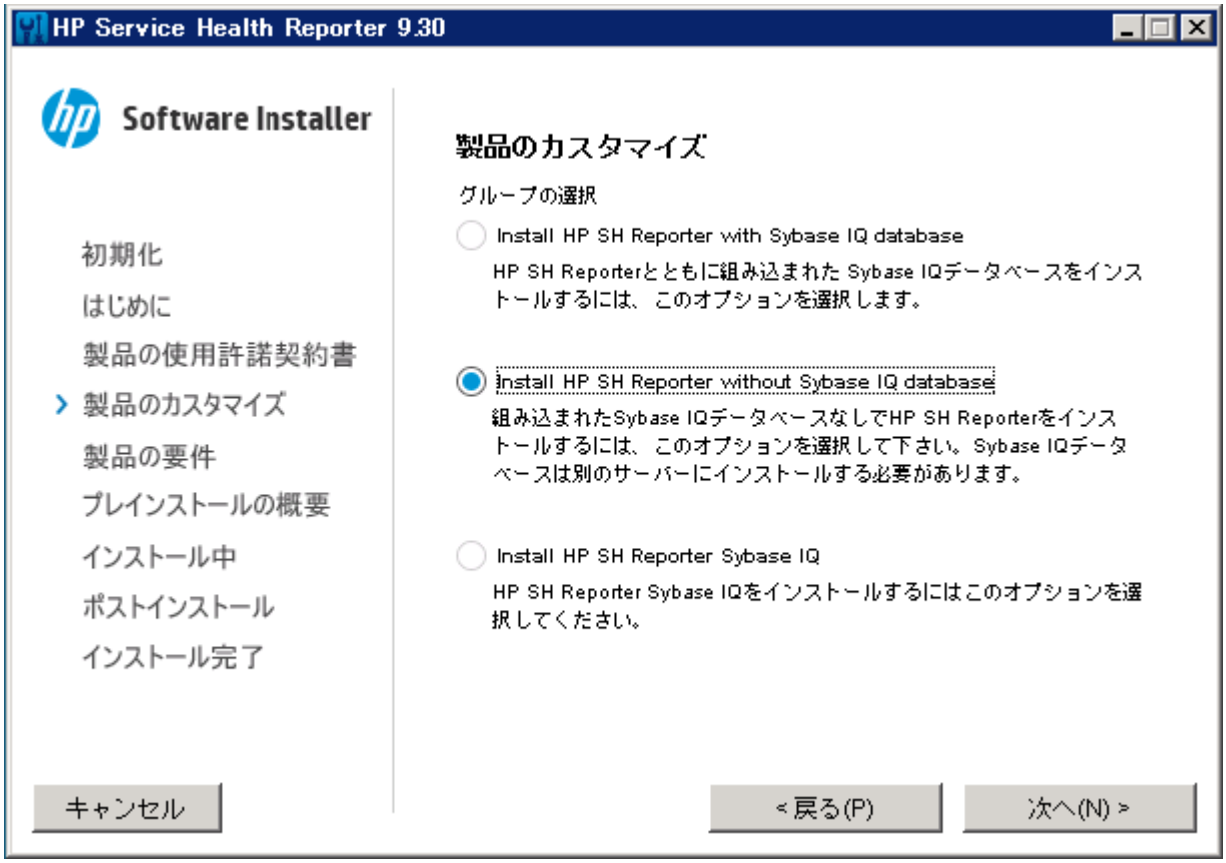
2 インストールする言語を選択してから [SHROK] **をクリックします。**

3 [はじめに] ページが開きます。[はじめに] ページの注を見直し、[**次へ**] をクリックします。

4 [ライセンス契約] ページが開きます。使用許諾契約書を読み、[**同意する ...**] を選択し、[**次へ**] をクリックします。

5 Windows の場合のみ。[フォルダの選択] ページが開きます。インストーラーでは、Windows 上の場合のみ、デフォルト以外のインストールディレクトリを選択できます。SHR のフォルダをデフォルト以外にしたい場合、必要な変更を行い、[**次へ**] をクリックします。

6 [製品のカスタマイズ] ページが開きます。[製品のカスタマイズ] ページで 2 番目のオプションを選択し、[**次へ**] をクリックします。



7 インストーラーはインストールの前提条件について確認し、[インストールチェック] ページにチェックの結果を表示します。チェックが正常に終了した場合は、[**次へ**] をクリックします。

8 [プレインストールの概要] ページが開きます。概要を確認し、[**インストール**] をクリックします。

9 インストールが完了したら、[**完了**] をクリックします。

コマンド行コンソールからのインストール (Linux の場合のみ)

コマンド行コンソールからインストールするには、次の手順を実行します。

1 メディアのルートに移動します。

2 コマンドプロンプトに次のコマンドを入力します。

```
./HP-SHR_9.30_setup.bin -i console
```

3 [**Enter**] キーを押してインストールを開始します。

インストール中のどの時点でも、back と入力して前のページに戻ることも、quit と入力してインストールをキャンセルすることもできます。

4 [ロケールの選択] セクションが表示されます。インストールする言語を選択してから [SHREnter] **キーを押します。**

5 インストーラーによって、プレインストールの情報がコンソールに表示されます。[**Enter**] キーを押します。

6 インストーラーによって、使用許諾契約の詳細が表示されます。**Y** と入力して契約書に同意し、[**Enter**] キーを押します。

7 インストーラーによって、さまざまなインストールオプションが表示されます。SHR (Sybase IQ なし) をインストールするために **2** と入力し、[**Enter**] を押します。インストーラーは必要な前提条件のチェックを実行し、チェックの結果をコンソールに表示します。

8 [**Enter**] キーを押します。インストーラーによってプレインストールの概要がコンソールに表示されます。[**Enter**] キーを押してインストールを開始します。

Windows での Sybase IQ サービスの作成

Sybase IQ を Linux にインストールした場合はこのセクションをスキップしてください。

リモート Sybase IQ (Windows) システムでは、Sybase IQ を Windows サービスとして実行するように設定する必要があります。SHR Linux インストーラーによって、デフォルトでリモートシステムに Sybase IQ サービスが作成されます。

Sybase IQ を Windows サービスとして実行する場合、マシンを起動したときに必ずサーバーを自動的に起動できます。サーバーは、マシンで Windows が実行されている限り稼働し続けます。

Sybase IQ サービスを作成するには、次の手順を実行します。

1 Sybase IQ をインストールしたシステムにログオンします。

2 リモートシステムで *PMDB_HOME* 環境変数を設定します。

   a [システムのプロパティ] ダイアログボックスを開きます。

      Windows 2003 システムでは、**[コントロール パネル]-> [システム] ->[詳細設定]** タブをクリックします

      Windows 2008 システムでは、**[マイ コンピューター] -> [システムの詳細設定] -> [詳細設定]** タブを右クリックします

   b **[環境変数]** をクリックします。[**環境変数**] ダイアログが開きます。

   c [**システム変数**] の下の [**新規**] をクリックします。

      [変数名] テキストボックスに **PMDB_HOME** と入力し、**[変数値]** テキストボックスに **<インストールディレクトリ >¥PMDB** と入力します。

      ここでの**<インストールディレクトリ>**はSybase IQをインストールしたディレクトリです。

3 次のファイルをリモートデータベースシステムにコピーします。ターゲットディレクトリがリモートデータベースシステムに存在しない場合、ターゲットディレクトリを作成して次のファイルをそれぞれの場所にコピーします。

   - `%PMBD_HOME%¥bin¥SybaseServiceCreation.bat` を `%PMBD_HOME%¥bin` ディレクトリに
   - `%PMBD_HOME%¥bin¥JavaService¥JavaService.exe` を `%PMBD_HOME%¥bin¥JavaService` ディレクトリに
   - `%PMBD_HOME%¥bin¥JavaService¥JavaServiceDebug.exe` を `%PMBD_HOME%¥bin¥JavaService` ディレクトリに
   - `%`*PMBD_HOME*`%¥bin¥JavaService¥LGPL.txt` を `%PMBD_HOME%¥bin¥JavaService` ディレクトリに

- %PMBD_HOME%¥config¥BSMRLogConfig.xml を %PMBD_HOME%¥config ディレクトリに
- %PMBD_HOME%¥config¥BSMRLogConfigClient.xml を %PMBD_HOME%¥config ディレクトリに
- %PMBD_HOME%¥data¥config.prp を %PMBD_HOME%¥data ディレクトリに
- %PMBD_HOME%¥lib¥activemq-all-5.1.0.jar を %PMBD_HOME%¥lib ディレクトリに
- %PMBD_HOME%¥lib¥commons-logging-1.0.4.jar を %PMBD_HOME%¥lib ディレクトリに
- %PMBD_HOME%¥lib¥commons-logging-api.jar to を %PMBD_HOME%¥lib ディレクトリに
- %PMBD_HOME%¥lib¥log4j-1.2.15.jar を %PMBD_HOME%¥lib ディレクトリに
- %PMBD_HOME%¥lib¥utils.jar を %PMBD_HOME%¥lib ディレクトリに

4 手動で log ディレクトリを %PMDB_HOME% の下に作成します。

5 Sybase サービスが既に **Sybase IQ Service Manager** を使用して作成されている場合、このサービスは削除する必要があります。確認するには、次の手順を実行します。

a [スタート] -> [ファイル名を指定して実行] をクリックします

b **Services.msc** と入力します

c Sybase サービスが存在する場合、削除します。

6 Sybase サービスを作成します。

a コマンドプロンプトを開きます。

b %PMDB_HOME%/bin フォルダに移動します。

c 次のコマンドを実行します。

%PMDB_HOME%/bin/SybaseServiceCreation.bat -install <インストールディレクトリ >

ここでの<インストールディレクトリ>はSybase IQをインストールしたディレクトリです。

7 データベースを起動します。

a [スタート] -> [ファイル名を指定して実行] をクリックします

b **Services.msc** と入力します

a [サービス] ウィンドウで、**HP SH Reporter Sybase Service** を開始します。

IQSRV15.exe が [タスク マネージャ] の [プロセス] タブに表示されていることを確認します。

8 データベースを停止します。

a [スタート] -> [ファイル名を指定して実行] をクリックします

b **Services.msc** と入力します

c **HP SH Reporter Sybase Service** を停止します。

d コマンドプロンプトを開きます。

e %PMDB_HOME%/bin フォルダに移動します。

f 次のインストールコマンドでバッチファイルを実行します。

%PMDB_HOME%/bin/SybaseServiceCreation.bat -remove < インストールディレクトリ >

ここでの<インストールディレクトリ>はSybase IQをインストールしたディレクトリです。

リモートシステムへの SHR コレクターのインストール

一般的な SHR のインストールでは、データコレクターは SHR をインストールしたのと同じシステムにインストールされます。ただし、SHR にはコレクターを別のサーバー上にインストールするオプションもあります。必要に応じて、コレクターは複数のシステムにインストールすることもできます。コレクターは、SHR によってサポートされている任意のオペレーティングシステムを実行するリモートシステムにインストールできます (ソフトウェア要件 ページ 19 を参照してください)。SHR メディアには、コレクター用の異なる 2 つのインストーラープログラムが含まれています。1 つは Windows 用で 1 つは Linux 用です。

コレクターをリモートシステムにインストールするには、次の手順を実行します。

1. コレクターを SHR システムと同じオペレーティングシステムで稼働するシステムにインストールしたい場合、メディアのルートに移動し、次のファイルを探します。
   - Windows の場合 : `HP-SHR-RemotePoller_9.30_setup.exe`
   - Linux の場合 : `HP-SHR-RemotePoller_9.30_setup.bin`
2. コレクターを SHR ホストのオペレーティングシステムとは異なるオペレーティングシステムで稼働するシステムにインストールしたい場合、次の手順を実行します。
   a. メディアの packages ディレクトリに移動します。
   b. コレクターを Windows にインストールするには、次のファイルを探します。

      `HP-SHR-09.30-RemoteCollector.exe`

   c. コレクターを Linux にインストールするには、次のファイルを探します。

      `HP-SHR-09.30-RemoteCollector.tar.gz`
3. ファイルを、コレクターをインストールしたいシステムに転送します。
4. コレクターをインストールしたいシステムに root または管理者としてログオンします。
5. リモートシステムと SHR システムのタイムゾーンが同じであることを確認します。
6. システムがドメイン名システム (DNS) に登録されていることを確認します。

   または、以下を確認してください。
   - SHR システムの `hosts` ファイルにコレクターシステムのエントリが含まれている。
   - コレクターシステムの `hosts` ファイルに SHR システムのエントリが含まれている。

   `hosts` ファイルは次の場所に置かれます。

   Windows の場合 : `C:¥Windows¥System32¥drivers¥etc`

   Linux の場合 : `/etc/hosts`
7. Linux の場合 (HP-SHR-RemotePoller_9.30_setup.bin ファイルを転送した場合、この手順はスキップします)。`HP-SHR-09.30-RemoteCollector.tar.gz` ファイルを転送した場合、ファイルのコンテンツをローカルディレクトリに抽出します。
   – 次のコマンドを実行します。

     `tar -xvf HP-SHR-09.30-RemoteCollector.tar.gz`

     このコマンドは、`HP-SHR-09.30-RemoteCollector.tar` ファイルをアーカイブから抽出します。
   – 次のコマンドを実行します。

     `tar -xvf HP-SHR-09.30-RemoteCollector.tar`

     このコマンドは、`HP-SHR-RemotePoller_9.30_setup.bin` ファイルと `packages` ディレクトリをアーカイブから抽出します。

8 転送したファイルを保存したディレクトリ (または`HP-SHR-09.30-RemoteCollector.tar` ファイルのコンテンツを抽出したディレクトリ) に移動します。

9 次のファイルを実行します。

- Windows の場合 : `HP-SHR-09.30-RemoteCollector.exe`
- Linux の場合 : `HP-SHR-09.30-RemoteCollector.bin`

10 [はじめに] ページが開きます。[はじめに] ページの注を見直し、[**次へ**] をクリックします。

11 [ライセンス契約] ページが開きます。使用許諾契約書を読み、[**同意する ...**] を選択し、[**次へ**] をクリックします。

12 Windows の場合のみ。[フォルダの選択] ページが開きます。インストーラーでは、Windows 上の場合のみ、デフォルト以外のインストールディレクトリを選択できます。コレクターのフォルダをデフォルト以外にしたい場合、必要な変更を行い、[**次へ**] をクリックします。

13 インストーラーはインストールの前提条件について確認し、[インストールチェック] ページにチェックの結果を表示します。チェックが正常に終了した場合は、[**次へ**] をクリックします。

14 [プレインストールの概要] ページが開きます。概要を確認し、[**インストール**] をクリックします。

15 インストールが完了したら、[**完了**] をクリックします。

SAP BusinessObjects 言語パックのインストール

SHR を Linux にインストールした場合はこのセクションをスキップしてください。Linux では、SHR 9.30 インストーラーがすべての必要な SAP BusinessObjects 言語パックを自動的にインストールします。

SHR 9.30 は 10 言語で使用可能です。インストールするときに言語を選択できます。インストーラーは選択した言語の SAP BusinessObjects 言語パックをインストールします。ただし、その後は、SHR システムのロケールをほかのサポートされた言語に変更した場合に、その言語の SAP BusinessObjects 言語パックを個別にインストールする必要があります。

追加の SAP BusinessObjects 言語パックををインストールするには、次の手順を実行します。

1 SHR をインストールしたシステムにログオンします。

2 SHR のデフォルトの言語パックでのインストールが成功していることを確認してください。

   デフォルトの言語パックのインストールが成功したことを確認するには、SAP BusinessObjects InfoView ポータルを開始し (**http://<*SHR_HostName*>:8080/InfoViewApp**)、**[InfoView] ページ > [プリファレンス] > [全般] > [製品ロケール]** に移動します。[製品ロケール] ボックスにインストールした言語パックが一覧表示されます。

   このインスタンスでの *<SHR_HostName>* は SHR システムの完全修飾ドメイン名です。

3 SHR 9.30 メディアがシステムで利用可能であることを確認します。

4 次のディレクトリに移動します。

   `%PMDB_HOME%/BOLanguagepacks/Setupfiles`

5 次のコマンドを実行します。

   `BO_LanguagepackInstall.bat` *<SHR_media_root> <lang_pack_name>*

   このインスタンスで、

- *<SHR_media_root>* は SHR 9.30 メディア (これは、SHR 9.30 のインストーラーが利用可能なディレクトリです) のルートへのパスです。インストーラーの名前を入力しないでください。また末尾に ¥ 文字を使用しないでください。

  たとえば、SHR メディアが `E:¥Installer` ディレクトリに抽出されたとします。これは SHR インストーラー (`HP-SHR_9.30-setup.exe`) が `E:¥Installer` ディレクトリに存在することを意味します。その場合には次のコマンドを実行する必要があります。

  `BO_LanguagepackInstall.bat E:¥Installer` *<lang_pack_name>*

- *<lang_pack_name>* は SAP BusinessObjects 言語パックの名前です。次の表ですべてのサポートされたロケールの言語パックの名前を示します。

言語	言語パック名
ドイツ語	de
英語	en
スペイン語	es
フランス語	fr
イタリア語	it
韓国語	ko
オランダ語	nl
ポルトガル語	pt
ロシア語	ru
中国語	zh_CN

言語パックのインストールに非常に多くの時間がかかるために、コマンドを実行する時には目的の言語パックを正確に選択する必要があります。

コマンドで複数の言語パック名を (スペースで区切って) 入力することで複数の言語パックをインストールすることができます。2 つの言語パック名を*半角スペース 1 つのみ*で区切ってください。たとえば、スペイン語と韓国語の言語パックをインストールするには、次のコマンドを実行します。

`BO_LanguagepackInstall.bat` *<SHR_media_root>* **`es ko`**

デスクトップヒープメモリーの設定

1 つのユーザーセッション内で、すべてのデスクトップオブジェクトがデスクトップヒープメモリーに関連付けられます。デスクトップヒープには、ウィンドウ、メニュー、フックなどの特定のユーザーインタフェースオブジェクトが格納されます。ただし、次のような理由で、デスクトップヒープへの関連付けの失敗が発生することがあります。

- 特定のセッションのセッションビュースペースがすべて使用されていて、新しいデスクトップヒープを作成できない。

- 既存のデスクトップヒープの割り当てがすべて使用されていて、デスクトップを使用するスレッドが追加のデスクトップヒープを使用できない。

デスクトップヒープが消費されると、特定のプロセスが開始できなかったりプロセスが失敗したりする可能性があります。デスクトップヒープの使用の問題を回避するには、レジストリエディタでヒープメモリーのデフォルト値を変更する必要があります。

1 [**スタート**] → [**ファイル名を指定して実行]** をクリックします。[ファイル名を指定して実行] ダイアログボックスが開きます。

2 [名前] フィールドに `regedit` と入力し、[**ENTER**] キーを押します。[レジストリエディタ] ウィンドウが開きます。

3 左側のペインで、[**HKEY_LOCAL_MACHINE**]、[**SYSTEM**]、[**CurrentControlSet**]、[**Control**]、[**Session Manager**] の順に展開し、[**SubSystems**] をクリックします。

4 右ペインで、[**Windows**] を右クリックし、[**修正**] をクリックします。[文字列の編集] ダイアログボックスが開きます。

5 [値のデータ] ボックスで、値 **ObjectDirectory=¥Windows SharedSection=1024,20480,768** を **ObjectDirectory=¥Windows SharedSection=1024,20480,1536** に変更します。

6 レジストリエディタでの変更が終了したら、システムを再起動します。

上記の手順を実行すると、SHR での特定のデータ処理ストリームの失敗 (エラーステータスコード 128 または 832) を回避することができ、さらに、収集フレームワークの各段階 (集約、変換、ステージング) でのデータの移動が回避されます。

4 SHR のアップグレード

SHR 9.30 メディアに付属するインストーラープログラムを使用すると、SHR 9.20 から SHR 9.30 にアップグレードできます。それより古いバージョンの SHR は直接 SHR 9.30 にアップグレードすることはできません。

アップグレードの前提条件

SHR のアップグレードに進む前に、以下のタスクが完了していることを確認してください。

1. SHR 設定を完全にバックアップします。正常にアップグレードできない場合のデータ損失を防ぐため、アップグレード前に SHR システムをバックアップすることをお勧めします。
2. すべての SHR サービスを停止します。
3. 次のプロパティファイルを変更した場合は、各ファイルをバックアップします。
   - *%PMDB_HOME%*¥`config¥ramscheduler.properties`
   - *%PMDB_HOME%*¥`config¥Aggregate_config.xml`
   - *%PMDB_HOME%*¥`config¥Collection.properties`
4. インストールの前提条件 ページ 19 にリストされているすべての前提条件を満たしていることを確認します。プレインストールの作業 ページ 26 のすべてのタスクを実行します。
5. HP Service Health Optimizer (SHO) を使用しない場合は、この手順をスキップします。SHR 9.30 は、SHO のどのバージョンとも統合または共存しません。SHO 9.20 と SHR 9.20 が同じシステムにインストールされている場合は、バージョン 9.30 にアップグレードする前に SHR を別のシステムに再インストールする必要があります。

   SHR 9.30 にアップグレードする前に、次の手順を実行します。

   a. SHR と SHO が共存しているシステムで、SHR データをバックアップします。詳細については、『HP Service Health Reporter 9.20 インストールおよび設定ガイド』の「データベースのバックアップとリカバリ」の章を参照してください。
   b. SHR 9.20 を別のシステムにインストールします。詳細については、『HP Service Health Reporter 9.20 インストールおよび設定ガイド』を参照してください。
   c. バックアップした SHR データを、手順ステップ b で SHR をインストールしたシステムにリカバリします。詳細については、『HP Service Health Reporter 9.20 インストールおよび設定ガイド』の「データベースのバックアップとリカバリ」の章を参照してください。
   d. 新規にインストールした SHR インスタンスのバージョン 9.30 へのアップグレード

      バージョン 9.30 にアップグレードした後で、SHO 9.20 がインストールされているサーバーから SHR 9.20 の古いインスタンスを削除する必要があります。

SHR 9.20 データベースのバックアップ

正常にアップグレードできない場合のデータ損失を防ぐため、すべての SHR データベースをバックアップすることをお勧めします。詳細については、『HP Service Health Reporter 9.20 インストールおよび設定ガイド』の「データベースのバックアップとリカバリのセクションを参照してください。

SHR サービスの停止

SHR サービスを停止するには、次の手順を実行します。

1 SHR システムにログオンします。

2 [サービス] ウィンドウを開きます。

3 以下のサービスを停止します。

- BOE120MySQL
- BOE120SQLAW
- HP_PMDB_Platform_Administrator
- HP_PMDB_Collection
- HP_PMDB_DB_Logger
- HP_PMDB_Platform_IM
- HP_PMDB_Platform_Message_Broker
- HP_PMDB_Platform_PostgreSQL
- HP_PMDB_Platform_Sybase
- HP_PMDB_Platform_Timer

SHR のアップグレード

単一システムのアップグレード

シングルシステム環境の場合は、単一システムのインストール : 単一システム上での SHR と Sybase IQ のインストール ページ 33 の指示に従って SHR をバージョン 9.20 から 9.30 にアップグレードします。

単一システム環境では、[グループの選択] ページの適切な項目がインストーラーによって自動的に選択されます。この選択を変更しないでください。

デュアルシステムのアップグレード

デュアルシステム環境の場合は、デュアルシステムのインストール : 別々のシステムでの SHR と Sybase IQ のインストール ページ 35 の指示に従って SHR をバージョン 9.20 から 9.30 にアップグレードします。アップグレード時に、Sybase IQ データベースが開始されて実行中であることを確認します。

この環境では、SHR をアップグレードする前に必ず Sybase IQ をアップグレードしてください。

デュアルシステム環境では、インストーラーがシステムタイプを自動的に検出し、[グループの選択] ページの適切な項目を選択します。この選択を変更しないでください。

コンテンツパックをアップグレードするには、コンテンツパックのアップグレード ページ 92 を参照してください。

アップグレード後の設定

SHR のアップグレード後、次のタスクを実行します。

これらのタスクは単一システムとデュアルシステムの両方の環境で実行します。

タスク 1: すぐに使用可能なレポートのアクセスレベルの再適用

このタスクは、特定の読み取り / 書き込みアクセス権限を SAP Business Objects ユーザーに付与している場合のみ実行します。

SHR アプリケーションコンテンツパックをアップグレードすると、(SHR の以前のバージョンでインストールされた) 古いすぐに使用可能なレポートは新しいすぐに使用可能なレポートによって上書きされます。

そのため、SAP Business Objects レポート / ユニバースを表示または変更するためにユーザーに付与されている特定の読み取りまたは書き込みアクセス権限がすべて削除されます。したがって、各ユーザーに対してアクセス権限を再び付与する必要があります。

ユーザーアクセスレベルを有効化する手順については、SAP Business Objects ドキュメントを参照してください。

タスク 2: バックアップしたプロパティファイルの再インストール

47 ページのステップ 3 を実行しなかった場合は、この手順をスキップします。

バックアップしたプロパティファイル (47 ページのステップ 3 を参照) を *%PMDB_HOME%*¥`config` フォルダに戻します。

タスク 3: MySQL のアンインストール

SHR9.20 に含まれていた SAP Business Objects パッケージでは、MySQL データベースが使用されていました。ただし、SHR 9.30 に含まれている SAP Business Objects パッケージでは MySQL データベースは使用されません。そのため、SHR のアップグレード後に SHR サーバーから MySQL をアンインストールする必要があります。

SHR サーバーから MySQL をアンインストールするには、次の手順を実行します。

1. [**スタート**] → [**すべてのプログラム**] → [**BusinessObjects XI 3.1**] → [**BusinessObjects Enterprise**] → [**Central Configuration Manager**] に移動します。

   [Central Configuration Manager] ウィンドウが開きます。

2. [**Server Intelligence Agent**] を右クリックし、[**停止**] をクリックします。
3. [**Server Intelligence Agent**] を右クリックし、[**プロパティ**] をクリックします。

   [Server Intelligence Agent Properties] ダイアログボックスが開きます。

4. [依存関係] タブをクリックします。
5. 依存関係リストから [**BOE120MySQL**] を選択し、[**削除**] をクリックします。

6 [依存関係] タブで [**追加**] をクリックします。

[依存関係の追加] ウィンドウが開きます。

7 依存関係リストから [**BOE120SQLAW**] を選択し、[**OK**] をクリックします。

8 [OK] をクリックします。

9 [**Server Intelligence Agent**] を右クリックし、[**開始**] をクリックします。

10 BOE120MySQL サービスを停止します。

BOE120MySQL サービスを停止するには、次の手順を実行します。

a [**スタート**] → [**ファイル名を指定して実行**] をクリックします。[ファイル名を指定して実行] ダイアログボックスが開きます。

b [**名前**] フィールドに **`services.msc`** と入力し、[**ENTER**] キーを押します。[サービス] ウィンドウが開きます。

c 右ペインで [**BOE120MySQL**] を右クリックし、[**停止**] をクリックします。

11 次のフォルダーの内容をSHR 9.20インストールメディアからSHRサーバーにコピーします。

```
<CD ROM のドライブ文字 >
¥HPSHR-09.20.000-Win5.2_64-release¥packages¥BO¥package¥
```

12 [**スタート**] → [**コントロール パネル**] をクリックします。

13 [**プログラムの追加と削除**] をダブルクリックします。

14 [**SAP BusinessObjects Enterprise XI 3.1 SP3**] を選択し、[**変更**] をクリックします。

[SAP BusinessObjects Enterprise XI 3.1 SP3 のセットアップ] ウィンドウが開きます。

15 [SAP BusinessObjects Enterprise XI 3.1 SP3 のセットアップ] ウィンドウで、[**修正または変更**] を選択し、[**次へ**] をクリックします。

16 [機能の選択] ページで、[**SAP BusinessObjects Enterprise**] → [**サーバーコンポーネント**] → [**中央管理サーバー**] をクリックします。

17 MySQL を選択します。

18 をクリックし、[**機能全体を使用できなくする**] を選択します。

19 [**次へ**] をクリックします。

20 次の詳細情報を指定します。

CMS ホスト名 :-	サーバーの FQDN。 たとえば、完全なサーバー名が server.example.com である場合、入力値として server のみを使用します。
ポート :-	6400
パスワード :-	このフィールドは空白のままにします。

21 [**次へ**] をクリックします。

22 上記の手順 11 で SHR サーバーにコピーしたパッケージフォルダの場所を指定します。

23 [**完了**] をクリックします。

24 <SAP BusinessObjects がインストールされているディレクトリのドライブ文字 >:¥Program Files (x86)¥Business Objects¥MySQL5 から MySQL フォルダを削除します。

25 [**スタート**] → [**すべてのプログラム**] → [**BusinessObjects XI 3.1**] → [**BusinessObjects Enterprise**] → **[32 ビットデータソース (ODBC)**] をクリックします。

[32 ビットデータソース (ODBC)] ウィンドウが開きます。

26 [**システム DSN**] タブをクリックします。

27 [システム DSN] タブで、[**BusinessObjects 監査サーバー**] および [**BusinessObjects CMS**] を選択し、[**削除**] をクリックします。

28 [**OK**] をクリックします。

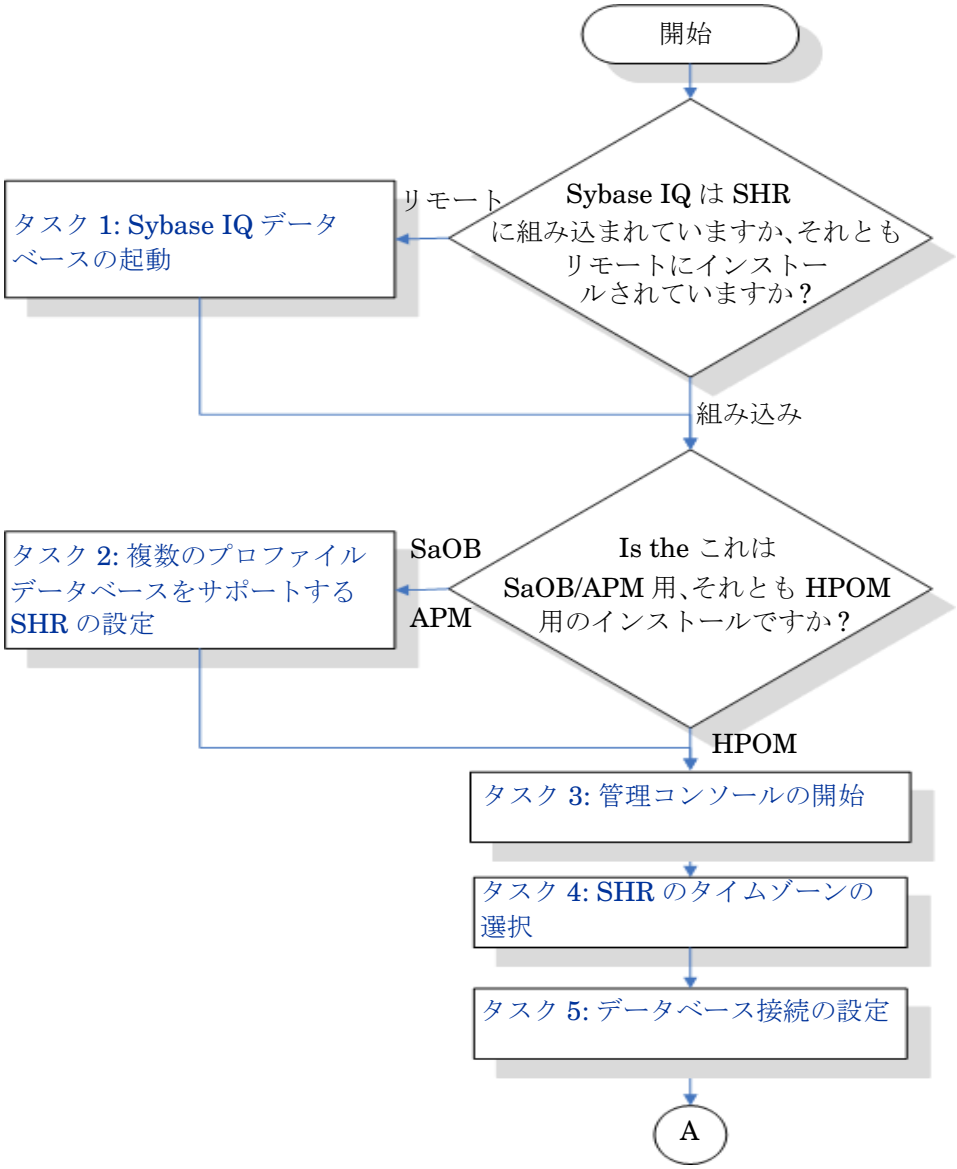
MySQL が SHR サーバーからアンインストールされます。

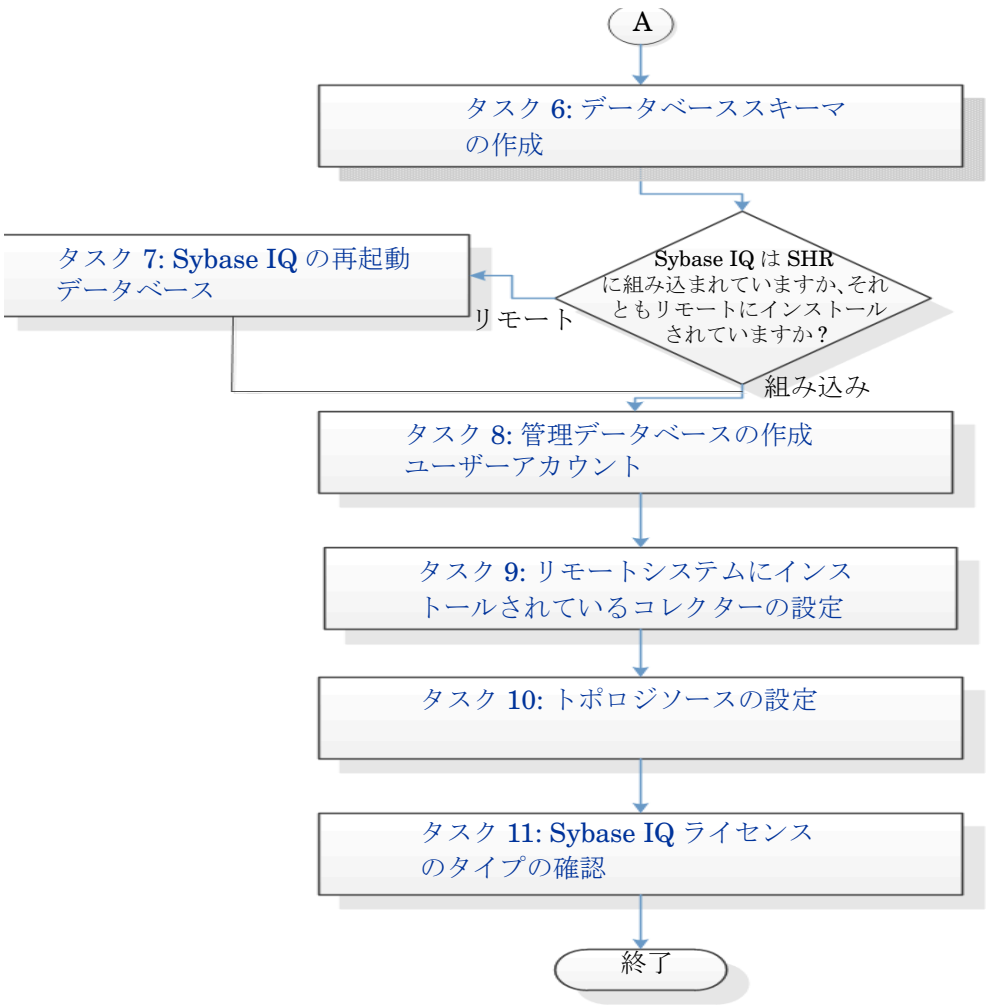
5 設定 SHR

SHR をインストールまたはアップグレードした後に、デプロイメントマネージャーでコンテンツパックをインストールまたはアップグレードする前に、本章で説明しているすべてのインストール後の設定作業を実行する必要があります。

以下のフローチャートには、SHR のインストール後の設定作業の概要が示されています。

フローチャート内にあるリンクをクリックすると、関連するセクションが表示されます。





アップグレード後、SHR のすべてのサービスが自動的に再起動します。

タスクを完了するための手順は、明記されている場合を除き Windows と Linux で同じです。

タスク 1: Sybase IQ データベースの起動

このタスクは、SHR をリモート Sybase IQ とともにインストールした場合にのみ実行してください。そうでない場合は、タスク 2: 複数のプロファイルデータベースをサポートする SHR の設定 ページ 55 に進んでください。

次の手順を実行します。

Windows の場合

1 リモートシステムにログオンします。管理者の権限を持っている必要があります。

2 [**スタート**] → [**ファイル名を指定して実行**] をクリックします。[ファイル名を指定して実行] ダイアログボックスが開きます。

3 cmd と入力し、[**Enter**] キーを押して、コマンドプロンプトウィンドウを開きます。

4 コマンドプロンプトで、次のコマンドを入力して Sybase IQ データベースを起動します。

```
start_iq @<インストールディレクトリ>¥Sybase¥IQ-15_4¥scripts¥pmdbConfig.cfg
```

ここでの < インストールディレクトリ > は、SHR のインストール先の場所です。

すでに SHR データベースを設定済みで、コマンドラインから SHR データベースを開始する場合は、次のコマンドを入力する必要があります。

start_iq.exe @< インストールディレクトリ >
¥Sybase**¥IQ-15_4¥scripts¥pmdbConfig.cfg <**Sybase データファイルの場所 **>**
¥pmdb.db

5 [**ENTER**] キーを押します。[Starting IQ] ウィンドウが開きます。

6 コマンドプロンプトウィンドウを閉じます。

Sybase IQ を停止するには、通知バーの Sybase IQ サーバーアイコンを右クリックし、ポップアップメニューからオプションを選択します。

Sybase IQ サーバーのアイコンが、SHR システムの通知バーに表示されない場合は、次のコマンドを使用して Sybase IQ を停止します。

dbstop -y -c uid=dba;pwd=sql;eng=< サーバーエンジン名 **>;*dbn=utility_db;***
links=tcpip{host=< ホスト名 **>.<** ドメイン名 **>;port=21424}**

この例では、< サーバーエンジン名 > は Sybase サーバーエンジンの名前、< ホスト名 > は SHR データベースをホスティングするシステムの名前、< ドメイン名 > はネットワーク構成にしたがったドメインの名前を示します。

このコマンドは 1 行に入力する必要があります。

Linux の場合

/opt/HP/BSM/Sybase/IQ-15_4/scripts に移動します。

- Sybase を開始するには、コマンドプロンプトに次のコマンドを入力します。

  ./start_iq @/opt/HP/BSM/Sybase/IQ-15_4/scripts/pmdbConfig.cfg

- Sybase を停止するには、次の操作を実行します。

  ./dbstop -y -c uid=dba;pwd=sql;eng=< サーバーエンジン名 **>;dbn=utility_db;**
  links=tcpip{host=< ホスト名 **>.<** ドメイン名 **>;port=21424}**

  このコマンドは 1 行に入力する必要があります。

タスク 2: 複数のプロファイルデータベースをサポートする SHR の設定

このタスクは、SHR のトポロジソースとして RTSM を設定する場合にのみ実行してください。トポロジソースとして HPOM または VMware vCenter を設定する場合は、このタスクをスキップして、タスク 3: 管理コンソールの開始 ページ 56 に進みます。

SHR は、HP BSM 環境内にデプロイされた複数のプロファイルデータベースの設定とそのデータベースからのデータ収集をサポートします。

ただし、すべての既存のプロファイルデータベースが SHR によって確実に識別されて管理コンソールに表示されるようにするには、次の手順を実行します。

1 リモートアクセスを使用して HP BSM ホストシステムにログオンします。

HP BSM のセットアップが分散され、ゲートウェイサーバーとデータ処理サーバーが別々のエンティティである場合は、データ処理サーバーにアクセスする必要があります。

2 %topaz_home%¥Conf フォルダーを参照します。

3 SHR システム上で次のファイルを `%topaz_home%¥Conf` フォルダーから `%PMDB_HOME%¥config` フォルダーにコピーします。

— `encryption.properties`

— `seed.properties`

Oracle RAC で管理 / プロファイルデータベースを設定する場合、SHR システム上で `bsm-tnsnames.ora` ファイルも `%PMDB_HOME%¥config` フォルダーにコピーする必要があります。プロファイルデータベースのデータソース接続の設定 ページ 104 を参照してください。

これらのファイルをコピーしたら、HP PMDB Platform Administrator サービスを開始する必要があります。次の手順を実行します。

Windows の場合

1 SHR システムで、[**スタート**] → [**ファイル名を指定して実行**] をクリックします。[ファイル名を指定して実行] ダイアログボックスが開きます。

2 [**名前**] フィールドに `services.msc` と入力します。[サービス] ウィンドウが開きます。

3 右側のペインで、[**HP_PMDB_Platform_Administrator**] を右クリックし、[**開始**] をクリックします。

4 [サービス] ウィンドウを閉じます。

Linux の場合

コマンドプロンプトに次のコマンドを入力します。

```
service HP_PMDB_Platform_Administrator start
```

タスク 3: 管理コンソールの開始

1 Web ブラウザーで管理コンソールを起動します。

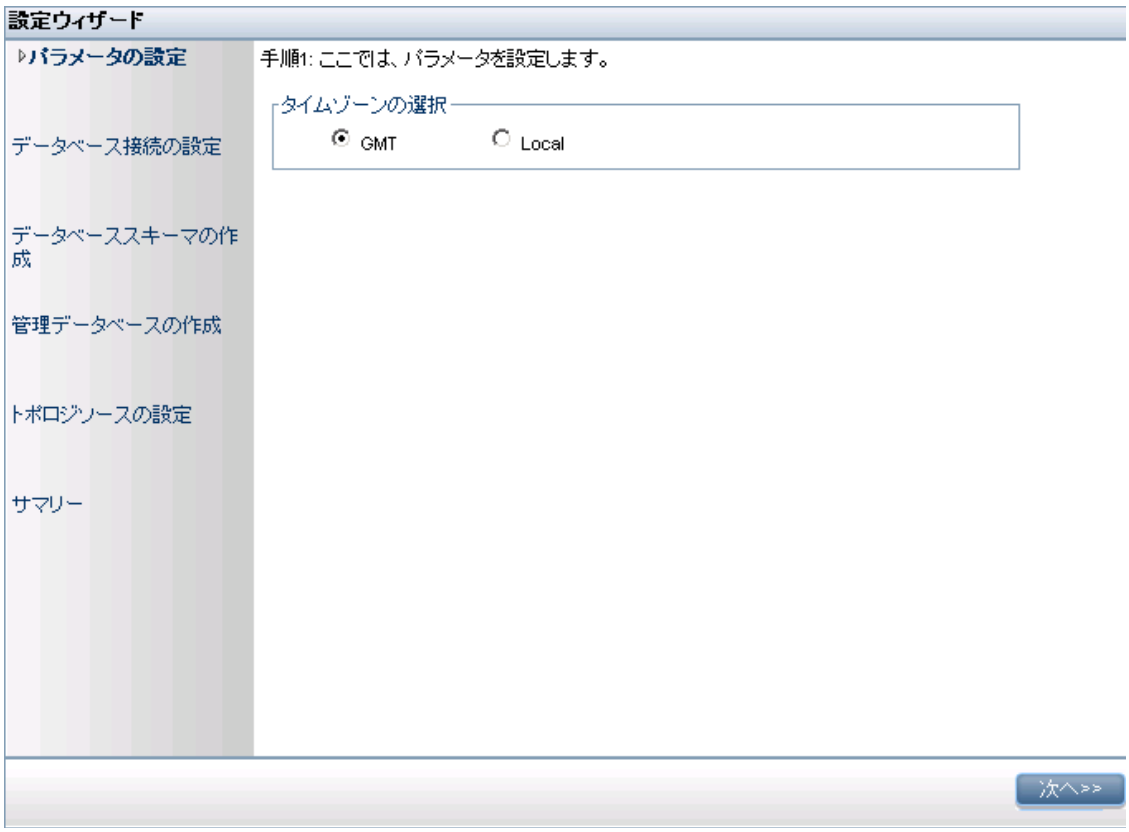
a 次の URL にアクセスします。

http://<SHR_ サーバー _FQDN>**:21411/BSMRApp**

b [**ログイン名**] フィールドに `administrator` と入力し、[**ログイン**] をクリックして続行します。ホームページが開きます。

ほかのユーザーアカウントを使用して管理コンソールにアクセスする場合は、そのユーザーアカウントが管理者権限を持っていることを確認してください。

インストール後の HP Service Health Reporter 設定ウィザードは、インストール後の設定作業を完了していない場合にのみ表示されます。ウィザードは、セッション状態の維持をサポートします。これにより以前に中断された設定セッションを再開して続行することができます。



タスク 4: SHR のタイムゾーンの選択

[SHR パラメータの設定] ページで、SHR を動作させるタイムゾーン (GMT またはローカル) を選択します。

タイムゾーンを選択するには、次の手順を実行します。

1 **HP SH Reporter のタイムゾーンの選択**の下で、次の手順のいずれかを実行します。

- SHR を GMT 時間で動作させる場合は、[**GMT**] を選択します。
- SHR をローカルシステム時間で動作させる場合は、[**Local**] を選択します。

➤ ここで選択したタイムゾーンが SHR システムとレポートに適用されます。ただし、収集やワークフローストリームなどのプロセスの実行時情報は、この選択に関係なく常にローカル時間に基づきます。

2 [**次へ**] をクリックします。[データベース接続の設定] ページが開きます。

タスク 5: データベース接続の設定

[データベース接続の設定] ページで、SHR のデータベースの作成場所となるデータベースサーバーの詳細を指定します。

データベース接続を設定するには、次の手順を実行します。

1 SHR をリモート Sybase IQ とともにインストールする場合は、[データベース接続の設定] ページで、[**リモートデータベース**] を選択します。リモート Sybase IQ とともにインストールしない場合は、次のステップに進みます。

2 [**データベース接続パラメータの入力**] で、次の値を入力します。

ホスト名 - Sybase IQ データベースサーバーが実行されているホストの名前または IP アドレス。

ポート - データベースサーバーを照会するためのポート番号。デフォルトポートは `21424` です。

サーバー名 - Sybase IQ サーバーの名前。Sybase IQ サーバー名がサブセット全体で固有であることを確認します。

このフィールドに表示されるサーバー名は情報提供のみを目的としています。サーバー名はどんな場合でも変更しないようにする必要があります。

3 [**データベースユーザー (DBA 権限) とパスワードの入力**] で、次の値を入力します。

ユーザー名 - Sybase IQ データベースユーザーの名前。ユーザーは、DBA の権限を持っていなければなりません。デフォルトのユーザー名は `dba` です。

パスワード - データベースユーザーのパスワード。デフォルトのパスワードは `sql` です。

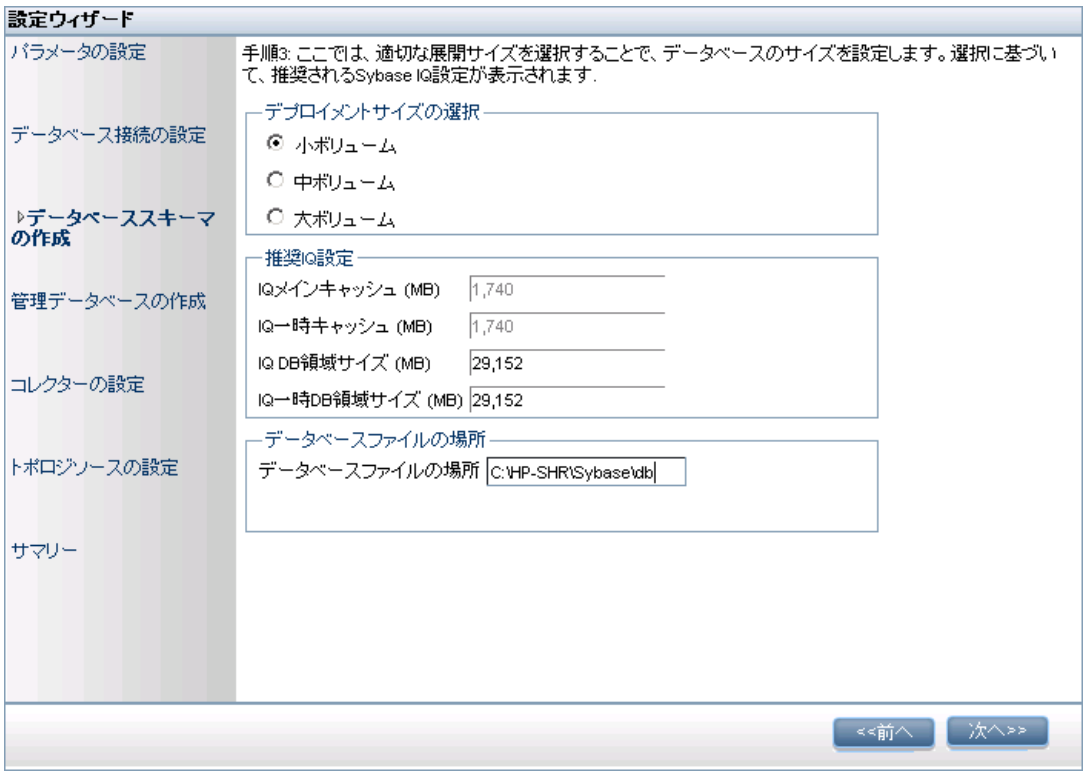
インストール後の設定作業を続ける前にデフォルトのパスワードを変更することをお勧めします。パスワードを変更する方法については、**http://sybooks.sybase.com/ (英語サイト)** で Sybase IQ のマニュアルを参照してください。

4 [**PMDB データベースユーザー (PMDB_ADMIN) のパスワードの選択**] で、次の値を入力します。

管理パスワード - PMDB データベース管理者のパスワード。

管理パスワードの確認 - 確認のために同じパスワードを再入力します。

5 [**次へ**] をクリックします。[データベーススキーマの作成] ページが開きます。



タスク 6: データベーススキーマの作成

[データベーススキーマの作成] ページで、データベースのデプロイメントサイズ (つまり SHR がデータを収集する元になるノードの数) を指定します。ユーザーの選択に応じて、推奨されるデータベースサイズが SHR によって計算されて表示されます。

データベーススキーマを作成するには、次の手順を実行します。

1 [**デプロイメントサイズの選択**] の下で、要件を基にして次のいずれかのデータボリュームを選択します。

小ボリューム	-	このオプションを選択すると、SHR が 500 未満のノードからのデータ収集をサポートできるようになります。
中ボリューム	-	このオプションを選択すると、SHR が 500 ～ 5000 のノードからのデータ収集をサポートできるようになります。
大ボリューム	-	このオプションを選択すると、SHR が 5000 から 20000 のノードからのデータ収集をサポートできるようになります。

2 [**推奨 IQ 設定**] で、次の値を入力します。

IQ メインキャッシュ (MB)	-	Sybase IQ メインストアのメインバッファーキャッシュの推奨サイズ。この値はデフォルトで設定されます。
IQ 一時キャッシュ (MB)	-	Sybase IQ 一時ストアの一時バッファサイズの推奨サイズ。この値はデフォルトで設定されます。
IQ DB 領域サイズ (MB)	-	メインデータベースファイルを格納する IQ_System_Main DBSpace の推奨サイズ。このサイズは変更可能です。
IQ 一時 DB 領域サイズ (MB)	-	一時データベースファイルを格納するIQ_System_Temp DBSpace の推奨サイズ。このサイズは変更可能です。

3 SHR を組み込み Sybase IQ とともにインストールする場合は、次の手順を実行します。

[**データベースファイルの場所**] フィールドに、データベースファイルが保存される場所を入力します。たとえば、`C:¥HP-SHR¥Sybase¥db` のように入力します。(Windows)、`opt/HP/BSM/Sybase/db` (Linux の場合)

> 選択した SHR データ収集ボリュームをサポートするための十分なシステムリソースがあることを確認してください。選択したボリュームのリソース要件の詳細については、HP Service Health Reporter サポート一覧表 (**http://support.openview.hp.com/sc/support_matrices.jsp**) を参照してください。

a [**次へ**] をクリックします。確認のダイアログボックスが開きます。

b [**はい**] をクリックします。データベース接続とスキーマの作成が正常に実行された場合は、確認ページが表示され、スキーマの作成ステータスが表示されます。

c [**次へ**] をクリックして続行します。

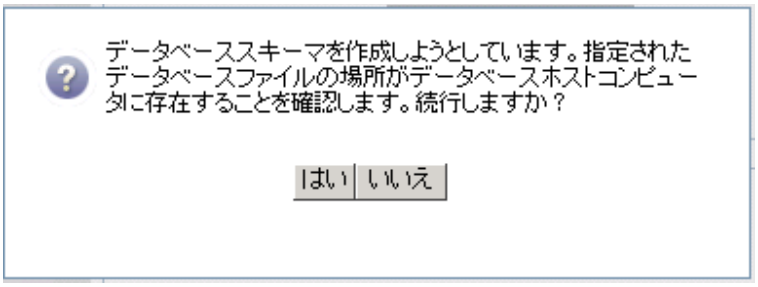
データベース接続とスキーマの作成が失敗した場合は、[**前へ**] ボタンをクリックして指定した値を確認します。

4 SHR をリモート Sybase IQ とともにインストールする場合は、次の手順を実行します。

[**データベースファイルの場所**] フィールドに、データベースファイルが保存される場所を入力します。たとえば、Windows の場合は `C:¥HP-SHR¥Sybase¥db`、Linux の場合は `/opt/HP/BSM/Sybase/db` のように入力します。[データベースファイルの場所] フィールドにパスを入力する前にデータベースフォルダーを作成します。

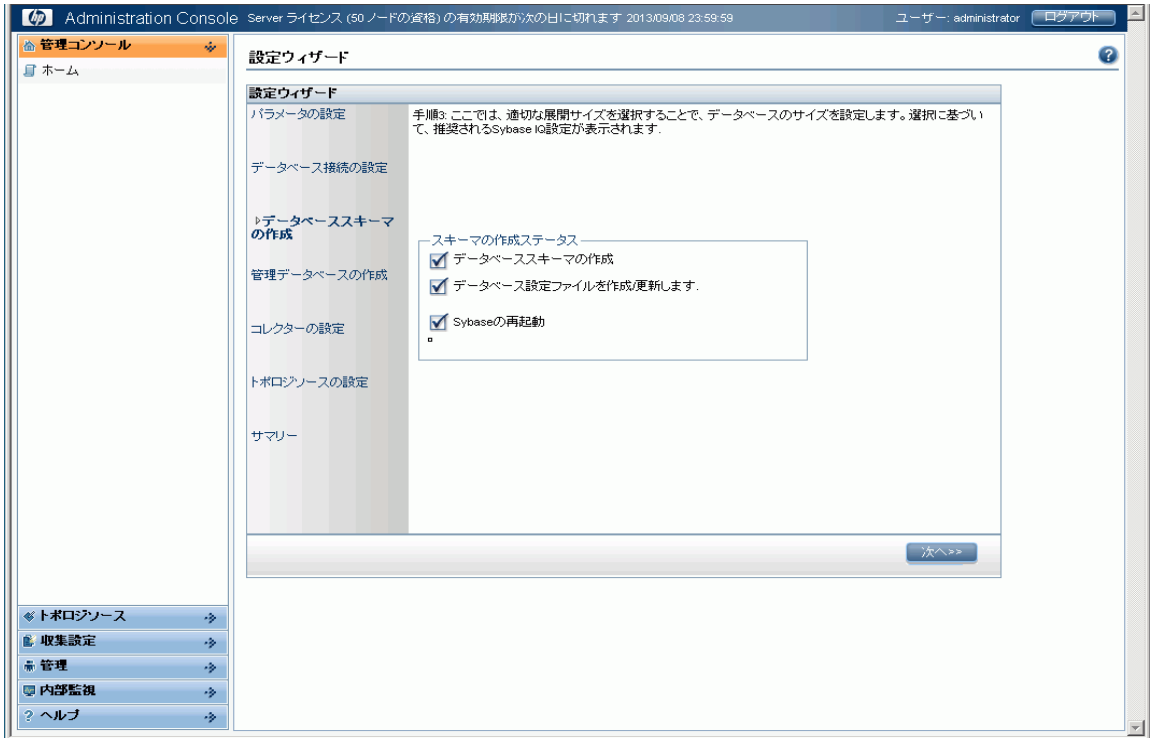
選択した SHR データ収集ボリュームをサポートするための十分なシステムリソースがあることを確認してください。選択したボリュームのリソース要件の詳細については、HP Service Health Reporter サポート一覧表（**http://support.openview.hp.com/sc/support_matrices.jsp**）を参照してください。

d [**次へ**] をクリックします。確認のダイアログボックスが開きます。



リモートデータベースホストマシン上のデータベースフォルダーの存在を確認します。

e [**はい**] をクリックします。データベース接続とスキーマの作成が正常に実行された場合は、確認ページが表示され、スキーマの作成ステータスが表示されます。



新しく作成された `pmdbConfig.cfg` ファイルをリモートシステムにコピーし、データベースを再起動します。

[**次へ**] をクリックして続行します。

データベース接続とスキーマの作成が失敗した場合は、[**前へ**] ボタンをクリックして指定した値を確認します。

タスク 7: Sybase IQ データベースの再起動

このタスクは、SHR をリモート Sybase IQ とともにインストールした場合にのみ実行してください。リモート Sybase IQ とともにインストールしない場合は、直接タスク 8: 管理データベースユーザーアカウントの作成 ページ 61 に進みます。

このタスクでは、最初に Sybase IQ データベースの実行を停止する必要があります。その後で、Sybase IQ サービスマネージャを使用して、Sybase IQ サービスを作成する必要があります。このサービスを使用して、Sybase IQ データベースを再起動することができます。

次の手順を実行します。

1 新しく作成されたデータベースフォルダーを参照し、`pmdbConfig.cfg` ファイルをリモートシステムにコピーします。

2 [**スタート**] → [**ファイル名を指定して実行**] をクリックします。[ファイル名を指定して実行] ダイアログボックスが開きます。

3 `cmd` と入力し、[**Enter**] キーを押して、コマンドプロンプトウィンドウを開きます。

4 コマンドプロンプトで、次のコマンドを入力して Sybase IQ データベースを停止し、[**Enter**] キーを押します。

```
dbstop -y -c uid=dba;pwd=sql;eng=< サーバーエンジン名 >;dbn=utility_db;
links=tcpip{host=< ホスト名 >.< ドメイン名 >;port=21424}
```

この例では、< サーバーエンジン名 > は Sybase サーバーエンジンの名前、< ホスト名 > は SHR データベースをホスティングするシステムの名前、< ドメイン名 > はネットワーク構成にしたがったドメインの名前を示します。

このコマンドは 1 行に入力する必要があります。

通知バーの Sybase IQ サーバーのアイコンを右クリックして、メニューからデータベースの停止を選択することもできます。

Linux の場合

Linux Firefox ブラウザーを開き、デフォルトのアドレスを入力します。

`http://< サーバー名 >.< ドメイン名 >:21411/BSMRApp/`

ここで、< サーバー名 > は SHR をインストールしたホストシステムの名前で、< ドメイン名 > はネットワーク構成に基づくドメインの名前です。

タスク 8: 管理データベースユーザーアカウントの作成

管理データベースとは、データプロセスジョブストリームのステータス、変更されたテーブルのステータス、ノード情報などの実行時データを保存するために SHR によって使用されるオンライントランザクション処理 (OLTP) ストアを意味します。

[管理データベースの作成] ページで、管理データベースのユーザーの詳細を指定します。

管理データベースのユーザーアカウントを作成するには、次の手順を実行します。

1 [**管理データベースユーザー (DBA 権限) とパスワードの入力**] で、次の値を入力します。

ユーザー名	-	PostgreSQL データベース管理者の名前。デフォルト値は **postgres** です。
パスワード	-	PostgreSQL データベース管理者のパスワード。デフォルト値は **PMDB92_admin@hp** です。

2 管理データベースユーザーのパスワードを変更する場合は、[**HP SH Reporter の管理データベースのユーザー情報の入力**] で、次の値を入力します。

ユーザー名	-	管理データベースユーザーの名前。デフォルトの値は **pmdb_admin** です。
新しいパスワード	-	管理データベースユーザーのパスワード。
新しいパスワードの確認	-	確認のために同じパスワードを再入力します。

3 [**次へ**] をクリックします。[サマリー] ページが開きます。

4 データベース接続と管理データベースの詳細を確認し、[**次へ**] をクリックします。[トポロジソースの設定] ページが開きます。

タスク 9: リモートシステムにインストールされているコレクターの設定

リモートコンピュータにコレクターをインストールしたら、インストール SHR ページ 31 を参照してコレクターを設定する必要があります。コレクターを設定する前に、次のコマンドを実行する必要があります。

Windows の場合

```
"perl %PMDB_HOME%/bin/scripts/configurePoller.pl <SHRシステムの完全修飾ホスト名>"
```

Linux の場合

```
"perl $PMDB_HOME/bin/scripts/configurePoller.pl <SHR システムの完全修飾ホスト名 >"
```

上記のコマンドを実行することにより、SHR システムとコレクターシステムの間で証明書が交換されます。この交換により、SHR とコレクターの間の通信チャネルが設定されます。

新しいコレクターを設定するには、次の手順を実行します。

コレクターの 1 つのインスタンスでは、1 つのみの SHR のインスタンスを使用するように設定できます。1 つのコレクターで複数の SHR インスタンスを使用する設定はサポートされていません。

1 SHR の管理コンソールにログオンし、[**コレクターの設定**] に移動します。

2 [**新規作成**] をクリックして [**設定パラメーター**] セクションを開き、次の値を入力します。

名前		RC の表示名 (ユーザーによる任意の名前の指定が可能)
ホスト名	-	コレクターホスト名
通信モード		SHR とコレクターの間の通信プロトコール。セキュア (HTTPs) または非セキュア (HTTP) のいずれかです。

3 [**OK**] をクリックして、コレクターの作成を完了します。

4 新規コレクターの作成をキャンセルするには、[**キャンセル**] をクリックします。

タスク 10: トポロジソースの設定

データ収集を行うために SHR を設定するには、トポロジソースを設定する必要があります。トポロジソースの設定作業は、次のカテゴリに編成されます。

- BSM Service and Operations Bridge または Application Performance Management 環境に SHR をデプロイした場合は、次の RTSM トポロジソースの設定 : SHR ページ 64 を参照してください。

- HPOM 環境に SHR をデプロイした場合は、次の HPOM トポロジソースの設定 : SHR ページ 73 を参照してください。
- VMware vCenter 環境に SHR をデプロイした場合は、次の VMware vCenter トポロジソースの設定 : SHR ページ 82 を参照してください。

次の RTSM トポロジソースの設定 : SHR

BSM Service and Operations Bridge または Application Performance Management 環境では、RTSM が SHR のトポロジ情報源になります。トポロジ情報には、RTSM においてモデル化されて検出されるすべての CI が含まれます。ノードリソース情報は、HP Operations Agent、Performance Agent、および HP SiteScope から直接取得されます。

ノードリソースは、HP Operations Agent、Performance Agent、および HP SiteScope のローカルディメンションです。

SHR で RTSM トポロジソースを設定するには、次のタスクを実行する必要があります。

タスク 1: トポロジビューのデプロイメント

HP BSM 環境では、RTSM を使用して CI が検出され、トポロジビューが作成されます。ドメイン固有のデータを収集するように SHR を設定するには、まずコンテンツパックごとにそのようなトポロジビューをデプロイする必要があります。

そのトポロジビューには、コンテンツパックが関連データを収集するのに使用する個々の CI 属性が備えられています。ただし、このトポロジビューは、コンテンツパックごとに異なる可能性があります。

たとえば、Exchange Server コンテンツパックでは、Exchange Server、メールボックスサーバー、メールボックスおよびパブリックフォルダーストアなどを一覧表示するトポロジビューが必要になることがあります。ただし、システム管理コンテンツパックでは、すべてのビジネスアプリケーション、ビジネスサービス、およびインフラストラクチャ内の CPU、メモリー、ディスクなどのシステムリソースを一覧表示する別のトポロジビューが必要になる可能性があります。これらのビューに基づいて、各コンテンツパックの CI 属性はそれぞれ異なる可能性があります。

HP BSM サーバーでのコンテンツパック用のトポロジモデルビューをデプロイするには、次の手順を実行します。

1. 管理者として HP BSM ホストシステムにログオンします。
2. HP BSM ホストシステムからリモートアクセスを通して管理者として、SHR がインストールされているホストシステムにログオンします。

%PMDB_Home%¥packages または $PMDB_HOME¥packages (Linux の場合) に移動し、以下のトポロジビューをコピーします。

コンテンツパック	ビュー名	場所
BPM (合成トランザクションモニタリング)	EUM_BSMR.zip	**Windows の場合** %PMDB_HOME%¥pacakges¥EndUserManagement¥ETL_BPM.ap¥source¥cmdb_views **Linux の場合** $PMDB_HOME¥pacakges¥EndUserManagement¥ETL_BPM.ap¥source¥cmdb_views
Real User Transaction Monitoring	EUM_BSMR.zip	**Windows の場合** %PMDB_HOME%¥packages¥EndUserManagement¥ETL_RUM.ap¥source¥cmdb_views **Linux の場合** $PMDB_HOME¥packages¥EndUserManagement¥ETL_RUM.ap¥source¥cmdb_views
Network	SHR_Network_Views.zip	**Windows の場合** %PMDB_HOME%¥packages¥Network¥ETL_Network_NPS.ap¥source¥cmdb_views Linux の場合 $PMDB_HOME¥packages¥Network¥ETL_Network_NPS.ap¥source¥cmdb_views
システム管理	SM_BSM9_Views.zip	**Windows の場合** %PMDB_HOME%¥packages¥SystemManagement¥ETL_SystemManagement_PA.ap¥source¥cmdb_views **Linux の場合** $PMDB_HOME¥packages¥SystemManagement¥ETL_SystemManagement_PA.ap¥source¥cmdb_views
Oracle	SHR_DBOracle_Views.zip	**Windows の場合** %PMDB_HOME%¥Packages¥DatabaseOracle¥ETL_DBOracle_DBSPI.ap¥source¥cmdb_views¥SHR_DBOracle_Views.zip **Linux の場合** $PMDB_HOME¥Packages¥DatabaseOracle¥ETL_DBOracle_DBSPI.ap¥source¥cmdb_views¥SHR_DBOracle_Views.zip

コンテンツパック	ビュー名	場所
Oracle WebLogic Server	J2EEApplication.zip	**Windows の場合** %PMDB_HOME%¥packages¥ApplicationServer¥ETL_AppSrvrWLS_WLSSPI.ap¥source¥cmdb_views **Linux の場合** $PMDB_HOME¥packages¥ApplicationServer¥ETL_AppSrvrWLS_WLSSPI.ap¥source¥cmdb_views
IBM WebSphere Application Server	J2EEApplication.zip	**Windows の場合** %PMDB_HOME%¥packages¥ApplicationServer¥ETL_AppSrvrWBS_WBSSPI.ap¥source¥cmdb_views **Linux の場合** $PMDB_HOME¥packages¥ApplicationServer¥ETL_AppSrvrWBS_WBSSPI.ap¥source¥cmdb_views
Microsoft SQL Server	SHR_DBMSSQL_Views.zip	**Windows の場合** %PMDB_HOME%¥packages¥DatabaseMSSQL¥ETL_DBMSSQL_DBSPI.ap¥source¥cmdb_views **Linux の場合** $PMDB_HOME¥packages¥DatabaseMSSQL¥ETL_DBMSSQL_DBSPI.ap¥source¥cmdb_views
Microsoft Exchange Server	SHR_Exchange_Business_View.zip	**Windows の場合** %PMDB_HOME%¥packages¥ExchangeServer¥ETL_Exchange_Server2007.ap¥source¥cmdb_views **Linux の場合** $PMDB_HOME¥packages¥ExchangeServer¥ETL_Exchange_Server2007.ap¥source¥cmdb_views
Microsoft Active Directory	SHR_AD_Business_View.zip	**Windows の場合** %PMDB_HOME%¥packages¥ActiveDirectory¥ETL_AD_ADSPI.ap¥source¥cmdb_views **Linux の場合** $PMDB_HOME¥packages¥ActiveDirectory¥ETL_AD_ADSPI.ap¥source¥cmdb_views

たとえば、システム管理 zip ファイルをコピーするには、`%pmdb_home%¥packages¥System_Management¥System_Management.ap¥CMDB_View¥SM_BSM9_Views.zip` に移動し、`SM_BSM9_Views.zip` ファイルを HP BSM ホストシステムにコピーします。

3 HP BSM ホストシステムで [**スタート**] → [**プログラム**] → [**Internet Explorer**] をクリックします。Web ブラウザーが開きます。

4 Web ブラウザーで、以下の URL を入力します。

`http://< サーバー名 >.< ドメイン名 >/HPBSM`

ここでの < サーバー名 > は、HP BSM サーバーの名前、< ドメイン名 > は、ユーザーネットワーク設定どおりのユーザーのドメインの名前です。

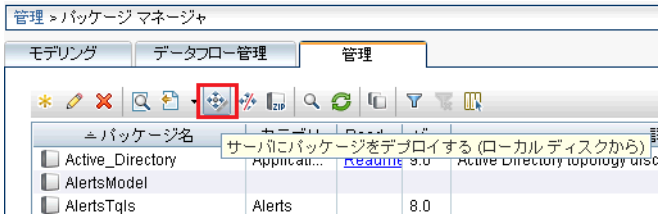
[Business Service Management のログイン] ページが開きます。

5 ログイン名とパスワードを入力し、[**ログイン**] をクリックします。[Business Service Management - サイトマップ] が開きます。

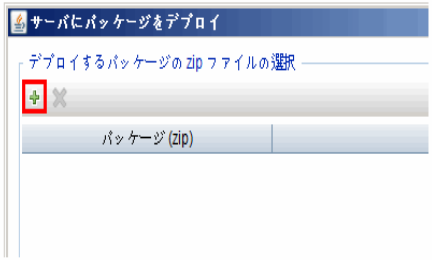
6 [**管理**] → [**RTSM 管理**] をクリックします。[RTSM 管理] ページが開きます。

7 [**管理**] → [**パッケージマネージャ**] をクリックします。[パッケージマネージャ] ページが開きます。

8 [**サーバにパッケージをデプロイする (ローカルディスクから)**] アイコンをクリックします。[サーバにパッケージをデプロイ] ダイアログボックスが開きます。



9 [**追加**] アイコンをクリックします。



[サーバにパッケージをデプロイする (ローカルディスクから)] ダイアログボックスが開きます。

10 コンテンツパック zip ファイルの場所に移動し、目的のファイルを選択してから、[**開く**] をクリックします。

[**サーバーにパッケージをデプロイする (ローカルディスクから)**] ダイアログボックスの [**デプロイするリソースを選択**] の下で、デプロイする TQL ビューおよび ODB ビューを表示および選択することができます。すべてのファイルを選択したことを確認します。

11 [**デプロイ**] をクリックし、コンテンツパックビューをデプロイします。

Linux の場合

ブラウザーを開き、67 ページのステップ 4 から続行します。

コンテンツパックの CI 属性の有効化

どのコンテンツパックビューにも、そのコンテンツパックに固有の CI 属性のリストが備えられています。データ収集に必要な CI 属性は、デプロイ後の各コンテンツパックビューにおいて自動的に有効になります。

ビジネスニーズに関連した追加情報を収集するための追加の CI 属性を有効にするには、次の手順を実行します。

1 [**スタート**] → [**プログラム**] → [**Internet Explorer**] をクリックします。Web ブラウザーが開きます。

2 Web ブラウザーで、以下の URL を入力します。

`http://< サーバー名 >.< ドメイン名 >/HPBSM`

ここでの < サーバー名 > は、HP BSM サーバーの名前、< ドメイン名 > は、ユーザーネットワーク設定どおりのユーザーのドメインの名前です。

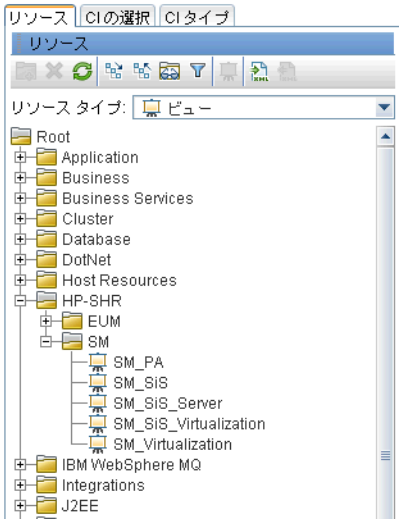
[Business Service Management のログイン] ページが開きます。

3 ログイン名とパスワードを入力し、[**ログイン**] をクリックします。[ビジネスサービス管理 - サイトマップ] が開きます。

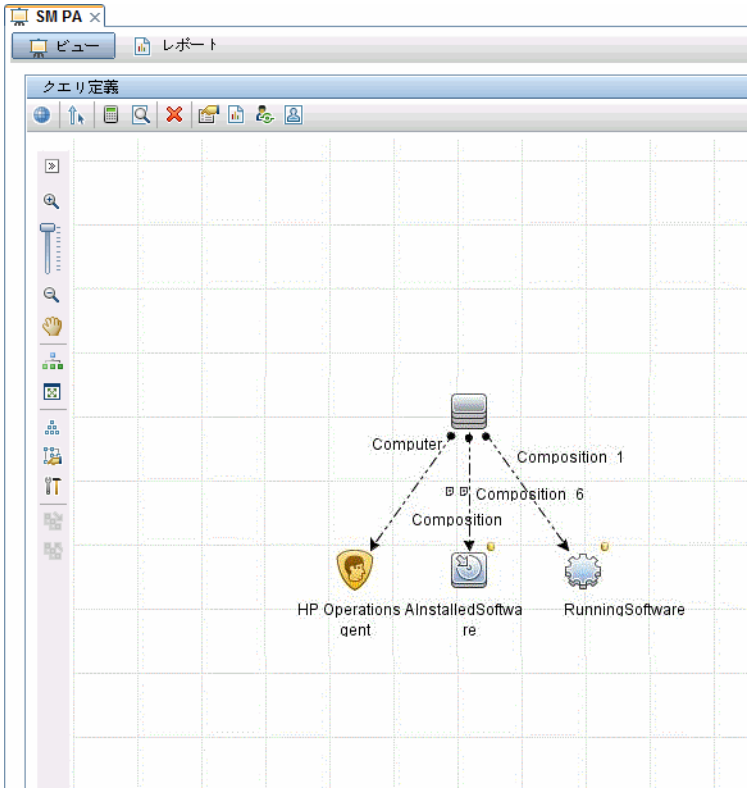
4 [**管理**] → [**RTSM 管理**] をクリックします。[RTSM 管理] ページが開きます。

5 [**モデリング**] → [**モデリング スタジオ**] をクリックします。[モデリング スタジオ] ページが開きます。

6 [リソース] ペインで、[**HP-SHR**] を展開し、コンテンツパックのフォルダーを展開して、トポロジビューをダブルクリックして開きます。

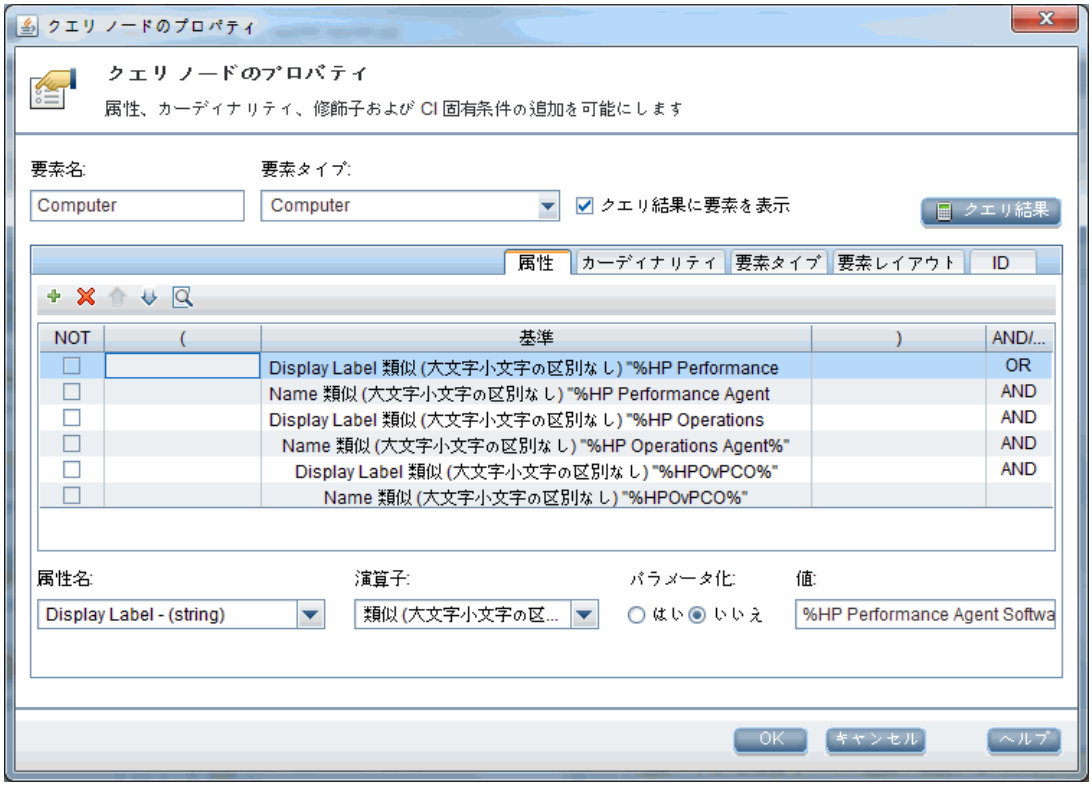


7 トポロジペインで、トポロジ図内の任意のノードを右クリックしてから [**クエリノードのプロパティ**] をクリックして、選択したノードの CI 属性のリストを表示します。



[クエリ ノードプロパティ] ダイアログボックスが開きます。

8 [**属性**] をクリックします。有効化する属性を選択してから [**OK**] をクリックします。



SHR に対して選択したタイプのデプロイメントシナリオに基づいて、コンテンツパックのデプロイが正常に完了しました。

タスク 2: SHR との統合のための SiteScope の設定

HP SiteScope は、サーバー、オペレーティングシステム、ネットワークデバイス、ネットワークサービス、アプリケーション、アプリケーションコンポーネントなどの分散 IT インフラストラクチャの可用性とパフォーマンスを確保するよう設計されたエージェント不要の監視ソリューションです。

SHR が SiteScope から物理ノードのデータを収集するには、最初に SiteScope でモニターを作成する必要があります。モニターは、エンタープライズビジネスシステムで使用されている各種のシステムとアプリケーションに自動的に接続して問い合わせを行うツールです。このモニターは、環境内にあるさまざまな IT コンポーネントに関するデータを収集し、CPU 使用率、メモリー使用率など、SHR が使用する特定のメトリックにマップされます。モニターを作成したら、SiteScope が HP Operations Agent/BSM プロファイルデータベースでデータのログを記録して、エージェントから必要なデータを SHR が収集できるようにする必要もあります。このタスクは、SiteScope を環境内にインストールした場合にのみ実行してください。そうでない場合は、次のタスクに進みます。

SiteScope に作成するモニター (カウンターおよび測定を含む) のリストについては、SiteScope Monitors for HP Service Health Reporter ページ 189 を参照してください。

SiteScope にモニターを作成する方法の詳細については、『SiteScope の使用』および『Monitor Reference』ガイドを参照してください。このドキュメントは、以下の URL に用意されています。

http://support.openview.hp.com/selfsolve/manuals

SiteScope モニターによって収集されたトポロジデータを BSM に転送するには、SiteScope と BSM 間の統合を有効にします。BSM との SiteScope の統合の詳細については、『SiteScope の使用』ガイドの第 8 章「Business Service Management (BSM) との連携」を参照してください。

SiteScope を SHR に統合するには、次の手順を実行します。

1. SHR がインストールされているホストシステムに管理者としてログオンします。
2. SiteScope アドレスを Web ブラウザーに入力することにより、SiteScope にアクセスします。デフォルトアドレスは次のとおりです。**http://<**SiteScope ホスト名 **>:<** ポート番号 **>/SiteScope**
3. データのログ記録のために SiteScope を HP Operations Agent に統合できるようにします。その手順の詳細については、『SiteScope の使用』ガイドの第 9 章「HP Operations Agent を使用した Operations Manager と BSM での作業」を参照してください。
4. モニター数と、HP Operations Agent の統合システムにデータを取り込む頻度を設定します。デフォルトの SiteScope 設定で数千のモニターの実行は可能ですが、SiteScope-HPOM のメトリックの統合において保存できるモニターの最大数、メトリック、およびモニタータイプの計画を立てるには、サイズ設定が重要です。詳細については、『SiteScope の使用』ガイドの第 9 章の中の「SiteScope-Operations Manager 測定値統合のサイズ設定の推奨事項」の項を参照してください。

タスク 3: RTSM サービス定義ソースの設定

[トポロジソースの設定] ページで、RTSM サービス定義ソースを設定し、管理対象環境のトポロジ情報を提供できます。

設定を行うには、次の手順を実行します。

1 [**サービス定義ソース**] の下で [**RTSM**] を選択し、RTSM データソース接続を作成します。

[サービス定義] ページでトポロジソースを設定した後でトポロジソースを変更することはできません。

2 [**新規作成**] をクリックします。[接続パラメータ] ダイアログボックスが開きます。

3 [**接続パラメータ**] ダイアログボックスに次の値を入力します。

ホスト名	-	BSM サーバーの IP アドレスまたは FQDN。HP BSM インストールが分散されている場合は、データ処理サーバー (DPS) の名前を [**ホスト名**] フィールドに入力します。
ポート	-	RTSM Web サービスに照会するためのポート番号。デフォルトのポート番号は 21212 です。 ポート番号が変更された場合、データベース管理者に詳細を問い合わせてください。
ユーザー名	-	RTSM Web サービスユーザーの名前。デフォルトのユーザー名は `admin` です。
パスワード	-	RTSM Web サービスユーザーのパスワード。デフォルトのパスワードは `admin` です。

4 **[OK]** をクリックします。

作成できる RTSM データソース接続は 1 つのみです。接続が作成された後、デフォルトでは [**新規作成**] ボタンは無効になります。この設定は 1 回限りの設定なので、正しい値を入力したことを確認してください。

5 [**接続テスト**] をクリックし、接続をテストします。

6 [**保存**] をクリックして、このページで行った変更を保存します。

7 メッセージボックスで、[**はい**] をクリックします。[正常に保存しました] メッセージが [情報] メッセージパネルに表示されます。

RTSM サービス定義ソースの設定に関する詳細については、『HP Service Health Reporter 管理者オンラインヘルプ』のトピック「エンタープライズトポロジの管理」を参照してください。

8 [**次へ**] をクリックして続行します。[サマリー] ページが開きます。

9 [**終了**] をクリックして、インストール後の設定タスクを完了します。[デプロイメントマネージャ] ページが開きます。

10 管理コンソールを閉じてシステムを再起動し、HP PMDB Platform Collection Service と HP PMDB Platform Message Broker Service の依存関係が有効になるようにします。

システムを再起動したら、必要なコンテンツパックのインストールを続行できます。詳細については、コンテンツパックの選択およびインストール ページ 89 を参照してください。

仮想化データを VMware vCenter から収集する場合、コンテンツパックのインストール後に VMware vCenter でデータ収集を設定します。次の VMware vCenter トポロジソースの設定 : SHR ページ 82 を参照してください。

次の HPOM トポロジソースの設定 : SHR

HPOM デプロイメントシナリオでは、HPOM データベースが管理対象ノードのトポロジ情報のソースになります。SHR は、Windows、Unix、Linux および Solaris データベースで HPOM からのデータ収集をサポートします。

トポロジ関係は、ノードグループ、ノード、およびノードリソースに限定されます。グループ情報は、HPOM ノードグループから取得されます。ノードリソース情報は、コンテンツパックで定義されているルールに基づいて SHR によって検出されます。

事前に必要な作業

HPOM トポロジソース接続を設定する前に、環境において、ドメインへのインストールまたはスタンドアローンシステムとしてのインストールのどちらの方法で HPOM がインストールされているかに応じて、該当する事前に必要な作業を実行する必要があります。

ドメインユーザー用の SHR サービスの設定

ローカルアカウントではなくドメイン管理者アカウントを使ってSHRがシステムにインストールされている場合、HPOM デプロイメントシナリオでは、HP PMDB Platform Administrator サービスおよび HP PMDB Platform Collection Service は始動しません。したがって、HPOM サービス定義ソース接続を設定する前に、ドメインユーザー用のサービスを設定する必要があります。

タスク 1: ドメインアカウント用の HP PMDB Platform Administrator サービスの設定

設定を行うには、次の手順を実行します。

1. [**スタート**] → [**ファイル名を指定して実行]** をクリックします。[ファイル名を指定して実行] ダイアログボックスが開きます。
2. [**名前**] フィールドに `services.msc` と入力し、[**ENTER**] キーを押します。[サービス] ウィンドウが開きます。
3. 右側のペインで、[**HP_PMDB_Platform_Administrator**] を右クリックし、[**停止**] をクリックします。
4. [**HP_PMDB_Platform_Administrator**] を右クリックし、[**プロパティ**] をクリックします。[SHR のプロパティ] ダイアログボックスが開きます。
5. [**ログオン**] タブで、[**アカウント**] を選択します。
6. ドメインユーザー名を空白フィールドに入力します。たとえば、DOMAIN ドメインのユーザーが Administrator という名前である場合、このフィールドに `DOMAIN¥Administrator` と入力します。
7. ユーザーパスワードを [**パスワード**] フィールドに入力します。
8. パスワードを [**パスワードの確認入力**] フィールドに再度入力します。
9. [**適用**] をクリックし、[**OK**] をクリックします。
10. 右側のペインで、[**HP_PMDB_Platform_Administrator**] を右クリックし、[**開始**] をクリックします。

タスク 2: ドメインアカウント用の HP PMDB Platform Collection Service の設定

次の手順を実行します。

1. [**スタート**] → [**ファイル名を指定して実行]** をクリックします。[ファイル名を指定して実行] ダイアログボックスが開きます。
2. [**名前**] フィールドに `services.msc` と入力し、[**ENTER**] キーを押します。[サービス] ウィンドウが開きます。

3 右のペインで、[**HP_PMDB_Platform_Collection Service**] を右クリックし、[**停止**] をクリックします。

4 [**HP_PMDB_Platform_Collection_Service**] を右クリックし、[**プロパティ**] をクリックします。[SHR Collection Service のプロパティ] ダイアログボックスが開きます。

5 [**ログオン**] タブで、[**アカウント**] を選択します。

6 次に、ドメインユーザー名をブランクフィールドに入力します。

7 ユーザーパスワードを [**パスワード**] フィールドに入力します。

8 パスワードを [**パスワードの確認入力**] フィールドに再度入力します。

9 [**適用**] をクリックし、[**OK**] をクリックします。

10 右のペインで、[**HP_PMDB_Platform_Collection Service**] を右クリックし、[**開始**] をクリックします。

上記の手順が必須なのは、製品をドメインユーザー用にインストールする場合のみです。製品をローカルユーザー用にインストールする場合は、上記の手順は不要です。

設定手順を実行し終わったら、HPOM サービス定義接続の設定に進みます。

HPOM データベースサーバーでのデータベースユーザーアカウントの作成

この作業の実行方法は、HPOM 環境で Microsoft SQL Server がどのように設定されているかと、HPOM データベースサーバーと通信するために SHR をどのように設定できるかによって異なります。選択できるシナリオには次の 2 つがあります。

- シナリオ **1**: HPOM for Windows 8.x/9.x が 1 つのシステムにインストールされ、Microsoft SQL Server 2005 または Microsoft SQL Server 2008 は同一システムまたはリモートシステムにインストールされます。別のシステムにインストールされている SHR は、Windows 認証または SQL Server 認証 (混合モード認証) を介して SQL Server に接続するように設定できます。SQL Server に定義されている認証方法を SHR で使用して、HPOM データベース接続を設定できます。
- シナリオ**2**: HPOM for Windows 8.xは、デフォルトで組み込まれているMicrosoft SQL Server 2005 Express Edition を使用します。同様に、HPOM for Windows 9.x も、デフォルトで組み込まれている Microsoft SQL Server 2008 Express Edition を使用します。このシナリオにおける認証モードは、Windows NT 認証です。ただし、その場合、SQL Server と SHR の間のリモート接続は可能ではありません。したがって、このシナリオで混合モード認証が可能になるよう、SHR 用のユーザーアカウントを作成する必要があります。

そのユーザーアカウントを作成する前に、まず混合モード認証を使用可能にする必要があります。その手順については、次の URL を参照してください。

http://support.microsoft.com

認証目的でユーザー名およびパスワードを作成するには、次の手順を実行します。Microsoft SQL Server 2008 を使用する場合、手順は、SQL Server 2005 で実行される次のような手順に似通っています。

1 ユーザー名とパスワードを作成します。

   a 組み込みの Microsoft SQL Server 2005 を使って HPOM システムにログオンします。

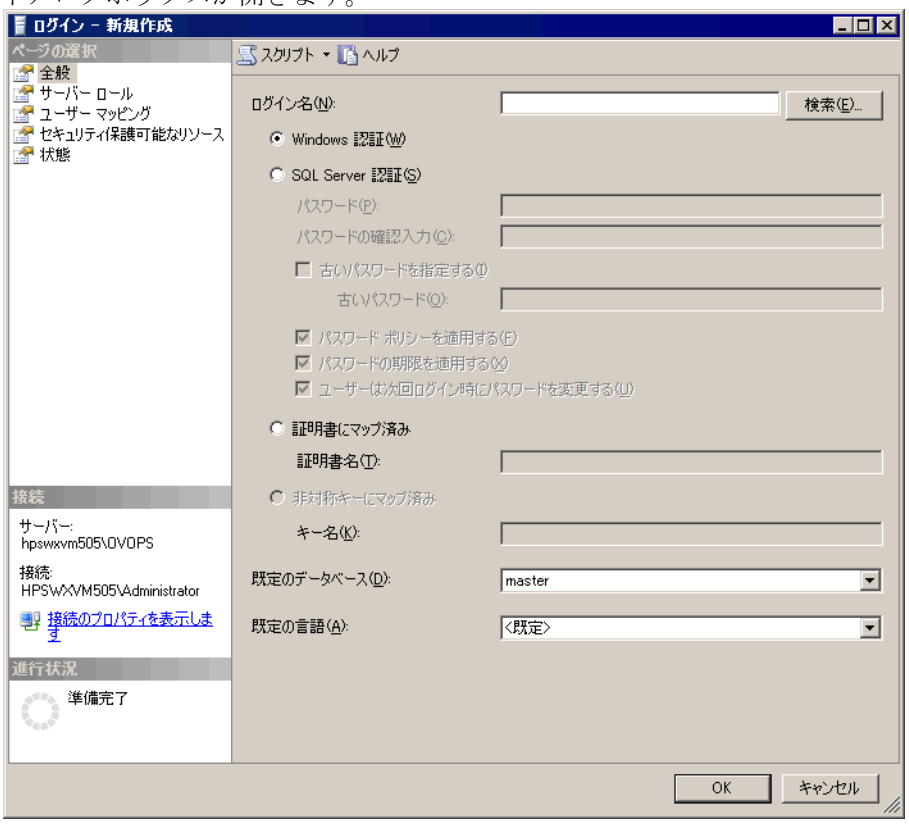
   b [**スタート**] → [**プログラム**] → [**Microsoft SQL Server 2005**] → [**SQL Server Management Studio**] をクリックします。[Microsoft SQL Server Management Studio] ウィンドウが開きます。

   ➤ SQL Server Management Studio がシステムにインストールされていない場合、以下の URL にアクセスして Microsoft の Web サイトの関連セクションからダウンロードできます。**http://www.microsoft.com**

c [サーバーへの接続] ダイアログボックスで、[**認証**] リストから [**Windows 認証**] を選択してから、[**接続**] をクリックします。

d [オブジェクト エクスプローラ] ペインで、[**セキュリティ**] を展開します。

e [**ログイン**] を右クリックし、[**新しいログイン**] をクリックします。[ログイン - 新規作成] ダイアログボックスが開きます。



f [**ログイン名**] フィールドにユーザー名を入力します。必要なその他の詳細を指定します。

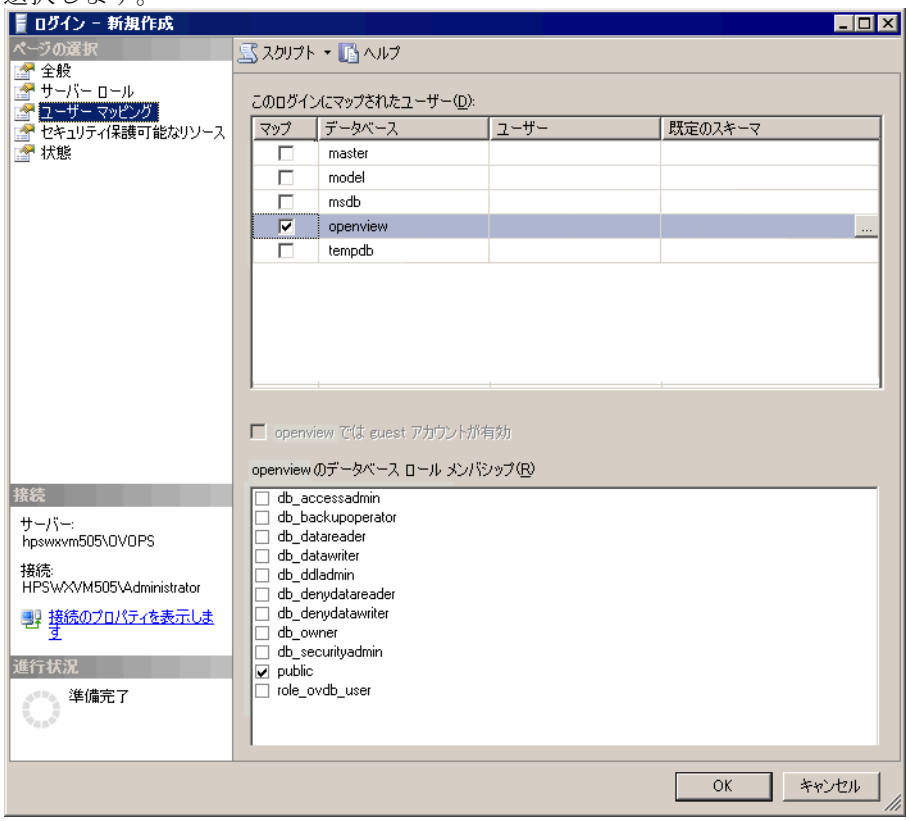
g [**SQL Server 認証**] ラジオボタンを選択します。

h [**パスワード**] フィールドにパスワードを入力します。

i [**パスワードの確認入力**] フィールドにパスワードをもう一度入力します。パスワードの入力義務ルールを無効にして、シンプルなパスワードを作成することができます。

j [**ユーザーマッピング**] をクリックします。

k [**このログインにマップされたユーザー**] の下で、[**openview**] の横のチェックボックスを選択します。

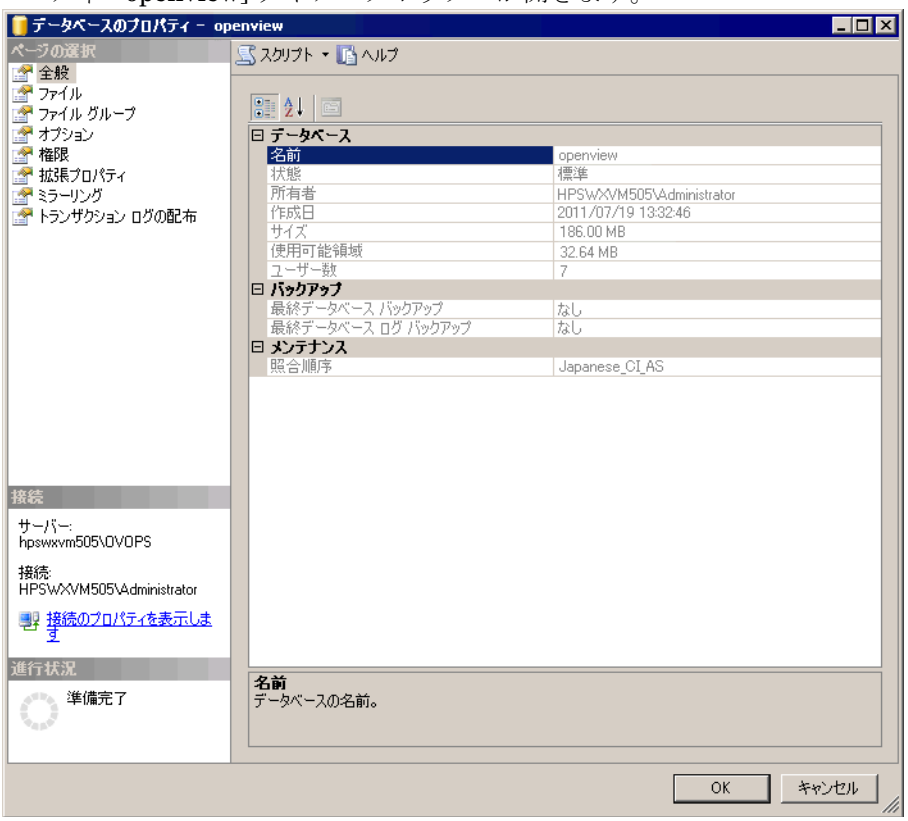


l [**OK**] をクリックし、ユーザー名とパスワードを作成します。

2 データベースユーザーは、少なくとも **CONNECT** 権限および **SELECT** 権限を持っていなければなりません。新たに作成したユーザーアカウントに対して **CONNECT** 権限および **SELECT** 権限を有効にするには、以下の手順を実行します。

a [**オブジェクト エクスプローラ**] ペインで、[**データベース**] を展開します。

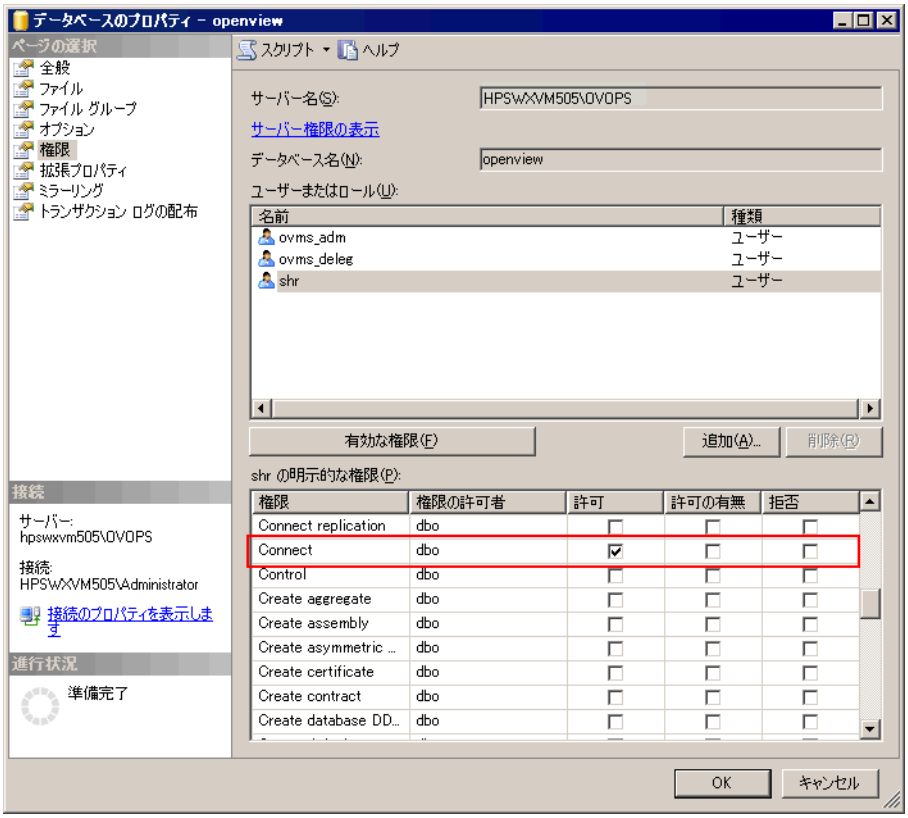
b [**openview**] を右クリックしてから、[**プロパティ**] をクリックします。[データベースのプロパティ - openview] ダイアログボックスが開きます。



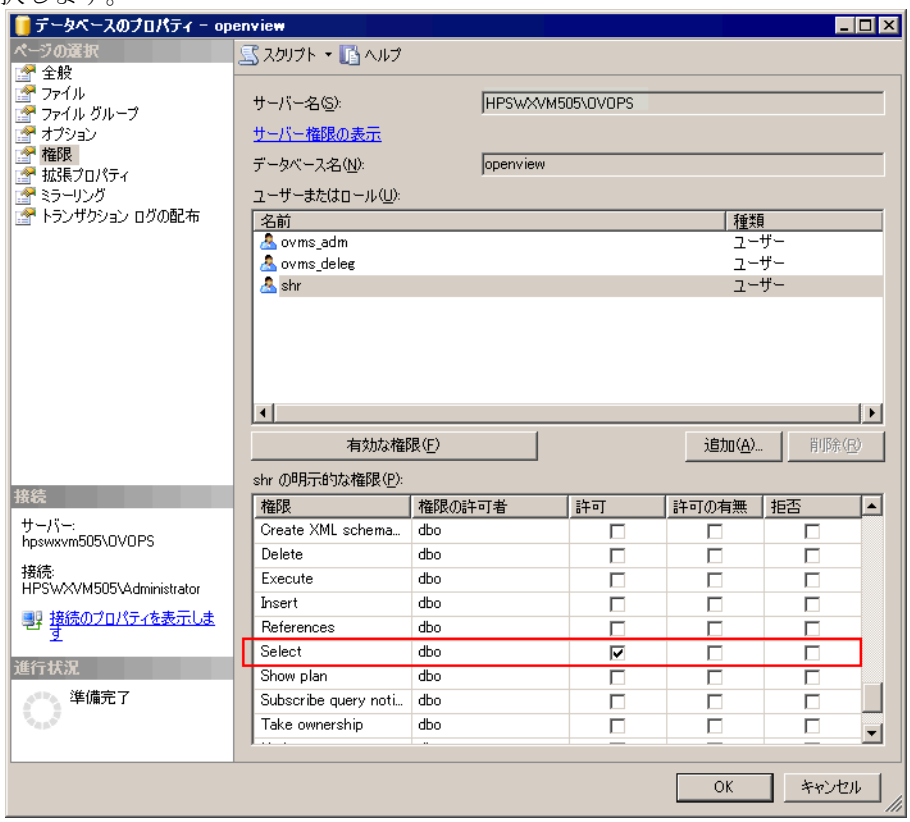
c [**ページの選択**] ペインで、[**権限**] をクリックします。

d [**ユーザーまたはロール**] の下で、新たに作成したユーザーアカウントをクリックします。

e [**明示的な権限**] の下で、**CONNECT** 権限にスクロールダウンしてから、その権限に対する [**許可**] チェックボックスを選択します。



f **SELECT** 権限にスクロールダウンし、その権限に対する [**許可**] チェックボックスを選択します。

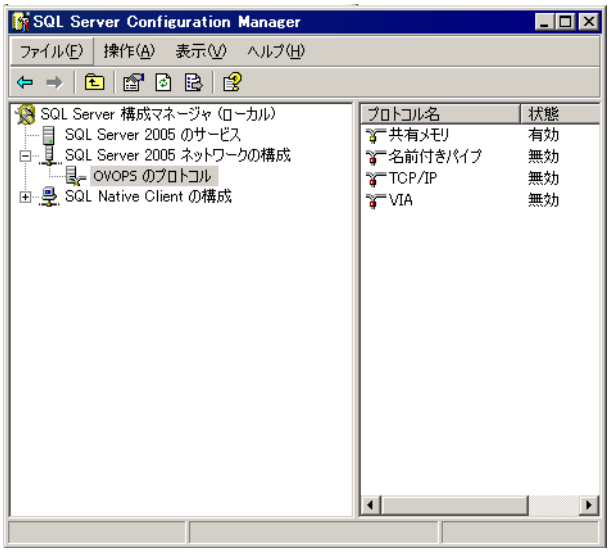


g **[OK]** をクリックします。

3 次のように、HPOM サーバーのポート番号をチェックします。

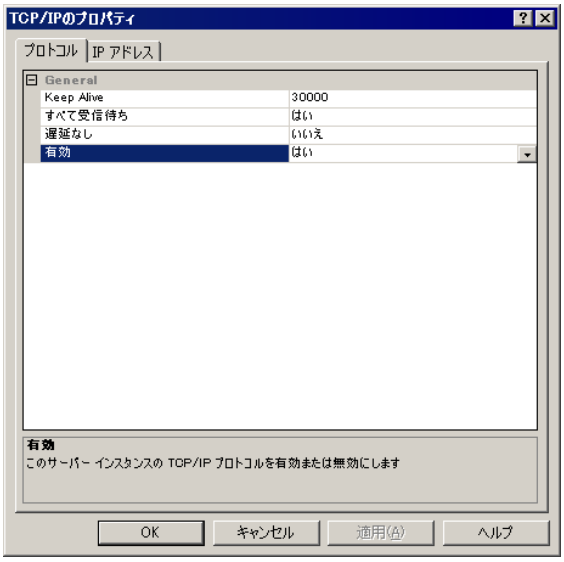
a [**スタート**] → [**プログラム**] → [**Microsoft SQL Server 2005**] → [**構成ツール**] → [**SQL Server 構成マネージャ**] をクリックします。[SQL Server 構成マネージャ] ウィンドウが開きます。

b [**SQL Server ネットワークの構成**] を展開して [**OVOPS のプロトコル**] を選択します。インスタンス名を変更した場合、該当するインスタンス名を選択します。



c 右側のペインで、[**TCP/IP**] を右クリックしてから [**有効化**] をクリックします。

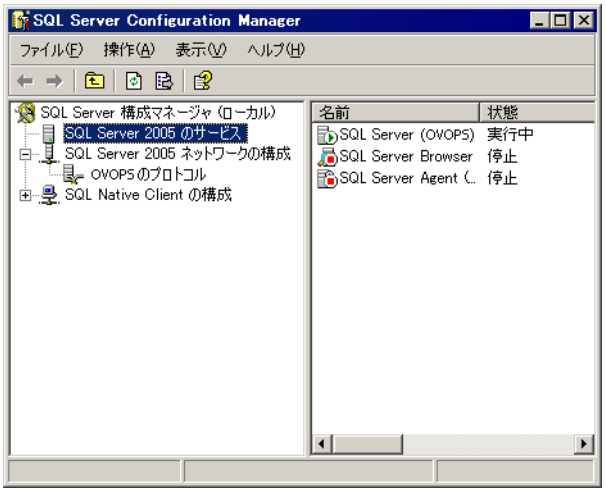
d [**TCP/IP**] をもう一度右クリックし、[**プロパティ**] をクリックします。[TCP/IP のプロパティ] ダイアログボックスが開きます。



e [**IP アドレス**] タブの [**IPAll**] の下のポート番号を書き留めます。

4 HPOM データベースサーバーを再起動します。

a [SQL Server 構成マネージャ] ウィンドウで、[**SQL Server のサービス**] をクリックします。



b 右側のペインで、[**SQL Server (OVOPS)**] を右クリックしてから [**再起動**] をクリックします。

管理コンソールで HPOM データソース接続を設定するときに、新たに作成したユーザー名、パスワードおよび検出したインスタンス名とポート番号を使用できます。

コマンドプロンプトユーティリティ **osql** を使用して、この手順を実行できます。詳細については、次の URL の Microsoft の Web サイトにアクセスしてください。

http://support.microsoft.com

データ収集のために、SHR での HPOM トポロジソース接続および HPOM データソース接続の設定に進んでください。次のタスクを実行します。

HPOM サービス定義ソースの設定

[トポロジーソースの設定] ページで、HPOM サービス定義ソースを設定し、管理対象環境のトポロジ情報を提供できます。

HPOM for Windows とともにインストールされるデフォルトの SQL Server Express はリモート接続を受け入れません。

次の手順を実行します。

1 [**サービス定義ソース**] の下で [**HP OM**] を選択し、HPOM データソース接続を作成します。

[サービス定義] ページでトポロジソースを設定した後でトポロジソースを変更することはできません。

2 [**新規作成**] をクリックします。[接続パラメータ] ダイアログボックスが開きます。

3 [**接続パラメータ**] ダイアログボックスで、次の値を指定または入力します。

認証にデータベースの方法を使用してHPOMデータベースサーバーに接続している場合は、「openview」データベースの SELECT 権限と CONNECT 権限を持つユーザーの詳細をここで指定する必要があります。

データソースのタイプ	-	環境で設定されている HPOM のタイプを選択します。オプションには次のものがあります。 • HPOM for Windows • HPOM for Unix • HPOM for Linux • HPOM for Solaris
データベースタイプ	-	選択するデータソースタイプに応じて、データベースタイプが自動的に選択されます。HPOM for Windows データソースタイプの場合、データベースタイプは MSSQL です。HPOM for Unix、HPOM for Linux、HPOM for Solarisの場合、データベースタイプはOracleです。
ホスト名	-	HPOMデータベースサーバーのIPアドレスまたは完全修飾ドメイン名 (FQDN)。
データベースインスタンス	-	データソース内のデータベースインスタンスのシステム識別子 (SID)。デフォルトのデータベースインスタンスは OVOPS です。
ポート	-	HPOM データベースサーバーに照会するためのポート番号。 OVOPS などの、データベースインスタンスのポート番号をチェックするには、HPOM サーバーのポート番号のチェック ページ 82 を参照してください。
Windows 認証	-	HPOM データベースにアクセスするための Windows 認証を有効にするためのオプション。ユーザーは、データベースをホスティングしている Windows システムのアクセス資格情報と同じ情報を使用して HPOM にアクセスすることができます。このオプションは、データソースタイプとして HPOM for Windows が選択された場合にのみ表示されます。
ユーザー名	-	HPOM データベースユーザーの名前。HPOM for Windows データソースタイプの場合に、[Windows 認証] オプションを選択すると、このフィールドは無効になって空になります。
パスワード	-	HPOM データベースユーザーのパスワード。HPOM for Windows データソースタイプの場合に、[Windows 認証] オプションを選択すると、このフィールドは無効になって空になります。

4 **[OK]** をクリックします。

5 [**接続テスト**] をクリックし、接続をテストします。

6 [**保存**] をクリックして変更を保存します。

7 メッセージボックスで、[**はい**] をクリックします。[正常に保存しました] メッセージが [情報] メッセージパネルに表示されます。

手順 2 を実行すれば、追加の HPOM データソースを設定できます。

非ドメインホストからデータを収集するには、そのようなホストに対して HPOM 管理者が適切な DNS 解決を行うことにより、ドメインにインストールされている SHR からそのホストに到達できるようにする必要があります。

HPOM サービス定義ソースの設定に関する詳細については、『HP Service Health Reporter 管理者オンラインヘルプ』のトピック「エンタープライズトポロジの管理」を参照してください。

8 [**次へ**] をクリックして続行します。[サマリー] ページが開きます。

9 [**終了**] をクリックして、インストール後の設定タスクを完了します。[デプロイメントマネージャ] ページが開きます。

10 管理コンソールを閉じてシステムを再起動し、HP PMDB Platform Collection Service と HP PMDB Platform Message Broker Service の依存関係が有効になるようにします。

HPOM サーバーのポート番号のチェック

SQL Server が HPOM で使用するデータベースタイプである場合、HPOM データベースサーバーでのデータベースユーザーアカウントの作成 ページ 74 の手順 3 を参照して、HPOM サーバーのポート番号をチェックしてください。

Oracle が HPOM におけるデータベースタイプの場合、以下の手順を実行して、ポート番号をチェックしてください。

1 Oracle サーバーにログオンします。

2 `$ORACLE_HOME/network/admin` フォルダーまたは `%ORACLE_HOME%¥NET80¥Admin` フォルダーに移動します。

3 `listener.ora` ファイルを開きます。HPOM サーバーのポート番号はこのファイルに一覧表示されています。

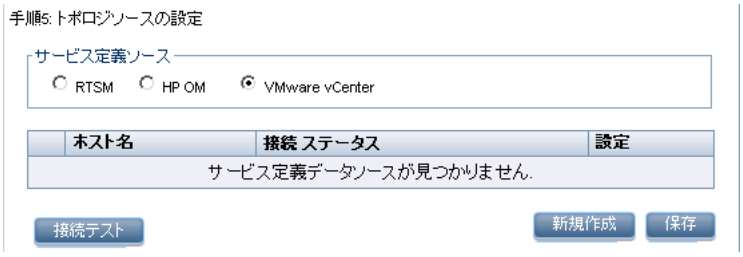
仮想化データを VMware vCenter から収集する場合、コンテンツパックのインストール後に VMware vCenter でデータ収集を設定します。次の VMware vCenter トポロジソースの設定 : SHR ページ 82 を参照してください。

次の VMware vCenter トポロジソースの設定 : SHR

VMware vCenter は、エンタープライズのビジネスに不可欠なシステムの仮想インフラストラクチャの管理を行う柔軟な中央プラットフォームを提供する分散型サーバー / クライアントソフトウェアソリューションです。VMware vCenter は、パフォーマンスとイベントを中央から監視し、仮想環境の高度な可視性を提供します。そのため、IT 管理者は環境を簡単に制御できます。

SHR は VMware vCenter データベースから仮想化パフォーマンスメトリックを収集します。

[トポロジソースの設定] ページで、VMware vCenter サービス定義ソースを設定し、管理対象環境のトポロジ情報を提供できます。



設定を行うには、次の手順を実行します。

1 [**サービス定義ソース**] の下で [**VMware vCenter**] を選択し、VMware vCenter データソース接続を作成します。

[サービス定義] ページでトポロジソースを設定した後でトポロジソースを変更することはできません。

2 [**新規作成**] をクリックします。[接続パラメータ] ダイアログボックスが開きます。

3 [**接続パラメータ**] ダイアログボックスで、次の値を指定または入力します。

ホスト名	-	VMware vCenter データベースサーバーの IP アドレスまたは FQDN。
ユーザー名	-	VMware vCenter データベースユーザーの名前。
パスワード	-	VMware vCenter データベースユーザーのパスワード。

[**サービス定義ソース**] で [**VMware vCenter**] の接続パラメーターを設定すると、対応する情報が **VMware vCenter データ収集 ソース**ページに取り込まれます。

4 **[OK]** をクリックします。

5 [**接続テスト**] をクリックし、接続をテストします。

6 [**保存**] をクリックして変更を保存します。

7 メッセージボックスで、[**はい**] をクリックします。[正常に保存しました] メッセージが [情報] メッセージパネルに表示されます。

[新規作成] をクリックします。[接続パラメータ] ダイアログボックスが開きます。ページ 72 を実行すれば、追加の VMware vCenter データソースを設定できます。

タスク 11: Sybase IQ ライセンスのタイプの確認

Intel EM64T プロセッサーを搭載しているシステムに Sybase IQ がインストールされている場合は、`pmdb.lmp` ファイル内の Sybase IQ ライセンスのタイプを確認する必要があります。ライセンスのタイプが OEM CPU ライセンスではない場合、1 か月後に Sybase IQ ライセンスが期限切れになりデータベースの機能が停止します。

次の手順を実行します。

1 データベースファイルが保存されている場所を参照します。これは、59 ページのステップ で指定した場所です。

2 テキストエディターで `pmdb.lmp` ファイルを開きます。

3 ライセンスのタイプ (`LT=AC`) を確認します。LT の値が AC ではない場合は、AC に変更します。

4 変更を保存してファイルを閉じます。

`pmdb.lmp` ファイル内でライセンスのタイプを変更した後で、データベースを再起動する必要があります。次の手順を実行します。

1 [**スタート**] → [**ファイル名を指定して実行**] をクリックします。[ファイル名を指定して実行] ダイアログボックスが開きます。

2 [**名前**] フィールドに `services.msc` と入力し、[**ENTER**] キーを押します。[サービス] ウィンドウが開きます。

3 右側のペインで、[**HP_PMDB_Platform_Sybase**] サービスを右クリックしてから [**再起動**] をクリックします。

Linux の場合

プロンプトに次のコマンドを入力します。

```
service HP_PMDB_Platform_Sybase restart
```

コンテンツパックのインストールに進みます。

SHR の HP Operations Agent との共存の有効化

SHR と HP Operations Agent を同じマシンにインストールする場合は、追加の設定作業を実行する必要があります。

SHR と HP Operations Agent の共存を有効にするには、次の手順を実行します。

1 SHR と HP Operations Agent の両方がシステムにインストールされていることを確認します。

2 管理者または root としてシステムにログオンします。

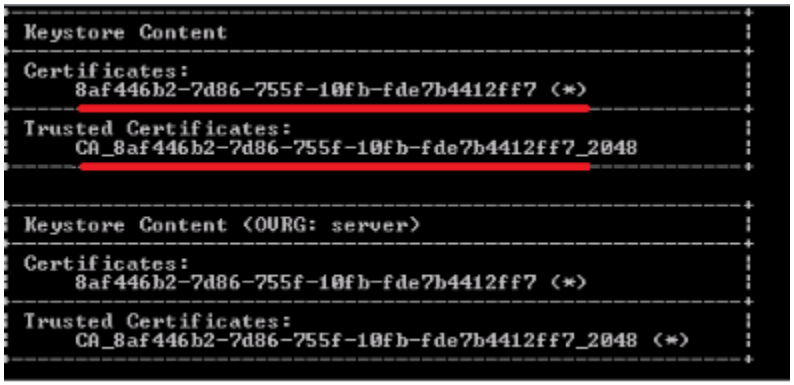
3 コマンドラインコンソールで、次のコマンドを実行します。

```
ovcert -list
```

コマンドラインコンソールには、システムにインストールされているすべての証明書のリストが表示されます。

4 コマンドラインコンソールの、[Keystore Content] セクションにある [Certificates and Trusted Certificate] フィールドの内容を書き留めます。

例 :



5 SHR システムで、次のコマンドを実行します。

ovcert -remove < 証明書のコンテンツ >

ここでの<証明書のコンテンツ>は、[Certificates セクションに表示される完全な文字列です。

6 SHR システムで、次のコマンドを実行します。

ovcert -remove < 信頼済み証明書のコンテンツ >

ここでの < 信頼済み証明書のコンテンツ > は、[Trusted Certificates] セクションに表示される完全な文字列です。

7 oainstall.vbs -configure または oainstall.sh -configure コマンドを使用してエージェントが HPOM 管理サーバーと連携するように設定します。詳細については、『HP Operations Agent インストールおよび設定ガイド』を参照してください。

8 HPOM コンソールで、SHR ノードの証明書の要求を受け入れます。

9 HPOM for Windows を使用している場合は、次の手順を実行します。

a 新しいポリシーを、**[ポリシー管理] > [タイプ別ポリシー] > [エージェントポリシー] > [フレキシブル管理]** に作成します。

b 次の内容をポリシーにコピーします。

```
#
# Template for message forwarding to another management server
#
TIMETEMPLATES
# None
#
# Responsible Manager Configurations
#
RESPMGRCONFIGS
# Responsible target Manager: target
# Responsible source Manager: source
RESPMGRCONFIG
    DESCRIPTION "Responsible managers"
    SECONDARYMANAGERS
       SECONDARYMANAGER
               NODE IP 0.0.0.0 "OM_SERVER"
               DESCRIPTION "Management Server OM_SERVER"
               SECONDARYMANAGER
               NODE IP 0.0.0.0 "SHR_SERVER"
               DESCRIPTION "Backup Server for OM_SERVER"
       ACTIONALLOWMANAGERS
               ACTIONALLOWMANAGER
               NODE IP 0.0.0.0 "OM_SERVER"
               DESCRIPTION "Management Server OM_SERVER"
               ACTIONALLOWMANAGER
               NODE IP 0.0.0.0 "SHR_SERVER"
               DESCRIPTION "Backup Server for OM_SERVER"
    MSGTARGETRULES
```

c OM_SERVER を HPOM 管理サーバーの FQDN に置換し、SHR_SERVER を SHR システムの FQDN に置換します。

d **[構文の確認]** をクリックし、内容が有効であることを確認します。

e ポリシーを SHR システムにデプロイします。

10 UNIX/Linux で HPOM を使用している場合は、次の手順を実行します。

a ルートとして管理サーバーにログオンします。

b 次のコマンドを実行します。

cp /etc/opt/OV/share/conf/OpC/mgmt_sv/tmpl_respmgrs/backup-server /etc/opt/OV/share/conf/OpC/mgmt_sv/respmgrs/allnodes

c /etc/opt/OV/share/conf/OpC/mgmt_sv/respmgrs/allnodes/backup-server ファイルを編集し、M1 を HPOM 管理サーバーの FQDN に置換し、M2 を SHR システムの FQDN に置換します。

d 次のコマンドを実行します。

opcragt -dist <SHR ノード名 >

11 SHR システムで次のコマンドを実行します。

ovcert -exporttrusted -file < ファイル名 > **-ovrg server**

ここでの < ファイル名 > は、証明書を保存する名前です。証明書ファイルへの完全パスを指定する必要があります。

12 SHR システムで次のコマンドを実行します。

ovcert -importtrusted -file < ファイル名 >

ここでの < ファイル名 > は前の手順でエクスポートしたファイルの名前です。証明書ファイルへの完全パスを指定する必要があります。

13 SHR システムで、次のコマンドを実行します。

ovcert -trust <SHR サーバー > **-ovrg server**

ここでの <SHR サーバー > は、SHR システムの FQDN です。

14 SHR システムで次のコマンドを実行します。

ovc -restart

リモートシステム上での SHR コレクターと HP Operations Agent の共存の有効化

SHR コレクターと HP Operations Agent を同じシステムにインストールした場合は、追加の設定作業を実行する必要があります。

この手順は、SHR コレクターをリモートシステムにインストールした場合にのみ使用してください。

SHR コレクターと HP Operations Agent の共存を有効化するには、次の手順を実行します。

1 SHR コレクターと HP Operations Agent の両方がシステムにインストールされていることを確認します。

2 管理者または root としてコレクターシステムにログオンします。

3 コマンドラインコンソールで、次のコマンドを実行します。

ovcert -list

コマンドラインコンソールには、システムにインストールされているすべての証明書のリストが表示されます。

4 コマンドラインコンソールの、[Keystore Content] セクションにある [Certificates and Trusted Certificates] フィールドの内容を書き留めます。

例：

```
Keystore Content
Certificates:
    8af446b2-7d86-755f-10fb-fde7b4412ff7 (*)
Trusted Certificates:
    CA_8af446b2-7d86-755f-10fb-fde7b4412ff7_2048

Keystore Content (OVRG: server)
Certificates:
    8af446b2-7d86-755f-10fb-fde7b4412ff7 (*)
Trusted Certificates:
    CA_8af446b2-7d86-755f-10fb-fde7b4412ff7_2048 (*)
```

5 コレクターシステムで、次のコマンドを実行します。

ovcert -remove < 証明書のコンテンツ >

ここでの<証明書のコンテンツ>は、[Certificates] セクションに表示される完全な文字列です。

6 コレクターシステムで、次のコマンドを実行します。

ovcert -remove < 信頼済み証明書のコンテンツ >

ここでの < 信頼済み証明書のコンテンツ > は、[Trusted Certificates] セクションに表示される完全な文字列です。

7 コレクターシステムで次のコマンドを実行します。

Windows の場合

perl %PMDB_HOME%¥bin¥scripts¥configurePoller.pl <HPOM_Server>

Linux の場合

perl $PMDB_HOME/bin/scripts/configurePoller.pl <HPOM_Server>

8 HPOM コンソールで、SHR ノードの証明書の要求を受け入れます。

9 HPOM for Windows を使用している場合は、次の手順を実行します。

a 新しいポリシーを、**[ポリシー管理] > [タイプ別ポリシー] > [エージェントポリシー] > [フレキシブル管理]** に作成します。

b 次の内容をポリシーにコピーします。

```
# Template for message forwarding to another management server
#
TIMETEMPLATES
# なし
#
# Responsible Manager Configurations
#
RESPMGRCONFIGS
# Responsible target Manager: target
# Responsible source Manager: source
RESPMGRCONFIG
    DESCRIPTION "Responsible managers"
    SECONDARYMANAGERS
       SECONDARYMANAGER
               NODE IP 0.0.0.0 "OM_SERVER"
```

```
                DESCRIPTION "Management Server OM_SERVER"
                SECONDARYMANAGER
                NODE IP 0.0.0.0 "SHR_SERVER"
                DESCRIPTION "Backup Server for OM_SERVER"
        ACTIONALLOWMANAGERS
                ACTIONALLOWMANAGER
                NODE IP 0.0.0.0 "OM_SERVER"
                DESCRIPTION "Management Server OM_SERVER"
                ACTIONALLOWMANAGER
                NODE IP 0.0.0.0 "SHR_SERVER"
                DESCRIPTION "Backup Server for OM_SERVER"
    MSGTARGETRULES
```

c OM_SERVER を HPOM 管理サーバーの FQDN に置換し、SHR_SERVER を SHR システムの FQDN に置換します。

d **[構文の確認]** をクリックし、内容が有効であることを確認します。

e OM_SERVER を HPOM 管理サーバーの FQDN に置換し、SHR_SERVER を SHR システムの FQDN に置換します。

f **[構文の確認]** をクリックし、内容が有効であることを確認します。

g ポリシーをコレクターシステムにデプロイします。

10 UNIX/Linux で HPOM を使用している場合は、次の手順を実行します。

a ルートとして管理サーバーにログオンします。

b 次のコマンドを実行します。

cp /etc/opt/OV/share/conf/OpC/mgmt_sv/tmpl_respmgrs/backup-server /etc/opt/OV/share/conf/OpC/mgmt_sv/respmgrs/allnodes

c /etc/opt/OV/share/conf/OpC/mgmt_sv/respmgrs/allnodes/backup-server ファイルを編集し、M1 を HPOM 管理サーバーの FQDN に置換し、M2 を SHR システムの FQDN に置換します。

d 次のコマンドを実行します。

opcragt -dist <SHR ノード名 >

11 SHR システムで次のコマンドを実行します。

ovcert -exporttrusted -file < ファイル名 > **-ovrg server**

ここでの < ファイル名 > は、証明書を保存する名前です。証明書ファイルへの完全パスを指定する必要があります。

12 エクスポートした証明書をコレクターシステムに手動でコピーします。

13 コレクターシステムで次のコマンドを実行します。

ovcert -importtrusted -file < ファイル名 >

ここでの < ファイル名 > は、前の手順でコピーしたファイルの名前です。証明書ファイルへの完全パスを指定する必要があります。

14 コレクターシステムで次のコマンドを実行します。

ovc -restart

6 コンテンツパックの選択およびインストール

必要なコンテンツパックをインストールする場合は、SHR の管理コンソールを通して、デプロイメントマネージャユーティリティが提供されます。この Web ベースのインタフェースでは、ドメイン、データを収集するデータソースアプリケーション、およびデータ収集用にインストールする特定のコンテンツパックコンポーネントに基づいてコンテンツパックが配置されるため、インストールプロセスが簡略化されます。

➤ SHR 9.20 から SHR 9.30 にアップグレードする場合は、コンテンツパックを更新する前に HP PMDB Platform Timer サービス。

出荷時に提供されているレポートのカスタマイズはサポートされていません。このレポートはコンテンツパックの更新後にデフォルトのレポートによって上書きされます。

コンテンツパックのユニバースの変更によるレポートの作成もサポートされていません。そのようなレポートはコンテンツパックの更新後に正常に機能しません。

コンテンツパックコンポーネントの選択

コンテンツパックは、1 つのデータマート (さまざまなソースから収集されたデータのリポジトリ) です。これは、システムのパフォーマンス、仮想環境のパフォーマンスなどの特定のドメインに関係しており、分析、コンテンツプレゼンテーション、使いやすさの点から見て、特定のグループの知識を持つユーザー固有の要求を満たしています。たとえば、システムのパフォーマンスコンテンツでは、現在の IT インフラストラクチャにあるシステムの可用性とパフォーマンスに関連するデータが提供されます。コンテンツパックには、1 つのリレーショナルデータモデル (特定のドメインに対して収集されるデータの種類を定義)、および収集したデータを表示するレポートセットも含まれています。

コンテンツパックは次の層またはコンポーネントによって構成されます。

- **ドメインコンポーネント** : ドメインまたはコアドメインコンポーネントは、特定のコンテンツパックのデータモデルを定義します。これには、リレーショナルスキーマを生成するためのルールが含まれています。また、データベースへとデータを処理するためのデータ処理ルール (標準の事前集計ルールのセットを含む) も含まれています。ドメインコンポーネントには、1 つまたは複数のレポートコンテンツパックコンポーネントで活用可能な、一般的に使用するディメンションとキューブを含めることができます。ドメインコンテンツパックコンポーネントは、設定済みのトポロジソースまたはデータの収集元であるデータソースに依存しません。
- **ETL (抽出、変換と読込) コンポーネント** : ETL コンテンツパックコンポーネントは、収集ポリシーと、変換ルール、調整ルール、およびステージングルールを定義します。また、データ処理ステップの実行順序を定義するデータ処理ルールも提供します。

  ETL コンテンツパックコンポーネントは、データソース依存型です。そのため、特定のドメインについて、各データソースアプリケーションは異なる ETL コンテンツパックコンポーネントを持ちます。たとえば、HP Performance Agent からシステムパフォーマンスデータを収集する場合、SysPerf_ETL_PerformanceAgent コンポーネントをインストールする必要があります。

HP SiteScope からシステムパフォーマンスデータを収集する場合、SysPerf_ETL_SiS (CODA にログ記録されたソースデータ) または SysPerf_ETL_SiS_DB (BSM プロファイルデータベースにログ記録されたソースデータ) のいずれかをインストールする必要があります。

単一のデータソースアプリケーションは、複数の ETL コンポーネントを持つことができます。たとえば、Performance Agent でサポートされる仮想技術 (Oracle Solaris Zones、VMware、IBM LPAR、Microsoft HyperV など) ごとに ETL コンポーネントを 1 つ持つことが可能です。ETL コンポーネントは、1 つまたは複数のドメインコンポーネントに依存できます。また、同じドメインコンポーネントにデータをフィードする複数の ETL コンポーネントを持つこともできます。

- **レポートコンポーネント**：レポートコンテンツパックコンポーネントは、アプリケーション固有の集計ルール、ビジネスビュー、SAP BOBJ ユニバース、および特定のドメインに対するレポートを定義します。レポートコンポーネントは、1 つまたは複数のドメインコンポーネントに依存できます。また、このコンポーネントには、1 つ以上のドメインコンポーネントで定義されるデータモデルを拡張する柔軟性も備えられています。

インストール可能なコンテンツパックコンポーネントのリストは、インストール後の設定段階で設定したトポロジソースに応じて異なります。トポロジソースが設定されると、デプロイメントマネージャは、コンテンツパックコンポーネントのリストをフィルタリングし、サポートされるデプロイメントシナリオにインストール可能なコンポーネントのみを表示します。たとえば、RTSM がトポロジソースとして設定されると、デプロイメントマネージャは、SaOB および APM のデプロイメントシナリオにインストール可能なコンポーネントのみを表示します。

各コンテンツパックとそれらによって提供されるレポートの詳細については、HP Service Health Reporter ユーザーオンラインヘルプを参照してください。

コンテンツパックコンポーネントのインストール

コンテンツパックコンポーネントをインストールするには、デプロイメントマネージャユーティリティを使用します。

コンテンツパックをインストールするには、次の手順を実行します。

1 Web ブラウザーで管理コンソールを起動します。

   a 次の URL にアクセスします。

   http://<SHR_ サーバー _FQDN>**:21411/BSMRApp**

   b [**ログイン名**] フィールドに `administrator` と入力し、[**ログイン**] をクリックして続行します。ホームページが開きます。

   ➤ ほかのユーザーアカウントを使用して管理コンソールにアクセスする場合は、そのユーザーアカウントが管理者権限を持っていることを確認してください。

2 左側のペインで [**管理**] をクリックし、[**デプロイメントマネージャ**] をクリックします。[デプロイメントマネージャ] ページが開きます。

   デプロイメントマネージャには、サポートされるデプロイメントシナリオにインストール可能なコンテンツパックコンポーネントが表示されます。デフォルトでは、デプロイメントシナリオに固有のすべてのコンテンツパックコンポーネントがインストール用に選択されます。選択肢を変更するには、選択しているコンテンツ、データソースアプリケーション、またはコンテンツパックコンポーネントをリストからクリアします。各デプロイメントシナリオに固有のコンテンツを次の表に示します。

テーブル 1　コンテンツパックのリスト

コンテンツ	Service and Operations Bridge	HP Operations Manager	Application Performance Management	VMware vCenter	RTSM
Default	✓	✓	✓	✓	
システムパフォーマンス	✓	✓		✓	
Virtual Environment Performance	✓	✓		✓	
合成トランザクション監視	✓		✓		
Health and Key Performance Indicators	✓		✓		
IBM WebSphere Application Server	✓	✓			
Microsoft Active Directory	✓	✓			
Microsoft Exchange Server	✓	✓			
Microsoft SQL Server	✓	✓			
Cross-Domain Operations Events	✓				
Real User Transaction Monitoring	✓		✓		
Network Performance	✓	✓			
Operations Events	✓	✓			
Oracle	✓	✓			

コンテンツ	Service and Operations Bridge	HP Operations Manager	Application Performance Management	VMware vCenter	RTSM
Oracle WebLogic Server	✓	✓			
SiteScope ProfileDB (Virtual Environment Performance)					✓
SiteScope ProfileDB (システムパフォーマンス)					✓

3 [**デプロイ**] をクリックします。

デプロイメントマネージャは、選択したコンテンツパックコンポーネントのインストールを開始します。

[ステータス] 列にインストールの進行状況が表示されます。[デプロイメントマネージャ] ページは自動的に更新され、最新のステータスが表示されます。

実行中のワークフローストリームがある場合、デプロイメントマネージャに次のメッセージが表示されます。

すべての必要なサービスが停止していますが、まだいくつかのジョブがアクティブな状態です。時間を置いて再試行してください。

このメッセージが表示されたら、すべてのワークフローストリームが完了するまでしばらくお待ちください。

インストールが完了すると、各コンテンツパックコンポーネントの [ステータス] 列に [Installation Successful] と表示されます。

コンテンツパックのアップグレード

SHR を 9.30 に正常にアップグレードできたら、デプロイメントマネージャーのヘルプを参照して SHR システムにインストールされているすべてのコンテンツパックを更新する必要があります。

コンテンツパックをアップグレードするには、次の手順を実行します。

1 Web ブラウザーで管理コンソールを起動します。

a 次の URL にアクセスします。

http://<SHR_ サーバー _FQDN>**:21411/BSMRApp**

b [**ログイン名**] フィールドに `administrator` と入力し、[**ログイン**] をクリックして続行します。ホームページが開きます。

ほかのユーザーアカウントを使用して管理コンソールにアクセスする場合は、そのユーザーアカウントが管理者権限を持っていることを確認してください。

2 左側のペインで [**管理**] をクリックし、[**デプロイメントマネージャ**] をクリックします。[デプロイメントマネージャ] ページが開きます。

3 [インストールされているバージョン] 列で アイコンで強調表示されているコンテンツパックを選択し、[**インストール / アップグレード**] をクリックします。

7 ローカルデータおよびリモートデータ収集のための SHR の設定

コンテンツパックをインストールしたら、ローカルデータコレクター (SHR サーバーに存在するコレクター) またはリモートデータコレクター (リモートデータソースからデータを収集するコレクター) を使用してデータを収集するように SHR を設定する必要があります。

ローカルおよびリモートコレクターの両方の設定は、デプロイメントシナリオおよび SHR で設定したトポロジソースのタイプによって異なります。

データ収集の設定作業は、次のカテゴリに編成されます。

- HPOM のデプロイメントシナリオで SHR をインストールした場合は、HPOM デプロイメントシナリオでのデータ収集の設定 ページ 96 を参照してください。
- BSM Service and Operations Bridge のデプロイメントシナリオで SHR をインストールした場合は、BSM Service and Operations Bridge デプロイメントシナリオの場合のデータ収集 ページ 104 を参照してください。
- アプリケーションパフォーマンス管理のデプロイメントシナリオで SHR をインストールした場合は、アプリケーションパフォーマンス管理デプロイメントシナリオの場合のデータ収集の設定 ページ 116 を参照してください。
- VMware vCenter のデプロイメントシナリオで SHR をインストールした場合は、VMware vCenter デプロイメントシナリオでのデータ収集の設定 ページ 120 を参照してください。

HPOM デプロイメントシナリオでのデータ収集の設定

以下のデータコレクターを SHR 内で設定する必要があります。

- イベントおよびメッセージを HPOM データベースから取り出し、さまざまなノードからデータを収集する HPOM データベースコレクター。
- エンタープライズアプリケーション、データベースおよびシステムリソースのデータを各種の管理対象ノードから収集する HP Performance Agent コレクター。

エンタープライズアプリケーションデータソースの設定

データソースを設定し、インストール済みの各種コンテンツパック用のデータを提供する必要があります。

HPOM データベース接続の設定

HPOM コンテンツパックのインストールを完了し、HPOM 用のトポロジソース接続を [サービス定義] ページで作成し終わったら、同じデータソース接続が [Operations Manager] ページに表示されます。新規のデータソース接続を作成する必要はありません。既存の接続をテストし、それを保存できます。

ただし、[サービス定義] ページでデータソース接続を更新しても、[Operations Manager] ページの接続の詳細は更新されません。

データベース接続を設定するには、次の手順を実行します。

1 管理コンソールで、[**収集設定**] → [**Operations Manager**] をクリックします。[Operations Manager] ページが開きます。

2 ホスト名の横のチェックボックスを選択してから、[**接続テスト**] をクリックして接続をテストします。

3 [**保存**] をクリックして変更を保存します。[正常に保存しました] メッセージが [情報] メッセージパネルに表示されます。

追加の HPOM データソースを設定するには、[**新規作成**] ボタンをクリックします。特定のデータソース接続を変更するには、[**設定**] をクリックします。

4 1 つ以上のホストの HPOM データ収集スケジュールを変更するには、[**頻度のスケジュール**] 列で、[**時間**] ボックスに 1 ～ 24 時間の収集時間を指定します。

5 [**保存**] をクリックして変更を保存します。[正常に保存しました] メッセージが [情報] メッセージパネルに表示されます。

HPOM データソース接続の変更

HPOM データソース接続を変更するには、次の手順を実行します。

管理コンソールで、[**収集設定**] → [**Operations Manager**] をクリックします。[Operations Manager] ページが開きます。

6 [**設定**] をクリックします。[接続パラメータ] ダイアログボックスが開きます。

認証にデータベースの方法を使用して HPOM データベースサーバーに接続している場合は、**openview** データベースの SELECT 権限と CONNECT 権限を持つユーザーの詳細をここで指定する必要があります。

7 [接続パラメータ] ダイアログボックスで、次の値を入力します。

ホスト名	HPOM データベースサーバーのアドレス (IP または名前)。
ポート	HPOM データベースサーバーに照会するためのポート番号。SQL Server がデータベースタイプの場合のデフォルトポートは 1433、Oracle がデータベースタイプの場合は 1521 です。
データベースインスタンス	HPOM データベースインスタンスのシステム識別子 (SID)。デフォルトのデータベースインスタンスは OVOPS です。
データベースタイプ	HPOM データベースを作成するために使用されるデータベースエンジンのタイプ。これは、Oracle または MSSQL のいずれかです。
Windows 認証	データベースタイプとして MSSQL を選択した場合、MSSQL に対する Windows 認証を有効化するオプションがあります。つまり、ユーザーはデータベースをホスティングする Windows システムと同じ資格情報を SQL Server へのアクセスで使用できます。
ユーザー名	HPOM データベースユーザーの名前。[Windows 認証] オプションを選択した場合、このフィールドは無効になります。
パスワード	HPOM データベースユーザーのパスワード。[Windows 認証] オプションを選択した場合、このフィールドは無効になります。
収集ステーション	ローカルであるか、またはリモートシステムにインストールされているかを指定します。

データベースのホスト名、ポート番号、および SID に関する詳細は、HPOM データベース管理者にお問い合わせください。

8 [**OK**] をクリックします。

9 [**接続テスト**] をクリックし、接続をテストします。

10 [**保存**] をクリックして変更を保存します。[正常に保存しました] メッセージが [情報] メッセージパネルに表示されます。

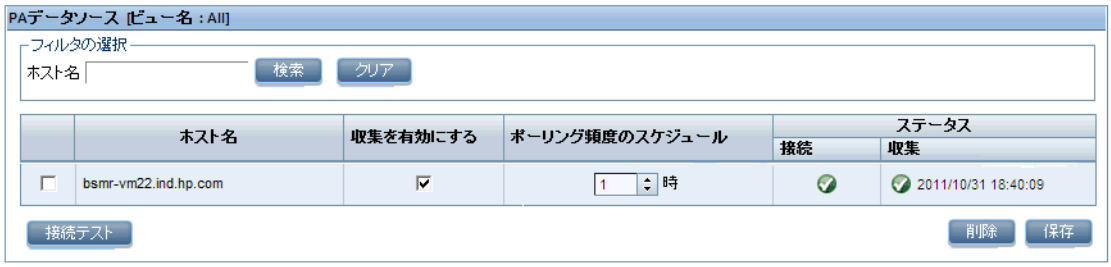
HPOM データソース接続の設定に関する詳細については、『HP Service Health Reporter 管理者オンラインヘルプ』のトピック「HPOM データ収集の管理」を参照してください。

HP Performance Agent データソースの設定

HPOM デプロイメントシナリオでは、HP Performance Agent の新規データソース接続を作成する必要はありません。デフォルトでは、トポロジ情報の収集時に、HP Performance Agent がインストールされているすべてのノードが自動的に検出されるからです。そのような HP Performance Agentデータソースまたはノードは、管理コンソールのPAデータソースページに一覧表示されます。

HP Performance Agent データソースのリストを表示するには、次の手順を実行します。

1 管理コンソールで、[**収集設定**] → [**HP Operations Agent**] をクリックします。PA データソースページが開きます。



2 HP Performance Agent データソースの詳細を表示するには、PA データソースのサマリーテーブル内のビュー名または番号をクリックします。PA データソースの詳細テーブルが開きます。

3 1 つ以上のホストのデータ収集スケジュールを変更するには、[**ポーリング頻度のスケジュール**] 列の [**時間**] ボックスに 1 ～ 24 時間のポーリング時間を指定します。

4 [**保存**] をクリックして変更を保存します。[正常に保存しました] メッセージが [情報] メッセージパネルに表示されます。

5 管理コンソールを閉じます。

HP Performance Agent データソース接続の設定に関する詳細は、『HP Service Health Reporter 管理者オンラインヘルプ』のトピック「PA データソースのデータ収集の管理」を参照してください。

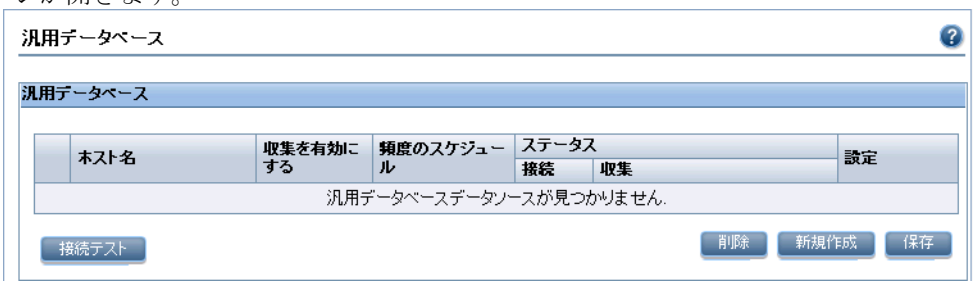
ネットワークデータソース接続の設定

Network コンテンツパックをインストールしたら、NNMi からネットワーク関連のデータを収集するように SHR を設定する必要があります。NNMi は、ネットワークパフォーマンスデータのリポジトリとして Network Performance Server (NPS) を使用します。管理コンソールの [汎用

データベース] ページを使用して、NPS から必要なデータを収集するように SHR を設定します。このページでは、データベースシステムとして Sybase、Oracle、または SQL Server を使用する汎用データベースへの接続を設定することもできます。

NPS データソース接続を設定するには、次の手順を実行します。

1 管理コンソールで、[**収集設定**] → [**汎用データベース**] をクリックします。[汎用データベース] ページが開きます。



2 [**新規作成**] をクリックし、NPS データソース接続を作成します。[接続パラメータ] ダイアログボックスが開きます。

3 [**接続パラメータ**] ダイアログボックスで、次の値を指定または入力します。

ホスト名	-	NPS データベースサーバーのアドレス (IP または FQDN)。
ポート	-	NPS データベースサーバーを照合するためのポート番号。
タイムゾーン	-	データベースインスタンスが設定されるタイムゾーン。
データベースタイプ	-	NPS データベースを作成するために使用されるデータベースエンジンのタイプ。
ドメイン	-	選択したデータベースタイプからSHR/リモートコレクターにデータを収集させるドメインを選択します。
URL	-	データベースインスタンスの URL。
ユーザー名	-	NPS データベースユーザーの名前。
パスワード	-	NPS データベースユーザーのパスワード。
収集ステーション	-	ローカルまたはリモートシステムのいずれかであるかを指定します。

[**ドメイン**] は、NetworkPerf_ETL_PerfiSPI9.10 または NetworkPerf_ETL_PerfSPI9.20 コンテンツパックをインストールした後にのみ表示されます。コンテンツパックのバージョンは、現在の環境にインストールされている **HP Network Node Manager iSPI Performance for Metrics ソフトウェア**のバージョンに依存します。

4 [**OK**] をクリックします。

5 [**接続テスト**] をクリックし、接続をテストします。

6 [**保存**] をクリックして変更を保存します。[正常に保存しました] メッセージが [情報] メッセージパネルに表示されます。

7 1 つ以上のホストのデータ収集スケジュールを変更するには、[**頻度のスケジュール**] 列で、[**時間**] ボックスに 1 ～ 24 時間の収集時間を指定します。

8 [**保存**] をクリックして変更を保存します。[正常に保存しました] メッセージが [情報] メッセージパネルに表示されます。

汎用データベース接続の変更

1 管理コンソールで、[**収集設定**] → [**汎用データベース**] をクリックします。[汎用データベース] ページが開きます。

2 [**設定**] をクリックします。[接続パラメータ] ダイアログボックスが開きます。

3 [接続パラメータ] ダイアログボックスで、次の値を入力します。

ホスト名	汎用データベースサーバーのアドレス (IP または名前)。
ポート	データベースサーバーを照会するためのポート番号。
タイムゾーン	データベースインスタンスが設定されるタイムゾーン。
データベースタイプ	汎用データベースを作成するために使用されるデータベースエンジンのタイプ。これは、Sybase IQ、Sybase ASE、Oracle、または MSSQL のいずれかです。
ドメイン	選択されたデータベースタイプからSHRがデータを収集するドメインを選択します。
URL	データベースインスタンスの URL。
ユーザー名	汎用データベースユーザーの名前。
パスワード	汎用データベースユーザーのパスワード。
収集ステーション	ローカルまたはリモートシステムのいずれかであるかを指定します。

4 [**OK**] をクリックします。

5 [**接続テスト**] をクリックし、接続をテストします。

6 [**保存**] をクリックして変更を保存します。[正常に保存しました] メッセージが [情報] メッセージパネルに表示されます。

新たに作成したすべてのデータソース接続に対するデータ収集は、デフォルトでは有効になります。ネットワークデータソース接続の設定に関する詳細については、『HP Service Health Reporter 管理者オンラインヘルプ』のトピック「汎用データベースからの収集の管理」を参照してください。

データ収集サービスの再起動

ネットワークデータソース接続を設定した場合、データ収集サービスを再起動する必要があります。データ収集サービスを再起動するには、次の手順を実行します。

1 管理者としてホストシステムにログオンします。

2 Click **Start Run.** [ファイル名を指定して実行] ダイアログボックスが開きます。

3 [**名前**] フィールドに `services.msc` と入力し、[**ENTER**] キーを押します。[サービス] ウィンドウが開きます。

4 [`HP PMDB Platform Collection`] を右クリックし、[**停止**] を選択してサービスを停止します。

5 これで収集サービスが停止されます。[サービス] ウィンドウを閉じます。

収集サービスを再起動するには、次の手順を実行します。

Windows の場合

1 管理者としてホストシステムにログオンします。

2 [**スタート**] → [**ファイル名を指定して実行**] をクリックします。[ファイル名を指定して実行] ダイアログボックスが開きます。

3 [**名前**] フィールドに `services.msc` と入力し、[**ENTER**] キーを押します。[サービス] ウィンドウが開きます。

4 [`HP PMDB Platform Collection`] を右クリックし、[**開始**] を選択してサービスを起動します。

5 収集サービスが起動されます。ウィンドウを閉じます。

Linux の場合

1 ルートとしてホストシステムにログオンします。

2 データ収集サービスを停止するには、プロンプトに次のコマンドを入力します。

```
service HP_PMDB_Platform_Collection stop
```

3 データ収集サービスを開始するには、プロンプトに次のコマンドを入力します。

```
service HP_PMDB_Platform_Collection start
```

VMware vCenter データソース接続の設定

VMware vCenter をデータ収集ソースとして設定し、HPOM デプロイメントシナリオで仮想化メトリックを収集できます。

次の手順を実行します。

1 管理コンソールで、[**収集設定**] → [**VMware vCenter**] をクリックします。[VMware vCenter データソース] ページが開きます。

2 [**新規作成**] をクリックし、接続をテストします。[**接続パラメータ**] ダイアログボックスが開きます。

3 [**接続パラメータ**] ダイアログボックスで、次の値を入力します。

ホスト名	VMware vCenterデータベースサーバーのIPアドレスまたは FQDN。
ユーザー名	VMware vCenter データベースユーザーの名前。
パスワード	VMware vCenter データベースユーザーのパスワード。
収集ステーション	ローカルまたはリモートシステムのいずれかであるかを指定します。

作成するそれぞれの VMware vCenter に対して、[新規作成] をクリックし、接続をテストします。[接続パラメータ] ダイアログボックスが開きます。ページ 101 を実行すれば、追加の VMware vCenter データソースを設定できます。

4 1 つ以上のホストの VMware vCenter データ収集スケジュールを変更するには、[**頻度のスケジュール**] 列で、[**分**] ボックスに 5 ～ 60 分の収集時間を指定します。

5 [**保存**] をクリックして変更を保存します。[正常に保存しました] メッセージが [情報] メッセージパネルに表示されます。

6 VMware vCenter サーバーで、ユーザーに次の権限を付与します。

— [**データストア**] 権限を [**データストアの参照**] に設定します。

— [**データストア**] 権限を [**低レベルのファイル操作**] に設定します。

— [**セッション**] 権限を [**セッションの確認**] に設定します。

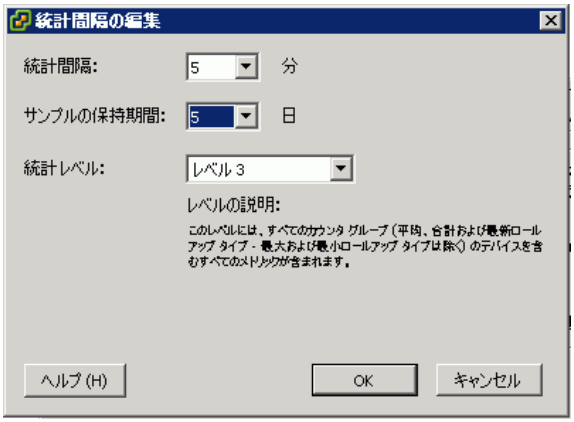
7 VMware vCenter サーバーで、統計値レベルを設定します。

a vSphere Client で、[**管理**] → [**vCenter Server 設定**] をクリックします。

b [vCenter Server 設定] ウィンドウで、[**統計情報**] をクリックします。[統計間隔] ページに、vCenter Server 統計値が保存されるまでの時間間隔、統計値が保存される期間、および統計値レベルが表示されます。

c [**編集**] をクリックします。

d [**統計間隔の編集**] ウィンドウで、ドロップダウンリストから [**統計間隔**] を選択します。[統計間隔の編集] ウィンドウに、選択した統計値レベルで収集される統計値のタイプが表示されます。最小統計値レベルを「2」に設定する必要があります。



VMware vCenter データソース接続の変更

1 管理コンソールで、[**収集設定**] → [**VMware vCenter**] をクリックします。VMware vCenter ページが開きます。

2 [**設定**] をクリックします。[**接続パラメータ**] ダイアログボックスが開きます。

3 [**接続パラメータ**] ダイアログボックスで、次の値を入力します。

ホスト名	VMware vCenterデータベースサーバーのIPアドレスまたは FQDN。
ユーザー名	VMware vCenter データベースユーザーの名前。
パスワード	VMware vCenter データベースユーザーのパスワード。
収集ステーション	ローカルまたはリモートシステムのいずれかであるかを指定します。

4 [**OK**] をクリックします。

5 [**接続テスト**] をクリックし、接続をテストします。

6 [**保存**] をクリックして変更を保存します。[正常に保存しました] メッセージが [情報] メッセージパネルに表示されます。

7 1 つ以上のホストのデータ収集スケジュールを変更するには、[**頻度のスケジュール**] 列で、[**分**] ボックスに 5 ～ 60 分の収集時間を指定します。

8 [**収集を有効にする**] 列のチェックボックスをオンにして、データ収集を有効にします。データ収集を停止するには、チェックボックスをオフにします。

9 [**保存**] をクリックして変更を保存します。[正常に保存しました] メッセージが [情報] メッセージパネルに表示されます。

➤ コンテンツパックのインストールが完了し、データ収集のために SHR を設定し終わったら、データ保管テーブル内のデータを表示できるまでに少なくとも 3 時間待機する必要があります。

SHR は、HPOM 管理対象環境内の設定済みのさまざまなデータソースからの履歴データの収集を開始し、必要なレポートを作成します。レポートの表示方法の詳細については、『HP Service Health Reporter ユーザーオンラインヘルプ』を参照してください。

BSM Service and Operations Bridge デプロイメントシナリオの場合のデータ収集

以下のデータコレクターを SHR 内で設定する必要があります。

- プロファイルデータベースおよび管理データベースの履歴合成トランザクションモニタリングデータおよびリアルユーザーモニタリングデータを収集するデータベースコレクター。これはまた、プロファイルデータベース、管理データベース、HPOM データベース、および HP OMi データベースなどのデータソースのデータベースからイベント、メッセージ、可用性、およびパフォーマンスの主要パフォーマンス指標 (KPI) も収集します。
- システムパフォーマンスメトリックと、アプリケーション、データベース、およびシステムリソースに関連したデータを収集する HP Performance Agent コレクター。データは、管理対象ノードにインストールされている HP Performance Agent によって収集されます。

エンタープライズアプリケーションデータソースの設定

管理コンソールを使用して、インストールした各種コンテンツパックに対して SHR がデータ収集先のデータソースを設定します。

プロファイルデータベースのデータソース接続の設定

HP BSM のデプロイメントでは、すべてのデータを 1 つのデータで保管しきれない場合にスケーリングの目的で複数のプロファイルデータベースを設定する場合があります。複数のプロファイルデータベースで重要なデータと重要でないデータを保管しなければならない場合があります。環境内にデプロイされているさまざまなプロファイルデータベースに関する情報は、管理データベースに保管されます。

複数のプロファイルデータベース接続を設定するには、[ManagementDB / プロファイル DB] ページで管理データベースを設定する必要があります。管理データベースのデータソース接続が設定されると、デプロイされたプロファイルデータベースがすべて SHR によって検出され、[ManagementDB / プロファイル DB] ページにリスト表示されます。

次の手順を実行します。

1. 管理コンソールで、[**収集設定**] → [**ManagementDB / プロファイル DB**] をクリックします。[ManagementDB / プロファイル DB] ページが開きます。

2 [**Management Database**] の下の [**新規作成**] をクリックします。[接続パラメータ] ダイアログボックスが開きます。

3 [**接続パラメータ**] ダイアログボックスに次の値を入力します。

ホスト名		管理データベースサーバーの名前。[Oracle RAC の管理 DB] が選択されている場合、または [Oracle RAC の管理 DB] と [Oracle RAC のプロファイル DB] の両方が選択されている場合、ホスト名は表示されません。
ポート	-	管理データベースサーバーに照会するためのポート番号。[Oracle RAC の管理 DB] が選択されている場合、ポート番号は表示されません。
データベースインスタンス	-	管理データベースインスタンスのシステム識別子 (SID)。[Oracle RAC の管理 DB] が選択されている場合、データベースインスタンスは表示されません。 データベースのホスト名、ポート番号、および SID に関する詳細は、データベース管理者にお問い合わせください。
データベースタイプ	-	管理データベースを作成するために使用されるデータベースエンジンのタイプ。これは、Oracle または MSSQL のいずれかです。
Windows 認証	-	データベースタイプとして MSSQL を選択した場合、MSSQL に対する Windows 認証を有効化するオプションがあります。つまり、ユーザーはデータベースをホスティングする Windows システムと同じ資格情報を SQL Server へのアクセスで使用できます。
Oracle RAC の管理 DB		このオプションは、データベースタイプとして [Oracle] を選択した場合のみ表示されます。[Oracle RAC の管理 DB] のみが選択されていて [Oracle RAC のプロファイル DB] は選択されていない場合、プロファイルデータベースの詳細が自動的に設定されます。
Oracle RAC のプロファイル DB		このオプションは、データベースタイプとして [Oracle] を選択した場合のみ表示されます。このオプションが選択されている場合にのみプロファイルデータベースのパラメーターを設定します。SHR の管理コンソールの [プロファイル DB] ページから手動でプロファイル DB を設定する必要があります。
データベース名	-	データベースの名前。このフィールドは、データベースタイプとして MSSQL を選択した場合のみ表示されます。

Service Name		このオプションは、[Oracle RAC の管理 DB] が選択されている場合にのみ表示されます。
ユーザー名	-	管理データベースユーザーの名前。これは、管理データベースのセットアップ時に BSM 設定ウィザードで指定したものです。 [Windows 認証] オプションを選択した場合、このフィールドは無効になって空になります。
パスワード	-	管理データベースユーザーのパスワード。これは、管理データベースのセットアップ時に BSM 設定ウィザードで指定したものです。 [Windows 認証] オプションを選択した場合、このフィールドは無効になって空になります。

ユーザーが [Oracle RAC の管理 DB] を選択した場合、または [Oracle RAC の管理 DB] と [Oracle RAC のプロファイル DB] の両方を選択した場合、[**ホスト名**] の代わりに [**Service Name**] が表示されます。

4 [**OK**] をクリックします。

作成できる管理データベースデータソース接続は 1 つのみです。接続が作成された後、デフォルトでは [**新規作成**] ボタンは無効になります。この設定は 1 回限りの設定なので、正しい値を入力したことを確認してください。

5 [**接続テスト**] をクリックし、接続をテストします。

6 [**保存**] をクリックして、このページで行った変更を保存します。[正常に保存しました] メッセージが [情報] メッセージペインに表示されます。

新たに作成した管理データベース接続を保存した後、SHR (ローカルコレクターまたはリモートコレクター) では、プロファイルデータベース情報が管理データベースのデータソースから取り出され、ページの [プロファイルデータベース] セクションの下に既存のすべてのプロファイルデータベースのデータソースがリストされます。

プロファイルデータベースのデータソースに対するデータ収集はデフォルトで有効になっています。さらに、収集の頻度は 1 時間ごとにスケジュールされています。

リモートコレクターの場合、ページの [プロファイルデータベース] セクションにある [**データベースタイプ**] ドロップダウンボックスから収集ステーションが選択されている必要があります。

プロファイルデータベースのデータソース接続の設定に関する詳細については、『HP Service Health Reporter 管理者オンラインヘルプ』のトピック「ManagementDB / プロファイル DB データ収集の管理」を参照してください。

サービス状況 CI に対する KPI データ収集の有効化

KPI は、CI のパフォーマンスと可用性の詳細インジケーターです。ビジネスサービス、ビジネスアプリケーション、ビジネスプロセス、およびホストなどの特定の論理サービス状況 CI に属する KPI データは、デフォルトではプロファイルデータベースにログ記録されます。SHR はそのデータをレポート用にデータベースから収集します。

ただし、その他の CI タイプの KPI データは、プロファイルデータベースに自動的にログ記録されません。そのような CI タイプの KPI データをログ記録するには、HP BSM において CI を設定する必要があります。詳細は、『HP Business Service Management - サービス状況の使用』ガイドの 363 ページの「永続データおよび履歴データ」セクションを参照してください。このガイドは、Application Performance Management (BAC) 製品として、下記の URL に用意されています。

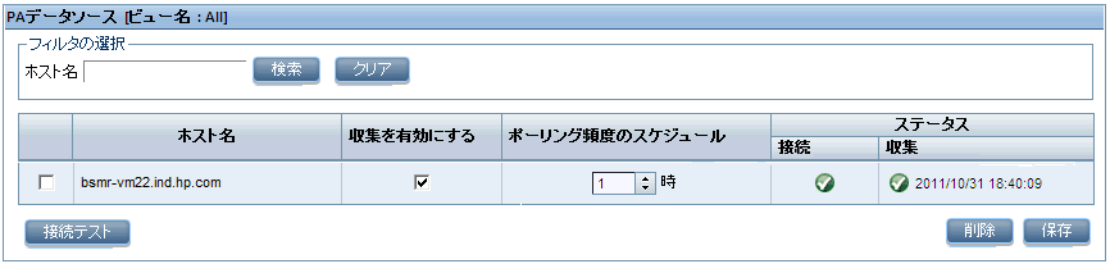
http://support.openview.hp.com/selfsolve/manuals

HP Performance Agent のデータソース接続の設定

RTSM デプロイメントシナリオでは、HP Performance Agent の新規データソース接続を作成する必要はありません。デフォルトでは、トポロジ情報の収集時に、HP Performance Agent がインストールされているすべてのノードが自動的に検出されるからです。そのような HP Performance Agentデータソースまたはノードは、管理コンソールのPAデータソースページに一覧表示されます。

HP Performance Agent データソースのリストを表示するには、次の手順を実行します。

1 管理コンソールで、[**収集設定**] **PA データソース**をクリックします。PA データソースページが開きます。



2 HP Performance Agent データソースの詳細を表示するには、PA データソースのサマリーテーブル内のビュー名または番号をクリックします。PA データソースの詳細テーブルが開きます。

3 1 つ以上のホストのデータ収集スケジュールを変更するには、[**ポーリング頻度のスケジュール**] 列の [**時間**] ボックスに 1 ～ 24 時間のポーリング時間を指定します。

4 [**保存**] をクリックして変更を保存します。[正常に保存しました] メッセージが [情報] メッセージパネルに表示されます。

HP Performance Agent データソース接続の設定に関する詳細は、『HP Service Health Reporter 管理者オンラインヘルプ』のトピック「PA データソースのデータ収集の管理」を参照してください。

HPOM データベース接続の設定

HPOM コンテンツパックをインストールした場合、以下の手順を実行します。

1 管理コンソールで、[**収集設定**] → [**Operations Manager**] をクリックします。[Operations Manager] ページが開きます。

2 [**新規作成**] をクリックし、新規データソース接続を作成します。[接続パラメータ] ダイアログボックスが開きます。

3 [**接続パラメータ**] ダイアログボックスで、次の値を入力します。

認証にデータベースの方法を使用してHPOMデータベースサーバーに接続している場合は、「openview」データベースの SELECT 権限と CONNECT 権限を持つユーザーの詳細をここで指定する必要があります。

ホスト名	-	HPOM データベースサーバーの IP アドレスまたは FQDN。
ポート	-	HPOM データベースサーバーに照会するためのポート番号。 SQL Server がデータベースタイプの場合のデフォルトポートは 1433、Oracle がデータベースタイプの場合は 1521 です。 ポート番号のチェックの詳細については、HPOM サーバーのポート番号のチェック ページ 82 を参照してください。
データベースインスタンス	-	HPOM データベースインスタンスのシステム識別子 (SID)。デフォルトのデータベースインスタンスは OVOPS です。
データベースタイプ	-	HPOM データベースを作成するために使用されるデータベースエンジンのタイプ。これは、Oracle または MSSQL のいずれかです。名前は openview です。
Windows 認証	-	データベースタイプとして MSSQL を選択した場合、MSSQL に対する Windows 認証を有効化するオプションがあります。つまりユーザーは、データベースをホスティングする Windows システムと同じ資格情報を SQL Server へのアクセスで使用できます。
ユーザー名	-	HPOM データベースユーザーの名前。[Windows 認証] オプションを選択した場合、このフィールドは無効になって空になります。
パスワード	-	HPOM データベースユーザーのパスワード。[Windows 認証] オプションを選択した場合、このフィールドは無効になって空になります。
収集ステーション	-	ローカルまたはリモートシステムのいずれかであるかを指定します。

4 [**OK**] をクリックします。

5 [**接続テスト**] をクリックし、接続をテストします。

6 [**保存**] をクリックして変更を保存します。[正常に保存しました] メッセージが [情報] メッセージパネルに表示されます。

[新規作成] をクリックし、新規データソース接続を作成します。[接続パラメータ] ダイアログボックスが開きます。ページ 108 の手順を実行すれば、追加の HPOM データソースを設定できます。特定のデータソース接続を変更するには、[**設定**] をクリックします。

7 1 つ以上のホストの HPOM データ収集スケジュールを変更するには、[**頻度のスケジュール**] 列で、[**時間**] ボックスに 1 ～ 24 時間の収集時間を指定します。

8 [**保存**] をクリックして変更を保存します。[正常に保存しました] メッセージが [情報] メッセージパネルに表示されます。

既存の HPOM データソース接続を変更するには、HPOM データソース接続の変更 ページ 97 を参照してください。

HPOM データソース接続の設定に関する詳細については、『HP Service Health Reporter 管理者オンラインヘルプ』のトピック「HPOM データ収集の管理」を参照してください。

HP OMi データベース接続の設定

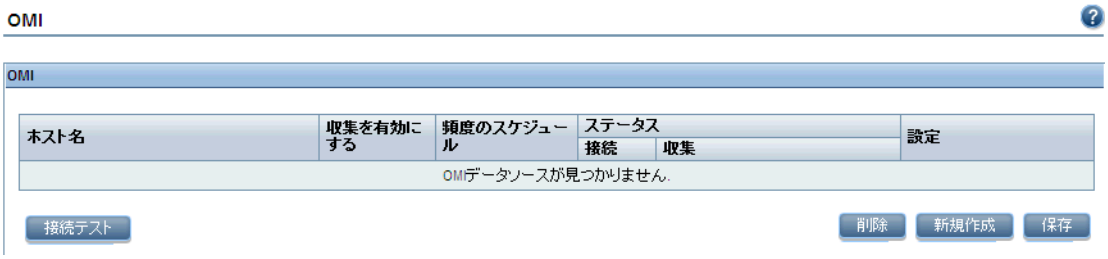
HP OMi コンテンツパックをインストールする場合、データ収集用の HP OMi データベース接続を設定する必要があります。

新規の HP OMi データソース接続を作成する場合は、その前に、管理データベース用のデータソース接続が [管理 DB/ プロファイル DB] ページに存在することを確認してください。このデータ接続は、管理データベースに保管される HP OMi 用の割り当て済みユーザー / グループの情報を取り出すのに必要です。

環境内に 1 つ以上の OMi セットアップがある場合は、トポロジソースとして設定された HP BSM RTSM に属する OMi データソースを設定する必要があります。

HP OMi データソース接続を設定するには、次の手順を実行します。

1 管理コンソールで、[**収集設定**] → [**OMI**] をクリックします。[OMI] ページが開きます。



2 [**新規作成**] をクリックし、新規 HP OMi データソース接続を作成します。[接続パラメータ] ダイアログボックスが開きます。

3 [**接続パラメータ**] ダイアログボックスで、次の値を指定または入力します。

ホスト名	-	HP OMi データベースサーバーのアドレス (IP または FQDN)。
ポート	-	HP OMi データベースサーバーに照会するためのポート番号。
データベースインスタンス	-	HP OMi データベースインスタンスのシステム識別子 (SID)。 データベースのホスト名、ポート番号、および SID に関する詳細は、HP OMi データベース管理者にお問い合わせください。
データベースタイプ	-	HP OMi データベースを作成するために使用されるデータベースエンジンのタイプ。これは、Oracle または MSSQL のいずれかです。

ホスト名	-	HP OMi データベースサーバーのアドレス (IP または FQDN)。
Windows 認証	-	データベースタイプとして MSSQL を選択した場合、MSSQL に対する Windows 認証を有効化するオプションがあります。つまりユーザーは、データベースをホスティングする Windows システムと同じ資格情報を SQL Server へのアクセスで使用できます。
データベース名	-	データベースの名前。このフィールドは、データベースタイプとして MSSQL を選択した場合のみ表示されます。
ユーザー名	-	HP OMi データベースユーザーの名前。[Windows 認証] オプションを選択した場合、このフィールドは無効になって空になります。
パスワード	-	HP OMi データベースユーザーのパスワード。[Windows 認証] オプションを選択した場合、このフィールドは無効になって空になります。
収集ステーション	-	ローカルまたはリモートシステムのいずれかであるかを指定します。

4 [**OK**] をクリックします。

作成できる HP OMi データソース接続は 1 つのみです。接続が作成された後、デフォルトでは [**新規作成**] ボタンは無効になります。正しい値を入力したことを確認してください。

5 [**接続テスト**] をクリックし、接続をテストします。

6 [**保存**] をクリックして変更を保存します。[正常に保存しました] メッセージが [情報] メッセージパネルに表示されます。

7 1 つ以上のホストの HP OMi データ収集スケジュールを変更するには、[**頻度のスケジュール**] 列で、[**時間**] ボックスに 1 ～ 24 時間の収集時間を指定します。

8 [**保存**] をクリックして変更を保存します。[正常に保存しました] メッセージが [情報] メッセージパネルに表示されます。

HP OMi データソース接続の変更

1 **管理コンソール**で、[**収集設定**] [**OMI**] をクリックします。[OMI] ページが開きます。

2 特定のホストについて、[**設定**] をクリックします。[**接続パラメータ**] ダイアログボックスが表示されます。

3 [**接続パラメータ**] ダイアログボックスで、次の値を入力します。

ホスト名	HP OMi データベースサーバーのアドレス (IP または名前)。
ポート	HP OMi データベースサーバーに照会するためのポート番号。
データベースタイプ	HP OMi データベースを作成するために使用されるデータベースエンジンのタイプ。これは、Oracle または MSSQL のいずれかです。
データベースインスタンス	HP OMi データベースインスタンスのシステム識別子 (SID)。

ホスト名	HP OMi データベースサーバーのアドレス (IP または名前)。
Windows 認証	データベースタイプとして MSSQL を選択した場合、MSSQL に対する Windows 認証を有効化するオプションがあります。つまり、ユーザーはデータベースをホスティングするWindowsシステムと同じ資格情報を SQL Server へのアクセスで使用できます。
データベース名	データベースの名前。このフィールドは、データベースタイプとして MSSQL を選択した場合にのみ表示されます。
ユーザー名	HP OMi データベースユーザーの名前。[Windows 認証] オプションを選択した場合、このフィールドは無効になります。
パスワード	HP OMi データベースユーザーのパスワード。[Windows 認証] オプションを選択した場合、このフィールドは無効になります。
収集ステーション	ローカルまたはリモートシステムのいずれかであるかを指定します。

データベースのホスト名、ポート番号、および SID に関する詳細については、HP OMi データベース管理者にお問い合わせください。

4 [**OK**] をクリックします。

5 [**接続テスト**] をクリックし、接続をテストします。

6 [**保存**] をクリックして変更を保存します。[正常に保存しました] メッセージが [情報] メッセージパネルに表示されます。

7 1 つ以上のホストの HP OMi データ収集スケジュールを変更するには、[**頻度のスケジュール**] 列で、[**時間**] ボックスに 1 ～ 24 時間の収集時間を指定します。

8 [**保存**] をクリックして変更を保存します。[正常に保存しました] メッセージが [情報] メッセージパネルに表示されます。

新たに作成したすべてのデータソース接続に対するデータ収集は、デフォルトでは有効になります。HP OMi データソース接続の設定に関する詳細については、『HP Service Health Reporter 管理者オンラインヘルプ』のトピック「HP OMi データ収集の管理」を参照してください。

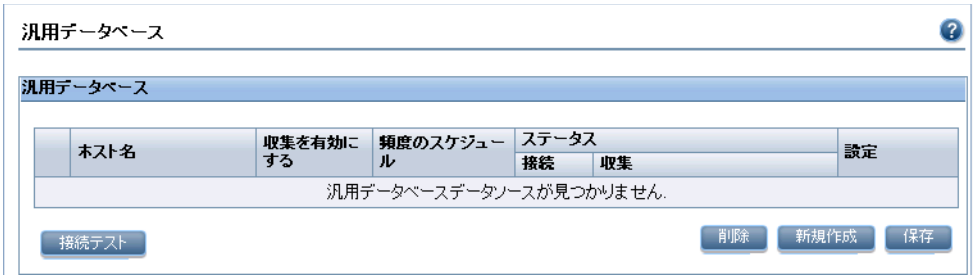
SHR は、設定済みのさまざまなデータソースからの履歴データの収集を開始し、必要なレポートを作成します。レポートの表示方法の詳細については、『HP Service Health Reporter ユーザーオンラインヘルプ』を参照してください。

ネットワークデータソース接続の設定

Network コンテンツパックをインストールしたら、NNMi からネットワーク関連のデータを収集するように SHR (ローカルデータコレクター) またはリモートコレクターを設定する必要があります。NNMi は、ネットワークパフォーマンスデータのリポジトリとして NPS を使用します。管理コンソールの [汎用データベース] ページを使用して、NPS から必要なデータを収集するように SHR を設定します。このページでは、データベースシステムとして Sybase、Oracle、または SQL Server を使用する汎用データベースへの接続を設定することもできます。

NPS データソース接続を設定するには、次の手順を実行します。

1 管理コンソールで、[**収集設定**] → [**汎用データベース**] をクリックします。[汎用データベース] ページが開きます。



2 [**新規作成**] をクリックし、NPS データソース接続を作成します。[接続パラメータ] ダイアログボックスが開きます。

3 [**接続パラメータ**] ダイアログボックスで、次の値を指定または入力します。

ホスト名	-	NPS データベースサーバーのアドレス (IP または FQDN)。
ポート	-	NPS データベースサーバーを照合するためのポート番号。
タイムゾーン	-	データベースインスタンスが設定されるタイムゾーン。
データベースタイプ	-	NPS データベースを作成するために使用されるデータベースエンジンのタイプ。
ドメイン	-	選択されたデータベースタイプから SHR がデータを収集するドメインを選択します。
URL	-	データベースインスタンスの URL。
ユーザー名	-	NPS データベースユーザーの名前。
パスワード	-	NPS データベースユーザーのパスワード。
収集ステーション	-	ローカルまたはリモートシステムのいずれかであるかを指定します。

[**ドメイン**] は、NetworkPerf_ETL_PerfiSPI9.10 または NetworkPerf_ETL_PerfSPI9.20 コンテンツパックをインストールした後にのみ表示されます。コンテンツパックのバージョンは、現在の環境にインストールされている **HP Network Node Manager iSPI Performance for Metrics ソフトウェア**のバージョンに依存します。

4 [**OK**] をクリックします。

5 [**接続テスト**] をクリックし、接続をテストします。

6 [**保存**] をクリックして変更を保存します。[正常に保存しました] メッセージが [情報] メッセージパネルに表示されます。

7 1 つ以上のホストのデータ収集スケジュールを変更するには、[**頻度のスケジュール**] 列で、[**時間**] ボックスに 1 ～ 24 時間の収集時間を指定します。

8 [**保存**] をクリックして変更を保存します。[正常に保存しました] メッセージが [情報] メッセージパネルに表示されます。

新たに作成したすべてのデータソース接続に対するデータ収集は、デフォルトでは有効になります。ネットワークデータソース接続の設定に関する詳細については、『HP Service Health Reporter 管理者オンラインヘルプ』のトピック「汎用データベースからの収集の管理」を参照してください。

汎用データベース接続の変更

1 管理コンソールで、[**収集設定**] → [**汎用データベース**] をクリックします。[汎用データベース] ページが開きます。

2 [**設定**] をクリックします。[接続パラメータ] ダイアログボックスが開きます。

3 [接続パラメータ] ダイアログボックスで、次の値を入力します。

ホスト名	汎用データベースサーバーのアドレス (IP または名前)。
ポート	データベースサーバーを照会するためのポート番号。
タイムゾーン	データベースインスタンスが設定されるタイムゾーン。
データベースタイプ	汎用データベースを作成するために使用されるデータベースエンジンのタイプ。これは、Sybase IQ、Sybase ASE、Oracle、または MSSQL のいずれかです。
ドメイン	選択されたデータベースタイプから SHR がデータを収集するドメインを選択します。
URL	データベースインスタンスの URL。
ユーザー名	汎用データベースユーザーの名前。
パスワード	汎用データベースユーザーのパスワード。
収集ステーション	ローカルまたはリモートシステムのいずれかであるかを指定します。

4 [**OK**] をクリックします。

5 [**接続テスト**] をクリックし、接続をテストします。

6 [**保存**] をクリックして変更を保存します。[正常に保存しました] メッセージが [情報] メッセージパネルに表示されます。

データ収集サービスの再起動

ネットワークデータソース接続を設定した場合、データ収集サービスを再起動する必要があります。データ収集サービスを再起動するには、次の手順を実行します。

1 管理者としてホストシステムにログオンします。

2 [**スタート**] → [**ファイル名を指定して実行]** をクリックします。[ファイル名を指定して実行] ダイアログボックスが開きます。

3 [**名前**] フィールドに `services.msc` と入力し、[**ENTER**] キーを押します。[サービス] ウィンドウが開きます。

4 [`HP PMDB Platform Collection`] を右クリックし、[**停止**] を選択してサービスを停止します。

5 これで収集サービスが停止されます。[サービス] ウィンドウを閉じます。

収集サービスを再起動するには、次の手順を実行します。

1 管理者としてホストシステムにログオンします。

2 [**スタート**] → [**ファイル名を指定して実行]** をクリックします。[ファイル名を指定して実行] ダイアログボックスが開きます。

3 [**名前**] フィールドに `services.msc` と入力し、[**ENTER**] キーを押します。[サービス] ウィンドウが開きます。

4 [HP PMDB Platform Collection] を右クリックし、[**開始**] を選択してサービスを起動します。

5 収集サービスが起動されます。ウィンドウを閉じます。

Linux の場合

プロンプトに次のコマンドを入力し、[ENTER] キーを押します。

```
service HP_PMDB_Platform_Collection restart
```

VMware vCenter データソース接続の設定

VMware vCenter をデータ収集ソースとして設定し、RTSM がトポロジソースの場合の仮想化メトリックを収集できます。

VMware vCenter データソース接続を設定するには、次の手順を実行します。

1 管理コンソールで、[**収集設定**] → [**VMware vCenter**] をクリックします。[VMware vCenter データソース] ページが開きます。

2 [**新規作成**] をクリックし、接続をテストします。[**接続パラメータ**] ダイアログボックスが開きます。

3 [**接続パラメータ**] ダイアログボックスで、次の値を入力します。

ホスト名	VMware vCenterデータベースサーバーのIPアドレスまたは FQDN。
ユーザー名	VMware vCenter データベースユーザーの名前。
パスワード	VMware vCenter データベースユーザーのパスワード。
収集ステーション	ローカルまたはリモートシステムのいずれかであるかを指定します。

[新規作成] をクリックし、新規データソース接続を作成します。[接続パラメータ] ダイアログボックスが開きます。ページ 108 を実行すれば、追加の VMware vCenter データソースを設定できます。

4 1 つ以上のホストの VMware vCenter データ収集スケジュールを変更するには、[**頻度のスケジュール**] 列で、[**分**] ボックスに 5 ～ 60 分の収集時間を指定します。

5 [**保存**] をクリックして変更を保存します。[正常に保存しました] メッセージが [情報] メッセージパネルに表示されます。

6 VMware vCenter サーバーで、ユーザーに次の権限を付与します。

— [**データストア**] 権限を [**データストアの参照**] に設定します。

— [**データストア**] 権限を [**低レベルのファイル操作**] に設定します。

— [**セッション**] 権限を [**セッションの確認**] に設定します。

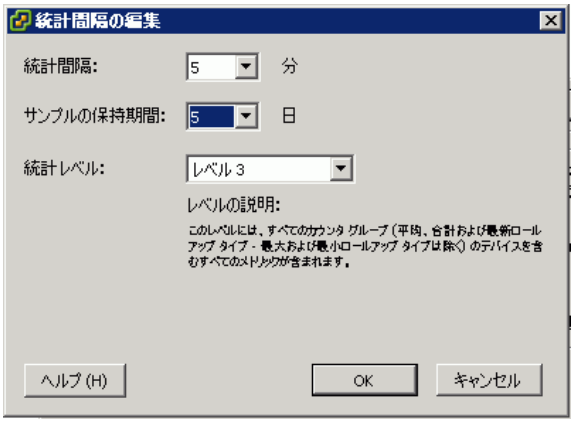
7 VMware vCenter サーバーで、統計値レベルを設定します。

a vSphere Client で、[**管理**] → [**vCenter Server 設定**] をクリックします。

b [vCenter Server 設定] ウィンドウで、[**統計情報**] をクリックします。[統計間隔] ページに、vCenter Server 統計値が保存されるまでの時間間隔、統計値が保存される期間、および統計値レベルが表示されます。

c [**編集**] をクリックします。

d [**統計間隔の編集**] ウィンドウで、ドロップダウンリストから [**統計レベル**] を選択します。[統計間隔の編集] ウィンドウに、選択した統計値レベルで収集される統計値のタイプが表示されます。最小統計値レベルを「2」に設定する必要があります。



VMware vCenter データソース接続の変更

1 管理コンソールで、[**収集設定**] → [**VMware vCenter**] をクリックします。[VMware vCenter] ページが開きます。

2 [**設定**] をクリックします。[**接続パラメータ**] ダイアログボックスが開きます。

3 [**接続パラメータ**] ダイアログボックスで、次の値を入力します。

ホスト名	VMware vCenter データベースサーバーの IP アドレスまたは FQDN。
ユーザー名	VMware vCenter データベースユーザーの名前。
パスワード	VMware vCenter データベースユーザーのパスワード。
収集ステーション	ローカルであるか、またはリモートシステムにインストールされているかを指定します。

4 [**OK**] をクリックします。

5 [**接続テスト**] をクリックし、接続をテストします。

6 [**保存**] をクリックして変更を保存します。[正常に保存しました] メッセージが [情報] メッセージパネルに表示されます。

7 1 つ以上のホストのデータ収集スケジュールを変更するには、[**頻度のスケジュール**] 列で、[**分**] ボックスに 5 ～ 60 分の収集時間を指定します。

8 [**収集を有効にする**] 列のチェックボックスをオンにして、データ収集を有効にします。データ収集を停止するには、チェックボックスをオフにします。

9 [**保存**] をクリックして変更を保存します。[正常に保存しました] メッセージが [情報] メッセージパネルに表示されます。

RTSM デプロイメントシナリオで、コンテンツパックのインストールが完了し、データ収集のために SHR を設定し終わったら、データ保管テーブル内のデータを表示できるまでに少なくとも 3 時間待機する必要があります。

アプリケーションパフォーマンス管理デプロイメントシナリオの場合のデータ収集の設定

Application Performance Management 環境では、プロファイルデータベースおよび管理データベースの履歴合成トランザクションモニタリングデータおよびリアルユーザーモニタリングデータを収集するデータベースコレクターを設定する必要があります。システム関連データは、SiteScope サーバーまたは BSM プロファイルデータベース上で稼働する CODA エージェントから収集されます。

このデプロイメントシナリオでのSHRの設定のための作業は、若干の変更点はありますが、Service and Operations Bridge のデプロイメントシナリオの作業に似通っています。HP Performance Agent、HPOM、ネットワーク、および HP OMi データソース接続を管理コンソールで設定する必要はありません。

RUM データと BPM データを提供するために、複数のプロファイルデータベース接続を設定するには、プロファイルデータベースのデータソース接続の設定 ページ 104 を参照してください。

RTSM デプロイメントシナリオで、コンテンツパックのインストールが完了し、データ収集のために SHR を設定し終わったら、データ保管テーブル内のデータを表示できるまでに少なくとも 3 時間待機する必要があります。

SHR は、設定済みのさまざまなデータソースからの履歴データの収集を開始し、必要なレポートを作成します。レポートの表示方法の詳細については、『HP Service Health Reporter ユーザーオンラインヘルプ』を参照してください。

ファイアウォール環境内またはプロキシ経由の HP Performance Agent のデータ収集の設定

ネットワークのファイアウォールが存在する場合、そのファイアウォールを通して SHR と通信するように、HP Performance Agent を設定する必要があります。また、プロキシサーバーを介する HP Performance Agent データ収集を設定することもできます。

ファイアウォール環境内またはプロキシサーバー経由での SHR と HP Performance Agent 管理対象ノードの間の通信を設定する手順の詳細は、『Operations Manager Firewall Concepts and Configuration Guide』(英語版) を参照してください。このガイドは、以下の URL に用意されています。

http://support.openview.hp.com/selfsolve/manuals

セキュアモードでのデータ収集のための HP Performance Agent の設定

HP Performance Agent は、クライアントおよびサーバーアプリケーション間のデータアクセスに対して、HTTP 1.1 ベースの通信インタフェースをサポートします。ただし、セキュア (HTTPS) モードでのHP Performance Agent管理対象ノードからのデータ収集を設定することもできます。

HTTPS 通信の場合、エージェントは CODA 8.xx をサポートする必要があります。サポートされていない場合は、HTTP または DCE 方式が使用されます。HTTPS 通信は証明書をベースとするので、SHR システムおよび管理対象ノード上に証明書がインストールされていなければなりません。SHR システムは証明書クライアントとして稼働し、証明書サーバー (認証局) は HP 管理サーバーから提供されます。HTTPS 通信を確立するには、クライアント証明書を交換する必要があります。

HP Performance Agent システム上で、[coda] ネームスペースにおいて SSL_SECURITY オプションを [ALL] または [REMOTE] に設定すると、HTTP 通信は失敗します。HTTPS のみがサポートされます。

証明書をインストールする手順の詳細は、『HP Operations Manager for Windows Certificate Management in Environments with Multiple HP Software Products』ホワイトペーパー (英語版) を参照してください。その他の詳細は、『HP Operations Manager for Unix HTTPS Agent Concepts and Configuration Guide』(英語版) を参照してください。これらの資料は、以下の URL に用意されています。

http://support.openview.hp.com/selfsolve/manuals

HP OpenView Ctrl Service および HP PMDB Platform Collection Service の開始

HTTPS 通信の設定が完了したら、以下の手順を実行します。

1. SHR システムで、[**スタート**] → [**ファイル名を指定して実行**] をクリックします。[ファイル名を指定して実行] ダイアログボックスが開きます。
2. [**名前**] フィールドに `services.msc` と入力し、[**ENTER**] キーを押します。[サービス] ウィンドウが開きます。
3. 右側のペインで、[**HP OpenView Ctrl Service**] を右クリックしてから [**開始**] をクリックします。
4. [**HP_PMDB_Platform_Collection**] を右クリックし、[**再開**] をクリックします。
5. [サービス] ウィンドウを閉じます。

   Linux の場合

   プロンプトに次のコマンドを入力し、[ENTER] キーを押します。

   ```
   service HP_PMDB_Platform_Collection restart
   ```

レポートドリル機能設定の設定

SHR には、作成後のレポートを表示するための SAP BusinessObjects InfoView ポータルが備えられています。SAP BusinessObjects InfoView には、日単位、月単位、および年単位レベルで情報を表示するのに使用できるドリル機能が備えられています。ただし、レポート内をドリルアップまたはドリルダウンしても、指定したレベル関連のデータがレポート内のセクションに表示されないことがあります。レポートのブロックが、レポート内の [ドリル] オプション間で同期を喪失します。レポートに必ず正しいデータが表示されるようにするには、SAP BusinessObjects InfoView の [設定] の設定を設定しなおすことにより、同期を再確立する必要があります。

ドリル機能設定を設定するには、次の手順を実行します。

1. [**スタート**] → [**プログラム**] → [**HP Software**] → [**SH Reporter**] → [**Administration**] の順にクリックします。管理コンソールが開きます。
2. 管理コンソールで、[**管理**] → [**SAP BOBJ**] をクリックします。[SAP BOBJ] ページが開きます。
3. [**InfoView を起動**] をクリックして [SAP BusinessObjects InfoView] を開きます。BusinessObjects InfoView ログイン ページが開きます。

4 SAP BusinessObject InfoView のユーザー名とパスワードを [**ユーザー名**] および [**パスワード**] フィールドにそれぞれ入力します。

5 [**ログオン**] をクリックします。SAP BOBJ InfoView ポータルが開きます。

6 [**カスタマイズ**] の下の [**基本設定**] をクリックします。[基本設定] ページが開きます。

7 [**Web Intelligence**] をクリックします。

8 [**ドリル オプション**] の下の [**レポートのブロックのドリルを同期化**] オプションを選択します。

9 [**OK**] をクリックします。

10 Web ブラウザーを閉じます。

SHR 管理者アカウントのパスワードの作成

デフォルトの管理者ユーザー名のパスワードを作成する場合は、次の手順を実行します。

1 [**スタート**] → [**プログラム**] → [**HP Software**] → [**SH Reporter**] → [**Administration**] の順にクリックします。管理コンソールが開きます。

2 管理コンソールにログオンします。

3 管理コンソールで、[**管理**] → [**SAP BOBJ**] をクリックします。[SAP BOBJ] ページが開きます。

4 [SAP BOBJ] ページから SAP BOBJ 中央管理コンソール (CMC) にアクセスします。

5 CMC のログイン画面で、[**ユーザー名**] フィールドに、「`Administrator`」と入力します。

6 [**ログオン**] をクリックします。[CMC ホーム] 画面が開きます。

7 [**ユーザーとグループ**] をクリックします。[ユーザーとグループ] 画面が開きます。

8 右側のペインで、[**Administrators**] をダブルクリックします。

9 [**Administrator**] を右クリックし、[**プロパティ**] をクリックします。[Properties: Administrator] ダイアログボックスが開きます。

10 [**Enterprise パスワード設定**] の下にある [**パスワード**] フィールドに新しいパスワードを入力します。

11 [**確認**] フィールドにパスワードをもう一度入力します。必要な場合は、この画面で管理者ユーザー名を変更し、他の必要な詳細を指定することができます。

12 [**保存して閉じる**] をクリックして変更を受け入れます。

13 [**ログアウト**] をクリックして、中央管理コンソールを終了します。

Web サービスのログイン画面のプライバシー情報の表示

使用しているシステムのプライバシーポリシー情報を表示して管理コンソール Web サービスにアクセスする場合、`Privacy.html` ファイルを編集することにより、ログイン画面を手動でカスタマイズできます。ログイン画面をカスタマイズするには、次の手順を実行します。

1 SHR システムで、`%PMDB_HOME%¥adminServer¥webapps¥BSMRApp` を検索します。

2 `Privacy.html` ファイルを任意のテキストエディターで開きます。

3 ファイルに書かれている指示に従って、内容を編集します。このファイルでは、以下を行うことができます。

- ログイン画面のヘッダーメッセージを指定する。
- ログイン画面に表示する会社ロゴのイメージを指定する。ロゴイメージは `%PMDB_HOME%¥adminServer¥images` フォルダーに置かれていなければなりません。
- プライバシーメッセージを指定する。

4 ファイルを保存します。ログイン画面に、会社固有のプライバシー情報が表示されます。

VMware vCenter デプロイメントシナリオでのデータ収集の設定

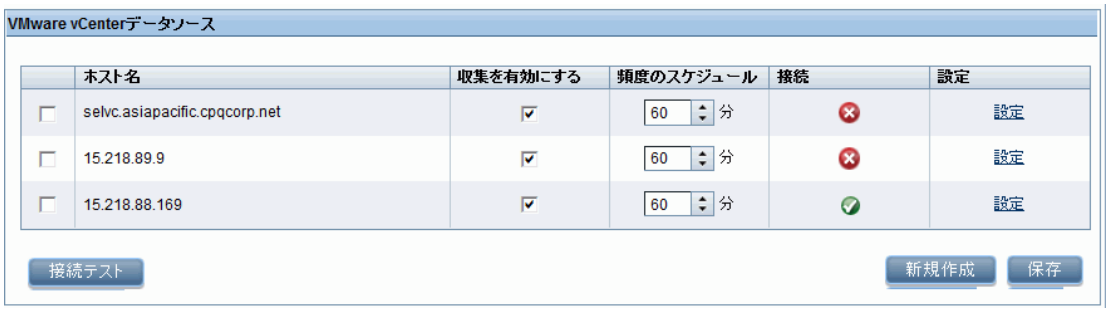
VMware vCenter 環境では、VMware vCenter データソースから仮想化メトリックを収集するには VMware vCenter データコレクターを設定する必要があります。

VMware vCenter データソース接続の設定

VMware vCenter デプロイメントシナリオでは、トポロジ収集用に設定した VMware vCenter ソースが SHR によって自動的にパフォーマンスデータの収集用に設定されます。

次の手順を実行します。

1 管理コンソールで、[**収集設定**] → [**VMware vCenter**] をクリックします。[VMware vCenter データソース] ページが開きます。



2 ホスト名の横のチェックボックスを選択してから、[**接続テスト**] をクリックして接続をテストします。

3 [**保存**] をクリックして変更を保存します。[正常に保存しました] メッセージが [情報] メッセージパネルに表示されます。

追加の VMware vCenter データソースを設定するには、[**新規作成**] ボタンをクリックします。

4 1 つ以上のホストの VMware vCenter データポーリングスケジュールを変更するには、[**頻度のスケジュール**] 列で、[**分**] ボックスに 5 ～ 60 分のポーリング時間を指定します。

5 [**保存**] をクリックして変更を保存します。[正常に保存しました] メッセージが [情報] メッセージパネルに表示されます。

6 VMware vCenter サーバーで、VMware vCenter ユーザーに次の権限を付与します。

— [**データストア**] 権限を [**データストアの参照**] に設定します。

— [**データストア**] 権限を [**低レベルのファイル操作**] に設定します。

— [**セッション**] 権限を [**セッションの確認**] に設定します。

7 VMware vCenter サーバーで、統計値レベルを設定します。

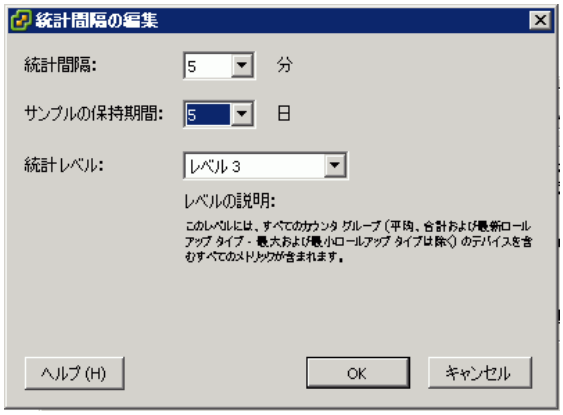
a vSphere Client で、[**管理**] → [**vCenter Server 設定**] をクリックします。

b [vCenter Server 設定] ウィンドウで、[**統計情報**] をクリックします。[統計間隔] ページに、vCenter Server 統計値が保存されるまでの時間間隔、統計値が保存される期間、および統計値レベルが表示されます。

c [**編集**] をクリックします。

d [統計間隔の編集] ウィンドウで、ドロップダウンリストから [**統計間隔**] を選択します。[統計間隔の編集] ウィンドウに、選択した統計値レベルで収集される統計値のタイプが表示されます。

最小統計間隔を 5 分に設定します。



トポロジ収集に複数の VMware vCenter が使用されている場合、作成する各 VMware vCenter 接続で次の 120 ページのステップ 2 の一連の手順を繰り返します。

VMware vCenter データソース接続の変更

1 管理コンソールで、[**収集設定**] → [**VMware vCenter**] をクリックします。[VMware vCenter] ページが開きます。

2 [**設定**] をクリックします。[**接続パラメータ**] ダイアログボックスが開きます。

3 [**接続パラメータ**] ダイアログボックスで、次の値を入力します。

ホスト名	VMware vCenter サーバーの IP アドレスまたは FQDN。
ユーザー名	VMware vCenter サーバーへアクセスするための有効なユーザー名。
パスワード	VMware vCenter サーバーへアクセスするための有効なパスワード。
収集ステーション	ローカルであるか、またはリモートシステムにインストールされているかを指定します。

4 [**OK**] をクリックします。

5 [**接続テスト**] をクリックし、接続をテストします。

6 [**保存**] をクリックして変更を保存します。[正常に保存しました] メッセージが [情報] メッセージパネルに表示されます。

7 1 つ以上のホストのデータ収集スケジュールを変更するには、[**頻度のスケジュール**] 列で、[**分**] ボックスに 5 ～ 60 分の収集時間を指定します。

8 [**収集を有効にする**] 列のチェックボックスをオンにして、データ収集を有効にします。データ収集を停止するには、チェックボックスをオフにします。

9 [**保存**] をクリックして変更を保存します。[正常に保存しました] メッセージが [情報] メッセージパネルに表示されます。

8 インストールの検証

SHR ソフトウェアおよびコンテンツパックをインストールし、さまざまなデータソースからデータを収集するように SHR を構成した後、製品が正しく稼働することを検証できます。

この章は、インストールの正常完了を検証するために実行できる特定の検証タスクを取り上げています。SHR をインストールして構成した後、少なくとも 3 時間待ってから、次の検証タスクを実行します。

SHR サービスのチェック

SAP BOBJ および Sybase IQ サービスも含め、SHR サービスが稼働するかどうかをチェックする必要があります。

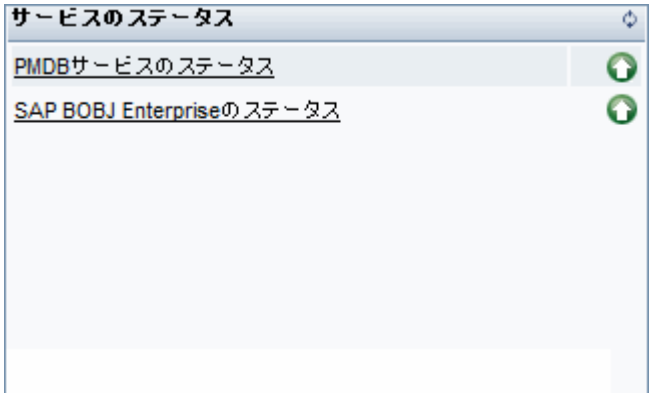
管理コンソールでサービスをチェックするには、次の手順を実行します。

1 [**スタート**] → [**プログラム**] → [**HP Software**] → [**SH Reporter**] → [**Administration**] の順にクリックします。管理コンソールが開きます。

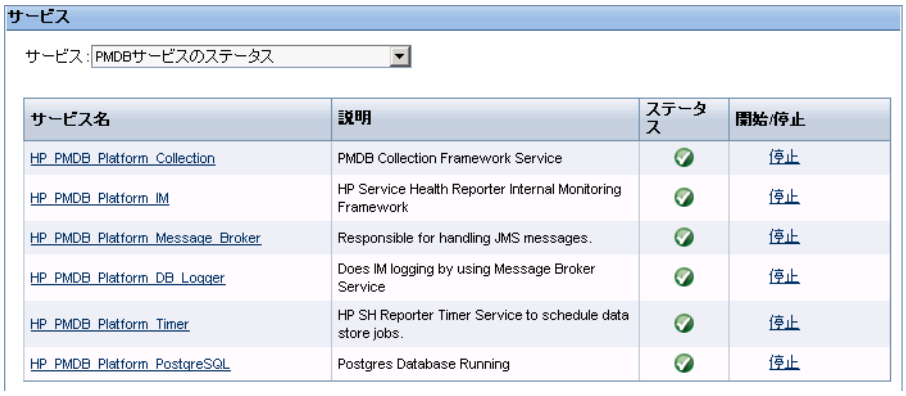
2 ログイン画面にユーザーの資格情報を入力し、[**ログイン**] をクリックします。SHR ホームページが開きます。

3 ホームページの [**サービスのステータス**] セクションで、SHR サービスと SAP BOBJ サービスのステータスを確認します。

アイコンは、サービスが稼働中であることを示します。



4 [**HP SH Reporter ステータス**] ハイパーリンクをクリックして、個々のサービスとそれぞれのステータスを表示します。[サービス] ページが開きます。



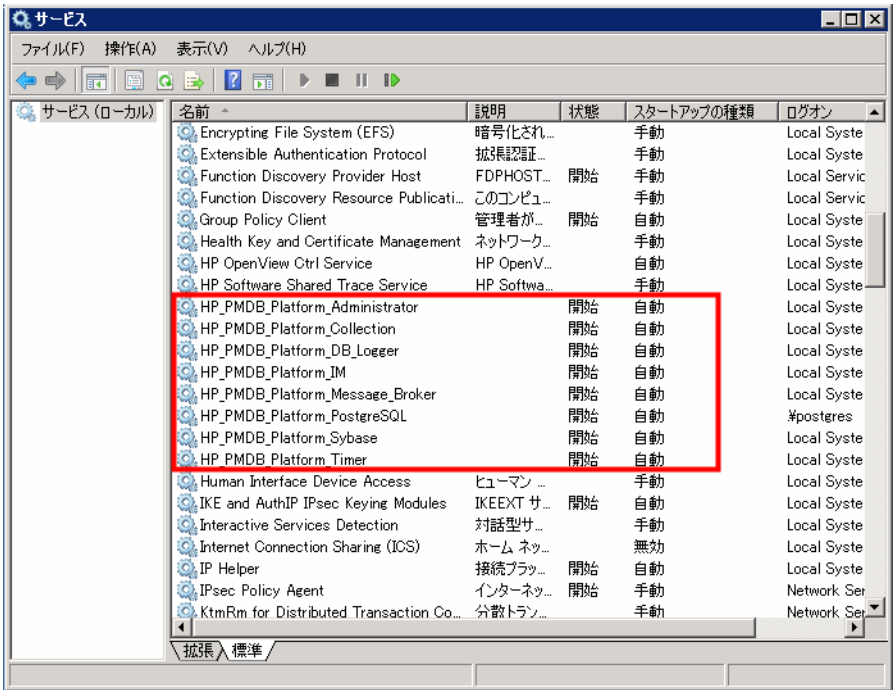
5 [**サービス**] リストで、[**SAP BOBJ Enterprise のステータス**] を選択し、SAP BOBJ サービスのリストを表示します。

または、次の手順を実行して、[サービス] ウィンドウでサービスをチェックすることもできます。

1 [**スタート**] → [**ファイル名を指定して実行**] をクリックします。[ファイル名を指定して実行] ダイアログボックスが開きます。

2 `services.msc` を [開く] フィールドに入力してから、[**ENTER**] キーを押します。[サービス] ウィンドウが開きます。

3 右のペインに、SHR サービスのステータスが示されます。



Linux の場合

Linux では、次の手順を実行してサービスをチェックできます。

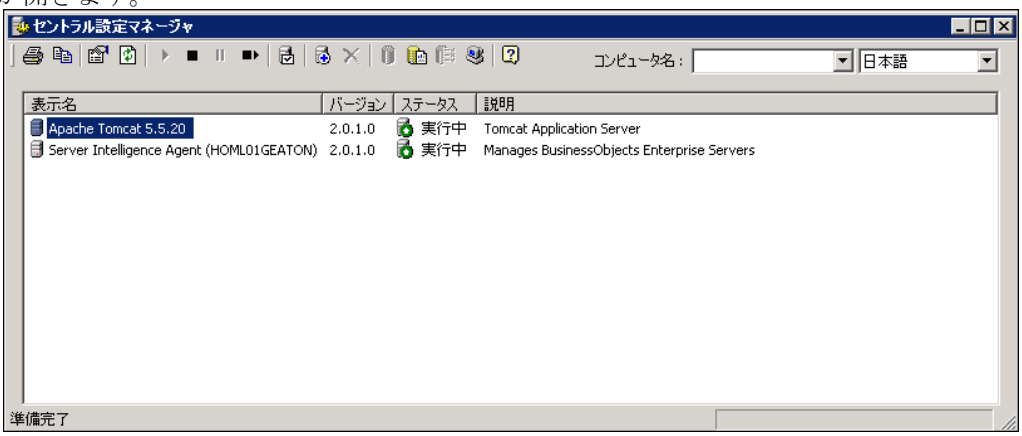
a **/etc/init.d** への移動

b **services.msc** と入力し、[**ENTER] キーを押します。**[サービス] ウィンドウが開きます。

c 右のペインで SHR サービスのステータスを確認します。

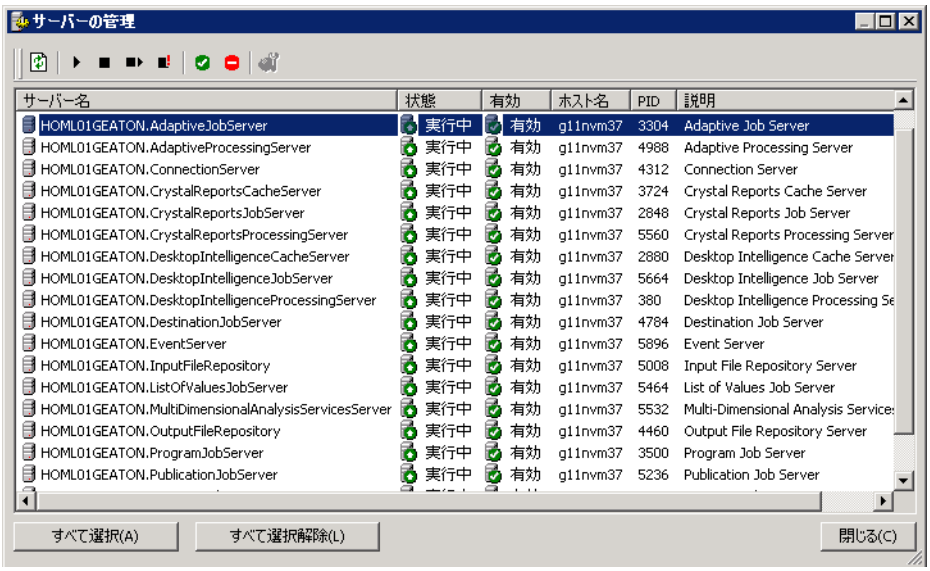
SAP BOBJ Central Configuration Manager を使用して、SAP BOBJ サービスのステータスをチェックできます。次の手順を実行します。

1 [**スタート**] → [**プログラム**] → [**BusinessObjects XI 3.1**] → [**BusinessObjects Enterprise**] → [**Central Configuration Manager**] をクリックします。[セントラル接続マネージャ] ウィンドウが開きます。



2 ボタンをクリックします。[ログオン] ダイアログボックスが開きます。

3 [**接続**] をクリックします。[サーバーの管理] ウィンドウが開きます。



4 一覧表示された SAP BOBJ サービスのステータスを確認します。すべてのサービスが使用可能になっていて実行中でなければなりません。

SHR データベースのチェック

SHR サービスをチェックし終わったら、インストール後の設定フェーズで作成したパフォーマンス管理データベース (PMDB) が存在しているかどうかチェックすることができます。次の 4 つの方法で、このタスクを実行できます。

ログファイルのチェック

データベースがエラーなしで作成されたことを確認するには、`%PMDB_HOME%¥log` フォルダー (Windows) または `$PMDB_HOME¥log` フォルダー (Linux) に置かれている `postinstallconfig.log` ファイルをチェックします。

管理コンソールのチェック

管理コンソールで、データベースのステータスをチェックできます。次の手順を実行します。

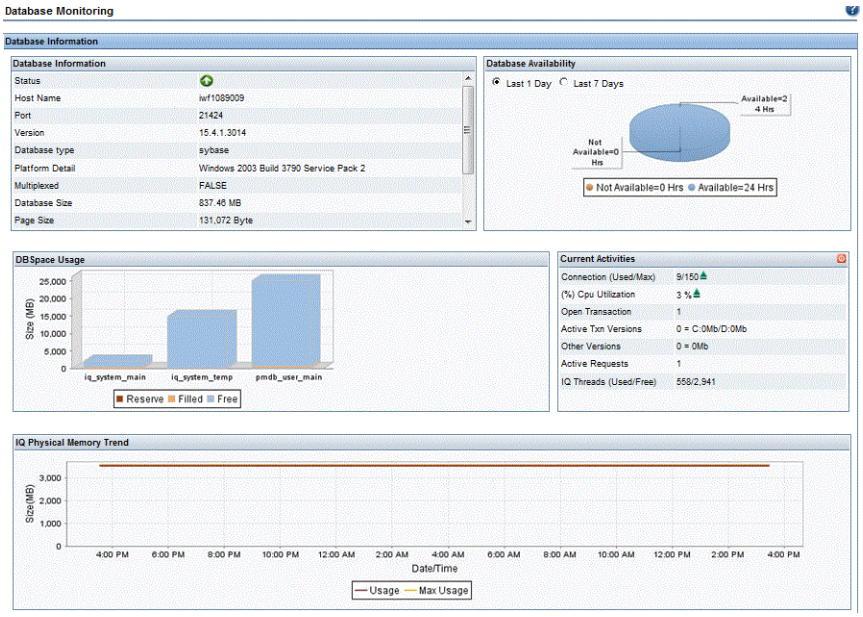
1 [**スタート**] → [**プログラム**] → [**HP Software**] → [**SH Reporter**] → [**Administration**] の順にクリックします。管理コンソールが開きます。

2 ログイン画面にユーザーの資格情報を入力し、[**ログイン**] をクリックします。SHR ホームページが開きます。

3 ホームページの [**データベースのステータス**] セクションで、PMDB データベースのステータスを確認します。

4 左のペインで [**内部監視**] → [**データベースの監視**] をクリックし、データベースのその他の情報を表示します。[データベースの監視] ページが開きます。

このページで、データベースの接続ステータス、可用性、および領域使用量などの詳細情報を確認できます。

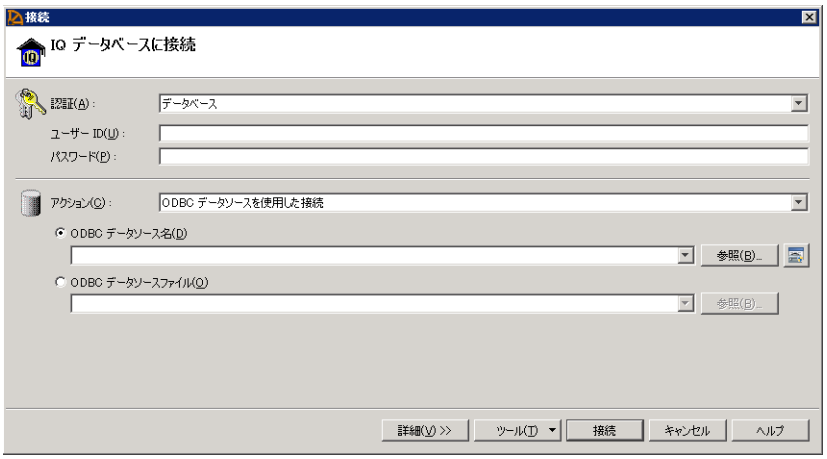


Sybase Central を使用したデータベースのチェック

また、Sybase Central を使用して PMDB データベースをチェックすることもできます。次の手順を実行します。

1 [**スタート**] → [**プログラム**] → [**Sybase**] → [**Sybase IQ 15.4**] → [**Sybase Central Java Edition**] をクリックします。[Sybase Central] ウィンドウが開きます。

2 メインツールバーで、ボタンをクリックします。[接続] ダイアログボックスが開きます。



3 [**ID**] タブで、[**ユーザー ID とパスワードを指定**] を選択してから、[**ユーザー ID**] および [**パスワード**] ボックスに PMDB データベース資格情報を入力します。

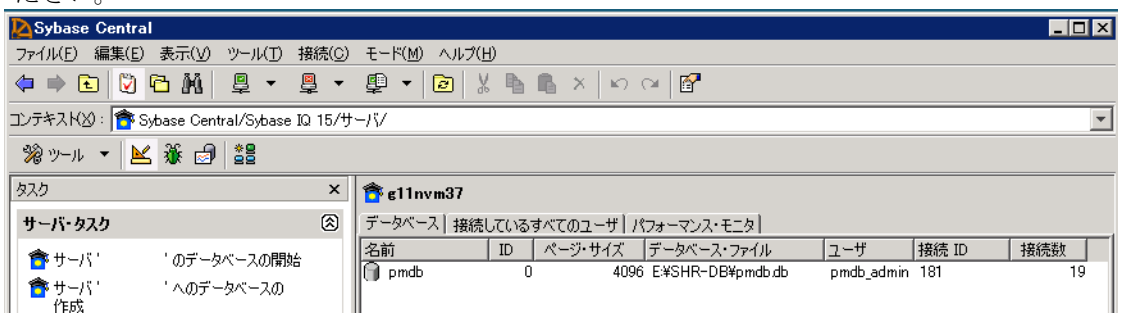
4 [**データベース**] タブで、[**サーバー名**] リストからデータベースサーバーを選択します。

5 [**ツール**] をクリックしてから、ポップアップメニューで [**接続テスト**] をクリックし、データベースサーバーへの接続をチェックします。

6 [接続テスト] メッセージボックスで、[**OK**] をクリックします。

7 [**OK**] をクリックして、[接続] ダイアログボックスを閉じます。

8 Sybase Central には、PMDB データベースが存在すればそれが表示されることに注意してください。



トポロジ収集のステータスのチェック

SHR のインストールが正常に完了したことを検証し終わったら、トポロジデータを収集するように SHR が正しく設定されているかどうかを検証します。デフォルトでは、トポロジデータの収集は 1 日 1 回実行されるようにスケジュールされます。管理コンソールを使って、トポロジ収集が行われたかどうかをチェックできます。

トポロジ収集のステータスをチェックするには、次の手順を実行します。

1 [**スタート**] → [**プログラム**] → [**HP Software**] → [**SH Reporter**] → [**Administration**] の順にクリックします。管理コンソールが開きます。

2 ログイン画面にユーザーの資格情報を入力し、[**ログイン**] をクリックします。SHR ホームページが開きます。

3 左のペインで、[**トポロジソース**] → [**サービス定義**] をクリックします。[サービス定義] ページが開きます。

4 表の [**収集**] 列に アイコンが表示されていることを確認します。このアイコンは、トポロジデータの収集が正常に完了したことを示します。

   Linux の場合

   ブラウザーを開き、デフォルトのアドレスを入力します。

   http://< サーバー名 >.< ドメイン名 >:21411/BSMRApp/

   ここでの < サーバー名 > は SHR をインストールしたホストシステムの名前で、< ドメイン名 > はネットワーク構成に基づくドメインの名前です。

CSV ビューファイルのチェック

トポロジ収集が実行された後、トポロジデータの特定のビューファイルが SHR で作成されます。それらの CSV ファイルは、`%PMDB_HOME%¥reconcil_registry¥cmdbRegistry` フォルダーに保存されます。トポロジ収集を確認するには、CSV ファイルのフォルダーをチェックします。`reconcil_registry` フォルダーには、次のフォルダーが入っています。

- `cachedRegistry`
- `cmdbRegistry`
- `registryDump`

インストールされたコンテンツパックのチェック

管理コンソールを使用して、必要なすべてのコンテンツパックがインストールされたかどうかを検証できます。コンテンツパックの一覧を表示するには、次の手順を実行します。

1 [**スタート**] → [**プログラム**] → [**HP Software**] → [**SH Reporter**] → [**Administration**] の順にクリックします。管理コンソールが開きます。

2 ログイン画面にユーザーの資格情報を入力し、[**ログイン**] をクリックします。SHR ホームページが開きます。

3 左のペインで、[**内部監視**] → [**コンテンツ**] をクリックします。[コンテンツ] ページが開きます。

このページには、すべてのインストール済みのコンテンツパックが、インストール日付とともに表示されます。

コンテンツパックのストリームステータスのチェック

SHRによって実行されているデータ処理タスクがエラーなしに正しく稼働しているかどうかを検証します。管理コンソールでワークフローストリームのステータスをチェックすると、収集されたデータのデータ集約を確認したり、データベースにレポート作成用データが読み込まれているかどうかを確認できます。インストールされているコンテンツパックの場合、すべてのワークフローストリームは、待機状態ではなく、実行中であるかまたは正常に完了済みである必要があります。ストリームの詳細を表示するには、次の手順を実行します。

1 [**スタート**] → [**プログラム**] → [**HP Software**] → [**SH Reporter**] → [**Administration**] の順にクリックします。管理コンソールが開きます。

2 ログイン画面にユーザーの資格情報を入力し、[**ログイン**] をクリックします。SHR ホームページが開きます。

3 左のペインで、[**内部監視**] → [**データ処理**] をクリックします。[データ処理] ページが開きます。

このページで、各コンテンツパックの実行中のワークフローストリームの数と、それらのストリームのステータスをチェックできます。

Linux の場合

各コンテンツパックの実行中のワークフローストリームの数と、それらのストリームのステータスをチェックするには、次の手順を実行して [データ処理] ページを開く必要があります。

ブラウザーを開き、デフォルトのアドレスを入力します。

http://< サーバー名 >.< ドメイン名 >:21411/BSMRApp/

ここでの < サーバー名 > は SHR をインストールしたホストシステムの名前で、< ドメイン名 > はネットワーク構成に基づくドメインの名前です。

CSV ファイルの段階フォルダーのチェック

`%PMDB_HOME%¥stage¥failed_to_load` フォルダーまたは `$PMDB_HOME¥stage¥failed_to_load` フォルダー (Linux) をチェックすると、データが PMDB データベースに読み込まれていることを確認することもできます。段階テーブルにデータが正常に読み込こまれた場合、`failed_to_load` フォルダーには CSV ファイルは存在しません。

データは、段階テーブルに読み込まれた後、データベースに移動されます。段階テーブルへの読み込みに失敗したデータは、`failed_to_stage` フォルダーに移動されます。データが正常にデータベースに保管された場合、`failed_to_stage` フォルダーおよび `failed_to_load` フォルダーには CSV ファイルは存在しません。

正常に完了したワークフローストリームの CSV ファイルは、`archive` フォルダーに移動されます。

`%PMDB_HOME%¥log` フォルダーまたは `%PMDB_HOME%¥log` フォルダー（Linux の場合）に置かれている `aggregate.log` ファイルをチェックして、ストリームの集約の詳細を知ることもできます。`loader.log` ファイルをチェックして、データ読み込みに関する詳細を知ることができます。

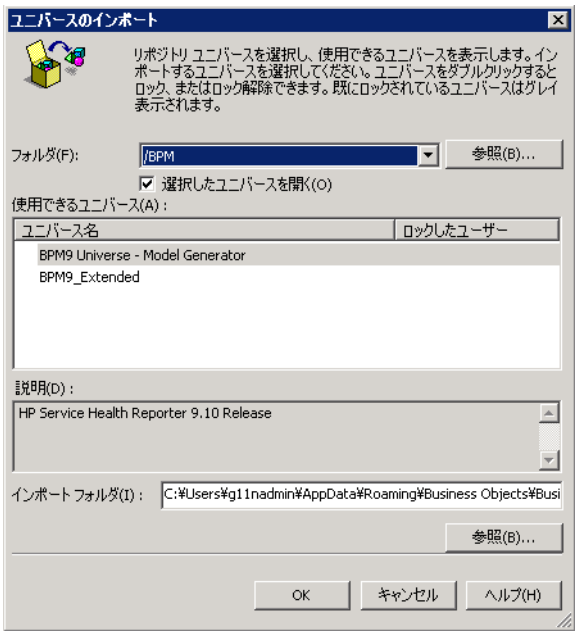
SAP BusinessObjects ユニバースのチェック

SAP BusinessObjects ユニバースとは、ビジネスユーザーが使用するビジネス用語に対してデータベース内のソースデータ構造をマップするオブジェクトとクラスを格納するファイルのことです。このユニバースは、Web Intelligence レポートの作成の際に SAP BusinessObjects Enterprise で使用されます。各コンテンツパックごとに SAP BusinessObjects ユニバースが存在するかどうかを確認できます。

ユニバースをチェックするには、次の手順を実行します。

1. [**スタート**] → [**プログラム**] → [**BusinessObjects XI 3.1**] → [**BusinessObjects Enterprise**] → [**Designer**] をクリックします。
2. [User Identification] ダイアログボックスで、[**OK**] をクリックします。Universe Designer が開きます。

3 [ファイル] メニューで [**インポート**] をクリックして、コンテンツパックユニバースをUniverse Designer にインポートします。[ユニバースのインポート] ダイアログボックスが開きます。



4 [**フォルダ**] リストでコンテンツパックのフォルダーを選択します。そのコンテンツパックに対して使用できるユニバースが、[**使用できるユニバース**] セクションに一覧表示されます。

5 表示するユニバースを選択し、[**OK**] をクリックします。

6 [ユニバースのインポート] メッセージボックスで、[**OK**] をクリックします。

選択したユニバースが Designer に表示されます。

Linux の場合

Universe Designer は使用できないため、その代わりに SAP BusinessObjects Client ツールを使用する必要があります。

SAP BusinessObjects サーバーに接続するには、次の手順を実行します。

a `/<` 抽出されたビットの場所 `>/packages/BO/BusinessObjectsXI-3.1` に移動します。

ここでの < 抽出されたビットの場所 > は SAP BusinessObjects Client ツールが抽出された場所です。

b `BusinessObjectsXI-3.1-Clienttools.zip` を解凍します。

次の 2 つのフォルダーが抽出されます。

`SP5Client`

`SP5.3Client`

c `SP5Client` フォルダーを開き、**setup.exe** をダブルクリックします。

画面に表示される指示にしたがいインストールを実行します。

d `SP5Client` をインストールしたら、`SP5.3Client` フォルダーを開き、**setup.exe** をダブルクリックします。

画面に表示される指示にしたがいインストールを実行します。

e SAP BusinessObjects Linux サーバーに接続し、131 ページのステップ 3 から手順を実行します。

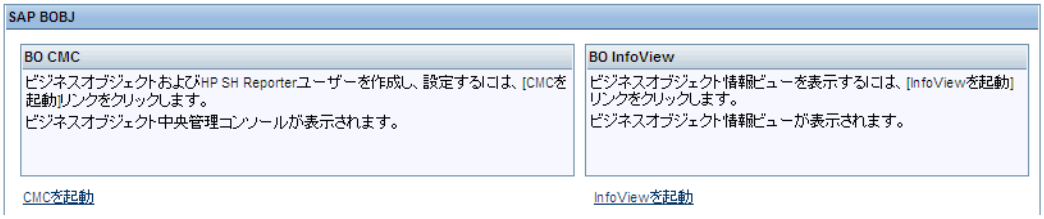
SAP BusinessObjects InfoView のレポートフォルダーのチェック

InfoView でレポートフォルダーをチェックするには、次の手順を実行します。

1 [**スタート**] → [**プログラム**] → [**HP Software**] → [**SH Reporter**] → [**Administration**] の順にクリックします。管理コンソールが開きます。

2 ログイン画面にユーザーの資格情報を入力し、[**ログイン**] をクリックします。SHR ホームページが開きます。

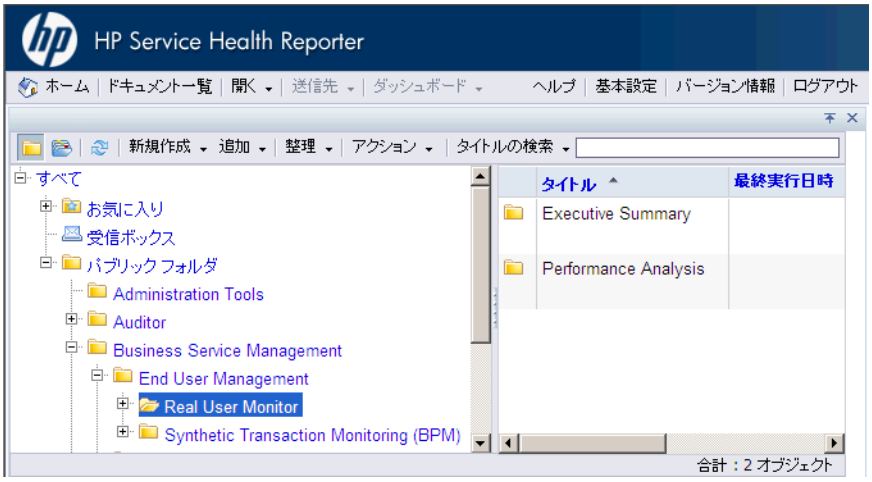
3 左のペインで、[**管理**] → [**SAP BOBJ**] をクリックします。[SAP BOBJ] ページが開きます。



4 右側のペインで、[**InfoView を起動**] をクリックします。SAP BOBJ InfoView のログイン画面が開きます。

5 ユーザー資格情報を入力し、[**ログオン**] をクリックします。[SAP BOBJ InfoView] が開きます。

6 [**ドキュメントリスト**] をクリックします。[ドキュメントリスト] ページが開きます。



7 左ペインのレポートフォルダーを展開し、右ペインにレポートが表示されているかどうかをチェックします。

これらのタスクを実行した後、管理コンソールと SAP BOBJ InfoView のレポートに関連情報が表示されていることを確認できたら、SHR は環境内に正しくインストールされて設定されたということです。

9 SHR 用のクライアント認証証明書

SHR には、管理コンソールと SAP BusinessObjects InfoView の 2 つのコンソールインタフェースがあります。管理コンソールでは SHR を管理して監視できるのに対して、SAP BusinessObjects InfoView コンソールではレポートとダッシュボードを表示できます。どちらのコンソールも、HTTPS ネットワークプロトコルを使用したセキュアな環境でも、HTTP ネットワークプロトコルを使用した非セキュアな環境でも実行できます。両方のコンソールのデフォルトプロトコルは HTTP です。セキュアな環境を設定するには、管理コンソールおよび SAP BusinessObjects InfoView コンソールの HTTPS 通信を設定する必要があります。

認証と承認

SHR は、認証と承認に SAP BusinessObjects を使用します。SAP BusinessObjects ユーザーアカウントは、SAP BusinessObjects 中央管理コンソールによって管理されます。SHR 管理コンソールにアクセスするには、SAP BusinessObjects 管理者である必要があります。SHR は、デフォルトではユーザー名 / パスワードに基づいた認証メカニズムを使用します。また、管理コンソールの場合は証明書に基づいた認証の設定。ページ 137、SAP BusinessObjects InfoViewApp および OpenDocument の場合はページ 139 に記載された手順に従って、クライアント証明書に基づいた認証を使用するように SHR を設定することもできます。SHR は、証明書を検証することによってユーザーの ID を確認し、SAP BusinessObjects を使用してユーザーを認証します。

証明書に基づいた認証の前提条件

証明書に基づいた認証を設定する前に、次の前提条件を満たしていることを確認してください。

タスク 1: SHR サーバー証明書とプライベートキーが含まれたキーストアファイルを作成します。

キーストアファイルはパスワードで保護されます。SHR により、keystorepath プロパティおよび keystorepasswd プロパティを使用してキーストアの場所およびパスワードの設定が可能です。Windows システムでは、キーストアパスはスラッシュを使用して指定する必要があります。Keystoretype プロパティにより、キーストアのタイプの指定が可能です。サポートされる値は **JKS** と **PKCS12** です。キーストア内の証明書のエイリアスは、次の表で示しているように keyalias プロパティを使用して指定されます。

プロパティ名	例
Keystorepath	C:¥¥certs¥¥serverkeystore.jks
Keystorepasswd	changeit
Keyalias	shserver
Keystoretype	JKS

タスク 2: 承認を証明する (CA) 証明書が含まれたキーストアファイルを作成します。

SHR サーバーによって信頼される CA 証明書が含まれたキーストアファイルを作成する必要があります。このファイルはパスワードで保護されます。SHR を使用して、**truststorepath** プロパティ、**truststorepasswd** プロパティ、および **truststoretype** プロパティを次の表で示している値に設定することで、トラストストアを設定できます。

プロパティ名	値の例
`truststorepath`	`C:¥¥certrelated¥¥Trustkeystore`
`truststorepasswd`	`changeit`
`truststoretype`	`JKS`

タスク 3: 証明書取り消しチェックを有効にする必要があるかどうかを決定します。

証明書取り消しチェックを有効にするには、**com.sun.net.ssl.checkRevocation** を true に設定する必要があります。SHR は取り消された証明書のチェックについて 2 つの方法をサポートしています。

- 証明書取り消しリスト (CRL) - CRL には取り消された証明書に関する情報が記載され、CA からダウンロードされます。SHR は、証明書から CRL 分布点 URL を抽出します。この確認を有効にするには、**com.sun.security.enableCRLDP** を true に設定する必要があります。
- オンライン証明書ステータスプロトコル (OSCP) - OSCP とは、OSCP レスポンダーと呼ばれるオンラインサービスを使用して単一の証明書の取り消しをチェックするためのプロトコルです。OCSP プロトコルを使用した取り消しチェックを有効にするには、**ocsp.enable** を true に設定する必要があります。SHR は、証明書から OCSP URL を抽出して証明書を検証します。ローカル OCSP レスポンダーサービスを設定したい場合、SHR では、**ocsp.responderURL** プロパティを使用して設定できます。

証明書の取り消し、CRL、OSCP を有効にする方法の詳細については、ページ 134 を参照してください

タスク 4: SHR サーバーとインターネットの間にプロキシが存在する場合、プロキシサーバーアドレスを決定します。

プロキシサーバーが存在する場合、CRL をダウンロードするために SHR サーバーを有効にするように設定する必要があります。プロキシサーバーは次のように設定できます。

`http.proxyHost`	http プロキシのホスト名を設定します
`http.proxyPort`	http プロキシのポート番号を設定します
`https.proxyHost`	https プロキシのホスト名を設定します
`https.proxyPort`	https プロキシのポート番号を設定します

詳細については、こちらを参照してください ページ 137

タスク 5: ユーザー名抽出メカニズムを決定します。

ユーザー名抽出メカニズムは、証明書の形式に依存します。証明書から抽出されたユーザー名は、SAP BusinessObjects で設定したユーザー名に一致する必要があります。SHR では、次の 2 つのメカニズムを使用してユーザー名を抽出できます。

- SubjectDN
- サブジェクトの別名 (SAN)

ユーザー名抽出メカニズムを設定するには、`server.xml` ファイルの field、entry、type、pattern、および OID の各プロパティで変更を行う必要があります。

```
<Realm className="com.hp.bto.bsmr.SHRSecureAuth.auth.SHRRealm"
field="SubjectDN" entry="CN" Type="" oid="" pattern=""
useSubjectDNonMatchFail="true"/>
```

- SubjectDN からユーザー名を抽出するには、次の値をプロパティに設定する必要があります

プロパティ名	値
field	SubjectDN
entry	CN に設定すると CN をユーザー名として指定します OU に設定すると OU をユーザー名として指定します

entry プロパティでは、SubjectDN におけるユーザー名として見なす必要のあるエントリを指定できます。entry パラメータを使用する代わりにパターンを使用して、SubjectDN からユーザー名を抽出することもできます。SubjectDN からユーザー名を抽出するパターンを設定するには、pattern パラメータを使用します。たとえば、パターンが EMAILADDRESS=(.+)@) として設定され、abc@hp.com が emailaddress フィールドの値である場合、abc がユーザー名として抽出されます。

- サブジェクトの別名 (SAN) からユーザー名を抽出するには、次の手順を実行します。

field プロパティの値を SAN に設定します。**Type** プロパティを使用して、SAN ユーザー名の **rcf822Name** または **otherName** の部分を設定できます。rcf822Name を設定するには、**Type** プロパティの値を **rcf822Name** に設定します。otherName を設定するには、**type** プロパティの値を **otherName** に設定し、オブジェクト識別子 (OID) を **OID** に設定します。

デフォルトでは、SHR は CN からユーザー名を抽出します。

ユーザーがスマートカードのみを使用してログオンできるように SHR を設定できます。スマートカードログオンを有効にするには、**smartcard.enable** プロパティを **true** に設定する必要があります。

server.xml ファイルの場所は、次の表で示しています。

設定	パス
管理者コンソール	%PMDB_HOME%/adminserver/conf。(Windows の場合) $PMDB_HOME/adminserver/conf。(Linux の場合)
SAPInfoview BusinessObjects	%PMDB_HOME%/BOWebServer/conf。(Windows の場合) $PMDB_HOME/BOWebServer/conf.(Linux の場合)

タスク 6: 証明書をインポートしてブラウザーを設定します。

- ルートCAによって発行された証明書をSHRサーバーにインポートします。Internet Explorer にある [**信頼されたルート証明機関**] タブを使用して、Web ブラウザーにインポートします。詳細については、Internet Explorer ヘルプを参照してください。
- プロトコル TLSv1 を受け入れるように Web ブラウザーを設定します。ここで、v1 はバージョンを示しています。

➤ 高可用性の場合、両方のサーバーを設定します。

SHR では、管理コンソールインタフェースおよび SAP BusinessObjects InfoViewApp インタフェース用に証明書に基づいた認証を設定できます。

SHR 管理コンソールの設定

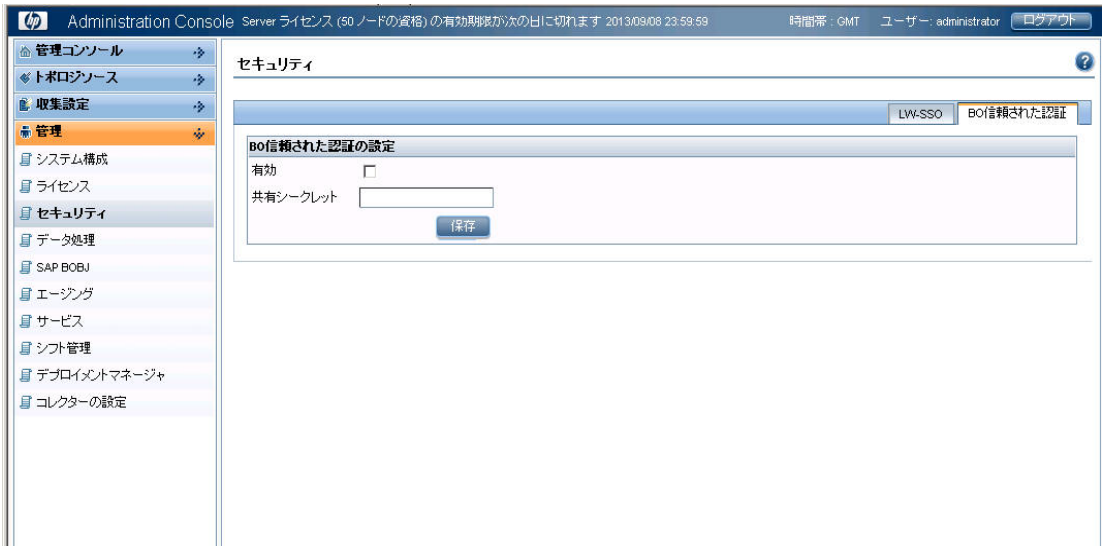
続行する前に、SHR のインストール後の設定が正常に完了していることを確認してください。証明書に基づいた認証を行うために SHR 管理コンソールを設定するには、次の手順を実行します。

タスク 1: 共有シークレットの設定。

共有シークレットは、信頼された認証を確立するために使用されます。共有シークレットは、文字形式のみで入力する必要があります。

a ブラウザーで `http://<ホスト名>:21411/BSMRApp/` と入力し、SHR の管理コンソールにログオンします。

b **[管理] → [セキュリティ] → [BO 信頼された認証]** に移動します。



c [**有効**] チェックボックスを選択します。

d [**共有シークレット**] と入力します。

e [**保存**] をクリックします。

設定が正常に完了したら、次のメッセージが表示されます。

タスク 2: HP_PMDB_Platform_Administrator サービスを停止します。

To stop HP_PMDB_Platform_Administrator サービスを停止するには、ドメインアカウント用の HP PMDB Platform Administrator サービスの設定 ページ 73 の最初の 3 つの手順を実行してください

Linux の場合

次のコマンドを実行します。

```
Service HP_PMDB_Platform_Administrator stop
```

タスク 3: config.prp ファイルの設定。

%PMDB_HOME%/data および $PMDB_HOME/data (Linux の場合) にある config.prp で次のフィールドを指定された値に設定します。

フィールド	値
shr.loginMethod	certbased
shr.auth.classes	com.hp.bto.bsmr.security.auth.BOTrustedAuthenticator

タスク 4: 証明書に基づいた認証の設定。

%PMDB_HOME%/data フォルダ (Windows の場合) および $PMDB_HOME/data (Linux の場合) にある adminserverclientauth.prp ファイルで次のパラメータを指定します。次のフィールドを編集し、次の説明に従って値を設定します。

フィールド	説明
truststorepath	トラストストアファイルのフルパス。クライアント証明書を検証するために使用されます。
truststorepasswd	トラストストアにアクセスするためのパスワード。
truststoretype	トラストストアに使用されるキーストアのタイプ。
keystorepath	ロードされるサーバー証明書を保存したキーストアファイルのフルパス。
keystorepasswd	指定したキーストアファイルからサーバー証明書にアクセスするために使用されるパスワード。
keystoretype	サーバー証明書に使用されるキーストアファイルのタイプ。
keyAlias	キーストア内のサーバー証明書に使用されるエイリアス
smartcard.enable	スマートカードログオンを有効にする場合は true に設定し、スマートカードログオンを無効にする場合は false に設定します。
http.proxyHost	HTTP プロキシのホスト名。
http.proxyPort	HTTP プロキシのポート番号。
com.sun.net.ssl.checkRevocation	取り消しを有効にする場合は true に設定し、取り消しを無効にする場合は false に設定します。
com.sun.security.enableCRLDP	CRL の取り消しを有効にする場合は true に設定し、無効にする場合は false に設定します。
ocsp.enable	OSCP に基づいた取り消しを有効にする場合は true に設定し、無効にする場合は false に設定します。
ocsp.responderURL	OCSP レスポンダー URL を設定します。

CRL に基づいた取り消しを true に設定する場合は OSCP に基づいた取り消しを false に設定し、OSCP に基づいた取り消しを true に設定する場合は CRL に基づいた取り消しを false に設定する必要があります。

プロパティ値を設定した後で、次の手順を実行します。

a `%PMDB_HOME%/bin` フォルダに移動します。

b 次のコマンドを実行します。

`perl adminserverclientauth.pl -authType clientcert -configFile <設定ファイルの場所>`

ここで、< 設定ファイルの場所 > とは `adminsever.prp` ファイルのフルパスを示しています

たとえば、`%PMDB_HOME%/data/adminserverclientauth.prp` です

Linux の場合

a `$PMDB_HOME/bin` フォルダに移動します。

b 次のコマンドを実行します。

`perl adminserverclientauth.pl -authType clientcert -configFile <設定ファイルの場所>`

ここで、< 設定ファイルの場所 > とは `adminsrver.prp` ファイルのフルパスを示しています

たとえば、`$PMDB_HOME/data/adminserverclientauth.prp` です

タスク 5: ユーザー名抽出を設定します。

SubjectDN フィールドの CN エントリが SHR によってユーザー名として抽出されることを確認してください。`server.xml` ファイルをページ 134 で説明しているように変更します。

タスク 6: HP_PMDB_Platform_Administrator サービスを開始します。

サービスを開始するには、[サービス] ウィンドウ (Windows の場合) または `service` コマンド (Linux の場合) を使用します。

タスク 7: 証明書に基づいた認証を確認します。

a Web ブラウザーで http://< ホスト名 >:21411/BSMRApp/ と入力し、SHR の管理コンソールにログオンします。

b [**デジタル証明書でログオン**] をクリックします。

SAP BusinessObjects InfoView および Open Document の設定

証明書に基づいた認証のために InfoView コンソールおよび Open Document を設定するには、次の手順を実行します。

タスク 1: SAP BusinessObject WebServer サービスを停止します。

a 管理者としてホストシステムにログオンします。

b [**スタート**] → [**ファイル名を指定して実行**] をクリックします。[ファイル名を指定して実行] ダイアログボックスが開きます。

c [**名前**] フィールドに `services.msc` と入力し、[**ENTER**] キーを押します。[サービス] ウィンドウが開きます。

d Business Object WebServer サービスを右クリックし、[**停止**] を選択してサービスを停止します。

Linux の場合

a `/opt/HP/BSM/PMDB/BOWebServer/bin` に移動します

b 次のコマンドを実行します。

```
./shutdown.sh
```

タスク 2: HP_PMDB_Platform_Administrator 管理者サービスを停止します。

HP_PMDB_Platform_Administrator サービスを停止するには、ドメインアカウント用の HP PMDB Platform Administratorサービスの設定 ページ 73の最初の3つの手順を実行してください

Linux の場合

```
Service HP_PMDB_Platform_Administrator stop
```

タスク 3: config.prp ファイルを編集します。

`%PMDB_HOME%/data` フォルダ (Windows の場合) および `$PMDB_Home/data` (Linux の場合) にある config.prp ファイルで、指定された値をフィールドに設定します。

フィールド	値
`bo.protocol`	`https`

タスク 4: 証明書に基づいた設定をセットアップします。

%PMDB_HOME%/dataフォルダ (Windowsの場合) および$PMDB_HOME/data (Linuxの場合) にある BOclientauth.prp ファイルで、次のフィールドを説明で指定している値に設定します。

フィールド	説明
truststorepath	truststore ファイルへのフルパス
truststorepasswd	トラストストアにアクセスするためのパスワード
truststoretype	トラストストアに使用されるキーストアのタイプ
keystorepath	ロードされるサーバー証明書を保存したキーストアファイルのフルパス。
keystorepasswd	指定したキーストアファイルからサーバー証明書にアクセスするために使用されるパスワード。
keystoretype	サーバー証明書に使用されるキーストアファイルのタイプ。
keyAlias	キーストア内のサーバー証明書に使用されるエイリアス。
smartcard.enable	スマートカードログオンを有効にする場合は true に設定し、無効にする場合は false に設定します。
http.proxyHost	HTTP プロキシのホスト名
http.proxyPort	HTTP プロキシのポート番号
https.proxyHost	HTTPS プロキシのホスト名
https.proxyPort	HTTPS プロキシのポート番号
com.sun.net.ssl.checkRevocation	取り消しを有効にする場合は true に設定し、無効にする場合は false に設定します。
com.sun.security.enable-CRLDP	CRL の取り消しを有効にする場合は true に設定し、無効にする場合は false に設定します。
ocsp.enable	OSCP に基づいた取り消しを有効にする場合は true に設定し、無効にする場合は false に設定します。
ocsp.responderURL	OSCP レスポンダー URL を設定します。

CRL に基づいた取り消しを true に設定する場合は OSCP に基づいた取り消しを false に設定し、OSCP に基づいた取り消しを true に設定する場合は CRL に基づいた取り消しを false に設定する必要があります。

プロパティを設定した後で、次の手順を実行します。

a %PMDB_HOME%/bin フォルダに移動します。

b 次のコマンドを実行します。

```
perl BOclientauth.pl -authType clientcert -configFile <設定ファイルの場所>
```

ここで、< 設定ファイルの場所 > とは BOclientauth.prp ファイルのフルパスを示しています。たとえば、%PMDB_HOME%/data/BOclientauth.prp です。

Linux の場合

a $PMDB_HOME/bin フォルダに移動します。

b 次のコマンドを実行します

perl BOclientauth.pl -authType clientcert -configFile <設定ファイルの場所>

ここで、<設定ファイルの場所> とはBOclientauth.prpファイルのフルパスを示しています。

たとえば、$PMDB_HOME/data/BOclientauth.prp です。

タスク 5: SAP BusinessObjects WebServer サービスを開始します。

a 管理者としてホストシステムにログオンします。

b [**スタート**] → [**ファイル名を指定して実行**] をクリックします。

c [名前] フィールドにservices.mscと入力し、[**ENTER**] キーを押します。[サービス] ウィンドウが開きます。

d SAP BusinessObject WebServer サービスを右クリックし、[**開始**] を選択してサービスを開始します。

Linux の場合

a /opt/HP/BSM/PMDB/BOWebServer/bin フォルダに移動します。

b コマンド ./startup.sh を実行します

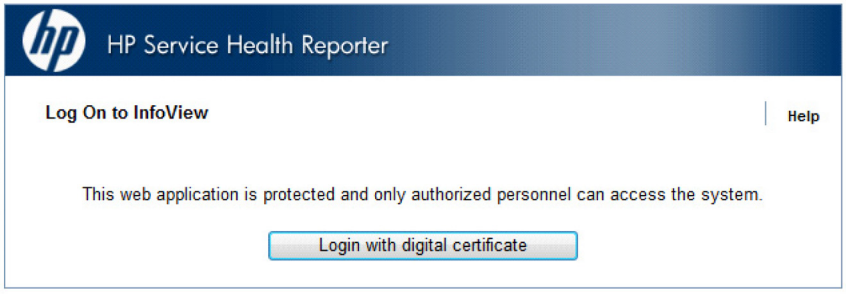
タスク 6: 証明書に基づいた認証を確認します。

a Webブラウザーでhttp://<ホスト名>:8080/InfoViewAppと入力し、SHRのInfoViewコンソールにログオンします。

b InfoView コンソールにログオンします。

c 次の画面が表示された場合、設定は完了です。

.



d これで、デジタル証明書で InfoView コンソールにログオンできるようになりました。

ユーザー名抽出メソッドの設定

ユーザー名抽出は、server.xml ファイルを編集して設定できます。詳細については、ユーザー名抽出メカニズムを決定します。ページ 134 を参照してください。

セキュアな接続 (HTTPS) の設定

管理コンソールおよび InfoView コンソール用のセキュアな接続を設定できます。

SHR の管理コンソールの場合

SHR の管理コンソール用のセキュアな接続を設定するには、次の手順を実行します。

タスク 1: HP-PMDB_Platform_Administrator サービスを停止します。

詳細については、ページ 136 を参照してください

タスク 2: server.xml ファイルを編集します。

a ポート値が 21412 に設定されている SSL コネクタータグのコメントアウトを解除します

b %PMDB_HOME%/adminserver/conf/ フォルダ (Windows の場合) および $PMDB_HOME/adminserver/conf/ フォルダ (Linux の場合) にある server.xml ファイルで、次のフィールドを説明で指定している値に設定します。

フィールド	説明
keystorefile	ロードされるサーバー証明書を保存したキーストアファイルのフルパス。
keystorepasswd	指定したキーストアファイルからサーバー証明書にアクセスするために使用されるパスワード。
keystoretype	サーバー証明書に使用されるキーストアファイルのタイプ。
keyAlias	キーストア内のサーバー証明書に使用されるエイリアス。

タスク 3: config.prp ファイルを編集します。

%PMDB_HOME%/data および $PMDB_HOME/data (Linux の場合) にある config.prp ファイルで次のフィールドを指定された値に設定します。

フィールド	値
bo.protocol	https
bo.ssl.enabled.port	8443

bo.ssl.enabled.portは、server.xml ファイルのコネクタータグのポート属性で指定したポート番号に設定されます。デフォルト値は 8443 です。

タスク 4: HP_PMDB_Platform_Administrator サービスを開始します。

詳細については、ページ 138 を参照してください

タスク 5: 設定を確認します。

設定を確認するには、https://<ホスト名>: 21412/BSMRApp を使用して管理コンソールにログオンします

SHR の InfoView コンソールの場合

SHR の InfoView コンソール用に HTTPS 通信を有効にするには、次の手順を実行します。

タスク 1: SAP BusinessObjects Webserver サービスを停止します。

詳細については、ページ 139 を参照してください

タスク 2: server.xml ファイルを編集します。

%PMDB_HOME%/BOWebServer/conf/ フォルダ (Windows の場合) および $PMDB_HOME/BOWebServer/conf/ (Linuxの場合) にある server.xml ファイルを開き、次の手順を実行します

a ポート値が 8443 に設定されている SSL コネクタータグのコメントアウトを解除します

b ファイル内の次のフィールドを説明で示している値に設定します。

フィールド	説明
keystorefile	ロードされるサーバー証明書を保存したキーストアファイルのフルパス。
keystorepasswd	指定したキーストアファイルからサーバー証明書にアクセスするために使用されるパスワード。
keystoretype	サーバー証明書に使用されるキーストアファイルのタイプ。
keyAlias	キーストア内のサーバー証明書に使用されるエイリアス。

タスク 3: SAP BusinessObjects WebServer を開始します。

詳細については、ページ 141 を参照してください

タスク 4: 設定を確認します。

次にログオンします

- https://< ホスト名 >:8443/InfoViewApp を使用して InfoViewApp に
- https://< ホスト名 >:8443/CmcApp を使用して CmcApp に

証明書に基づいた認証の設定の取り消し。

証明書に基づいた認証の設定を取り消すことで、元のユーザー名およびパスワードに基づいた認証モードに復元できます。証明書に基づいた認証は、管理コンソールレベルと InfoView コンソールレベルの両方で取り消すことができます。

管理コンソールレベルでの取り消し

管理コンソールレベルで証明書に基づいた認証を取り消すには、次の手順を実行します。

タスク 1: HP_PMDB_Platform_Administrator サービスを停止します。

To stop HP_PMDB_Platform_Administrator サービスを停止するには、ドメインアカウント用の HP PMDB Platform Administrator サービスの設定 ページ 73 の最初の 3 つの手順を実行してください

Linux の場合

次のコマンドを実行します。

```
Service HP_PMDB_Platform_Administrator stop.
```

タスク 2: config.prp ファイルの設定。

%PMDB_HOME%/data (Windows の場合) および $PMDB_HOME/data (Linux の場合) にある config.prp で、次のフィールドを指定している値に設定してファイルを保存します。

フィールド	値
shr.loginMethod	default
shr.auth.classes	com.hp.bto.bsmr.security.auth.BOAuthenticator
bo.protocol	http

タスク 3: パスワードに基づいた認証を有効にします。

a %PMDB_HOME%/bin フォルダに移動します。

b 次のコマンドを実行します。

```
perl adminserverclientauth.pl -authType password
```

ここで、**authType** パラメータの値である password は、パスワードに基づいた認証のモードを示しています。

Linux の場合

a $PMDB_HOME/bin フォルダに移動します

b 次のコマンドを実行します。

```
perl adminserverclientauth.pl -authType password
```

ここで、**authType** フィールドの値である password は、パスワードに基づいた認証のモードを示しています。

タスク 4: HP_PMDB_Platform_Administrator サービスを開始します。

サービスを開始するには、[サービス] ウィンドウ (Windows の場合) または service コマンド (Linux の場合) を使用します。

タスク 5: ユーザー名およびパスワードに基づいた認証を確認します。

ユーザー名とパスワードを使用して SHR の管理コンソールにログオンします。

InfoView コンソールレベルでの取り消し

InfoView コンソールレベルで証明書に基づいた認証を取り消すには、次の手順を実行します。

タスク 1: SAP BusinessObjects WebServer サービスを停止します。

詳細については、SAP BusinessObject WebServer サービスを停止します。ページ 139 を参照してください。

タスク 2: config.prp ファイルを編集します。

%PMDB_HOME%/data フォルダ （Windows の場合) および $PMDB_Home/data （Linux の場合) にある config.prp ファイルで、指定された値をフィールドに設定します。ファイルを保存します。

フィールド	値
bo.protocol	http
shr.loginMethod	default
shr.auth.classes	com.hp.bto.bsmr.security.auth.BOAuthenticator

タスク 3: パスワードに基づいた認証を有効にします

a %PMDB_HOME%/bin フォルダに移動します。

b 次のコマンドを実行します。

```
perl BOclientauth.pl -authType password
```

ここで、**authType** パラメータの値である password は、パスワードに基づいた認証のモードを示しています。

Linux の場合

a $PMDB_HOME/bin フォルダに移動します

b 次のコマンドを実行します。

```
perl BOclientauth.pl -authType password
```

ここで、**authType** フィールドの値である password は、パスワードに基づいた認証のモードを示しています。

タスク 4: SAP BusinessObjects WebServer サービスを開始します。

詳細については、SAP BusinessObjects WebServer サービスを開始します。ページ 141 を参照してください

タスク 5: パスワードに基づいた認証を確認します。

ユーザー名とパスワードを使用して SHR の InfoView コンソールにログオンします。

10 SHR 用のセキュアな接続の設定 (HTTPS)

SHR には、管理コンソールと SAP BusinessObjects InfoView という 2 つのコンソールインタフェースがあります。コンソールは、HTTPS ネットワークプロトコルを使用したセキュアな環境と、HTTP ネットワークプロトコルを使用したセキュアでない環境の両方で実行することが可能です。両方のコンソールのデフォルトのプロトコルはHTTPです。管理コンソールとSAP BusinessObjects InfoView コンソールにセキュアな環境をセットアップするには、HTTP ネットワークプロトコルを構成する必要があります。

キーストアファイルの作成

セキュアな接続を構成する前に、SHR サーバー証明書とプライベートキーを含むキーストアファイルを作成する必要があります。キーツールを使用してキーストアファイルを作成するには、次のコマンドを実行します。

```
keytool -genkey -keystore keystore.jks -alias mykey
```

他のツールを使用してキーストアファイルを作成することも可能です。

キーストアファイルはパスワードで保護されます。SHR により、keystorepath プロパティおよび keystorepasswd プロパティを使用してキーストアの場所およびパスワードの設定が可能です。Windows システムでは、キーストアパスはスラッシュを使用して指定する必要があります。Keystoretype プロパティにより、キーストアのタイプの指定が可能です。サポートされる値は **JKS** と **PKCS12 です。**キーストア内の証明書のエイリアスは、次の表で示しているように keyalias プロパティを使用して指定されます。

プロパティ名	例
Keystorepath	C:/certs/serverkeystore.jks
Keystorepasswd	changeit
Keyalias	shserver
Keystoretype	JKS

セキュアな接続の設定 (HTTPS)

管理コンソールおよび InfoView コンソール用のセキュアな接続を設定できます。

SHR の管理コンソールの場合

SHR の管理コンソール用のセキュアな接続を設定するには、次の手順を実行します。

タスク 1: HP_PMDB_Platform_Administrator サービスを停止します

Windows

HP_PMDB_Platform_Administrator サービスを停止するには、次の手順を実行します。

1 [**スタート**] → [**ファイル名を指定して実行**] をクリックします。[ファイル名を指定して実行] ダイアログボックスが開きます。

2 [名前] フィールドに **services.msc** と入力し、[**ENTER**] キーを押します。[サービス] ウィンドウが開きます。

3 右側のペインで、[**HP_PMDB_Platform_Administrator**] を右クリックし、[**Stop**] をクリックします。

Linux

次のコマンドを実行します。

```
Service HP_PMDB_Platform_Administrator stop
```

タスク 2: server.xml ファイルを編集します

編集する前に、server.xml ファイルをバックアップします。

1 ポート値が 21412 に設定されている SSL コネクタータグのコメントアウトを解除します。

2 次の場所にある server.xml ファイルで次のフィールドを設定します。

Windows

%PMDB_HOME%/adminserver/conf/

Linux

$PMDB_HOME/adminserver/conf/

フィールド	説明
keystorefile	ロードされるサーバー証明書を保存したキーストアファイルのフルパス。
keystorepasswd	指定したキーストアファイルからサーバー証明書にアクセスするために使用されるパスワード。
keystoretype	サーバー証明書に使用されるキーストアファイルのタイプ。
keyAlias	キーストア内のサーバー証明書に使用されるエイリアス。

タスク 3: config.prp ファイルを編集します。

編集する前に、config.prp ファイルをバックアップします。

次の場所にある config.prp ファイルで次のフィールドを設定します。

Windows

%PMDB_HOME%/data

Linux

$PMDB_HOME/data

フィールド	値
bo.protocol	https
bo.ssl.enabled.port	8443

bo.ssl.enabled.port は、server.xml ファイルのコネクタータグのポート属性で指定したポート番号に設定されます。デフォルト値は 8443 です。

タスク 4: HP_PMDB_Platform_Administrator service サービスを開始します。

Windows

HP_PMDB_Platform_Administrator サービスを停止するには、次の手順を実行します。

1. [**スタート**] → [**ファイル名を指定して実行**] をクリックします。[ファイル名を指定して実行] ダイアログボックスが開きます。
2. [**名前**] フィールドに **services.msc** と入力し、[**ENTER**] キーを押します。[サービス] ウィンドウが開きます。
3. 右側のペインで、[**HP_PMDB_Platform_Administrator**] を右クリックし、[**開始**] をクリックします。

Linux

次のコマンドを実行します。

```
Service HP_PMDB_Platform_Administrator start
```

タスク 5: 設定を確認します。

設定を確認するには、次の URL を使用して管理コンソールにログオンします。

https://< ホスト名 >: 21412/BSMRApp

ここで、< ホスト名 > は SHR サーバーの名前です。

SHR の InfoView コンソールの場合

SHR の InfoView コンソール用に HTTPS 通信を有効にするには、次の手順を実行します。

タスク 1: SAP BusinessObjects Webserver サービスを停止します。

Windows

SAP BusinessObject WebServer サービスを停止するには、次の手順を実行します。

1. [**スタート**] → [**ファイル名を指定して実行**] をクリックします。[ファイル名を指定して実行] ダイアログボックスが開きます。
2. [**名前**] フィールドに **services.msc** と入力し、[**ENTER**] キーを押します。[サービス] ウィンドウが開きます。
3. 右ペインで [**SAP BusinessObject WebServer**] を右クリックし、[**停止**] をクリックします。

Linux

/opt/HP/BSM/PMDB/BOWebServer/bin に移動し、次のコマンドを実行します。

```
./shutdown.sh
```

タスク 2: server.xml ファイルを編集します

編集する前に、`server.xml` ファイルをバックアップします。

`%PMDB_HOME%/BOWebServer/conf` (Windows の場合) または `$PMDB_HOME/BOWebServer/conf` (Linux の場合) にある `server.xml` ファイルを開きます。

次の手順を実行します。

1 **ポート**値が 8443 に設定されている SSL コネクタータグのコメントアウトを解除します。

2 ファイル内の次のフィールドを説明で示している値に設定します。

フィールド	説明
keystorefile	ロードされるサーバー証明書を保存したキーストアファイルのフルパス。
keystorepasswd	指定したキーストアファイルからサーバー証明書にアクセスするために使用されるパスワード。
keystoretype	サーバー証明書に使用されるキーストアファイルのタイプ。
keyAlias	キーストア内のサーバー証明書に使用されるエイリアス。

タスク 3: SAP BusinessObjects WebServer を開始します。

Windows

SAP BusinessObject WebServer サービスを停止するには、次の手順を実行します。

1 [**スタート**] → [**ファイル名を指定して実行**] をクリックします。[ファイル名を指定して実行] ダイアログボックスが開きます。

2 [名前] フィールドに **`services.msc`** と入力し、[**ENTER**] キーを押します。[サービス] ウィンドウが開きます。

3 右ペインで [**SAP BusinessObject WebServer**] を右クリックし、[**停止**] をクリックします。

Linux

`/opt/HP/BSM/PMDB/BOWebServer/bin` に移動し、次のコマンドを実行します。

`./startup.sh`

タスク 4: 設定を確認します。

設定が正常かどうかを確認するには、次の手順を実行します。

- **https://< ホスト名 >:8443/InfoViewApp** にログオンします

  ここで、< ホスト名 > は SHR サーバーの名前です。

- **https://< ホスト名 >:8443/CmcApp** にログオンします

  ここで、< ホスト名 > は SHR サーバーの名前です。

11 ライセンス取得

デフォルトでは、SHR には 60 日間有効な自動的にオンになる一時的なライセンスが含まれています。60 日間経過した後も継続して SHR を使用するには、永久的なライセンスをインストールする必要があります。

SHR ライセンスには、次のものが含まれています。

- **HP Service Health Reporter ソフトウェア**

  このライセンスには、データ収集フレームワーク、SAP BusinessObjects Enterprise、収集したメトリックを保存および処理するための高パフォーマンスなパフォーマンス管理データベース、追加設定なしのコンテンツパックが含まれています。さらに、最大 50 ノードのメトリックを収集して報告するためのエンタイトルメントも含まれています。

- **50 ノードの追加拡張パック**

  データ収集およびレポートのエンタイトルメントを追加し、環境に合わせてソリューションを拡張することができます。

SHR は、ライセンス取得のために、HP ライセンスマネージャーのライセンスパッケージと統合されます。HP ライセンスマネージャーは、SHR のライセンスフレームワーク、および一時的または永久的なライセンスのインストール機能を提供します。

永久的なライセンスを取得するには、HP ライセンスマネージャーを使用するか、HP ebware Web サイトを使用して HP Password Center から直接ライセンスを取得します。

永久的なライセンスキーの取得

永続的なライセンスキーを取得するには、次の手順を実行します。

1. 次の URL を使用して SHR 管理コンソールを開きます。

   http://< サーバー名 >**:21411/BSMRApp/logon.jsp**

   ここでの < サーバー名 > は、SHR がインストールされているサーバーの完全修飾ドメイン名です。

2. **[管理] > [ライセンス取得]** をクリックします。[HP ライセンスキー配布サービス] ページが開きます。
3. [ようこそ] の下にある [**新規ライセンスの生成**] をクリックします。
4. 自分のユーザー ID とパスワードを使用して、HP パスポートにログオンします。アカウントを持っていない場合は、操作を続ける前にアカウントを作成する必要があります。[注文番号] ページが開きます。
5. [注文番号] フィールドに注文番号を入力し、[**次へ**] をクリックします。[製品の選択] ページが開きます。
6. [**PERM**] を選択し、[**次へ**] をクリックします。[ライセンスの取得] ページが開きます。
7. [ライセンス所有者の検索または作成] を選択し、[ライセンス所有者の電子メールアドレス] フィールドに電子メールアドレスを入力します。
8. SHR ホストシステムの IP アドレスを入力し、[**次へ**] をクリックします。[ライセンス所有者の作成] ページが開きます。

9 次のライセンス所有者情報を入力します。

フィールド	説明
ライセンス所有者 (エンドユーザー) 情報の作成	ライセンス所有者の名前、電話番号、および電子メールアドレス。
会社の電子メールドメイン	ライセンス所有者の会社のドメイン名。
メールアドレス	ライセンス所有者のメールアドレス。
ライセンス所有者のプライバシーポリシー (オプション)	ライセンス所有者のプライバシーポリシーのオプションの設定。

10 [**次へ**] をクリックして続行します。[トランザクション要約] ページが開きます。

11 要約を確認し、[**次へ**] をクリックして続行します。[ライセンス証明書] ページが開きます。

12 ライセンス証明書の情報を確認し、ライセンスをシステムに保存して、[ライセンス証明書] ページを閉じます。

永久的なライセンスキーのインストール

永続的なライセンスをインストールするには、次の手順を実行します。

Windows の場合

1 管理者として SHR システムにログオンします。

2 **[スタート] > [プログラム] > [HP Software] > [SH Reporter] > [License Manager]** をクリックします。ライセンスキーのインストール / 復元ウィンドウが開きます。

3 [**ファイルからのライセンス キーのインストール / 復元**] をクリックします。[ファイルからのライセンス キーのインストール / 復元] ページが開きます。

4 保存したライセンス証明書の場所を参照し、[**ファイル内容の表示**] をクリックして、[**PERM**] を選択し、[**インストール**] をクリックします。

Linux の場合

1 ルートとして SHR システムにログオンします。

2 次のコマンドを実行します。

```
$PMDB_HOME/bin/LicenseManager.sh
```

ライセンスキーのインストール / 復元ウィンドウが開きます。

3 [**ファイルからのライセンス キーのインストール / 復元**] をクリックします。[ファイルからのライセンス キーのインストール / 復元] ページが開きます。

4 保存したライセンス証明書の場所を参照し、[**ファイル内容の表示**] をクリックして、[**PERM**] を選択し、[**インストール**] をクリックします。

SAP BOBJ ライセンスの再アクティブ化

SAP BOBJ ライセンスは、SHR ライセンスの有効性に依存します。SHR ライセンスが期限切れになった場合、SAP BOBJ ライセンスキーが自動的に無効になり、その結果、すべての SAP BOBJ サーバーが無効になります。SHR ライセンスを更新した後で管理コンソールにアクセスすると、SHR が自動的に SAP BOBJ ライセンスキーを再びアクティブにします。ただし、SAP BOBJ サーバーは無効な状態のままになっています。SAP BOBJ を機能させるには、次の手順を実行して、サーバーを手動で有効にする必要があります。

1 次の URL を使用して中央管理コンソールにログオンします。

   http://<SHR_System_FQDN>**:8080/CmcApp**

   ここでの <SHR_System_FQDN> は SHR システムの完全修飾ドメイン名です。

   管理者としてログオンします。

2 **[サーバー]** をクリックします。

3 それぞれのサーバーを右クリックし、[**サーバーの有効化**] をクリックします。

ライセンス使用権 (LTU)

テーブル 1 では、SHR で使用できるすべてのライセンス使用権を示します。

テーブル 1　[a] ライセンス使用権

ライセンス使用権	在庫商品識別番号 (SKU: Stock-keeping Unit)	説明
HP Service Health Reporter Standard Edition 50 Service Health Nodes ソフトウェア電子ライセンス使用権	TD905AAE	このライセンス使用権には次のコンテンツパックが含まれます。 • Systems/Virtualization Management コンテンツパック • SPI コンテンツパック • イベントコンテンツパック (OM、OMi) BSM EUM およびネットワークコンテンツパックはこのライセンス使用権では使用できません。
HP Service Health Reporter Advanced 50 Service Health Nodes ソフトウェア電子ライセンス使用権	TJ756AAE	このライセンス使用権は、SHR の出荷時に含まれるすべてのコンテンツパックのエンタイトルメントをユーザーに付与します。
HP Service Health Reporter Upgrade from Standard to Advanced 50 Service Health Nodes ソフトウェア電子ライセンス使用権	TD906AAE	このアップグレードライセンス使用権は、SHR を Standard Edition から Advanced Edition にアップグレードするための資格をユーザーに付与します。

テーブル 1　[a] ライセンス使用権

ライセンス使用権	在庫商品識別番号 (SKU: Stock-keeping Unit)	説明
HP Service Health Reporter add 50 Nodes for Standard or Advanced Service Health Nodes ソフトウェア電子ライセンス使用権	TJ757AAE	SHR用に50個の追加ノードのエンタイトルメントを追加するアドオンパックです。
Performance Insight to Service Health Reporter Advanced Core for Migration ソフトウェア電子ライセンス使用権	TJ773AAE	HP Service Health Reporter Advanced Core ライセンス使用権 (50 ノード) に移行するためのPerformance Insightユーザー向けの移行パックです。
Performance Insight to Service Health Reporter Advanced Migration 250 Service Health ソフトウェア電子ライセンス使用権	TJ774AAE	HP Service Health Reporter Advanced ライセンス使用権 (250 ノード) に移行するための Performance Insight ユーザー向けの移行パックです。
Performance Insight to Service Health Reporter Advanced Migration 1000 Service Health ソフトウェア電子ライセンス使用権	TJ775AAE	HP Service Health Reporter Advanced ライセンス使用権 (1000 ノード) に移行するための Performance Insight ユーザー向けの移行パックです。
Performance Insight to Service Health Reporter Advanced Migration 5000 Service Health ソフトウェア電子ライセンス使用権	TJ776AAE	HP Service Health Reporter Advanced ライセンス使用権 (5000 ノード) に移行するための Performance Insight ユーザー向けの移行パックです。
Performance Insight to Service Health Reporter Advanced Migration Unlimited Service Health ソフトウェア電子ライセンス使用権	TJ777AAE	HP Service Health Reporter Advanced Core電子ライセンス (ノード数無制限) に移行するための Performance Insight ユーザー向けの移行パックです。

a. ノードとは、実際または仮想のコンピュータシステム、またはネットワーク上のデバイス (たとえばプリンタ、ルーターまたはブリッジ) を指します。

12 アンインストール SHR

アプリケーション全体ではなく、個々のコンテンツパックを削除できます。HP Software インストーラーを使用して、SHR アプリケーションを削除することもできます。そのプロセスにより、コンテンツパックを含め、インストール済みのすべてのコンポーネントが削除されます。

データベースのバックアップの実行

SHR のアンインストールを開始する前に、SHR データベースをバックアップできます。バックアップの詳細については、データベースのバックアップとリカバリ ページ 169 を参照してください。

コンテンツパックのアンインストール

SHR をアンインストールする前に、コンテンツパックをアンインストールする必要があります。同じシステムに HP Service Health Optimizer (SHO) と SHR がインストールされている場合は、SHO に必要な次のコンテンツパックを残し、その他すべての SHR コンテンツパックをアンインストールできます。

共通のコンテンツパックコンポーネント：

- Core_Domain
- VirtualEnvPerf_Domain
- VirtualEnvPerf_Domain_VMWare
- SysPerf_Domain
- vCenter Collector コンテンツパック

RTSM がトポロジソースである場合のコンポーネント：

- SysPerf_ETL_PerformanceAgent (オプション。スタンドアロンホスト用)
- VirtualEnvPerf_ETL_HyperV_PerformanceAgent (オプション。HyperV ホスト用)

HPOM がトポロジソースである場合のコンポーネント：

- SysPerf_ETL_PerformanceAgent (オプション。スタンドアロンホスト用)
- VirtualEnvPerf_ETL_HyperV_PerformanceAgent (オプション。HyperV ホスト用)

コンテンツパックを午後 11 時にアンインストールしないでください。これは、アンインストール時に、PMDB Platform Timer サービスが停止されるためです。ただし、SHR は、保守のためにデータ処理ストリームを毎日午後 9 時に一時停止し、午後 11 時にそのストリームを再起動します。ストリームを再起動するには、PMDB Platform Timer サービスが実行されている必要があります。PMDB Platform Timer サービスが停止していると、SHR は、一時停止したデータ処理ストリームを再開できません。

この場合は、手動でジョブストリームを再開するか、または次のサイクル (次の日の午後 11 時) まで待機します。ストリームを再起動するには、次のコマンドを実行する必要があります。

- **`abcAdminUtil -resume -type loadBatch`**
- **`abcAdminUtil -resume -type runStep`**

デプロイメントマネージャを使用してコンテンツパックを削除するには、次の手順を実行します。

1 次の URL にアクセスします。

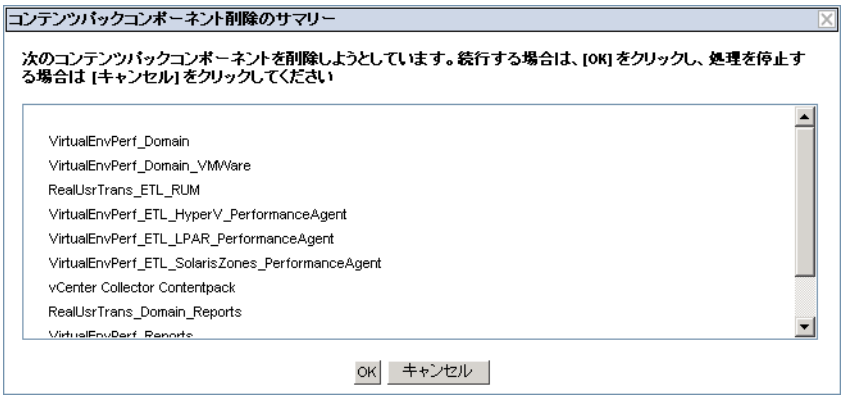
http://<SHR_ サーバー _FQDN>**:21411/BSMRApp**

2 [**ログイン名**] フィールドに `administrator` と入力し、[**ログイン**] をクリックして続行します。ホームページが開きます。

ほかのユーザーアカウントを使用して管理コンソールにアクセスする場合は、そのユーザーアカウントが管理者権限を持っていることを確認してください。

3 左側のペインで、[**管理**] をクリックし、[**デプロイメントマネージャ**] をクリックします。[デプロイメントマネージャ] ページが開きます。

4 [**削除**] 列で、削除するコンテンツパックコンポーネントの アイコンをクリックします。[コンテンツパックコンポーネント削除のサマリー] ダイアログボックスが開きます。



このダイアログボックスには、デプロイメントマネージャによって削除されるコンテンツパックコンポーネントの一覧が表示されます。この一覧には、選択したコンテンツパックコンポーネントとその他の従属コンポーネントが含まれています。

5 **[OK]** をクリックします。

コンテンツパックのアンインストールは正常に完了しました。

アンインストール SHR

すべてのコンテンツパックとともに SHR アプリケーション全体を削除するには、アプリケーションを直接アンインストールします。

SHR を削除するには、次の手順を実行します。

1 Sybase IQ がリモートシステムにインストールされている場合はこの手順をスキップします。Sybase IQ のプロセスを手動で停止します。

   Windows の場合

   a [サービス] ウィンドウで HP PMDB Platform Sybase サービスを停止します。

   b [Windows タスク マネージャ] を開き、[プロセス] タブに移動し、次のプロセスを終了します。

      — `iqsrv15.exe`

      — `dbstop.exe`

   Linux の場合

   a 次のコマンドを実行します。

      `ps -ef|grep iqsrv15`

   b コマンド出力で表示されたプロセス ID を書き留めます。

   c 次のコマンドを実行します。

      `kill -9` <pid>

      ここでの <pid> は、ステップ b で書き留めたプロセス ID です。

2 HP Software インストーラーを開始します。

   Windows の場合

   [**スタート**] → [**プログラム**] → [**HP Software**] → [**SH Reporter**] → [**Uninstall**] をクリックします。

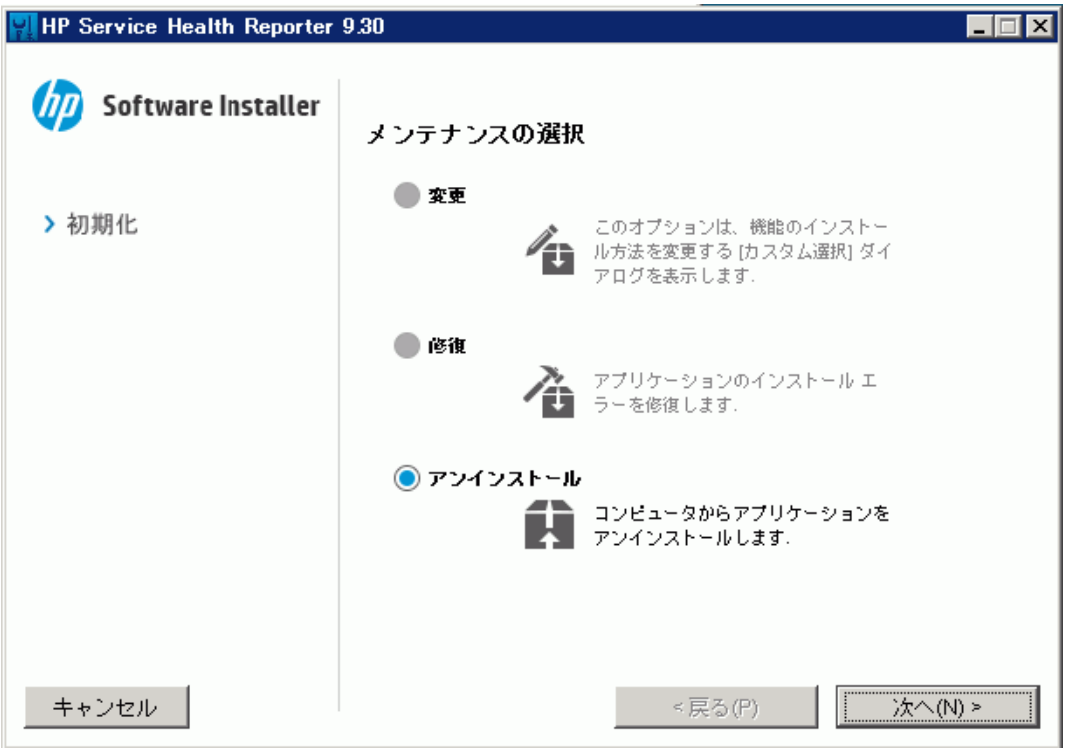
   Linux の場合

   `/opt/OV/Uninstall` に移動し、`setup.bin` ファイルを実行します。

   HP Software インストーラーが開きます。

   HP Software インストーラーは、ウィルス対策ソフトウェアなどの、アンインストールプロセスを妨げる可能性のあるアプリケーションまたはサービスをシステム内でチェックします。HP Software インストーラーが支障の存在を検出すると、警告またはエラーが生成され、[アプリケーションの要件チェックの警告] ウィンドウが開きます。

3 [**続行**] をクリックします。[アプリケーションのメンテナンス] ページが開きます。



4 [**メンテナンスの選択**] の下で、[**アンインストール**] が選択済みになっていることを確認してから、[**次へ**] をクリックします。[プレアンインストールの概要] ページが開きます。

SHR は、HP Software インストーラーに表示される [**変更**] または [**修復**] オプションをサポートしません。これらのオプションはデフォルトでは無効になっています。

5 [**アンインストール**] をクリックします。[アンインストール] ページが開きます。

6 アンインストールが完了した後、[削除] ダイアログボックスが開きます。

7 [**はい**] をクリックして、SHR ディレクトリを削除します。[アンインストールの完了] ページが開きます。

8 [**完了**] をクリックしてアンインストールを完了します。

9 [システムの再起動] メッセージボックスで [**はい**] をクリックし、システムを再起動します。

10 SHR ディレクトリを参照し、`HP-SHR` と `Business Objects` ディレクトリが削除済みであることをチェックします。フォルダーが存在する場合、手動で削除します。

SHR をシステムから正常にアンインストールしました。

アンインストールが完了したら、次の SHR データベースファイルを含むディレクトリを手動で削除する必要があります。

- `pmdb.db`
- `pmdb.iq`
- `pmdb.iqmsg`
- `pmdb.iqtmp`
- `pmdb.lmp`
- `pmdb.log`
- `pmdb_user_main01.iq`

システムでこれらの SHR ファイルを含むディレクトリを検索し、そのディレクトリを手動で削除します。

リモート Sybase IQ のアンインストール

リモートシステム上に Sybase IQ サーバーをインストールしていた場合は、次の手順を実行します。

リモート Sybase IQ のアンインストール手順を実行する前に、まず SHR をホストシステムから削除する必要があります。この操作により、Sybase IQ のアンインストール後にリモートデータベーススキーマが削除されます。

1 リモート Sybase IQ システムにログオンします。

2 Sybase IQ のプロセスを手動で停止します。

Windows の場合

a [サービス] ウィンドウで HP PMDB Platform Sybase サービスを停止します。

b [Windows タスク マネージャ] を開き、[プロセス] タブに移動し、次のプロセスを終了します。

— `iqsrv15.exe`

— `dbstop.exe`

Linux の場合

a 次のコマンドを実行します。

```
ps -ef|grep iqsrv15
```

b コマンド出力で表示されたプロセス ID を書き留めます。

c 次のコマンドを実行します。

```
kill -9 <pid>
```

ここでの <pid> は、ステップ b で書き留めたプロセス ID です。

3 次の手順を実行します (Windows の場合のみ)。

a [**スタート**] → [**プログラム**] → [**管理ツール**] → [**サービス**] をクリックします。[サービス] ウィンドウが開きます。

b [**Sybase IQ Agent 15.4**] を右クリックしてから、[**停止**] をクリックします。

c 作成した Sybase IQ サービスを右クリックしてから、[**停止**] をクリックします。

d コマンドプロンプトを開きます。

e `%PMDB_HOME%/bin` フォルダに移動します。

f 次のコマンドを実行します。

```
%PMDB_HOME%/bin/SybaseServiceCreation.bat -remove <INSTALLDIR>
```

ここでの <INSTALLDIR> は、Sybase IQ をインストールしたディレクトリです。

4 HP Software インストーラーを開始します。

Windows の場合

a [**スタート**] → [**設定**] → [**コントロール パネル**] をクリックします。

b [コントロール パネル] ウィンドウの [**プログラムの追加と削除**] をクリックします。

c [プログラムの追加と削除] ダイアログボックスで [**HP Service Health Reporter SybaseIQ**] をクリックし、[**変更 / 削除**] をクリックします。

Linux の場合

`/opt/OV/Uninstall` に移動し、`setup.bin` ファイルを実行します。

HP Software インストーラーが開きます。

HP Software インストーラーは、ウィルス対策ソフトウェアなどの、アンインストールプロセスを妨げる可能性のあるアプリケーションまたはサービスをシステム内でチェックします。HP Software インストーラーが支障の存在を検出すると、警告またはエラーが生成され、[アプリケーションの要件チェックの警告] ウィンドウが開きます。

5 [**続行**] をクリックします。[アプリケーションのメンテナンス] ページが開きます。

6 [**メンテナンスの選択**] の下で、[**アンインストール**] が選択済みになっていることを確認してから、[**次へ**] をクリックします。[プレアンインストールの概要] ページが開きます。

7 [**アンインストール**] をクリックします。[アンインストール] ページが開きます。

アンインストールが完了した後、[削除] ダイアログボックスが表示されます。

8 [**はい**] をクリックして、SHR ディレクトリを削除します。[アンインストールの完了] ページが開きます。

9 [**完了**] をクリックしてアンインストールを完了します。

10 Sybase IQ ディレクトリを参照し、`HP-SHR` フォルダが削除されたかどうかをチェックします。フォルダーが存在する場合、手動で削除します。

11 [システムの再起動] メッセージボックスで [**はい**] をクリックし、システムを再起動します。

Sybase IQ サーバーをリモートシステムから正常にアンインストールしました。

アンインストールが完了したら、次の SHR データベースファイルを含むディレクトリを手動で削除する必要があります。

- `pmdb.db`
- `pmdb.iq`
- `pmdb.iqmsg`
- `pmdb.iqtmp`
- `pmdb.lmp`
- `pmdb.log`
- `pmdb_user_main01.iq`

システムでこれらの SHR ファイルを含むディレクトリを検索し、そのディレクトリを手動で削除します。

SHR の手動アンインストール

停電やハードウェアの故障などの不測の事態が原因で SHR のインストールが失敗した場合、次の手順を実行し、既存の SHR インストールシステムを手動でクリーンアップすると、新規のインストールに進むことができます。

タスク 1: すべての SHR サービスの停止

Windows の場合

1 管理者としてホストシステムにログオンします。

2 [**スタート**] → [**ファイル名を指定して実行**] をクリックします。[ファイル名を指定して実行] ダイアログボックスが開きます。

3 [**名前**] フィールドに `services.msc` と入力し、[**ENTER**] キーを押します。[サービス] ウィンドウが開きます。

4 以下のサービスを右クリックし、[**停止**] を選択してサービスを停止します。

- HP PMDB Platform Message Broker
- HP PMDB Platform Administrator
- HP PMDB Platform IM
- HP PMDB Platform DB Logger
- HP PMDB Platform Collection
- HP PMDB Platform Timer
- HP PMDB Platform Sybase
- Sybase IQ Agent 15.4

リモートシステムに Sybase IQ をインストールしていた場合、そのリモートシステムで Sybase IQ Agent 15.4 サービスを停止する必要があります。

5 [サービス] ウィンドウを閉じます。

Linux の場合

プロンプトに次のコマンドを入力します。

`service <service-name> stop`

停止するサービスの名前で < サービス名 > を置換します。

例 : `service HP_PMDB_Platform_Administrator stop`

サービスの一覧

- **`service HP_PMDB_Platform_Administrator stop`**
- **`service HP_PMDB_Collection stop`**
- **`service HP_PMDB_DB_Logger stop`**
- **`service HP_PMDB_Platform_IM stop`**
- **`service HP_PMDB_Platform_Message_Broker stop`**
- **`service HP_PMDB_Platform_PostgreSQL stop`**
- **`service HP_PMDB_Platform_Sybase stop`**
- **`service HP_PMDB_Platform_Timer stop`**
- **`service BobjEnterprise120 stop`**

タスク 2: SAP BOBJ および PostgreSQL の削除

Windows の場合

1 Windows デスクトップで、[**スタート**] → [**設定**] → [**コントロール パネル**] をクリックします。

2 [コントロール パネル] ウィンドウの [**プログラムの追加と削除**] をクリックします。

3 [プログラムの追加と削除] ダイアログボックスで、[**SAP BusinessObjects Enterprise XI 3.1 SP3**] をクリックしてから、[**変更 / 削除**] をクリックし、SAP BOBJ Enterprise をアンインストールします。

4 アンインストールウィザードの指示に従って、アンインストールを完了します。

5 [プログラムの追加と削除] ダイアログボックスで、[**SAP BusinessObjects Enterprise XI 3.1 FP 3.5**] をクリックしてから、[**変更 / 削除**] をクリックし、SAP BOBJ Enterprise をアンインストールします。

6 アンインストールウィザードの指示に従って、アンインストールを完了します。

7 SAP BOBJ Enterprise を正常にアンインストールし終わったら、[プログラムの追加と削除] ダイアログボックスで、[**PostgreSQL 9.0**] をクリックしてから、[**変更 / 削除**] をクリックします。

8 アンインストールウィザードの指示に従って、アンインストールを完了します。

Linux の場合

SAP BOBJ を削除するには、次のシェルコマンドを実行します。

- ps -U SHRBOADMIN | awk '{print $1}' | xargs -i kill {}
- rm -rf /opt/HP/BSM/BO
- rm -f /etc/init.d/BobjEnterprise120
- find / -name "*BobjEnterprise*" -exec rm -f {} ¥;
- rm -rf /tmp/.SQLAnywhere
- rm -rf /root/.sqlanywhere12
- userdel -rf SHRBOADMIN

PostgreSQL を削除するには、次のシェルコマンドを実行します。

- /opt/HP/BSM/Postgres/uninstall-postgresql --mode unattended
- userdel postgres
- chkconfig --del HP_PMDB_Platform_PostgreSQL
- rm -f /etc/init.d/HP_PMDB_Platform_PostgreSQL
- rm -rf /opt/HP/BSM/Postgres/

タスク 3: Sybase IQ の削除

Windows の場合

1 Windows デスクトップで、[**スタート**] → [**設定**] → [**コントロール パネル**] をクリックします。

2 [コントロール パネル] ウィンドウの [**プログラムの追加と削除**] をクリックします。

3 [プログラムの追加と削除] ウィンドウで [**Sybase IQ Server Suite 15.4 (64-bit)**] をクリックしてから、[**変更 / 削除**] をクリックし、Sybase IQ アプリケーションを削除します。

4 Sybase IQ アンインストールウィザードで、[ようこそ] ページの [**次へ**] をクリックします。

5 削除しようとしている機能が選択済みであることを確認してから、[**次へ**] をクリックします。

6 [**次へ**] をクリックしてから [**アンインストール**] をクリックします。

7 [既存のファイルを削除] メッセージボックスで、[**すべてはい**] をクリックします。

8 [環境変数の復元] メッセージボックスで、[**すべてはい**] をクリックします。

9 [**終了**] をクリックしてアンインストールプロセスを完了します。

10 [**はい、コンピュータを再起動します**] オプションを選択してから、[**終了**] をクリックし、システムを再起動します。

Linux の場合

Sybase IQ を削除するには、次のシェルコマンドを実行します。

- /opt/HP/BSM/Sybase/sybuninstall/IQSuite/uninstall -i silent
- /opt/HP/BSM/Sybase/sybuninstall/IQClientSuite/uninstall -i silent
- rm -rf /opt/HP/BSM/Sybase
- chkconfig --del HP_PMDB_Platform_Sybase
- rm -f /etc/init.d/HP_PMDB_Platform_Sybase

タスク 4: Windows レジストリエントリの削除 (Windows の場合のみ)

このタスクは、他の HP 製品がシステムにインストールされていない場合のみ実行します。

1. Windows デスクトップで、[**スタート**] → [**ファイル名を指定して実行**] をクリックします。
2. [ファイル名を指定して実行] ダイアログボックスに **regedit** と入力し、[**ENTER**] キーを押します。[レジストリエディタ] ウィンドウが開きます。
3. [**HKEY_LOCAL_MACHINE**] を展開し、[**Software**] を展開してから、[**Hewlett-Packard**] を展開します。
4. [**BSM**] を展開し、[**HP OpenView**] を展開します。これらのフォルダーの下に一覧表示されている各コンポーネントは手動で削除する必要があります。
5. フォルダーをクリックし、パッケージ名と製品コードを書き留めます。

タスク 5: SHR コンポーネントの削除

Windows の場合

1. コンポーネントをアンインストールするには、Windows デスクトップで、[**スタート**] → [**ファイル名を指定して実行**] をクリックします。
2. [ファイル名を指定して実行] ダイアログボックスに **cmd** と入力し、[**ENTER**] キーを押します。[コマンドプロンプト] ウィンドウが開きます。
3. [コマンドプロンプト] に以下のコマンドを入力し、コンポーネントをアンインストールします。

   msiexec ¥x < 製品コード値 >

   ここでの < 製品コード値 > は、個々のコンポーネント別に [レジストリエディター] ウィンドウの右ペインに一覧表示されている値です。たとえば、HPPmdbMsgBus コンポーネントをアンインストールするには、次のように入力します。

   msiexec ¥x {F44672D8-C8A9-45F6-A215-C9CF138E6ED1}

   BSM および HP OpenView の下に一覧表示されているすべてのコンポーネントに対して、この手順を実行します。

Linux の場合

rpm パッケージを削除するには、次のコマンドを実行します。

rpm -e < パッケージ名 >

パッケージの一覧

a. HPSHRWBSEtl-9.30.000-1.x86_64
b. HPOvSecCo-11.10.035-1.x86_64
c. HPOvJPacc-11.10.035-1.x86_64
d. HPOvConf-11.10.035-1.x86_64
e. HPSHREtlSHlthBSM-9.30.000-1.x86_64

f HPSHRADEtl-9.30.000-1.x86_64

g HPSHRExchCore-9.30.000-1.x86_64

h HPSHRSmCoreVVM-9.30.000-1.x86_64

i HPSHREumEtlRum-9.30.000-1.x86_64

j HPSHRMSSqlCore-9.30.000-1.x86_64

k HPSHRWLSEtl-9.30.000-1.x86_64

l HPSHROraDBApp-9.30.000-1.x86_64

m HPOvPerlA-5.08.091-1.x86_64

n HPPmdbTomcat-9.30.000-1.x86_64

o HPSHRSmEtlPa-9.30.000-1.x86_64

p HPSHRSM-9.30.000-1.x86_64

q HPSHREumCore-9.30.000-1.x86_64

r HPSHRNwENps92-9.30.000-1.x86_64

s HPSHROraDBETL-9.30.000-1.x86_64

t HPSHRADApp-9.30.000-1.x86_64

u HPBsmFndJRE-9.20.191-1.x86_64

v HPPmdbPerl-9.30.000-1.x86_64

w HPOvJxpl-11.10.035-1.x86_64

x HPOvBbc-11.10.035-1.x86_64

y HPOvJbbc-11.10.035-1.x86_64

z HPOvSecCC-11.10.035-1.x86_64

aa HPOvDepl-11.10.035-1.x86_64

ab HPPmdbCollector-9.30.000-1.x86_64

ac HPPmdbMsgBus-9.30.000-1.x86_64

ad HPPmdbCore-9.30.000-1.x86_64

ae HPSHRNwENpsN92-9.30.000-1.x86_64

af HPSHRSmEtlSis-9.30.000-1.x86_64

ag HPSHROraDBCore-9.30.000-1.x86_64

ah HPSHRSmCoreV-9.30.000-1.x86_64

ai HPSHROMiEtl-9.30.000-1.x86_64

aj HPSHRWLSApp-9.30.000-1.x86_64

ak HPPmdbSybaseIQ-9.30.000-1.x86_64

al HPSHREumRum-9.30.000-1.x86_64

am HPSHRSmEtlVVmVc-9.30.000-1.x86_64

an HPSHRSmV-9.30.000-1.x86_64

ao HPSHRSmEtlSisDB-9.30.000-1.x86_64

ap HPSHRCoreWLS-9.30.000-1.x86_64
aq HPSHRMSSqlEtl-9.30.000-1.x86_64
ar HPSHROmEtl-9.30.000-1.x86_64
as HPPmdbSybIQESD1-9.30.000-1.x86_64
at HPSHRSmEtlVHyPa-9.30.000-1.x86_64
au HPPmdbAdmin-9.30.000-1.x86_64
av HPPmdbBOTomcat-9.30.000-1.x86_64
aw HPPmdbABC-9.30.000-1.x86_64
ax HPSHRSmEtlVvmPa-9.30.000-1.x86_64
ay HPSHRSmEtlVvmSiS-9.30.000-1.x86_64
az HPSHRSmVVm-9.30.000-1.x86_64
ba HPSHRNwPerf-9.30.000-1.x86_64
bb HPSHREumBpm-9.30.000-1.x86_64
bc HPSHROM-9.30.000-1.x86_64
bd HPSHRExchEtl07-9.30.000-1.x86_64
be HPSHRCoreSHlth-9.30.000-1.x86_64
bf HPSHRCoreAppS-9.30.000-1.x86_64
bg HPSHRADCore-9.30.000-1.x86_64
bh HPSHRCoreWBS-9.30.000-1.x86_64
bi HPPmdbBORebrand-9.30.000-1.x86_64
bj HPOvXpl-11.10.035-1.x86_64
bk HPOvJsec-11.10.035-1.x86_64
bl HPOvCtrl-11.10.035-1.x86_64
bm HPPmdbCommon-9.30.000-1.x86_64
bn HPBSMR9CP-9.30.000-1.x86_64
bo HPSHRSHlthA-9.30.000-1.x86_64
bp HPSHRMSAppCore-9.30.000-1.x86_64
bq HPSHRMSSqlApp-9.30.000-1.x86_64
br HPSHRCoreCP-9.30.000-1.x86_64
bs HPSHRSmEtlVLprPa-9.30.000-1.x86_64
bt HPSHRSmCore-9.30.000-1.x86_64
bu HPSHRExchApp-9.30.000-1.x86_64
bv HPOvSecCS-11.10.035-1.x86_64
bw HPPmdbLicAP-9.30.000-1.x86_64
bx HPSHRSmEtlVSolPa-9.30.000-1.x86_64
by HPSHRNwCore-9.30.000-1.x86_64
bz HPSHREumEtlBpm-9.30.000-1.x86_64
ca HPSHRExchEtl10-9.30.000-1.x86_64
cb HPSHRCoreOMi-9.30.000-1.x86_64
cc HPSHRWBSApp-9.30.000-1.x86_64

タスク 6: 個々の環境変数の削除

Windows の場合

1 [コントロール パネル] ウィンドウで、[**システム**] をダブルクリックします。[システムのプロパティ] ダイアログボックスが開きます。

2 [**詳細設定**] タブをクリックしてから、[**環境変数**] ボタンをクリックします。[環境変数] ダイアログボックスが開きます。

3 以下の変数を削除します。

- IQDIR15
- IQLOGDIR15
- IQPORT
- OvInstallDir
- PMDB_HOME
- SYBASE
- SYBASE_JRE6_64
- SYBROOT

4 SHR に関連しているものをすべて削除することによって、**PATH** 環境変数を編集します。

Linux の場合

特定の環境変数を削除するには、次のコマンドを実行します。

```
rm -f /etc/profile.d/setenv.sh
```

タスク 7: SHR フォルダーの削除

Windows の場合

1 SHR インストールディレクトリに移動します。

2 すべてのフォルダーを削除します。

上記の 7 つの手順を実行したら、システムを再起動します。

Linux の場合

SHR フォルダーを削除するには、次のコマンドを実行します。

```
rm -rf /opt/HP/BSM/PMDB
```

コンソールモードでの SHR のアンインストール (Linux)

コマンドラインコンソールから SHR をアンインストールするには、次の手順を実行します。

1 ローカルシステムにログオンします。

2 新しいプロンプトに次のコマンドを入力します。

```
./opt/OV/Uninstall/HP-SHR_9.30_setup.bin -i console
```

3 [**1**] キーを押してアンインストールを続行します。

4 プレインストールサマリを表示する画面で [**ENTER**] キーを押して続行します。

➤ インストーラーによって、アプリケーションパッケージが自動的にチェックされ、アンインストールされます。

5 プロンプトにしたがい、アンインストールを完了します。

リモートシステムにインストールされたコレクターのアンインストール

コレクターアプリケーションをすべてのコンテンツパックと共に削除する場合は、次の手順を実行できます。

1 HP Software インストーラーを開始します。

Windows の場合

[**スタート**] → [**プログラム**] → [**HP Software**] → [**SH Reporter**] → [**Uninstall**] をクリックします。

Linux の場合

`/opt/OV/Uninstall` に移動し、`setup.bin` ファイルを実行します。

HP Software インストーラーが開きます。

2 HP Software Installer の言語選択ページで、使用する言語を選択してから、[**OK**] をクリックします。

HP Software インストーラーは、ウィルス対策ソフトウェアなどの、アンインストールプロセスを妨げる可能性のあるアプリケーションまたはサービスをシステム内でチェックします。HP Software インストーラーが支障の存在を検出すると、警告またはエラーが生成され、[アプリケーションの要件チェックの警告] ウィンドウが開きます。

3 [**続行**] をクリックします。[アプリケーションのメンテナンス] ページが開きます。

4 [**メンテナンスの選択**] の下で、[**アンインストール**] が選択済みになっていることを確認してから、[**次へ**] をクリックします。[プレアンインストールの概要] ページが開きます。

➤ SHR は、HP Software インストーラーに表示される [**変更**] または [**修復**] オプションをサポートしません。これらのオプションはデフォルトでは無効になっています。

5 [**アンインストール**] をクリックします。[アンインストール] ページが開きます。

6 アンインストールが完了した後、[**削除**] ダイアログボックスが表示されます。

7 [**はい**] をクリックして、リモートコレクターを削除します。[**アンインストールの完了**] ページが開きます。

8 [**完了**] をクリックしてアンインストールを完了します。

13 データベースのバックアップとリカバリ

SHR を使用して、データベースに不具合が起きた時にデータが失われないように、データベースのバックアップおよびリカバリを行うことができます。実働環境で SHR の使用を開始する前に、データベースを定期的にバックアップすることをお勧めします。

SHR には、次のようなバックアップオプションが用意されています。

- **完全バックアップ：** 完全バックアップでは、データベースファイルおよびトランザクションログを含むデータベース全体のバックアップをとることができます。完全バックアップを毎週とることをお勧めします。
- **増分バックアップ：** 増分バックアップでは、トランザクションログのバックアップをとることができます。この場合、最後の完全バックアップ以降に変更または追加されたファイルのバックアップがとられます。増分バックアップは、毎日とることをお勧めします。

定期的な間隔で実行するように完全バックアップおよび増分バックアップのタスクをスケジュールする必要があります。

データベースに不具合が起きた場合には、SHR を使用して、バックアップ場所からデータベースをリカバリすることができます。

Windows でのデータベースのバックアップの実行

タスク 1: バックアップスクリプトの編集

SHR には、完全バックアップ用に 1 つと、増分バックアップ用に 1 つの、2 つのバックアップスクリプトが用意されています。バックアッププロセスを開始する前に、各自の要件に合わせてこれらのスクリプトを編集する必要があります。これらのスクリプトは、`%PMDB_HOME%¥scripts¥Sybase` フォルダーに用意されています。スクリプトは次のとおりです。

- 完全バックアップ用：`IQ_backup_full.sql`
- 増分バックアップ用： `IQ_backup_incr_since_full.sql`（増分バックアップ用）

スクリプトを編集するには、次の手順を実行します。

1. `%PMDB_HOME%¥scripts¥Sybase` フォルダーを参照します。
2. メモ帳アプリケーションで `IQ_backup_full.sql` を開きます。

   .sql スクリプトの最後のパラメーターに、バックアップファイルの保存先の場所を入力します。たとえば、次のような .sql スクリプトの場合、バックアップ先の場所として `E:¥HP-SHR¥Backup` を入力できます。

   ```
   dsi_pmdb_backup
   'FULL',NULL,'READWRITE_FILES_ONLY',NULL,NULL,NULL,NULL,NULL,'D',' バックアップ先の場所 '
   ```

   同様に、増分バックアップの場合は、次のようにバックアップ先の場所を入力します。

```
dsi_pmdb_backup
'INCREMENTAL_SINCE_FULL',NULL,'READWRITE_FILES_ONLY',NULL,NULL,NULL,N
ULL,NULL,'D','バックアップ先の場所'
```

➤ リモートデータベースを使用する SHR のインストールでは、バックアップ先の場所には、SybaseIQ データベースサーバー上の有効なパスを示します。

スクリプトは、完全バックアップと増分バックアップのそれぞれに対して、Execute_FullBackup_Script.bat と Execute_IncrSncFullBackup_Script.bat という 2 つのバッチファイルを使って実行されます。これらのバッチファイルは、%PMDB_HOME%¥DR¥ に用意されています。

スクリプトの実行後、曜日と指定場所を接尾辞に使ったファイル名の付いたデータベースバックアップが作成されます。

タスク 2: コピーバックアップスクリプトの編集

SHR には、指定場所にある前回の完全バックアップのバックアップをとるコピーバックアップスクリプトが用意されています。

コピーバックアップスクリプト (%PMDB_HOME%¥DR ディレクトリ内) を編集するには、完全バックアップ手順の開始の前に、既存の完全バックアップファイルの場所およびコピーしたファイルの保存先の場所を入力します。

```
COPY "既存の完全バックアップファイルの場所" "コピー先の場所">
%PMDB_HOME%¥tmp¥Copy_Backup.txt 2>&1 /Y /V
```

スクリプトの例を次に示します。

```
COPY "E:¥HP-SHR¥Backup¥Full*" "E:¥HP-SHR¥Backup¥Old¥" >
%PMDB_HOME%¥tmp¥Copy_Backup.txt 2>&1 /Y /V
```

タスク 3: バックアップのスケジュール

データベースのバックアップを定期的にとるには、Windows のタスク スケジューラを使用して、バックアップスクリプトを実行するようにスケジュールする必要があります。完全バックアップは週に 1 回実行し、増分バックアップは 1 日 1 回実行することをお勧めします。

コピーバックアップスクリプトを実行するスケジュール

コピーバックアップスクリプトは、完全バックアップのデータベースファイルのコピーを指定場所に作成し、既存の完全バックアップが上書きされないようにします。完全バックアップスクリプトの実行の前に、その都度コピーバックアップスクリプトを実行するようにスケジュールする必要があります。

1. [**開始**] -> [**コントロール パネル**] -> [**スケジュールされたタスク**] へ進みます。
2. [**スケジュールされたタスクの追加**] をダブルクリックします。[スケジュールされたタスク] ウィザードが開きます。
3. [**次へ**] をクリックします。
4. %PMDB_HOME%¥scripts に移動し、CopyBackup.bat を選択してから [**次へ**] をクリックします。
5. タスクの名前を入力し、[**このタスクの実行**] の下で [**週単位**] をクリックします。これで、このタスクが実行される頻度が指定されます。[**次へ**] をクリックします。
6. 次のように、タスクを開始する日時を選択します。
   a. 開始時刻を設定します。
   b. 週の頻度に対してはデフォルト値の 1 を変更しないでください。

c 曜日を選択します。このタスクは、作業負荷が小さい日にスケジュールすることをお勧めします。1 週間に複数回完全バックアップをとる場合は、複数の日を選択できます。

7 [**次へ**] をクリックします。

8 アカウント情報を設定するユーザー名とパスワードを入力します。

9 [**完了**] をクリックします。

完全バックアップスクリプトを実行するスケジュール

コピーバックアップスクリプトの後に、完全バックアップスクリプトを実行するようにスケジュールする必要があります。

1 [**開始**] -> [**コントロール パネル**] -> [**スケジュールされたタスク**] へ進みます。

2 [**スケジュールされたタスクの追加**] をダブルクリックします。[スケジュールされたタスク] ウィザードが開きます。

3 [**次へ**] をクリックします。

4 `%PMDB_HOME%¥scripts` に移動し、`Execute_FullBackup_Script.bat` を選択してから [**次へ**] をクリックします。

5 タスクの名前を入力し、[**このタスクの実行**] の下で [**週単位**] をクリックします。これで、このタスクが実行される頻度が指定されます。[**次へ**] をクリックします。

6 次のように、タスクを開始する日時を選択します。

a 開始時刻を設定します。

b 週の頻度に対してはデフォルト値の 1 を変更しないでください。

c 曜日を選択します。このタスクは、作業負荷が小さい日にスケジュールすることをお勧めします。1 週間に複数回完全バックアップをとる場合は、複数の日を選択できます。

7 [**次へ**] をクリックします。

8 アカウント情報を設定するユーザー名とパスワードを入力します。

9 [**完了**] をクリックします。

増分バックアップスクリプトを実行するスケジュール

増分バックアップスクリプトは、毎日 1 回実行するようにスケジュールする必要があります。

1 [**開始**] -> [**コントロール パネル**] -> [**スケジュールされたタスク**] へ進みます。

2 [**スケジュールされたタスクの追加**] をダブルクリックします。[スケジュールされたタスク] ウィザードが開きます。

3 [**次へ**] をクリックします。

4 `%PMDB_HOME%¥scripts` に移動し、`Execute_FullBackup_Script.bat` を選択してから [**次へ**] をクリックします。

5 タスクの名前を入力し、[**このタスクの実行**] の下で [**日単位**] をクリックします。これで、このタスクが実行される頻度が指定されます。[**次へ**] をクリックします。

6 次のように、タスクを開始する日時を選択します。

a 開始時刻を設定します。

b [**このタスクの実行**] の下の [**日単位**] のデフォルト値を変更しないでください。

c 開始日付を設定します。

7 [**次へ**] をクリックします。

8 アカウント情報を設定するユーザー名とパスワードを入力します。

9 [**完了**] をクリックします。

Linux でのデータベースのバックアップの実行

タスク 1: バックアップスクリプトの編集

SHR には、完全バックアップ用に 1 つと、増分バックアップ用に 1 つの、2 つのバックアップスクリプトが用意されています。バックアッププロセスを開始する前に、各自の要件に合わせてこれらのスクリプトを編集する必要があります。

これらのスクリプトは、`$PMDB_HOME/scripts/Sybase` ディレクトリに用意されています。

スクリプトは次のとおりです。

- 完全バックアップ用 : `IQ_backup_full.sql`
- 増分バックアップ用 : `IQ_backup_incr_since_full.sql`

スクリプトを編集するには、次の手順を実行します。

1 `$PMDB_HOME/scripts/Sybase` ディレクトリに移動します。

2 テキストエディターアプリケーションで `IQ_backup_full.sql` を開きます。

3 .sql スクリプトの最後のパラメーターに、バックアップファイルの保存先の場所を入力します。つまり、「バックアップ先の場所」を実際の場所に置き換えます。

```
dsi_pmdb_backup
'FULL',NULL,'READWRITE_FILES_ONLY',NULL,NULL,NULL,NULL,NULL,'D','バックアップ先の場所'
```

4 同様に、増分バックアップスクリプト (`IQ_backup_incr_since_full.sql`) の場合は、次のようにバックアップ先の場所を入力します。

```
dsi_pmdb_backup
'INCREMENTAL_SINCE_FULL',NULL,'READWRITE_FILES_ONLY',NULL,NULL,NULL,NULL,
NULL,'D','バックアップ先の場所'
```

上記の .sql スクリプトは、次のシェルスクリプトファイルによって実行されます

- Execute_FullBackup_Script.sh (完全バックアップ)
- Execute_IncSncFullBackup_Script.sh (増分バックアップ)

これらのシェルスクリプトは、`$PMDB_HOME/DR` ディレクトリに用意されています。

これらのスクリプトの実行後、曜日と指定場所を接尾辞に使ったファイル名の付いたデータベースバックアップが作成されます。

タスク 2: コピーバックアップスクリプトの編集

SHR には、指定場所にある前回の完全バックアップのバックアップをとるコピーバックアップスクリプトが用意されています。

コピーバックアップスクリプトを編集するには、完全バックアップ手順の開始の前に、既存の完全バックアップファイルの場所およびコピーしたファイルの保存先の場所を入力します。

```
COPY "既存の完全バックアップファイルの場所" "コピー先の場所"> $PMDB_HOME/tmp/Copy_
Backup.txt 2>&1
```

「既存の完全バックアップファイルの場所」と「コピー先の場所」は、実際の場所の詳細に置き換えます。

スクリプトの例：

```
cp "/disk1/HP-SHR/Backup/Full*" "/disk1/HP-SHR/Backup/Old/" > $PMDB_HOME/tmp/
Copy_Backup.txt
2>&1
```

タスク 3: バックアップのスケジュール

データベースのバックアップを定期的にとるには、Linux の CronJobs スケジューラを使用して、バックアップスクリプトを実行するようにスケジュールする必要があります。完全バックアップは週に 1 回とり、増分バックアップは 1 日 1 回とることをお勧めします。

コピーバックアップスクリプトは、完全バックアップのデータベースファイルのコピーを指定場所に作成し、既存のバックアップが上書きされないようにします。完全バックアップスクリプトの実行の前に、その都度コピーバックアップスクリプトを実行するようにスケジュールする必要があります。

Linux で cronjob スケジューラを設定するには、次の手順を実行します。

1 crontab ファイルを編集するには、Linux Terminal で次のコマンドを入力します。

   crontab -e

2 コピーバックアップスクリプトを毎日実行するスケジュール：

   次の行を crontab ファイルに入力します。

   0 15 * * * $PMDB_HOME/DR/Copy_Backup.sh

   上記の例では、コピーバックアップスクリプトが毎日 15:00 に実行されます。

3 完全バックアップスクリプトを週に 1 回実行するスケジュール：

   次の行を crontab ファイルに入力します。

   0 15 * * 1 $PMDB_HOME/DR/Execute_FullBackup_Script.sh

   上記の例では、完全バックアップが週の最初の日の 15:00 に実行されます。

4 増分バックアップスクリプトを毎日実行するスケジュール：

   次の行を crontab ファイルに入力します。

   0 15 * * * $PMDB_HOME/DR/Execute_IncSncFullBackup_Script.sh

   上記の例では、増分バックアップスクリプトが毎日 15:00 に実行されます。

5 エントリを追加した後で、crontab ファイルを保存します。

Windows でのデータベースの復元

データベースに不具合が起きた場合には、SHR を使用して、既存のデータベースバックアップからデータベースを復元できます。次の手順を実行します。

1 次の手順を実行して、HP_PMDB_Platform_Sybase サービスを停止します。

   a [**スタート**] → [**ファイル名を指定して実行**] をクリックします。[ファイル名を指定して実行] ダイアログボックスが開きます。

   b [名前] フィールドに services.msc と入力し、[**ENTER**] キーを押します。[サービス] ウィンドウが開きます。

   c 右側のペインで、[**HP_PMDB_Platform_Sybase**] サービスを右クリックしてから [**停止**] をクリックします。

2 .db、.log、および .iq の拡張子の付いたすべてのファイルをデータベースファイルの場所から取り出し、システム上の他の任意の場所に移動します。これらのファイルは、復元プロセスで再作成されます。

3 SybaseIQ サーバーを開始します。コマンドプロンプトで、次のコマンドを実行します。

```
start_iq
@< インストールディレクトリ >¥Sybase¥IQ-15_4¥scripts¥pmdbConfig.cfg
```

コマンドは、1 行に入力します。

4 次の手順を実行して SybaseIQ サーバーに接続します。

a SHR システムで、[**スタート**] -> [**ファイル名を指定して実行**] をクリックします。[ファイル名を指定して実行] ダイアログボックスが開きます。

b [名前] フィールドに dbisql と入力してから、[**ENTER**] キーを押します。Interactive SQL プログラムの [接続] ダイアログボックスが開きます。

c [**識別**] タブに次のように入力します。

– [ユーザー ID] フィールドに dba と入力します。

– [パスワード] フィールドに sql と入力します。

– [サーバー名] フィールドに、SHR SybaseIQ データベースのインストール先のサーバーの名前を入力します。

– [データベース名] フィールドに utility_db と入力します。

d [**接続**] をクリックします。Interactive SQL ウィンドウが開きます。

5 完全バックアップを復元します。

[SQL ステートメント] ボックスに、次のような SQL ステートメントを入力します。

RESTORE DATABASE < データベースのパス > FROM < バックアップファイルが保存されている場所 >

以下に例を示します。RESTORE DATABASE E:¥SybaseDB¥pmdb.db FROM E:¥HP-SHR¥backup¥Full.Sunday

6 完全バックアップの復元後に、増分バックアップ (存在する場合) を復元します。

増分バックアップファイルが複数個ある場合、最新の増分バックアップを選択して復元します。たとえば、データベースが木曜日に不具合を起こした場合に、完全バックアップがその前の日曜日にとられている場合は、日曜日の完全バックアップファイルを復元してから、前日の水曜日にとられた増分バックアップを復元する必要があります。

[SQL ステートメント] ボックスで増分バックアップを復元するには、次のような SQL ステートメントを入力します。

RESTORE DATABASE < データベースのパス > FROM < 増分バックアップファイルが保存されている場所 >

以下に例を示します。RESTORE DATABASE E:¥SybaseDB¥pmdb.db FROM E:¥HP-SHR¥backup¥Incr_sncfull.Wednesday

7 データベースを復元したら、アクセスするためにそのデータベースを開始する必要があります。

組み込み Sybase IQ データベースを開始するには、次の手順を実行します。

a [**スタート**] → [**ファイル名を指定して実行**] をクリックします。[ファイル名を指定して実行] ダイアログボックスが開きます。

b [名前] フィールドに services.msc と入力し、[**ENTER**] キーを押します。[サービス] ウィンドウが開きます。

c 右側のペインで、[**HP_PMDB_Platform_Sybase**] サービスを右クリックしてから [**開始**] をクリックします。

リモート Sybase IQ データベースを開始するには、次の手順を実行します。

a リモートシステムにログオンします。管理者の権限を持っている必要があります。

b [**スタート**] → [**ファイル名を指定して実行**] をクリックします。[ファイル名を指定して実行] ダイアログボックスが開きます。

c cmd と入力し、[**ENTER**] キーを押して、コマンドプロンプトウィンドウを開きます。

d コマンドプロンプトで、次のコマンドを入力して Sybase IQ データベースを起動します。

start_iq
@<インストールディレクトリ >**¥Sybase¥IQ-15_4¥scripts¥pmdbConfig.cfg** <Sybase データファイルの場所 **>¥pmdb.db**

ここでの < インストールディレクトリ > は SHR をインストールする場所で、**<**Sybase データファイルの場所 **>** は Sybase IQ データベースファイルが保存されている場所です。

Linux でのデータベースの復元

データベースに不具合が起きた場合には、SHR を使用して、既存のデータベースバックアップからデータベースを復元できます。次の手順を実行します。

1 HP_PMDB_Platform_Sybase サービスを停止します。

- **cd /etc/init.d**
- **service HP_PMDB_Platform_Sybase stop**

2 .db、.log、および .iq の拡張子の付いたすべてのファイルをデータベースの場所から取り出し、システム上の他の任意の場所に移動します。これらのファイルは、復元プロセスで再作成されます。

3 SybaseIQ サーバーを開始します。コマンドプロンプトで、次のコマンドを実行します。

start_iq @/opt/HP/BSM/Sybase/IQ-15_4/scripts/pmdbConfig.cfg

コマンドは、1 行に入力します。

4 SybaseIQ サーバーに接続します。

dbisql-c
"uid=dba;pwd=sql;dbn=utility_db;eng=< サーバー名 >;
commlinks=tcpip(host=< ホスト名 >;commlinks=tcpip(host=< ホスト名 >;
port=21424)"

例 :

dbisql -c
"uid=dba;pwd=sql;dbn=utility_db;eng=SHRLR02;commlinks=tcpip(host=SHRL
R02.DOMAIN.COM;p

5 同じパス / ドライブに完全バックアップを復元します。

[SQL ステートメント] ボックスに、次のような SQL ステートメントを入力します。

RESTORE DATABASE < データベースのパス > FROM < バックアップファイルが保存されている場所 >

以下に例を示します。

RESTORE DATABASE /root/SHR_Sybase/pmdb.db FROM /root/HPSHR/backup/Full.Sunday

6 異なるパス / ドライブにデータベースを復元するには、次のコマンドを実行します

Restore database < データベースのパス > from < バックアップファイルが保存されている場所 >

RENAME IQ_SYSTEM_MAIN TO <pmdb.iq へのパス >

RENAME IQ_SYSTEM_TEMP TO <pmdb.iqtmp へのパス >

RENAME pmdb_user_main TO <pmdb_user_main01.iq へのパス >

pmdb.db へのパスが存在することを確認します。

上記のすべてのコマンドを一緒に実行します。

7 完全バックアップの復元後に、増分バックアップ (存在する場合) を復元します。

増分バックアップファイルが複数個ある場合、最新の増分バックアップを選択して復元します。

[SQL ステートメント] ボックスで同じパス / ドライブに増分バックアップを復元するには、次のような SQL ステートメントを入力します。

RESTORE DATABASE < データベースへのパス > **FROM** < 増分バックアップファイルが保存されている場所 >

RENAME IQ_SYSTEM_MAIN TO <pmdb.iq へのパス >

RENAME IQ_SYSTEM_TEMP TO <pmdb.iqtmp へのパス >

RENAME pmdb_user_main TO <pmdb_user_main01.iq へのパス >

8 Sybase サービスを停止して開始します。

- **service HP_PMDB_Platform_Sybase stop**
- **service HP_PMDB_Platform_Sybase start**

14 SHR インストールのトラブルシューティング

本ガイドのこの項では、SHR のインストールが失敗する原因となる可能性のある問題と、そのトラブルシューティングの方法について説明します。

SHR ログファイル

SHR は、インストーラー、コレクター、ローダー、メタデータリポジトリ、内部監視、管理コンソール、パッケージマネージャー、SHR サービス、データ処理などのモジュールごとに、一連のログファイルを保持します。障害の発生時には、これらのログファイルにエラーメッセージが記録されます。SHR で何らかの問題が発生した場合、このログファイルをトラブルシューティングツールとして使用できます。

この項では、以下の項目について説明します。

- インストールのログファイル
- インストール後の設定ログファイル

インストールのログファイル

SHR またはコンテンツパックのインストール中に問題が生じた場合、インストールが失敗したことを通知するエラーメッセージが HP Software Installer で生成されます。ただし、そのエラーメッセージに、問題解決に役立つ必要な情報がすべて示されているとは限りません。または、トラブルシューティングツールの 1 つとして、インストールログファイルを使用することもできます。以下の表に、インストールログファイルとその場所を一覧で示します。

ログファイル	場所

SHR インストールログファイル	*Windows:*
	`%temp%¥..¥HPOvInstaller¥HP-SHR_9.30¥HP-SHR_9.30_<タイムスタンプ>_HPOvInstallerLog.html`
	`%temp%¥..¥HPOvInstaller¥HP-SHR_9.30¥HP-SHR_9.30_<タイムスタンプ>_HPOvInstallerLog.txt`
	Linux:
	`/tmp/../HPOvInstaller/HP-SHR_9.30/HP-SHR_9.30_<タイムスタンプ>_HPOvInstallerLog.html`
	`/tmp/../HPOvInstaller/HP-SHR_9.30/HP-SHR_9.30_<タイムスタンプ>_HPOvInstallerLog.txt`
	このフォルダーは、LCore コンポーネントや OVPerl など、SHR のコンポーネントごとにログファイルを保管します。ただし、トラブルシューティングを行うために、インストーラーログを使用できます。
	Linux のログファイルには、インストールが正常に完了した場合でも次のエラーメッセージが含まれる場合があります。
	`/bin/bash: error importing function definition for 'module'`
	このメッセージは無視してください。

コンテンツパックのインストールログファイル	*Windows:* %PMDB_HOME%¥log¥packagemanager.log *Linux:* $PMDB_HOME/log/packagemanager.log

ログファイル	場所
SAP BusinessObjects Enterprise のログファイル	<SAP BOBJ インストールディレクトリ >¥BusinessObjects Enterprise 12.0¥Logging¥BOEInstall_0.log <SAP BOBJインストールディレクトリ >;¥BusinessObjects Enterprise 12.0¥Logging¥BOE_FP_3_5_Install_0.log
Sybase IQ のログファイル	%USERPROFILE%¥IQ15Console.log Sybase IQ をリモートでインストールした場合、このログファイルはリモートシステムの以下の場所に置かれています。 %temp%¥..¥HPOvInstaller¥HP-SHR-SybaseIQ_9.30¥ このログファイルには、タイムスタンプが付加されています。 以下に例を示します。 HP-SHR-SybaseIQ_9.30_2012.09.16_08_45_HPOvInstallerLog.html HP-SHR-SybaseIQ_9.30_2012.09.16_08_45_HPOvInstallerLog.txt 問題の原因を識別し終わったら、Sybase IQ の資料を参照して訂正します。最新の資料は **http://sybooks.sybase.com/** で入手できます。
Postgresql-<date and time>.log	PostgreSQL Service のログファイル。

インストール後の設定ログファイル

インストール後の設定ログファイルは、インストール後の設定フェーズ中に実行された操作の詳細を示します。ログファイル (postinstallconfig.log) は、%PMDB_HOME%¥log (Windows) または $PMDB_HOME/log (Linux) からアクセスできます。

このログファイルには、以下が書き込まれています。

- Sybase IQ 上でのデータベーススキーマの作成に関する詳細。
- MySQL 上での SHR 管理データベーススキーマの作成に関する詳細。

SHR インストールのトラブルシューティング

SHR のインストールが失敗する原因となる可能性のある問題と、そのトラブルシューティングの方法を次に示します。

Sybase IQ データベースのクラッシュに関する問題

問題

SHR に搭載されている Sybase IQ は、場合によっては製品の実行時にクラッシュすることがあります。このクラッシュが発生した場合、管理コンソールの [ホーム] ページでは、該当データベースのステータスにアイコンが表示されます。さらに、クラッシュ後は、SHR Sybase サービスが [サービス] ウィンドウで実行中であっても、Windows タスクマネージャーのプロセス一覧に Sybase IQ プロセス (`iqsrv15.exe`) は表示されません。

解決方法

このクラッシュシナリオに関する既知の解決方法はありません。ただし、SHR には Sybase IQ 再起動スクリプトファイル `SHRIQFix.bat` が用意されています。これは、Sybase IQ が停止したかどうかをチェックし、クラッシュのたびにデータベースを自動的に再起動します。タスクウィザードを使用して、このファイルの実行を手動でスケジュールする必要があります。このスクリプトファイルは、`%PMDB_HOME%¥bin` フォルダーに置かれます。

このスクリプトファイルは、リモートシステムにインストールされた Sybase IQ に対しては効果はありません。その場合、Sybase IQ がクラッシュしたかどうかを検証してから、[サービス] ウィンドウからデータベースを手動で再起動する必要があります。

SHR と Sybase IQ がインストールされたシステムで再起動スクリプトファイルをスケジュールするには、次の手順を実行します。

1. [**スタート**] → [**プログラム**] → [**アクセサリ**] → [**システム ツール**] → [**タスク**] をクリックします。[タスク] ウィンドウが開きます。
2. [**スケジュールされたタスクの追加**] をダブルクリックします。[スケジュールされたタスク] ウィザードが開きます。
3. [**次へ**] ボタンをクリックして先に進みます。
4. 次のページで [**参照**] をクリックします。[実行するプログラムを選択してください] ウィンドウが開きます。
5. `%PMDB_HOME%¥bin folder` に移動し、`SHRIQFix.bat` を選択してから [**開く**] をクリックします。
6. [**次へ**] ボタンをクリックして先に進みます。
7. 次のページで、タスクの名前をテキストボックスに入力してから、[このタスクの実行] の下の [日単位] を選択します。[**次へ**] をクリックして先に進みます。
8. 次のページで、実行するタスクの開始時刻、開始日、および頻度を指定します。
9. [**次へ**] をクリックして先に進みます。
10. 次のページで、Windows ユーザー資格情報を入力し、[**次へ**] をクリックします。
11. 次のページで、[**終了] をクリックしたときに詳細プロパティを開く**] チェックボックスを選択してから、[**終了**] をクリックします。[詳細プロパティ] ダイアログボックスが開きます。
12. [**スケジュール**] タブをクリックしてから、[**詳細**] をクリックします。[スケジュール オプションの詳細設定] ダイアログボックスが開きます。
13. [**タスクを繰り返し実行**] を選択してから、タスクを実行する時刻を [`Every`] フィールドに指定します。

14 [**OK**] をクリックして、[スケジュール オプションの詳細設定] ダイアログボックスを閉じます。

15 [OK] をクリックして、[詳細プロパティ] ダイアログボックスを閉じます。

仮想マシンで環境変数が設定されない

問題

SHR を仮想マシンにインストールし、インストール後にそのマシンを再起動しない場合、インストーラーによって設定された環境変数をユーザーは使用できません。

解決方法

SHR のインストール後、仮想マシンを再起動します。

あるセッションで設定した環境変数が、他のセッションで表示されない

問題

インストール時に設定した環境変数が、インストール後セッション時には表示されません。それが原因で、ポストインストールの設定とコンテンツパックのインストールが失敗する可能性があります。

解決方法

この問題が起きるのは、1 つのターミナルサービスクライアントセッション時に SHR がインストールされてから、別のターミナルサービスクライアントセッション時にポストインストールの設定タスクが試みられた場合のみです。

これを解決するには、次の手順を実行します。

1 現在のセッションで、デスクトップの [**マイ コンピューター**] を右クリックしてから、[**プロパティ**] をクリックします。[システムのプロパティ] ダイアログボックスが開きます。

2 [詳細設定] タブをクリックします。

3 [**環境変数**] をクリックします。[環境変数] ダイアログボックスが開きます。

4 **[OK]** をクリックします。

5 [システムのプロパティ] ダイアログボックスで [**OK**] をクリックします。

データベーススキーマの作成にかなり時間がかかる

問題

インストール後の設定段階で、必要な値を入力した後に管理コンソールの [データベーススキーマの作成] ページの [**次へ**] ボタンをクリックしても何もアクティビティが起きないため、ユーザーはプロセスの完了を長時間待つ必要があります。

解決方法

Web ブラウザのキャッシュをクリアして、ページを再読み込みし、手順を再度実行します。

コンテンツパックのインストールが失敗する

問題

コンテンツパックのインストールが失敗した場合、インストールの失敗が管理コンソールに表示されます。ただし、失敗したコンテンツパックのデータ処理ストリームが管理コンソール内で更新されることはありません。

解決方法

この問題を解決するには、失敗したコンテンツパックをアンインストールする必要があります。その手順については、コンテンツパックのアンインストール ページ 155 を参照してください。

コンテンツパックのアンインストールが失敗する

問題

コンテンツパックを削除しようとしたとき、アンインストールプロセスが失敗し、以下のエラーメッセージが表示されます。

`SQL Anywhere Error -210: User 'pmdb_admin' has the row in '<テーブル名>' locked`

この失敗が起きるのは、データベース段階テーブルに対して1つ以上のデータベース接続が共有ロックをかけている場合です。

解決方法

次の手順を実行します。

1. 管理者としてホストシステムにログオンします。
2. [**スタート**] → [**プログラム**] → [**管理ツール**] → [**サービス**] をクリックします。[サービス] ウィンドウが表示されます。
3. 右側のペインで、以下のサービスを右クリックし、[**停止**] をクリックしてサービスを停止します。

- HP_PMDB_Platform_Collection
- HP_PMDB_Platform_Timer

4. デスクトップの通知バーにある Sybase IQ サーバーアイコンを右クリックしてから、[< ホスト名 > のシャットダウン] をクリックします。

Sybase IQ サーバーアイコンが通知バーに表示されていない場合、以下のコマンドをコマンドプロンプトウィンドウに入力し、Sybase IQ をシャットダウンします。

```
dbstop -y -c uid=dba;pwd=sql;eng=<サーバーエンジン名>;
dbn=utility_db;links=tcpip{host=<ホスト名>.<ドメイン名>;port=21424
```

この例では、< サーバーエンジン名 > は Sybase サーバーエンジンの名前を指し、< ホスト名 > は SHR データベースをホスティングするシステムの名前を指し、< ドメイン名 > はネットワーク構成に従ったドメインの名前です。

Sybase IQ サービスを再起動するには、[サービス] ウィンドウで「HP_PMDB_Platform_Sybase」を右クリックし、[開始] をクリックします。注意： Sybase IQ をリモートでインストールした場合、リモートシステム上に作成した Sybase サービスを開始する必要があります。

次のように、すべてのアクティブなストリームが実行を完了するまで待機します。

1. [**スタート**] → [**ファイル名を指定して実行**] をクリックします。[ファイル名を指定して実行] ダイアログボックスが開きます。

2 [名前] フィールドに「cmd」と入力し、[**Enter**] キーを押します。[コマンドプロンプト] ウィンドウが開きます。

3 以下のコマンドを入力し、ジョブストリームの読み込みを一時停止します。

```
abcAdminUtil -pause -type loadBatch
```

4 次のように、すべての読み込み済みジョブストリームが実行を完了するまで待機します。

5 次のコマンドを入力して、ステータスをチェックします。

```
abcMonitor -stream ID=ALL, state=active
```

テーブルがロックされているかどうかを検証するには、次の手順を実行します。

1 [**スタート**] → [**プログラム**] → [**Sybase**] → [**Sybase IQ 15.4**] → [**Interactive SQL Java**] をクリックします。Interactive SQL Java コンソールが開きます。

2 [接続] ダイアログボックスの [ID] タブで、[ユーザーID とパスワードを指定] を選択します。

3 ユーザー名とパスワードを入力し、[**OK**] をクリックします。

4 [**SQL Statements**] の下に「sp_iqlocks」と入力してから、[**Execute all SQL statement(s)**] ボタンをクリックし、コマンドを実行します。

ロックされているテーブルがある場合、すべてのワークフローストリームが完了するまで数分間待ってから、コマンドをもう一度実行します。ロックされているテーブルがない場合、コンテンツパックの削除を先に進めることができます。

Sybase IQ のアンインストールが失敗する

問題

SHR をアンインストールしても、Sybase IQ Server Suite 15.4 (64 ビット) が削除されません。

解決方法

次の手順を実行します。

1 Windows デスクトップで、[**スタート**] → [**設定**] → [**コントロール パネル**] をクリックします。

2 [コントロール パネル] ウィンドウの [**プログラムの**追加と**削除**] をクリックします。

3 [プログラムの追加と削除] ウィンドウで [**Sybase IQ Server Suite 15.4** (64-bit)] をクリックしてから、[**変更 / 削除**] をクリックし、Sybase IQ アプリケーションを削除します。

4 Sybase IQ アンインストールウィザードで、[ようこそ] ページの [**次へ**] をクリックします。

5 削除しようとしている機能が選択済みであることを確認してから、[**次へ**] をクリックします。

6 [**次へ**] をクリックしてから [**アンインストール**] をクリックします。

7 [既存のファイルを削除] メッセージボックスで、[**すべてはい**] をクリックします。

8 [環境変数の復元] メッセージボックスで、[**すべてはい**] をクリックします。

9 [**終了**] をクリックしてアンインストールプロセスを完了します。

10 [**はい、コンピュータを再起動します**] オプションを選択してから、[**終了**] をクリックし、システムを再起動します。

ネイティブ Windows インストーラーのエラーでインストールが失敗する

問題

SHR のインストール時に、インストールプロセスが停止し、以下のエラーメッセージが表示されます。

`Unable to proceed with installation since the required native installer check failed` (必要なネイティブのインストーラーチェックに失敗したため、インストールを先に進めることができません)。

解決方法

この問題が起きるのは、ネイティブの Windows インストーラーファイルが損傷しているか欠落している場合や、Windows インストーラーサービスが未登録であるかまたは損傷を受けている場合です。この問題を解決するには、Windows インストーラーを再登録する必要があります。Windows インストーラーをいったん登録解除してから登録し直せば、Windows のインストール上の問題の多くが解決します。次の手順を実行します。

1. [**スタート**] → [**ファイル名を指定して実行**] をクリックします。[ファイル名を指定して実行] ダイアログボックスが開きます。
2. [名前] フィールドに「`cmd`」と入力し、[**ENTER**] キーを押します。[コマンドプロンプト] ウィンドウが開きます。
3. コマンドプロンプトに次のコマンドを入力し、Windows インストーラーの登録を解除します。

   msiexec /unregister
4. 次のコマンドを入力して、Windows インストーラーを再登録します。

   msiexec /regserver

SAP BOBJ のエラーでインストールが失敗する

問題

HP Software インストーラーの実行中に、インストールが失敗し、以下のエラーメッセージが表示されます。

`SAP BusinessObjects is installed on the system. SAP BusinessObjects` をアンインストールしてから、`HP SH Reporter` をインストールしてください。

解決方法

SAP BOBJ や Sybase IQ などの、SHR で使用するコンポーネントがすでにシステムにインストールされている場合、インストーラーは製品に同梱されているコンポーネントのインストールを試みるので、SHR のインストールは失敗します。

この問題を解決するには、既存のコンポーネントをシステムから削除し、インストーラーをもう一度実行する必要があります。

リモート Sybase IQ データベースの作成が失敗する

問題

HP Service Health Reporter 設定ウィザードで、Sybase データベースファイルをリモートシステム上で作成しようとすると、インストール後処理が失敗し、以下のエラーメッセージが表示されます。

```
<タイムスタンプ>,690 INFO,
com.hp.bto.bsmr.dao.helper.CreateSybaseIQDatabase.logDBLoginInfo, Database
Info [username->dba;serverName-><サーバー名>_remote;Dbhostname-><ホスト名>;
port->21421]

<タイムスタンプ>,018 ERROR,
com.hp.bto.bsmr.dao.helper.CreateSybaseIQDatabase.executeSQL, Could not
connect to the database.

<タイムスタンプ>,049 ERROR,
com.hp.bto.bsmr.dao.helper.CreateSybaseIQDatabase.executeSQL, Specified
database not found

<タイムスタンプ>,081 ERROR,
com.hp.bto.bsmr.dao.helper.CreateSybaseIQDatabase.executeSQL, SQLCODE=-83,
ODBC 3 State="08001"
```

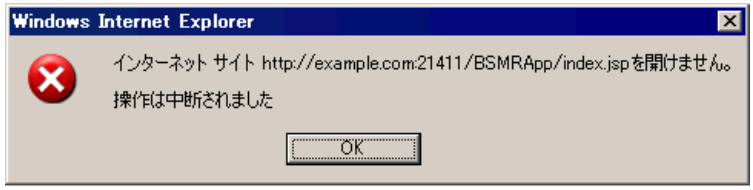
解決方法

このエラーが起きるのは、HP Service Health Reporter 設定ウィザードに指定したデータベースファイルの場所で、ファイルパス内にスペースが入っている場合です。この問題を解決するには、リモートシステムで、指定したデータベースファイル場所がリモートシステム上に存在することを確認します。それ以外に、インストール後ウィザードに指定したパスにスペースが入っていないことを確認します。

管理コンソールにログオンできない

問題

管理コンソールのログイン画面にユーザー資格情報を入力して [ログイン] ボタンをクリックした後、以下のエラーメッセージが表示されます。



解決方法

この問題を解決するには、次の手順を実行します。

1 メッセージボックスの [**OK**] をクリックします。

2 次のように、Web ブラウザキャッシュをクリアします。

   a Internet Explorer のメニューバーで、[**ツール**] をクリックしてから、[**インターネット オプション**] をクリックします。[インターネット オプション] ダイアログボックスが開きます。

   b [**全般**] タブが表示されていることを確認します。

   c [閲覧の履歴] の下で、[**削除**] をクリックします。[閲覧の履歴の削除] ダイアログボックスが開きます。

   d [インターネット一時ファイル] セクションの [**ファイルの削除**] をクリックします。

e [**閉じる**] をクリックしてから [**OK**] をクリックします。これでキャッシュはクリアされたはずです。

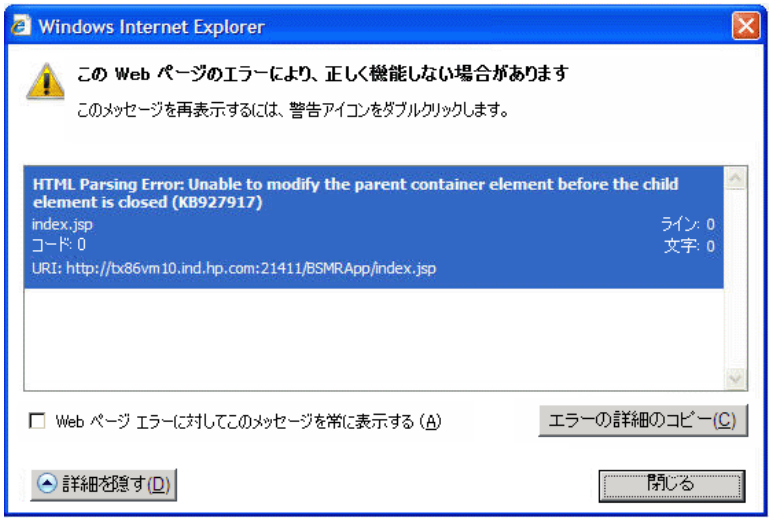
3 [**ログイン名**] および [**パスワード**] フィールドにユーザー資格情報を再度入力します。

4 [**ログイン**] をクリックします。管理コンソールが開きます。

管理コンソールの動作が断続的になる

問題

場合によっては管理コンソールが正しく稼働しないことがあります。管理コンソールを開いた後、次のような Windows エラーメッセージが表示されます。



解決方法

この問題を解決するには、Web ブラウザキャッシュをクリアする必要があります。管理コンソールにログオンできない ページ 185 を参照してください。

Windows Server 2008 での IPv6 アドレスの変更が原因でポストインストールの設定が失敗する

問題

インストール後に動的 IPv6 アドレスを使用するシステムを再起動すると、システムでは静的 IPv6 アドレスの代わりに自動生成された IPv6 アドレスが使用されます。この IPv6 アドレスが変更された結果、ポストインストールの設定が失敗します。この問題は、Windows Server 2008 で発生します。

解決方法

インタフェース ID は、デフォルトでは、Extended Unique Identifier (EUI)-64 アドレスに基づかず、Windows Server 2008 でランダムに生成されます。

この問題を解決するには、ランダムインタフェース ID を無効にする必要があります。詳細については、Microsoft のドキュメントを参照してください。

コレクターインストールのトラブルシューティング

システムからコレクターをアンインストールし、そのシステムにコレクターを再インストールすると、管理コンソールでコレクターを設定するときに SHR がコレクターとの通信に失敗し、エラーメッセージが表示されます。

この問題を解決するには、次の手順を実行して、証明書を SHR システムからコレクターシステムに手動でインポートします。

1 コレクターシステムにログオンします。

2 次のコマンドを実行します。

Windows の場合

%ovinstalldir%bin¥ovcoreid

Linux の場合

/opt/OV/bin/ovcoreid

コンソールに表示される ID を書き留めます。

3 SHR システムにログオンします。

4 次のコマンドを実行します。

Windows の場合

%ovinstalldir%bin¥ovcm -issue -file < ファイル > **-name** < ノード名 > **-coreid**

Linux の場合

/opt/OV/bin/ovcm -issue -file < ファイル > **-name** < ノード名 > **-coreid**

ここでの <file> は、コレクターシステムに手動でインポートする証明書ファイルの名前です。このファイルを格納するディレクトリの完全パスを含むファイル名を指定する必要があります。< ノード名 > はコレクターシステムの FQDN です。

5 証明書ファイルをコレクターシステムに転送します。

6 コレクターシステムにログオンします。

7 次のコマンドを実行します。

Windows の場合

%ovinstalldir%bin¥ovcert -importcert -file < ファイル >

Linux の場合

/opt/OV/bin/ovcert -importcert -file < ファイル >

A SiteScope モニター

この付録では、HP Service Health Reporter に関連する追加の情報を提供します。

SiteScope Monitors for HP Service Health Reporter

次の表に、仮想化メトリックを収集するのに使用されるモニターを一覧表示します。

モニター名	カウンタ	測定名
VMware パフォーマンス	ホストシステム ¥ 状態	hardware.memorySize
VMware パフォーマンス	ホストシステム ¥ 状態	summary.hardware.numCpuCores
VMware パフォーマンス	ホストシステム ¥ 状態	summary.hardware.cpuMhz
VMware パフォーマンス	ホストシステム ¥ 状態	summary.hardware.numNics
VMware パフォーマンス	ホストシステム ¥ リアルタイム ¥sys	uptime.latest[]
VMware パフォーマンス	ホストシステム ¥ リアルタイム ¥mem	usasge.average[]
VMware パフォーマンス	ホストシステム ¥ リアルタイム ¥mem	consumed average[]
VMware パフォーマンス	ホストシステム ¥ リアルタイム ¥cpu	usage.average[]
VMware パフォーマンス	ホストシステム ¥ リアルタイム ¥cpu	ready.summation[]
VMware パフォーマンス	ホストシステム ¥ リアルタイム ¥disk	usage.average[]
VMware パフォーマンス	ホストシステム ¥ リアルタイム ¥disk	read.average[]
VMware パフォーマンス	ホストシステム ¥ リアルタイム ¥disk	write.average[]

モニター名	カウンタ	測定名
VMware パフォーマンス	ホストシステム ¥ リアルタイム ¥net	received.average[]
VMware パフォーマンス	ホストシステム ¥ リアルタイム ¥net	transmitted.average[]
VMware パフォーマンス	ホストシステム ¥ リアルタイム ¥net	packetsRx.summation[]
VMware パフォーマンス	ホストシステム ¥ リアルタイム ¥net	packetsTx.summation[]
VMware パフォーマンス	ホストシステム ¥ リアルタイム ¥net	usage.average[]
VMware パフォーマンス	仮想マシン ¥ 状態	config.hardware.memoryMB
VMware パフォーマンス	仮想マシン ¥ 状態	config.cpuAllocation.shares.shares
VMware パフォーマンス	仮想マシン ¥ 状態	config.hardware.numcpu
VMware パフォーマンス	仮想マシン ¥ 状態	config.memoryAllocation.reservation
VMware パフォーマンス	仮想マシン ¥ 状態	config.memoryAllocation.limit
VMware パフォーマンス	仮想マシン ¥ 状態	config.cpuAllocation.reservation
VMware パフォーマンス	仮想マシン ¥ 状態	config.cpuAllocation.limit
VMware パフォーマンス	仮想マシン ¥ リアルタイム ¥sys	uptime.latest[]
VMware パフォーマンス	仮想マシン ¥ リアルタイム ¥mem	usage.average[]
VMware パフォーマンス	仮想マシン ¥ リアルタイム ¥mem	consumed.average[]
VMware パフォーマンス	仮想マシン ¥ リアルタイム ¥mem	active.average[]
VMware パフォーマンス	仮想マシン ¥ リアルタイム ¥mem	overhead.average[]
VMware パフォーマンス	仮想マシン ¥ リアルタイム ¥mem	swapin.average[]
VMware パフォーマンス	仮想マシン ¥ リアルタイム ¥mem	swapout.average[]

モニター名	カウンタ	測定名
VMware パフォーマンス	仮想マシン ¥ リアルタイム ¥mem	vmmemctltarget.average[]
VMware パフォーマンス	仮想マシン ¥ リアルタイム ¥mem	usage.average[]
VMware パフォーマンス	仮想マシン ¥ リアルタイム ¥mem	ready.summation[]
VMware パフォーマンス	仮想マシン ¥ リアルタイム ¥mem	usagemhz.average[]
VMware パフォーマンス	仮想マシン ¥ リアルタイム ¥mem	wait.summation[]
VMware パフォーマンス	仮想マシン ¥ リアルタイム ¥mem	ready.summation[]
VMware パフォーマンス	仮想マシン ¥ リアルタイム ¥mem	usage.average[]
VMware パフォーマンス	仮想マシン ¥ リアルタイム ¥mem	read.average[]
VMware パフォーマンス	仮想マシン ¥ リアルタイム ¥mem	write.average[]
VMware パフォーマンス	仮想マシン ¥ リアルタイム ¥mem	received.average[]
VMware パフォーマンス	仮想マシン ¥ リアルタイム ¥mem	transmitted.average[]
VMware パフォーマンス	仮想マシン ¥ リアルタイム ¥mem	packetsRx.summation[]
VMware パフォーマンス	仮想マシン ¥ リアルタイム ¥mem	packetsTx.summation[]
VMware パフォーマンス	仮想マシン ¥ リアルタイム ¥mem	usage.average[]

次の表に、システム管理メトリックを収集するのに使用されるモニターを一覧表示します。

L

モニター名	カウンタ	測定名
Windows		
Windows リソース	物理ディスク	物理ディスク ¥_ 合計 ¥ ディスクバイト / 秒
Windows リソース	メモリー	メモリー ¥ ページ出力 / 秒
Windows リソース	システム	システム ¥ プロセッサーのキュー長
Windows リソース	メモリー	メモリー ¥% コミット済みバイト数 (使用中)
Windows リソース	システム	システム稼働時間
Windows リソース	物理ディスク	ディスクバイト数 / 秒
Windows リソース	物理ディスク	ディスク読み取りバイト数 / 秒]
Windows リソース	物理ディスク	ディスク書き込みバイト数 / 秒
Windows リソース	ネットワークインタフェース	受信パケット数 / 秒
Windows リソース	ネットワークインタフェース	送信パケット数 / 秒
Windows リソース	ネットワークインタフェース	受信バイト数 / 秒
Windows リソース	ネットワークインタフェース	送信バイト数 / 秒
Windows リソース	ネットワークインタフェース	パケット数 / 秒
Windows リソース	ネットワークインタフェース	ネットワークインタフェース ¥% 合計バイト / 秒
メモリー	N/A	空き MB
メモリー	N/A	使用パーセント
CPU	N/A	使用率
CPU	N/A	cpu の使用率 #
Unix		
Unix リソース	キュー長	キュー長 ¥runq-sz

モニター名	カウンタ	測定名
Unix リソース	キュー統計マシン ¥ 状態	キュー統計 ¥runq-sz
Unix リソース	稼働時間	稼働時間 ¥ 稼働時間
Unix リソース	ネットワークインタフェース	パケット
Unix リソース	ネットワーク統計	ネットワーク統計 ¥Ipkts
Unix リソース	ネットワーク統計	ネットワーク統計 ¥Opkts
Unix リソース	ネットワークインタフェース	受信バイト数
Unix リソース	ネットワークインタフェース	送信バイト数
Unix リソース	ネットワークインタフェース	ipackets
Unix リソース	ネットワークインタフェース	opackets
Unix リソース	ネットワークインタフェース	rbytes
Unix リソース	ネットワークインタフェース	obytes
Unix リソース	ファイルシステム	容量
Unix リソース	ファイルシステム	kbytes
Unix リソース	ファイルシステム	使用 %
Unix リソース	ファイルシステム	使用済み
Unix リソース	ファイルシステム	容量
Unix リソース	ファイルシステム	使用済み
Unix リソース	ファイルシステム	% 使用済み
Unix リソース	ファイルシステム	(1024- ブロック)-(空き)

B　Xcelsius のインストール

XCelsius レポートは、SAP BusinessObjects Xcelsius Enterprise ツールを使用して作成される対話型のフラッシュベースのレポートです。SHR の Xcelsius フラッシュベースレポートを作成するには、SHR インストールメディアに含まれている Xcelsius 2008 アプリケーションをインストールする必要があります。レポートの表示には、Xcelsius 2008 は必要ありません。そのため、Xcelsius インストールはオプションになっています。

Microsoft Excel は、基盤として Xcelsius に必要です。

Xcelsius 2008 のインストールのハードウェアおよびソフトウェア要件

コンポーネント	バージョン
プロセッサーのタイプ	1.0GHz プロセッサー
物理メモリー	1GB の RAM
ディスク領域	350 MB
オペレーティングシステム	以下のオペレーティングシステムがサポートされます。 • Microsoft Windows XP • Microsoft Windows Server 2003 • Microsoft Windows Vista
ソフトウェア	次のバージョンの Microsoft Office がサポートされます。 • Microsoft Office 2003 • Microsoft Office XP • Microsoft Office 2007

SHR 9.30 にバンドルされている Xcelsius 2008 は、Microsoft Office 2010 をサポートしていません。Xcelsius 2008 sp5 がインストールされている場合にのみサポートされます。

Xcelsius のインストール (オプション)

次の手順を実行します。

1 インストールメディアのパッケージフォルダから Excelsius_2.00.166_DVD-2.zip ファイルを選択した場所にコピーします。

2 ファイルを抽出します。

3 [**スタート**] → [**ファイル名を指定して実行**] をクリックします。[ファイル名を指定して実行] ダイアログボックスが開きます。

4 **cmd** と入力し、[**ENTER**] キーを押して、コマンドプロンプトウィンドウを開きます。

5 コマンドプロンプトに次のコマンドを入力して Xcelsius コマンドが含まれるディレクトリを開きます。

cd < 抽出したファイルのパス >**¥IT_Analytics_2.00¥DVD-2¥IT_Analytics_2.00¥Setup¥BO Installers¥xcelsius**

ここでの < 抽出したファイルのパス > は、Xcelsius セットアップファイルを抽出した場所です。

このコマンドは 1 行に入力する必要があります。

6 コマンドプロンプトに次のコマンドを入力して Xcelsius をインストールします。

install-xcelsius.bat -installdir 「< インストールディレクトリ >」

ここでの < インストールディレクトリ > は、Xcelsius ファイルをインストールする場所です。

7 コマンドプロンプトウィンドウを閉じます。

お客様からのご意見をお待ちしております。

電子メールクライアントを設定済みのシステムの場合は、次をクリックしてください。 電子メールの送信

電子メールクライアントを利用できない場合、Web メールクライアントで以下の事項を新規メッセージにコピーし、そのメッセージを **docfeedback@hp.com** にお送りください。

製品名およびバージョン : HP Service Health Reporter 9.30

ドキュメントのタイトル : インストールおよび設定ガイド

フィードバック :